岩手県文化財調査報告書第72集

東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

— XVII —

（北　上　地　区）

昭和57年3月

岩手県教育委員会

日本道路公団

東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

—XⅦ—

（北　上　地　区）

岩手県文化財調査報告書第72集　東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XⅦ　正誤表

（北上地区）

頁	行	誤	正
序文3	4，5	遺物～した。	削除
	13	住脚	柱脚
序文5	13	(YHM76)	(THM76)
	76	(NAM75)	(KMD75)
7	2、19	平担	平坦
	21	少く	少なく
13	9	旭岡崎遺崎遺跡	旭岡崎遺跡
14	1	12m	12m
16	10	約13m　〃	約18m
17	6	崇減	磨減
	7	約20.08m,口縁部	約20.8m,残存部
	29	コーナ部	コーナー部
21	26	崇減	磨減
22	4	粘部	粘土
25	3	円塗り	丹塗り
27	1，12	1部	一部
29	12	基準点のり	基準点より
	15	8.25	8.25m
35	下1	綱縄文	網縄文
37	第10図上	Ab56ピット、Ab59ピット	Ad56ピット、Ad59ピット
41	3，11	13.68、火山、	13.68m、火山灰土、
42	7	17.46～路縁外m、	17.46m～路縁外、
43	4，12，19	18.75、18.27、16.94	mを入れる
45	23	基点	基準点
46	15、25	4/3YR、18.64	4/3、18.64m
47	20	瓜形	爪形
49	21	書いたにも	書いたようにも
88	10	抗	杭
89	注3、下1	曖か、分布に	曖が、分布は
96～200	19ほか	逢き、逢く	挽き、挽く
100	9	血状	皿状
126	6	トレンチに	トレンチを
142	第5表	(平)口径	口縁
187	2	繍	縫
191、197	8，4	湾曲	彎曲
206	9	0.5～4.8合	1.0～2.25
216	23	大山ガラス	火山ガラス
	25	英閃岩、ジルマン	火閃岩、ジルコン
219	図版1	2、同トレンチ写真	天地逆にする
267	3	0.3	0.3m
	27	pitが	pit3、4、5が
269	2，13	0.4、煙道は	0.4m、煙道の長さは
276	28	大形	大型
280	第13図	左上1段、左下2段	1、5を入れる
283	26	11ほ	10ほ
291	15	粘土に	粘土には
292	11	内黒	内面
385	25	拳大	拳大
388	9	1部	一部
390～396	2ほか	口径、体	口縁部、体部
401	8	49×58	49×58cm
409	表6	(B118住居跡)砂永拳	砂錐拳
429	10	C地区が105m～平坦地。	重複部分削除
	15、19	粗雑	粗脆
	16	千島	千鳥
441	1	少く	少なく
	参考文献	7)、8)、9)	5)、6)、7)

序

地域開発に伴う道路など交通網の整備事業は、現代社会の進歩発展から生ずる必然的な要請であり、本県においても、このような建設事業が多く計画・実施されております。

これらの開発事業に関連して、私たちには、先人が長い歴史の中で培いはぐくんできた貴重な文化遺産を保護し、新たな文化創造の糧として活用していく責務があります。

国土開発計画に基づいて建設される東北縦貫自動車道は、産業・経済開発の大動脈として多方面からの期待をになう国家的な大事業であり、宮城県境より西根インターまでは、すでに供用され、現在は更に秋田・青森県境へと工事が進められております。

岩手県教育委員会は、この供用区間に関係した99遺跡について、日本道路公団仙台建設局の委託によって、昭和47年度から7か年にわたって発掘調査を実施し、その整理と報告書の作成を、昭和53年度から4か年計画で実施して参りました。本年度は、その最終年度にあたります。

本報告書は、東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書の第XVII冊目として、北上地区に所在する下谷地B遺跡外12遺跡について、調査結果をとりまとめたものであります。

おもなものには、旧石器時代の石器工房跡（下成沢遺跡）、平安時代の集落跡（成沢・上大谷地遺跡など）等があります。また、異色あるものとしては、埋没した旧河道の中から発見された平安時代の遺物堆積層（下谷地B遺跡）があり、多量の土器・木製品にまじって、墨書土器（300点）・木簡（1点）が検出されました。これらは、律令政治の浸透に伴うこの地区における識字層の存在をうかがう貴重な資料として注目されます。

この報告書が、研究者のみならず、広く一般のかたがたに活用され、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められるよう願ってやみません。

ここに、調査について御援助・御協力をいただいた地元教育委員会はじめ関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

昭和57年3月

岩手県教育委員会

教育長　新　里　　盈

例　　言

1．本書は東北縦貫自動車道関係遺跡発掘調査報告書第XVII分冊として、岩手県北上市および同和賀郡江釣子村に所在する遺跡のうち、別表の13遺跡について作成したものである。

2．調査および資料について、次の方々からご指導、ご助言を賜った。（敬称略）

板橋　源（岩手県立博物館館長）	草間俊一（岩手県立盛岡短期大学学長）
司東真雄（岩手県文化財保護審議会委員）	田中喜多美（岩手県文化財保護審議会委員）
岡村道雄（東北歴史資料館研究部技師）	菊池強一（岩手県立釜石南高校教諭）
小林達雄（国学院大学助教授）	渋谷孝雄（山形県教育庁文化課）
富樫泰時（秋田県教育長文化課学芸主事）	林　謙作（北海道大学助教授）
藤沼邦彦（東北歴史資料館考古研究科長）	岩手県埋蔵文化財センター

3．資料の鑑定・分析・保存処理について、次の方々からご指導、ご協力を賜った。（敬称略）

井上克弘（岩手大学助教授）	火山灰
佐々木達夫（金沢大学助教授）	陶磁器
佐藤二郎（岩手県立大船渡農業高校教諭）	石材、地形
照井一明（岩手県立種市高校教諭）	胎土
早坂松次郎（岩手県木炭協会経営指導員）	樹種
平川　南（東北歴史資料館企画科長）	墨書土器、墨書木製品
本堂寿一（北上市立博物館学芸員）	木製品
増沢文武（元興寺文化財研究所研究室長）	木製品の保存処理
村井三郎（岩手県文化財保護審議会委員）	種子
山田一郎（東北大学文部教官）	火山灰
岩手県工業試験場	胎土、火山灰、鉄滓
日本アイソトープ協会	年代測定

尚、井上克弘、佐藤二郎、照井一明、村井三郎、山田一郎の各氏よりご執筆いたゞいた玉稿は当該遺跡に、また内容が2遺跡以上に及ぶ場合は巻末付篇にそれぞれ掲載させて戴いた。

4．本書に掲載する地形図は、建設省国土地理院発行の5万分の1、同20万分の1地形図を複製使用するものである。また、遺跡地形図は日本道路公団作成の「東北高速道計画図」（第十系座標による）を使用した。

5．遺跡における層相、遺物の色調観察は、農林省農林水産技術会議事務局監修による「新版標準土色帖」を使用した。

6．調査は日本道路公団の委託をうけ、岩手県教育委員会が主体となり、次の通り実施した。

No	遺跡名（略号）	所在地	調査期間 自～至	調査面積（対象面積）	発掘調査者	整理執筆者
1	飯豊（ＩＴ74）	北上市飯豊町第19地割45－1ほか	昭和 49．5．16 49．5．22	㎡ 3,000 (3,000)	高村嘉夫	狩野敏男
2	藤沢（ＦＳ74）	北上市飯豊町字藤沢14－139ほか	49．6．3 49．10．20	1,600 (1,750)	高村嘉夫・阿部省吾・菊地郁雄 三上　昭・高橋義介・中村清也	三上　昭
3	下谷地Ａ（ＳＹ73）	和賀郡江釣子村北鬼柳第12地割13ほか	48．9．14 48．10．8	610 (3,500)	高村嘉夫・中川重紀	昆野　靖 三上　昭
4	下谷地Ｂ（ＳＹ74）	〃	49．6．19 49．8．1	580 (600)	高村嘉夫・阿部省吾 三上　昭・高橋義介	〃
5	上藤木（ＫＦ73）	和賀郡江釣子村北鬼柳14－20－1	48．8．27 48．9．17	970 (3,530)	高村嘉夫	狩野敏男
6	成沢（ＮＳ72）	北上市相去町字下成沢54－1ほか	47．6． 47．7．9	1,250 (2,500)	林　謙作・菊地郁雄・嶋　千秋 山口勇典・佐々木勝・伊藤博幸 高橋文夫・高橋信夫・中村清也	石川長喜
7	下成沢（SNS72）	北上市相去町字中成沢44ほか	47．5．8 47．6．10	1,200 (3,500)		〃
8	大谷地（ＯＹ74）	北上市相去町高前田74	47．7．10 47．7．20	800 (2,500)	山口勇典	狩野敏男
9	上大谷地（KOY72）	北上市相去町上大谷地	47．7． 47．11．	2,500 (7,500)	林　謙作・菊地郁雄・嶋　千秋 山口勇典・佐々木勝・伊藤博幸 高橋文夫・高橋信夫・中村清也	三上　昭
10	土井Ａ（DIA72）	北上市相去町土井	47．10． 47．11．	50 (200)	林　謙作・高橋文夫・高橋信夫 伊藤博幸・中村清也・古谷洋子	〃
11	土井Ｂ（DIB72）	〃	47．11． 47．11．	625 (1,250)	〃	〃
12	土井Ｃ（DIC73）	〃	48．10．15 48．10．31	230 (420)	高村嘉夫・三上昭	〃
13	土井Ｄ（DID80）	〃	50．7． 50．7．	700 (900)	瀬川司男	〃

調査には北上市・江釣子村両教育委員会をはじめ、地元の方々の多大なご協力をいたゞいた。

7．本書の執筆は、序文を吉田努、相原康二、地区概観を斎藤　淳、各遺跡については別表の通りである。また、搜図および写真図版は、秋葉良子、阿部由美、菊池純子、小林史子、桜井芳彦、佐々木智子、佐々木信子、田中ヒデ、堀間好子、藤原周子の協力を得て作成した。

8．調査資料や遺物は、すべて岩手県教育委員会事務局文化課において保管している。

目　　次

序　文
1　経過
2　調査の方法について
3　整理について

本　文
北上地区概観
1　地形概観……1
2　遺跡の分布……1

飯豊遺跡
I　位置と立地……7
II　調査の概要及び結果……7
III　今後の問題点……7

藤沢遺跡
I　位置と立地……13
II　調査の経過……13
III　層序と土質……13
IV　発見された遺構と遺物……14
1　住居跡……14
2　ピット……27
3　溝状土壙……41
4　土壙……45
5　焼土遺構……45
6　溝……47
7　表採等の遺物……47
V　まとめ……66
写真図版……69

下谷地A遺跡
I　位置と立地……88
II　調査の経過……88
III　遺跡の層序……88
IV　調査の結果……89
V　出土遺物……91
VI　まとめ……110
写真図版……113

下谷地B遺跡
I　位置と立地……125
II　調査の経過……125
III　遺跡の層序……126
IV　トレンチの出土遺物……128
V　トレンチ以外の出土遺物……142
VI　まとめ……198
遺物の鑑定と分析
1　植物種子の同定……214
2　土器の岩石学的方法による
分析結果……215
写真図版……217

上藤木遺跡

Ⅰ　位置と立地 ……259
Ⅱ　調査の概要及び結果……259
Ⅲ　今後に残された問題 ……259

成沢遺跡

Ⅰ　位置と立地 ……263
Ⅱ　調査経過及び方法 ……263
Ⅲ　調査結果 ……265
　1　藩境塚 ……265
　2　竪穴住居跡 ……266
　3　その他の遺構 ……288
　4　遺構以外の出土遺物 ……289
Ⅳ　まとめと考察 ……297
　1　藩境塚について ……297
　2　竪穴住居跡について ……298
　3　まとめ ……301
付章　出土遺物の分析と年代測定 …303
　写真図版 ……305

下成沢遺跡

Ⅰ　位置と立地 ……323
Ⅱ　調査経過及び方法 ……323
Ⅲ　調査結果 ……326
　1　As 18 溝跡 ……326
　2　As 15　焼石 Pit ……327
　3　旧石器工房跡 ……328
　4　遺構以外の出土遺物 ……350
Ⅶ　まとめと考察 ……359
　1　旧石器について ……359
　2　その他の遺構と遺物
　　について ……360
　3　まとめ ……360
　写真図版 ……361

大谷地遺跡

Ⅰ　位置と立地 ……379
Ⅱ　調査の概要及び結果 ……379
Ⅲ　今後の問題点 ……379

上大谷地遺跡

Ⅰ　位置と立地 ……384
Ⅱ　遺跡の層序 ……384
Ⅲ　発見された遺構と遺物 ……384
Ⅳ　「上大谷地遺跡調査概要」
　　のまとめ……408
Ⅴ　まとめ ……415
　写真図版 ……417

土井Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ遺跡

Ⅰ　位置と立地 ……429
Ⅱ　調査の経過と結果 ……429

付　篇

1　和賀川流域の地形について ……佐藤二郎…435
2　東北地方における奈良～平安時代遺跡
　　埋土中の粉状パミスについて ……井上克弘・山田一郎…442
岩手県教育委員会事務局文化課職員一覧 ……460

序　　文

1、経　過

県内の東北縦貫自動車道建設は、昭和40年11月仙台・盛岡間の基本計画の決定に始まり、昭和43年４月の施行命令によって具体化される。

これによって破壊される埋蔵文化財の取扱いについては、文化庁と日本道路公団の覚書により、岩手県教育委員会がおこなうことになった。

まず、一関・盛岡間の路線予定地内の分布調査が、昭和42年及び43年に実施され、昭和45年２月19日水沢・花巻間40km、同年11月25日一関・胆沢間30km、46年２月10日石鳥谷・盛岡間29kmの路線発表がなされたことに伴い、昭和47年８月～９月に、用地巾50ｍで現地確認調査、同年10月インターチェンジ及び付帯施設予定地内の現地確認調査等が順次実施され、一関・盛岡間の調査対象遺跡は当初82ヶ所確認された。

これらの破壊される遺跡について、できるだけくわしく調査記録し、遺跡のもつ歴史的価値を永く後世に伝えることを目的とし、昭和47年度に北上市・花巻市・金ヶ崎町所在の遺跡から調査が開始され、用地買収、着工順位に従って順次にすすめられた。

この間、調査除外としたもの４ヶ所がある。一関市苅又遺跡は過去の開田による破壊の程度が大きく煙滅、一関市松の木遺跡は宅地化による破壊、衣川村桝形陣場跡は所在位置が路線からはずれる。衣川村二枚貝化石層は遺跡としての調査対象としないことなどの理由による。

また、路線変更によって保存されたのが、平泉町伝護摩堂跡である。この遺跡は奥州平泉文化との関連が考えられ、路線発表後に路線内に所在することが確認され、急遽日本道路公団と協議し、路線を西側に変更した。一方、工事直前もしくは工事中に新しく確認されたものに、土取場の和賀町梅ノ木Ⅰ～Ⅶ遺跡、路線内では江釣子村下谷地Ｂ遺跡・紫波町墳館遺跡および柳田館遺跡がある。

昭和49年６月20日、盛岡・安代間53kmの路線発表があり、この区間のうち、盛岡・西根（松川まで）間が調査対象の日程にくりこまれ、当初、８遺跡が確認されたが、工事中に滝沢村卯遠坂遺跡が発見追加され、更に紫波インターチェンジの誘致新設に関連し、栗田Ⅰ～Ⅲ遺跡が調査対象となる。

以上のように、一関・西根（松川まで）区間の調査対象遺跡数は、除外、新規発見などによる変動を見て来た。このことは、埋蔵文化財保護の基本の一つとして、分布調査の重要性が改めて問われる一面でもある。結局、調査遺跡数は、99遺跡、18市町村におよぶものとなった。

調査をすすめる一方、文化庁、日本道路公団との協議によって、前述の伝護摩堂跡を完全保

存したのをはじめ、江釣子村鳩岡崎遺跡の縄文中期の大竪穴住居跡の一部分、水沢市石田遺跡では、奈良時代から平安時代初期に相当する焼失家屋1棟、紫波町上平沢新田遺跡で、平安時代相当の焼失家屋1棟の路線境検出遺構を一部精査の上、それぞれ埋めもどし現地保存をした。

また、江釣子村猫谷地遺跡の古墳1基、紫波町墳館遺跡の墳墓1基、柳田館遺跡・盛岡市太田方八丁遺跡の一部は、施工法や設計変更等によって可能な限りの保存策をとった。

しかし、これらの保存遺構や遺跡の管理、活用は今後十分に留意しなければならないものであり、それがなされなければ完全な保存策であったとは言い得ない。

昭和47年度に始まった調査は、昭和53年度の紫波町栗田III遺跡を最後に終り、現在、整理作業をすすめているが、東北縦貫自動車道建設の具体化以来、事業をすすめるに当って、終始指導と助言をくださった県内外の協力者、および献身的な協力を得た関係市町村教育委員会、学校、関係諸機関、地元作業員の方々をはじめ各位に改めて敬意を表したい。

なお、西根町以北の東北縦貫自動車道関連遺跡は、(財)岩手県埋蔵文化財センターによって調査されることになり、昭和53年度から実施されている。

2　調査の方法について

(1)　調査対象範囲の選定　　遺跡の中で用地内および付帯施設を含む関連部分は、すべて調査対象とした。更に、当該遺跡周辺の分布調査を可能な限り実施することにつとめ、調査地とそれをとりまく遺跡群との関連解釈の一助に資することとした。

(2)　調査対象全域に次のような地区を設定

①地区設定のための原点は、日本道路公団測量の路線内中心杭の任意のものに定め、それと他の中心杭の2点間を見通す直線と、原点を通りこれに直交する直線を座標の基準線とした。

②南北の基準線をもとに、30mを1ブロックとし、北から順にA・B……の記号を付し、これを東西、南北に10等分し3m×3mのグリットを設定、グリット名は北から順にa－j、南北基準線から東方へ50・53・56……。西方へ03・06・09……。の記号を付し、これとブロック記号の組合せで表わした。例えば、Aa03・Aa50 のようになる。

(3)　発掘および記録　　発掘調査は絶対にくりかえしのできない作業であって、特に、緊急調査という性格と記録保存を考えるとき、調査の過程で観察された事項は可能な限り詳細に、しかもすべて客観的データーとして記録されねばならないし、記録者の解釈と観察された事実とが混同されぬよう留意しながら①遺構群をひとつのまとまりとして把握すること、文化層が重なっている場合、層序とともにそれぞれの文化層のひろがりを確実に把握すること、更に緊急調査の場合、事後の保存が困難である以上、トレンチによる部分発掘は回避すべきであることからグリッド設定にもとづく平面発掘につとめた。

②原則として3m×3mのグリッドで、調査地における遺物・遺構の分布状況を把握するため、「ちどり」状に人力による粗掘をすることにしたが、結果的に機械力の導入も多かった。遺物・遺構の検出を見た場合、その具体的内容を究明するため必要な範囲の全面発掘を実施した。遺物・遺構の検出を見た場合、その具体的内容を究明するため必要な範囲の全面発掘を実施した。

③遺構が検出された場合、該当グリット名を付した。その場合もっとも北西に位置するグリット名で呼称することを原則とした。精査に当っては、2分法・4分法による平面発掘に留意し遺構の性格と内部堆積状況・構造・重複等を把握しながら完掘することとした。

④遺物は、原則としてグリットごとに取り上げ、遺跡記号・出土年月日・出土地点・出土層位を記録し、遺構に直接関連するものや、年代決定の資料となり得るものについては出土レベル、位置を平面図に記録し、遺物番号を付して取り上げた。

⑤遺物の出土状況・層位・遺構に関する所見等の記録は、実測図・遺構カード・フィールドノートを用い、全体の問題点、進行は調査日誌に記録した。

⑥写真調録は、35mm版モノクロ、カラー・6×7cm版モノクロを主として用いた。

(4) 実測方法 ①発掘された遺構の実測は、原則として遣り方実測を用い、平板実測は補助にとどめた。②原図の縮尺は1/20に統一したが、遺構・遺物の細部については、必要に応じて1/10縮尺を採用した。

(5) 関連科学との連けい　総合的な見地からの記録作業という意味で、考古学のみならず関連科学の研究者、とくに自然科学系統の分野との連けいに留意し、調査現場の実見と見解を求めることにつとめた。

3 整理について

整理にあたっては調査の性格（「緊急調査」と「記録保存」）を十分に考慮した。したがって可能な限り詳細な記録を作成することと、その公開を主目的とした。なおいわゆる「行政調査（とくに緊急調査）」と「学術調査」の異同を、その「現場」に投入された技術、方法の次元に還元して論ずるのは妥当ではない。「緊急調査」の「現場・調査」の位置づけについては、本課にも若干の反省点がある。

(1) いわゆる「珍品主議」・「一番主義」を排し、得た資料のすべてを観察し、それぞれに応じた記録を作成することを目ざした。各調査地（「遺跡」）・調査資料の正当な評価の資料を提示するためであるし、それが「記録保存」の趣旨にも連なるからである。その結果として記述が若干繁雑になった。ただし実際上は、調査担当者の設定仮説が整理担当者に十分伝わっていないなどのことも目立ち、満足のいく整理を必ずしもなしえなかった調査地もまた多い。遺憾で

ある。また本書に提示した諸仮説、見解は本課の統一見解ではなく、整理担当のそれである。具体的には、①観察事項の正確な伝達　②仮説の提示とその展開、吟味　③新規の仮説、問題点の提起　④新しい資料操作法の提示などを目ざしたが、前述のように必ずしも十分には実施できなかった。

(2)　調査地はそれのみ単独での評価は避け、一定の地域内とりわけ他の「遺跡」との関係を重視して解釈・評価するように努めた。『周辺の遺跡』の項がやや繁雑にわたっているのはそのためである。これらは(1)の実践をめざすのみならず、遺構存在を遺跡成立の絶対条件視する見解への反論のためにも必要であり、とりわけ埋蔵文化財保護にはきわめて重要な観点である。

(3)　調査時と同様に「関連諸科学・諸技術との連携」に留意した。(1)で述べた目的を満足させるために必要不可決であり、さらにはその保存処理・各種データの蓄積・その公開も本課に課せられた責務だからである。今後の継続実施を考慮し、可能なものは努めて本県内の機関・公所・その他に連携ないし委託先を求めた。具体的実施例は、年代測定（カーボンディティング・熱ルミネッセッス法他）・材質鑑定（石材他）・樹種鑑定（木器・木材・住脚他）・種子鑑定（炭化米・雑穀類・雑草類他）・花粉分析・人骨（歯）鑑定・獣骨（家蓄を含む）鑑定・組成分析（釉薬・土器胎土・火山灰他）・燐分析・地質学的諸分析等にわたるが、今後も新分野を加える必要がある。保存処理は、木器・木材・柱脚類・鉄器類を中心に実施しているが、これも今後さらに新分野のものについて実施する必要がある。地質学的知見・教示は(2)などとの関連で、調査地および周辺の「遺跡」の立地・占地に関して、また遺物と出土層（とくに火山灰層）との関連に留意して援用した。大規模調査地については航空写真・ステレオカメラにもとづく作図を採用した。

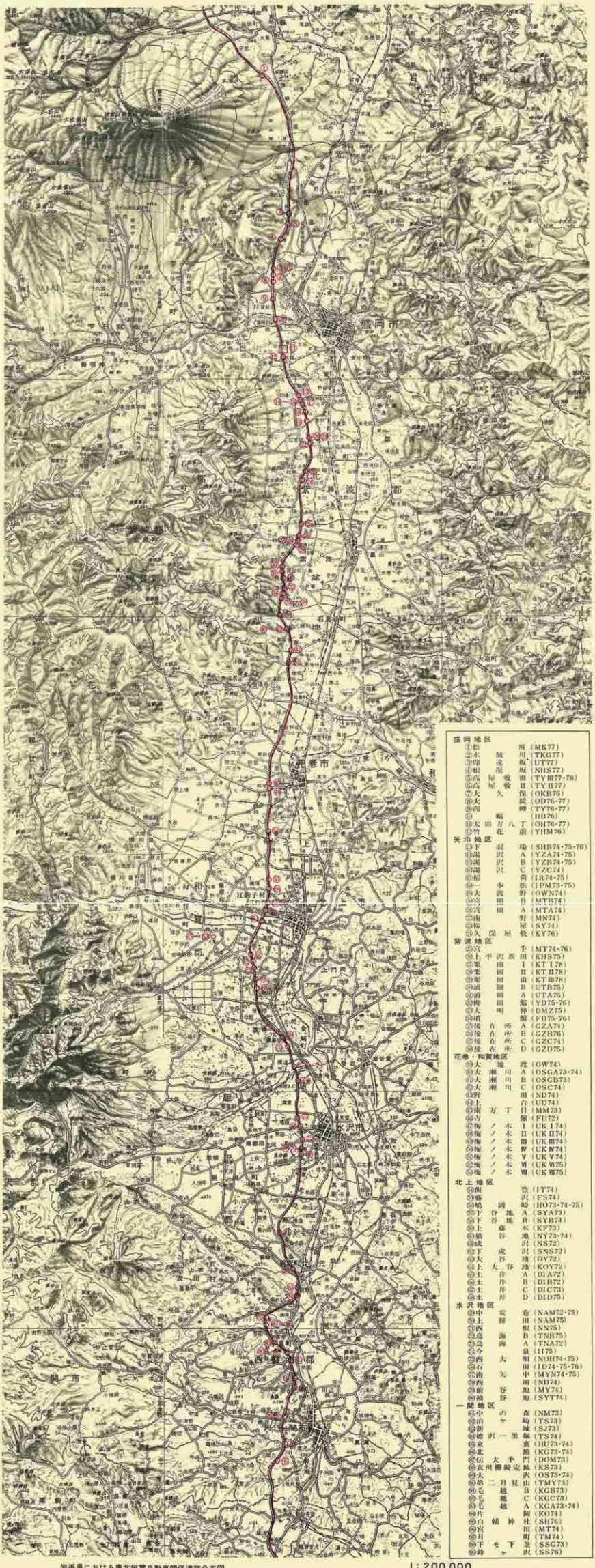
(4)　すべての対象（遺構・遺物・「遺跡」）について、技法的分析に加え組み合わせの重視の観点をも加えてある。

(5)　以上の技術的基準・指標として「出土遺物の整理について」（昭和47年度作成のうち一部修正）を作成し大略それに準拠した整理を実施した。細部は省略するが、大枠は①観察事項を正確に伝えるための作図法他の技術的部門、②文章表現上の留意点とからなる。後者については観察事項と解釈の峻別・不明事項の不明の理由明示などがとくに求められている。

(6)　得た厖大な資料の公開は、別途計画のもとに実施されるであろう。

東北縦貫自動車道関係調査遺跡一覧

地区	市町村名	No.	遺跡名	調査年度
盛岡	西根町	1	松川	昭和52
	滝沢村	2	木賊川	52
		3	卯遠坂	52
		4	根掘坂	52
		5	高屋敷 III	52・53
		6	高屋敷 II	52
		7	大久保	51
		8	大緩	51・52
		9	高柳	51・52
	盛岡市	10	幅	51
		11	太田方八丁	51・52
		12	竹花前	51
矢巾	都南村	13	下羽場	49・50・51
		14	湯沢 A	49・50
		15	湯沢 B	49・50
		16	湯沢 C	49
		17	稲荷	49・50
	矢巾町	18	一本松	48・50
		19	大渡野	49
		20	宮田 A	49
		21	宮田 B	49
		22	南野	49
		23	桜屋	49
		24	久保屋敷	51
紫波	紫波町	25	宮手	49・51
		26	上平沢新田	50
		27	栗田 I	53
		28	栗田 II	53
		29	栗田 III	53
		30	浦田 B	50
		31	浦田 A	50
		32	柳田館	50・51
		33	大明神	50
		34	墳館	50・51
		35	後在所 A	49
		36	後在所 B	51
		37	後在所 C	49
		38	後在所 D	50
花巻・和賀	石鳥谷町	39	大地渡	49
		40	大瀬川 A	48・49
		41	大瀬川 B	48
		42	大瀬川 C	49
		43	野田	48
		44	上台	49
	花巻市	45	南万丁目	48
		46	古館	47
	和賀町	47	梅ノ木 I	49
		48	梅ノ木 II	49
		49	梅ノ木 III	49
		50	梅ノ木 IV	49
和賀		51	梅ノ木 V	昭和49
		52	梅ノ木 VI	50
		53	梅ノ木 VII	50
北上	北上市	54	飯豊	49
		55	藤沢	49
	江釣子村	56	鳩岡崎	48・49・50
		57	下谷地 A	48
		58	下谷地 B	49
		59	上藤木	48
		60	猫谷地	48・49
	北上市	61	成沢	47
		62	下成沢	47
		63	大谷地	47
		64	上大谷地	47
		65	土井 A	47
		66	土井 B	47
		67	土井 C	48
		68	土井 D	50
水沢	金ヶ崎町	69	中荒巻	47・50
		70	上餅田	50
		71	西根	50
		72	鳥海 B	50
		73	鳥海 A	47
	水沢市	74	今泉	50
		75	西大畑	49・50
		76	石田	49・50・51
		77	南矢中	49・50
		78	西田	49
		79	前谷地	49
		80	袖谷地	49
一関	胆沢町	81	中の森	48
	前沢町	82	泊ヶ崎	48
		83	新城	48
		84	徳沢一里塚	49
	衣川村	85	東裏	48・49
		86	北館	48・49
		87	伝大手門跡	48
		88	衣川柵擬定地	48
	平泉町	89	大沢	48・49
		90	第二月見山	48
		91	毛越 B	48
		92	毛越 C	48
		93	毛越 A	48・49
		94	片岡	49
		95	白幡神社	51
	一関市	96	宮田	49
		97	月町	49
		98	下モ下釜	48
		99	鈴ヶ沢	51



岩手県における東北縦貫自動車関係遺跡分布図

1：200,000

0 5 10 15 20キロメートル

本　　文

北上地区概観

1．地形[注(1)]

北上川の支流和賀川が東流するこの地区は、北上川中流域のほゞ中央部にあたり、特に段丘の発達が著しい。上位段丘より順に西根・村崎野・金ヶ崎の各段丘[注(2)]に区分され、ともに小河川によって開析され、奥部に向かって大小の谷が入りくんでいる。

奥羽山系の和賀岳を源流とする和賀川はその支流とする尻平川、夏油川などを合せて東流し、北上市の南東部において合流する。特に南西部には広大な扇状地性段丘が多達し、河川低地は幅2km前後におよんでいる。和賀川の南岸における比高は10m以上であり、急崖が連続している。

和賀川南岸に広がる台地は、もっとも広く分布する金ヶ崎段丘が扇状地として形成された時期に上・中位の段丘を残丘状に残して発達している。和賀川の北岸においても、大小の扇状地、段丘の発達が良好であり、金ヶ崎段丘面が広く分布し、その間に西根・村崎野の上・中位段丘が残丘状に認められるのは南岸と同様である。また、和賀川北岸の河岸低地との間には、比較的規模の大きい自然堤防が形成されている。段丘崖の比高は4m前後である。

2．遺跡の分布

現段階において把握される北上川西岸の遺跡の分布は、大別して和賀川の南・北岸に分けられ、遺跡数によっては和賀川流域に集中し、北方の新堰川以北に希薄となる。

和賀川の北岸では、中位段丘やその縁辺部および開析された支谷に沿って縄文時代の遺跡が比較的多く分布し、河岸低地にも若干認められている。調査された遺跡には鳩岡崎遺跡、藤沢遺跡、藤沢Ic遺跡、同Id遺跡、藤沢II遺跡、九年橋遺跡[注(3)]などがある。一方、低位段丘上や和賀川沿いの河岸段丘縁辺部および自然堤防上には、奈良～平安時代にかけての遺跡が多く分布している。調査された主な遺跡は、長沼古墳群、五条丸古墳群、猫谷地古墳群、および猫谷地遺跡、八幡古墳群、下谷地A・B遺跡[注(4)]などである。

北岸に比して高い段丘崖を形成する南岸においては、段丘状に比較的広い面を形成する中位段丘上や開析された支谷沿いに縄文～平安時代にかけての遺跡が多く分布している。主な調査遺跡は、成沢、上大谷地、高前田、高前壇遺跡を含む相去遺跡群、滝ノ沢遺跡[注(5)]などがある。また、南岸沿いの中・低地段丘縁辺部には、湧泉や深く入り込んだ小谷を利用して、鹿島館、丸子館、白髭館、都鳥館、観音館などの城館遺跡が立地している。そのほか、東方の沖積低地の微高地には八木畑遺跡、松ノ木遺跡、西野遺跡[注(6)]などの平安時代の遺跡がある。

注(1)　詳細は本書付篇　「和賀川流域の地形について」
(2)　中川久夫他「北上川上流沿岸の第4系および地形」『地質学雑誌』第18号（1963）
(3)～(6)　岩手県教育委員会「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」IX（1981）

北上地区遺跡分布図

0 1 2 km

北上地区遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	轟木	中近世・その他	55	田代古墳群	縄文・中近世・その他	109	清水小路東	平安時代
2	飯豊森	〃	56	野崎 I	古墳・奈良・平安	110	九年橋	縄文時代
3	飯豊	平安時代	57	〃 II	〃	111	六八丁館跡	中・近世・その他
4	富士大グランド	縄文時代	58	下谷地A・B	平安時代	112	和野	縄文時代
5	中筵間	縄文時代	59	朴島 IV	平安時代	113	浮島古墳	中・近世・その他
6	長根	古墳・奈良・平安	60	朴島 I	〃	114	黒沢尻柵跡	〃
7	平和観音東	縄文時代	61	朴島 II	〃	115	上川岸	〃
8	森下	中・近世・その他	62	中田	中・近世・その他	116	館 III	縄文時代
9	飯豊館	〃	63	清水端	古墳・奈良・平安	117	館 II	〃
10	中館	〃	64	曽山 I	平安時代	118	立花	中・近世・その他
11	向	縄文時代	65	曽山 II	中・近世・その他	119	館 IV	縄文時代
12	唐戸崎	〃	66	村崎野駅東	〃	120	館 I	〃
13	月館	中・近世・その他	67	二子一里塚	〃	121	沢野	中・近世・その他
14	飯豊	〃	68	下春木場	〃	122	花曽根上	縄文時代
15	成田一里塚	〃	69	黒沢尻上野町住宅	〃	123	三十人町	中・近世・その他
16	下成田	縄文・中・近世・その他	70	野田 I	縄文・弥生	124	上成沢	〃
17	八森館	中・近世・その他	71	念仏車 I	縄文・中・近世・その他	125	成沢	平安時代
18	成田	〃	72	蟲屋敷	弥生・古墳・奈良	126	下成沢	〃
19	伊勢	〃	73	念仏車 II	縄文・弥生	127	高前田	中近世・その他
20	二子城跡	〃	74	大坊	中・近世・その他	128	新幹線ライスセンター	縄文時代
21	秋子沢	平安時代	75	下江釣子羽場	古墳・奈良・平安	129	滝ノ沢	〃
22		中・近世・その他	76	土析	縄文・中・近世・その他	130	滝ノ沢地区	縄文・中・近世・その他
23	北藤根	縄文時代	77	梅ノ木(岩崎城)	〃	131	中成沢	平安時代
24	南筵間	古墳・奈良・平安	78	久田	〃	132	葛西檀	〃
25		中・近世・その他	79	欠坂	〃	133	大谷地	中・近世・その他
26	遠ノ上長根	古墳・奈良・平安	80	田中	縄文時代	134	高前檀 I	平安時代
27	蓮見館跡	縄文・中・近世・その他	81	塚	古墳・奈良・平安	135		〃
28		〃	82	本宿羽場	平安時代	136	大谷地	縄文時代
29		〃	83	五条丸館	中・近世・その他	137	高前檀 II	平安時代
30		縄文時代	84	五条丸 II	〃	138	北長根道合	中・近世・その他
31		縄文・中・近世・その他	85	本宿	縄文・古墳・奈良	139	上大谷地	平安時代
32	藤根駅北	平安時代	86	五条丸 I	中・近世・その他	140	土井A～D	弥生時代
33		縄文・中・近世・その他	87	五条丸古墳群	古墳・奈良	141	鶴野館	古墳・奈良・平安
34		縄文・中・近世・その他	88	朴島 III	中・近世・その他	142	平林 I	平安時代
35		中・近世・その他	89	上藤木	〃	143	平林 II	〃
36		〃	90	高橋	平安時代	144	観音館	中・近世・その他
37	荒屋	〃	91	猫谷地(古墳群)	古墳・奈良・縄文	145	鬼柳西裏	縄文・弥生
38		縄文時代	92	八幡古墳群	古墳・奈良	146	南館	縄文・中・近世・その他
39	声壹	縄文・古墳・奈良	93	萩島	中・近世・その他	147	西野	平安時代
40	新平	〃	94	三枚橋	〃	148	陣ヶ丘	中・近世・その他
41	藤沢	古墳・奈良・平安	95	柳田	〃	149	展勝地	〃
42	高畑	中・近世・その他	96	黒小屋	平安時代	150	西谷	〃
43	持川	縄文	97	八幡	中・近世・その他	151	松ノ木	平安時代
44	下糠塚	中・近世・その他	98	鳥海柳	古墳・奈良・縄文	152	小磐沢	縄文・中・近世・その他
45	中通 I	古墳・奈良・平安	99	鍛冶町南	中・近世・その他	153	岩脇	〃
46	中通 II	〃	100	火薬庫西	〃	154	八木畑	〃
47	横堰 I	縄文・古墳・奈良	101	六軒	縄文時代	155	春木場	縄文時代
48	横堰 II	古墳・奈良・平安	102	柳上	中・近世・その他	156	上の台	縄文・中・近世・その他
49	鳩岡崎開墾	平安時代	103		〃	157	相田	縄文・弥生
50	鳩岡崎	縄文・古墳・奈良	104	常盤台	平安時代	158	前神沢	中・近世・その他
51	鳩岡崎三館	中・近世・その他	105	黒沢尻北高グランド	〃	159	館	古墳・奈良・平安
52	藤沢 I	縄文・古墳・奈良	106	梨子山	縄文時代	160		中・近世・その他
53	析橋	中・近世・その他	107	ボタン畑	〃	161	馬場先	平安時代
54	清水	〃	108	諏訪神社境内	中・近世・その他	162	下門岡墓塚	中・近世・その他
						163	樽山	縄文時代

飯豊遺跡

遺　跡　名：飯豊(略号IT74)
遺跡所在地：北上市飯豊町字飯豊
　　第19地割45－1
調査期間：昭和49年5月16日～5月22日
調査対象面積：3,000㎡
発掘調査面積：3,000㎡

I　位置と立地

本調査地は、国鉄東北本線村崎野駅北西4.5kmの中位段丘平担部に立地し、南側には飯豊川をのぞむ。標高約92mで現状は宅地、田畑であった。調査範囲は東北縦貫高速自動車道・本線及び側道部分の南北に長い部分であるが、遺跡範囲は東西方向にも伸びると思われる。周辺の遺跡としては、南東方向に唐戸崎遺跡（縄文時代中期・包含地）、北東方向には大谷地遺跡（平安時代、集落）、西方には中笹間遺跡（縄文時代中期・野営地）轟木遺跡（平安時代・集落）等がある。

II　調査の概要及び結果

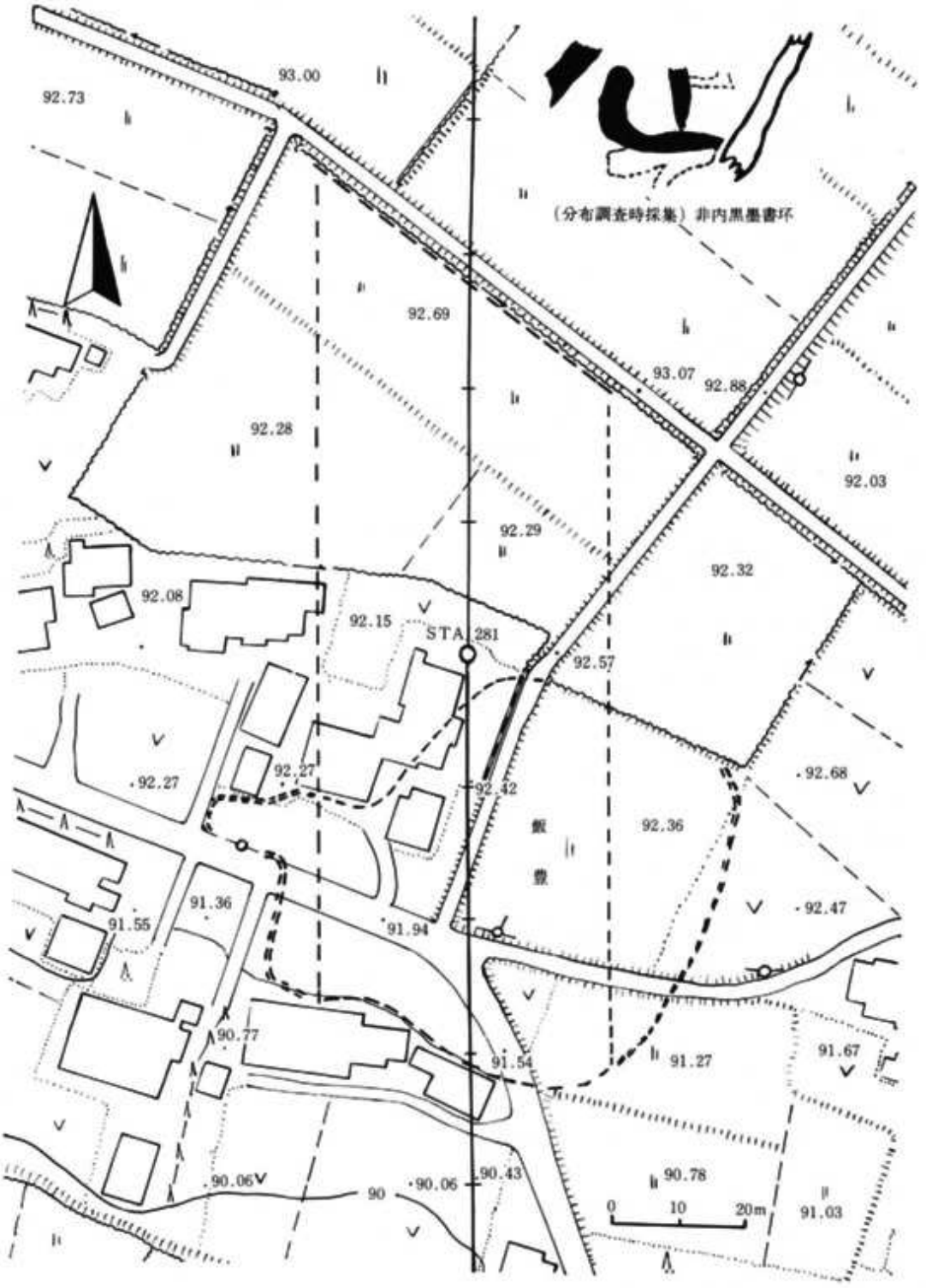
調査は昭和49年5月16日から5月22日までの6日間で行なわれた。道路敷となる区域について路線中心杭 STA281 をほぼ中間に南北約60mの範囲を調査した。表土の除去・住宅の基礎部・雑物撤去作業は重機（ブルドーザー）によって行なった。

地山面（黄褐色粘土層）までの検出作業によっても、遺構、遺物の確認は出来なかった。

周辺の畑地からは微量ではあるが平安期のロクロ使用土師器・須恵器の小破片が採取されている。分布調査時に発見された土器片については第1図に図示してある。これはロクロ使用土師器坏で墨書痕が認められるが、欠落やかすれ等で判読は難かしい。

III　今後の問題点

IIにおいてはふれなかったがすぐ西方には飯豊館遺跡がある。調査地西側は宅地であるので小規模な現状変更の可能性が考えられるのみであるがその際においても遺跡を破壊する事のないように注意する必要がある。又、調査地は平担とはいえ南斜面上に位置するので北方及び北西方向よりの遺物の流れ込みの可能性及びそれらの供給地としての集落等の存在の可能性も考えられる。現状が田の場合分布調査の結果遺物が発見される可能性は少く、その為に調査の行なわれない事も多いが遺跡が破壊されてしまわないように注意する必要がある。


93.00
92.73
(分布調査時採集) 非内黒墨書坏
92.69
93.07
92.88
92.28
92.03
92.29
92.32
92.08
92.15
STA 281
92.57
92.27
92.27
92.42
92.68
飯
豊
92.36
91.36
91.55
91.94
92.47
90.77
91.54
91.27
91.67
90.06
90
90.06
90.43
90.78
0
10
20m
91.03

第1図　飯豊遺跡地形図

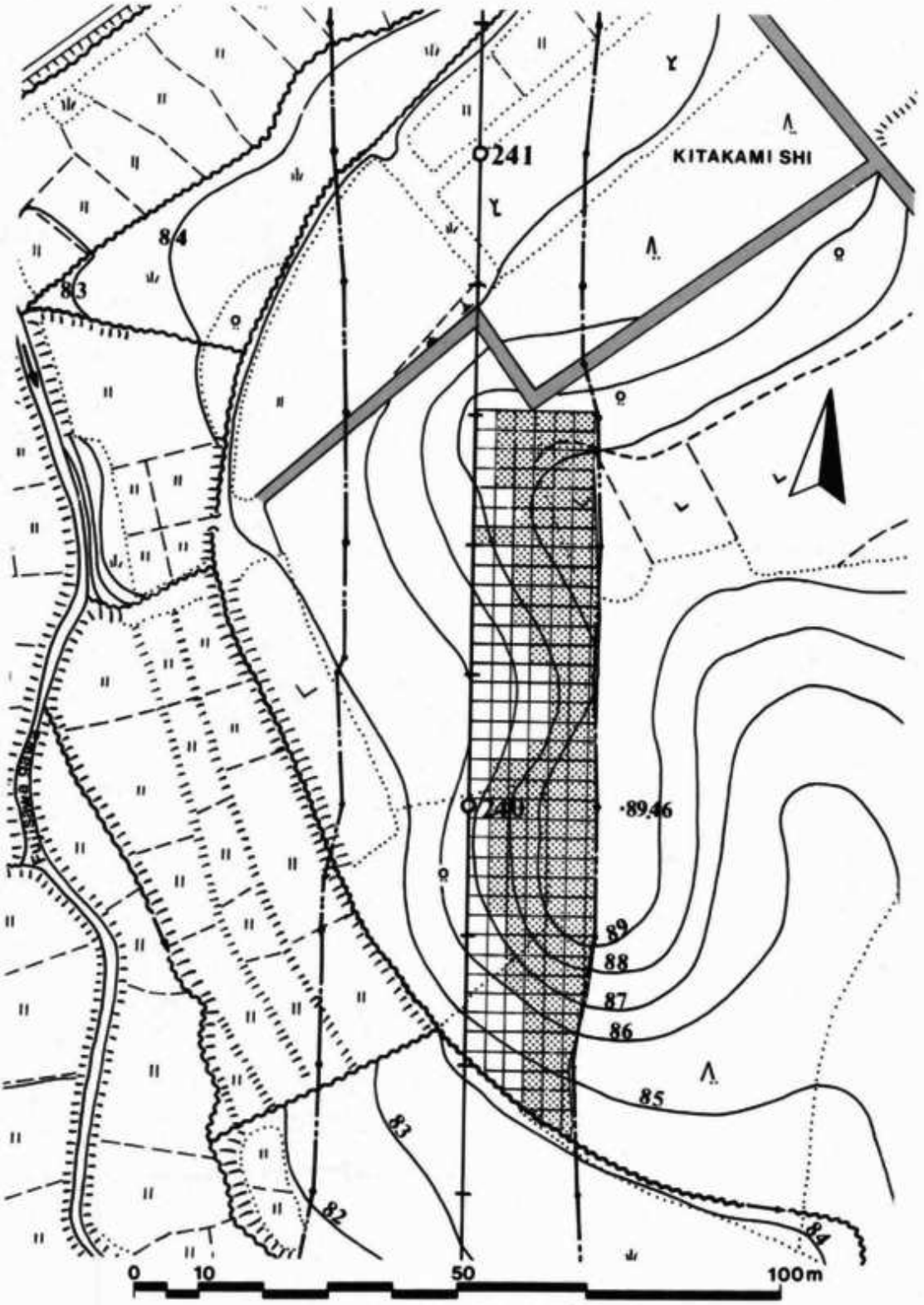
藤沢遺跡

遺　跡　名：藤沢(略号FS74)
所　在　地：北上市飯豊町藤沢14－139ほか
調 査 期 間：昭和49年6月3日～10月20日
調査対象面積：1,750㎡
発掘調査面積：1,600㎡

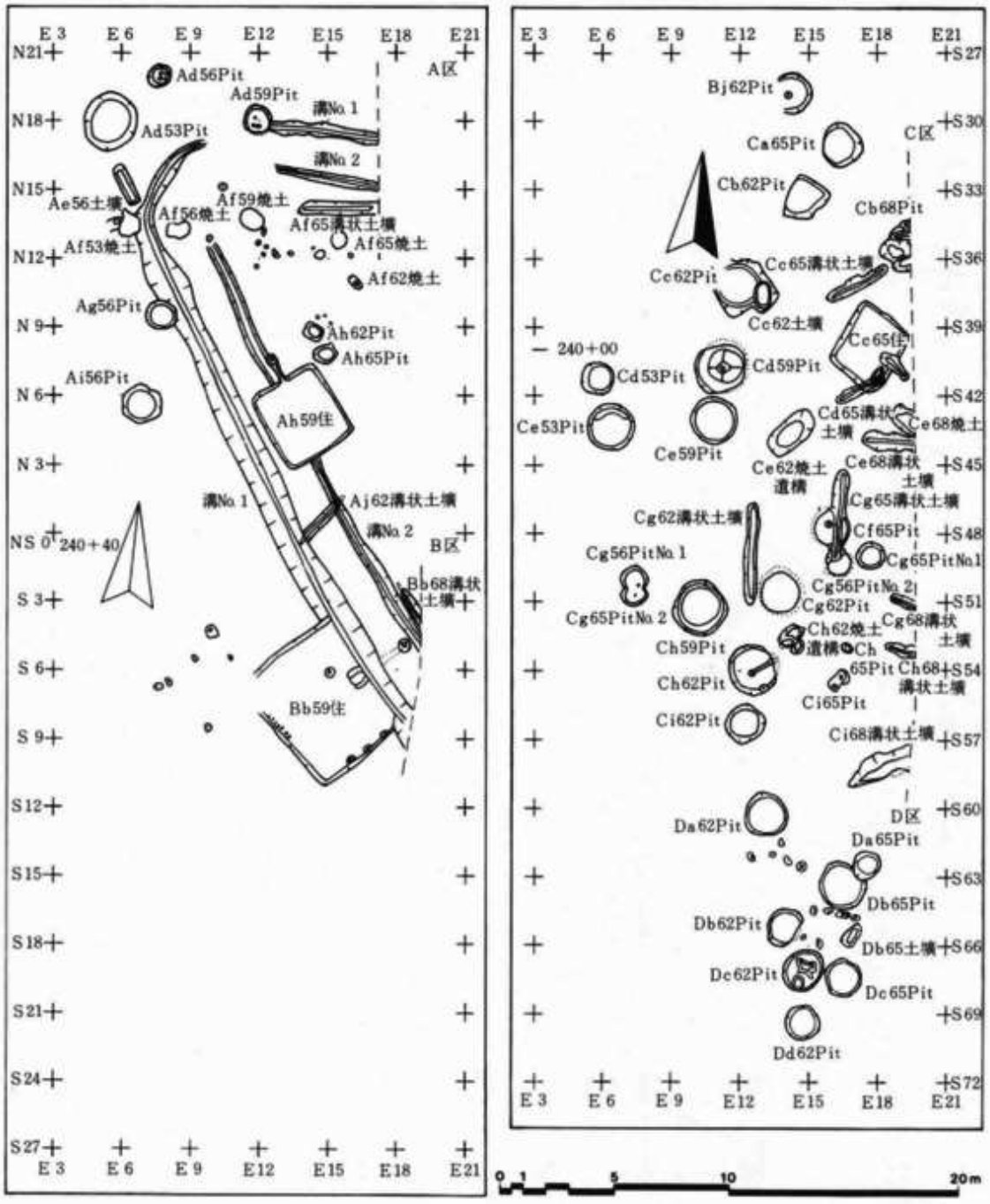
図 表 目 次

第１図　地形・グリット配置図……11
第２図　遺構配置図……12
第３図　土層図……13
第４図　Ah 59住居跡……15
第５図　Ah 59住居跡出土遺物……16
第６図　Bb 59住居跡……18
第７図　Bb 59住居跡出土遺物……20
第８図　Cc 65住居跡……24
第９図　Cc 65住居跡出土遺物……26
第10～11図　ピット実測図Ⅰ～Ⅱ……37
第12図　ピット・溝状土壙実測図……39
第13図　溝状土壙・焼土遺構・土壙実測図……44
第14図　溝実測図……48
第15～17図　石器実測図Ⅰ～Ⅲ……56
第18～21図　剥片石器実測図Ⅰ～Ⅳ……59
第22図　剥片石器実測図Ⅴ・土器実測図……63
第23図　土器・鉄器実測図……64

ピット一覧表……28
溝状土壙一覧表……40
土壙一覧表……40
焼土遺構一覧表……40
石器実測図説明Ⅰ～Ⅳ……52
遺物一覧表……65



第1図　地形・グリット配置図


E 3
E 6
E 9
E12
E15
E18
E21
N21
N18
N15
N12
N 9
N 6
N 3
NS 0
S 3
S 6
S 9
S12
S15
S18
S21
S24
S27
A区
B区
C区
D区
Ad56Pit
Ad59Pit
Ad53Pit
溝No. 1
溝No. 2
Ae56土壙
Af56焼土
Af59焼土
Af65溝状土壙
Af65焼土
Af53焼土
Af62焼土
Ag56Pit
Ah62Pit
Ah65Pit
Ai56Pit
Ah59住
Aj62溝状土壙
240+40
Bb68溝状土壙
Bb59住
Bj62Pit
Ca65Pit
Cb62Pit
Cb68Pit
Cc65溝状土壙
Cc62Pit
Cc62土壙
Cc65住
240+00
Cd53Pit
Cd59Pit
Cd65溝状土壙
Ce68焼土
Ce53Pit
Ce59Pit
Ce62焼土遺構
Ce68溝状土壙
Cg65溝状土壙
Cg62溝状土壙
Cf65Pit
Cg56PitNo. 1
Cg65PitNo. 1
Cg56PitNo. 2
Cg62Pit
Cg65PitNo. 2
Cg68溝状土壙
Ch62焼土遺構
Ch59Pit
Ch65Pit
Ch68溝状土壙
Ch62Pit
Ci65Pit
Ci62Pit
Ci68溝状土壙
Da62Pit
Da65Pit
Db65Pit
Db62Pit
Db65土壙
Dc62Pit
Dc65Pit
Dd62Pit
S27
S30
S33
S36
S39
S42
S45
S48
S51
S54
S57
S60
S63
S66
S69
S72
0 1 5 10 20m

第2図 遺 構 配 置 図

I　位置と立地

藤沢遺跡は、北上市飯豊町藤沢14—139他に在り、国鉄東北線北上駅の北西約4.8kmに位置する。北上市飯豊町に在る流通センターの北西端になる。

北上市の北西部に発達した村崎野段丘の南西に面した緩斜面に立地し、新堰川より分流した藤沢川の東側約60m地点で、河畔との比高は約９ｍである。

遺跡の現状は、植林された針葉樹の防風雪林と雑木林、北東側に１部畑地がある。この林は段丘崖に沿って南東へ長く続いていく。遺跡の東側と西側、及び北側は水田地帯である。

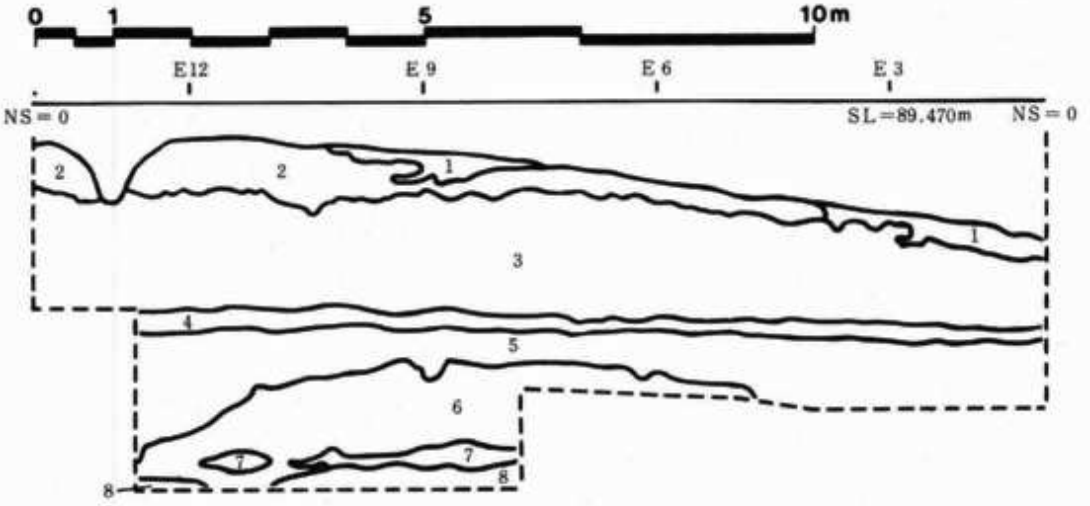
藤沢遺跡の南約300ｍには鳩岡崎遺跡。南約1.9kmには下谷地Ａ・Ｂ遺跡。南約2.7kmには猫谷地遺跡がある。また藤沢川の西岸にも鳩岡崎遺崎遺跡の延長と思われる遺物包含地がある。

II　調査の経過

分布調査によって登録された藤沢遺跡の位置は、本調査地区の北約60ｍの地点で、農業用水路とその周辺の低湿な水田であったため、昭和48年４月に現地確認の際、本調査地区西側の畑地（第１図）で遺物が散布されているのを確認し、調査地区を変更した。

調査は昭和49年６月３日から10月20日迄であるが、その間６月19日から８月１日迄は、下谷地(A)遺跡の南端で、農業用水路にヒューム管理設工事中に多量の木器、土器等が発見されたため、下谷地(B)遺跡の調査を実施し、藤沢遺跡の調査を中断した。

III　層序と土質



第３図　土 層 図

前項、第２図の如く、公団中心杭240＋40の地点から東へ深掘りを実施した。東へ12kmの地点で第２層から4.45mまで掘り下げた。図版14参照。

１層　7.5Y R4/4、褐色火山灰腐植土混合層、密で粘性有り。

２層　7.5Y R5/6、明褐色火山灰層、粗で粘性有り、パミス若干混入。

３層　10Y R6/8、明黄褐色パミス層、密で粘性有り、植物根有り。

４層　7.5Y R5/6、明褐色粘土質火山灰層、非常に密で粘性有り。

５層　2.5Y R7/4、浅黄色粘土層、粘性強い、植生痕有り。

６層　2.5Y R7/3、浅黄色シルト層、密で粘性無し。

７層　10Y R5/8、黄褐色砂礫層

８層　礫層

Ⅳ　発見された遺構と遺物

発見された遺構は、住居跡３棟、ピット33基。溝状土壙（陥し穴状遺構）11基。土壙３基。焼土遺構８基。他に最近造られたと思われる溝２条である。

発見された遺物は、縄文土器片、石器と剝片。弥生式土器片、土師器、須恵器、紡錘車、刀子で、主に住居跡とピットから出土した。遺物一覧表参照。

１　住居跡

(1)Ah 59 住居跡（第４図　図版１）

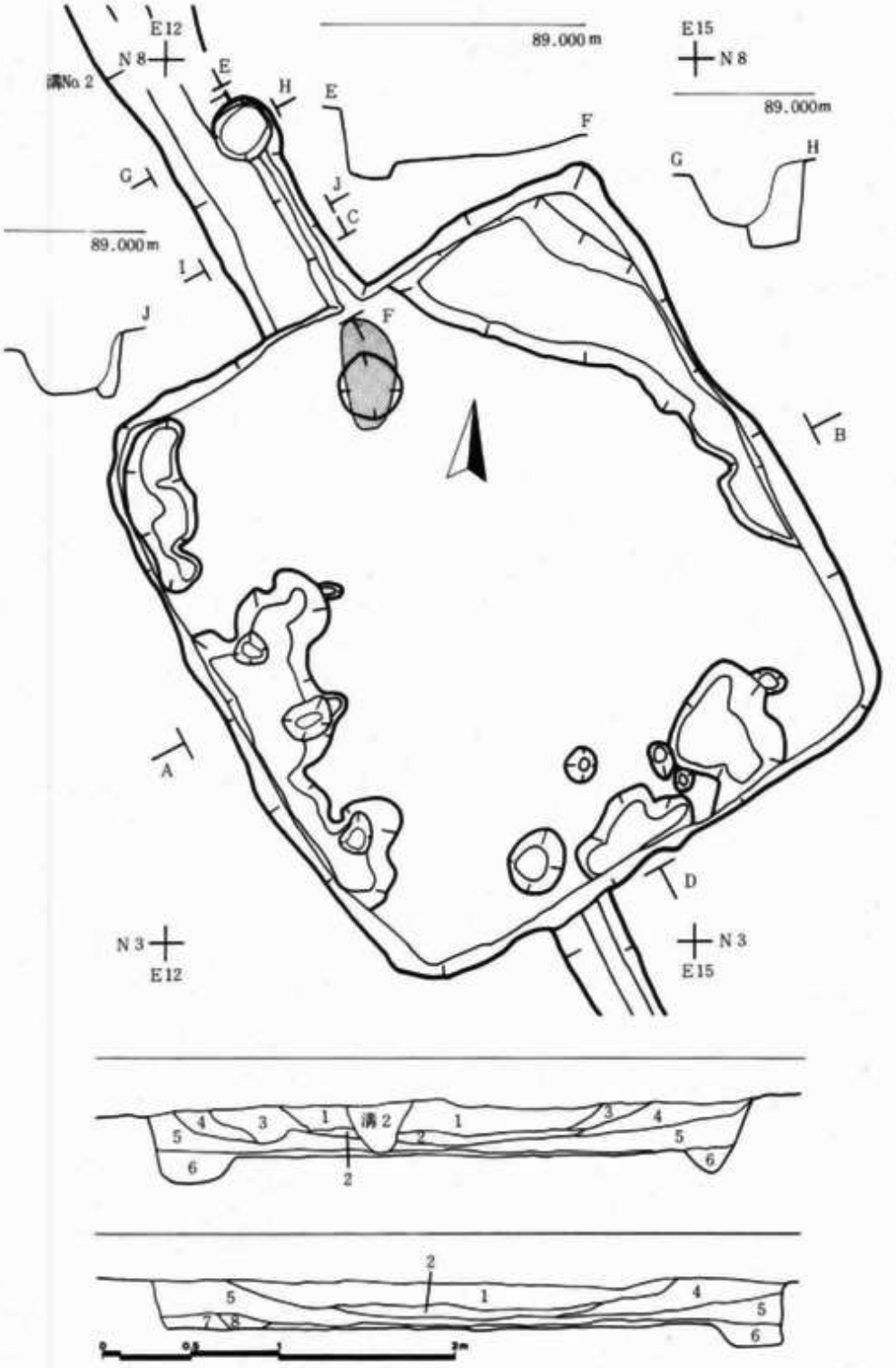
〔遺構の確認〕基準点240＋40から北へ2.80～7.39m、東へ11.68～16.05mの地点Ah 59地区と周囲に黒褐色の落込みを確認した。遺構確認面は明褐色火山灰層である。

〔重複・増改築〕溝№２が、煙道、煙出の西半分を切り、南壁中央部も切っている。

〔平面形・規模・方向〕東西3.45m、南北3.6mの方形で、軸線はN－35°－Wで北西向き。

〔堆積土〕１層：7.5Y R2/1黒色腐植土、指痕若干つく、粘性なし。２層：2.5Y R7/6明黄褐色粉状パミス、指痕つく、粘性なし、腐植土混入。３層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土、指痕若干つく、粘性なし、火山灰土若干混入。４層：7.5Y R4/3褐色火山灰土、指痕若干つく、粘性ややあり、腐植土混入。５層：7.5Y R4/4褐色火山灰土、指痕つく、粘性ややあり、腐植土、炭化物を含む。６層：7.5Y R4/4褐色火山灰土、指痕つく、粘性なし、腐植土混入。７層：褐色火山灰土、指痕ややつく、粘性ややあり、焼土、炭化物混入。８層：7.5Y R4/3褐色火山灰土、指痕つく、粘性なし、焼土、炭化物混入。

〔床面〕中央部は、地山面を利用し、固くしまっている。東・西・南の各壁下は柔らかく、掘方状の落ち込みがある。壁への立ち上りは急角度で、壁高は約30cmである。


E12
N 8
溝No. 2
E
H
E
F
89.000 m
E15
N 8
89.000m
G
H
G
J
C
89.000 m
I
J
F
B
A
D
N 3
E12
N 3
E15
溝 2
1
2
3
4
5
6
7
8
0
0.5
1
2m

第 4 図　Ah59住居跡

〔柱穴〕確認されなかった。

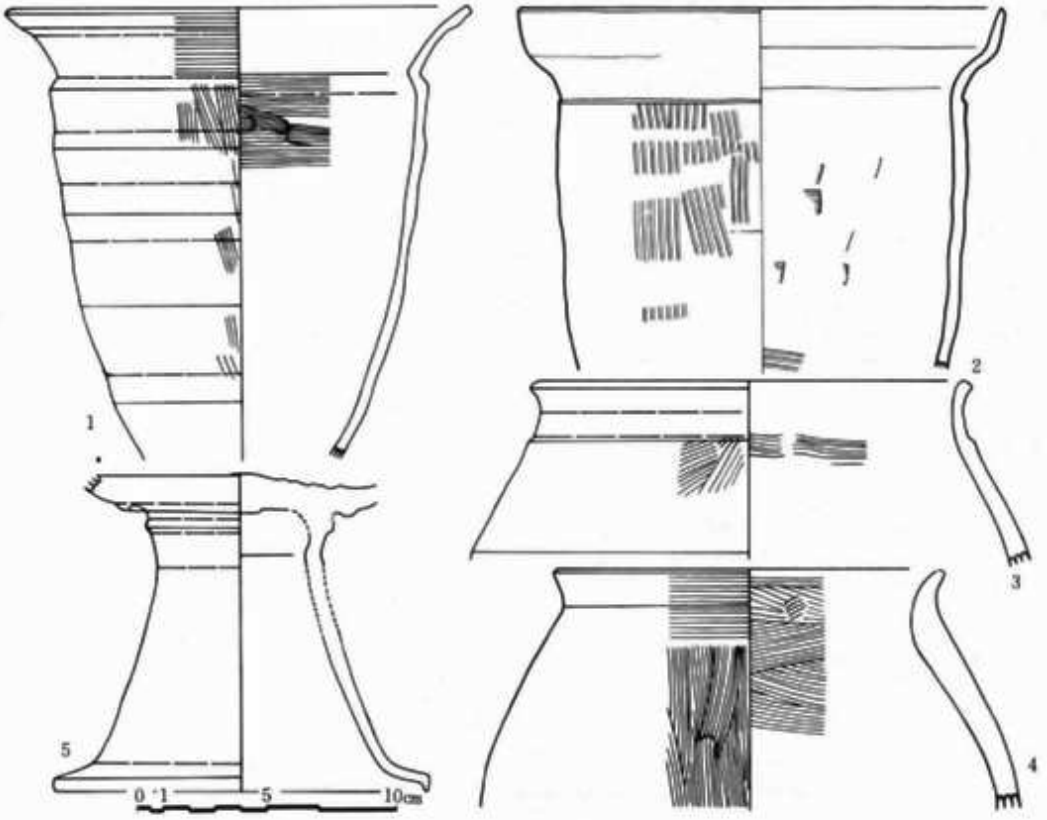
〔かまど〕北壁中央にあり、燃焼部は直径36cmの浅い掘込みで、焼土が堆積する。両袖は欠損する。煙道は長さ90cm。深さは15〜30cm。下場の巾4〜6cm。先下がりになる。煙出は上場径約35cm。下場径27×20cm。深さ40cm。溝№2に西半分を切られる。

〔貯蔵穴〕確認されなかった。また、その他の施設も確認されなかった。

〔年代決定資料〕遺物一覧表の通り、土師器長胴甕79点、球胴甕2点、内黒坏2点、高坏1点。須恵器非内黒坏1点が出土した。

出土遺物

土師器　長胴甕（5図1・2　図版1—1・2）2点共かなり磨滅している。1は推定口径約13cm。頸部径約14cm。体部最大径約14.5cm。口縁部高さ2.7cm。口縁部は横なで、かなり外反する。頸部有段。外体面は箆削り箆なで、かなり凸凹がある。内面は刷毛目痕がある。胎土軟質砂粒多い。色調灰白色、焼成は不良である。2は推定口径約18.8cm。頸部径約15.5cm。体部最大径15.8cm。口縁部高さ3.5cm。口縁部は横なでで、内湾外傾する。頸部有段外体面は縦に刷



第5図　Ah59住居跡出土遺物

毛目、内体面は横に刷毛目と篦なでで、凸凹がある。胎土は軟質砂粒多い。褐色で、焼成は不良である。他に77点の破片が出土しており、図版1－6～10の様に、口縁部は横なで、体部は篦なで篦削り刷毛目痕、下底面は木葉痕が認められる。

土師器球胴甕（第5図3・4　図版1－3・4）3は推定口径約17cm。頸部径約16.6cm。残存する体部最大径約21.5cm。口縁部高さ2.2cm。口縁部は横なでで、やや外反する。頸部有段、体部内外面は磨滅し成形調整は不明である。胎土軟質、色調は浅黄橙色、焼成は不良である。4は推定口径約15cm。頸部径約14.4cm。残存する体部最大径約20.08cm。口縁部高さ7.5cm。口縁部は横なでで、やや外反する。頸部無段。体部内外面は篦なでである。胎土やや軟質。色調は橙色～灰褐色、焼成はやや不良である。

高坏（第5図　図版1－5）底部と高台部若干残存で、底径9.4cm。台部上端径7.5cm。台部下端径14.5cm。台部高さ10.8cm。畳付部はかなり薄くなる。底部上面は上に張り出し、底部中央の厚さは1.6cmである。胎土軟質。色調灰白色。焼成不良である。

内黒坏　2点出土したが、両者共小破片で実測不能である。1点は底1/2残存で、丸底である。内面は放射状磨きである。1点は体下底1/3残存で、丸底である。磨滅しているため内面の磨き方向は不明である。

(2)Bb 59住居跡（第6図　図版2－上）

〔遺構の確認〕基準点240＋40から南へ3.52～11.05m。東へ11.23～18.2mの地点、Bb 59地区とその周囲に黒褐色の落込みを確認した。遺構確認面は明褐色火山灰層である。

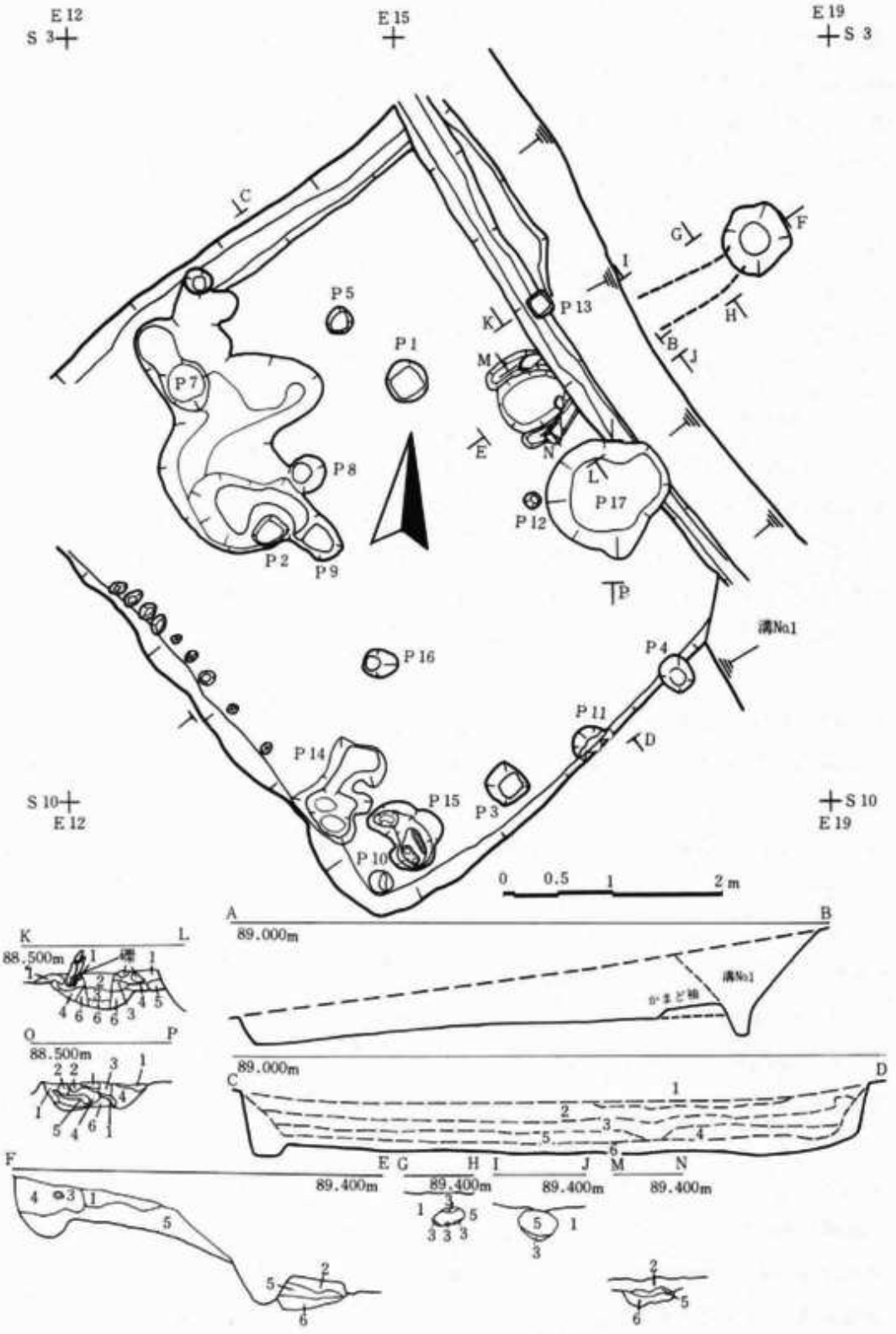
〔重複・増改築〕溝№1が東壁とかまど煙道の一部を切っている。中央から北壁にかけて攪乱がかなり広い範囲に確認され、床面も壊されている。

〔平面形・方向〕東西4.5～5m、南北5.85mの長方形で、軸線はN－50°－Eで北東向き。

〔堆積土〕1層：7.5YR3/1黒褐色腐植土、指痕つく、粘性なし、炭化物焼土、火山灰を含む。2層：7.5YR2/1黒色腐植土、指痕若干つく、粘性ややあり、火山灰を少量含む。3層：7.5YR3/3暗褐色腐植土、指痕若干つく、粘性なし、炭化物を少量、火山灰軽石を含む。4層：7.5YR4/6褐色土、指痕若干つく、粘性なし、炭化物を少量、火山灰軽石を含む。5層：7.5YR3/3暗褐色土、指痕若干つく、粘性ややあり、焼土炭化物を少量含む。6層：7.5YR3/2黒褐色土、指痕つく、粘性なし、腐植土、火山灰、軽石、パミス混合。

〔床面〕地山面を利用してつくられ、若干西側が低い。かなりの傾斜面につくられているため北西コーナ部は、検出面とほゞ同じで、壁の輪郭は不明であり、中央部から北壁にかけて1部床面がかなり掘り込まれている。壁への立ち上りは急角度で、壁高は15～70cmである。

〔柱穴〕主柱穴は4と思われ（P.1～P.4）、他に柱穴状のピットが9（P.5～P.13）ある。


E 12
S 3
E 15
E 19
S 3
P 5
P 1
P 7
P 8
P 2
P 9
P 13
P 17
P 12
P 16
P 4
P 11
P 14
P 15
P 3
P 10
溝No.1
S 10
E 12
S 10
E 19
0 0.5 1 2 m
89.000m
かまど跡
88.500m
89.400m

第 6 図　Bb59住居跡

主柱穴は、ほゞ方形のプランを呈し、径30～40cm、深さは床面下30～40cmである。

〔かまど〕東壁中央にあり、燃焼部は横約50cm、奥行き約70cmの楕円形プランで、中央部は約20cmほど掘り込まれる。両袖は共に残存し、礫が埋め込まれる。埋土(6図K－L)は、1層：10YR6/4にぶい黄橙色粘土、指痕ややつく、粘性あり、焼土を含む。2層：5YR3/4暗赤褐色粘土焼土混合土、指痕つく、粘性わずか。3層：2.5YR4/8赤褐色焼土、指痕つかない、粘性なし。4層：10YR4/6褐色火山灰腐植土混合土、指痕つく、粘性ややあり。5層：7.5YR5/6明褐色火山灰土、指痕つく、粘性ややあり。6層：7.5YR6/8橙色パミス焼成変質土、指痕つかない、粘性なし。6図M－Nの2層はK－L1層、5層はK－L3層、6層はK－L6層。煙道は、長さ約1.7m。巾22～35cm、縦15～30cmの刳り貫きで、先上りである。埋土6図E～Jは、1層：7.5YR5/4褐色火山灰土、指痕ややつく、粘性あり。2層：10YR6/4にぶい黄橙色粘土、指痕ややつく、粘性あり。3層：2.5YR4/4赤褐色焼土ブロック。4層：7.5YR3/4暗褐色腐植土、指痕つく、粘性あり、焼土炭化物、礫、遺物を含む。5層：2.5YR4/8赤褐色焼土、指痕つかない、粘性なし。6層：7.5YR6/8橙色パミス焼成変質土。煙出しは、上場径約60cm。下場径約27cm。深さ約50cm。埋土は上記3・4・5層（6図E－F）である。

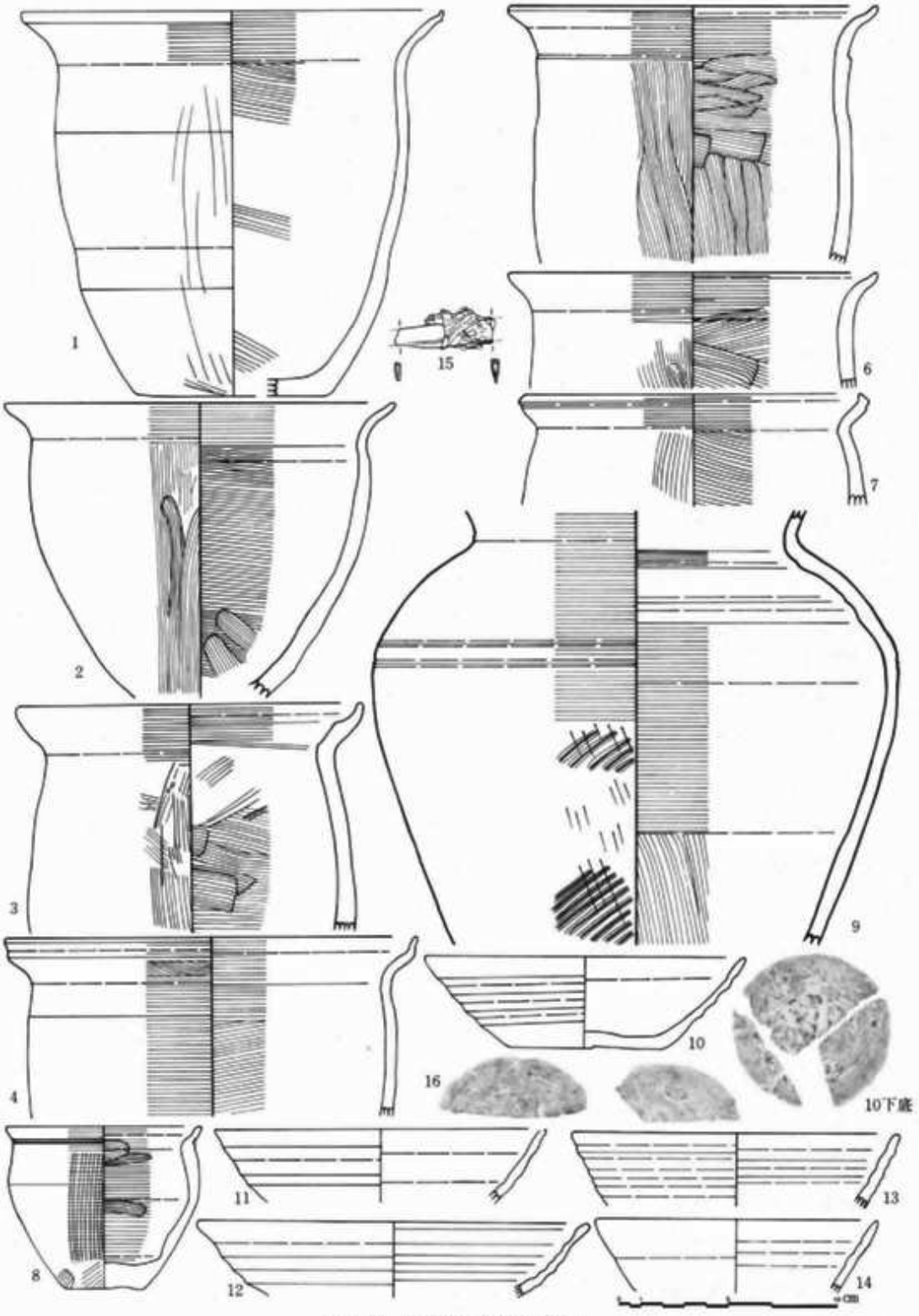
〔貯蔵穴〕貯蔵穴状ピット（P.17）は、上場径約1.1m、下場径約0.7m、深さ約25cmの不整形で、埋土（6図O－P）は、1層：7.5YR3/2黒褐色腐植土、指痕ややつく、粘性ややあり。2層：10YR7/6明褐色粘土、指痕ややつく、粘性あり。3層：7.5YR5/6明褐色火山灰土、指痕ややつく、粘性ややあり。4層：7.5YR4/6褐色火山灰土、指痕つく、粘性ややあり。焼土、炭化物、遺物を含む。5層：7.5YR4/4褐色火山灰土、指痕つく、粘性ややあり、焼土、炭化物を含む。6層：10YR4/6褐色火山灰土、指痕つかない、粘性ややあり。

〔その他の施設〕北壁下東半分に、溝が平行してつくられている。西壁下に9つの小ピットがある。P.14～P.16は浅く、遺物は発見されなかった。

〔年代決定資料〕土師器、長胴甕135点。球胴甕4点。内黒坏10点。須恵器、壺53点。坏21点。刀子1点。その他石器、剥片29点が出土した。甕は、頸部が有段のものと無段のものがあり、底部下面は木葉痕のものがある。坏は大部分が平底で、ろくろ使用、回転篦切りのものがみられる。石器、剥片は北側攪乱層から出土したものが多い。

出土遺物

長胴甕（7図1～9　図版2－1～9）1は、口縁部1/5、体部1/3、底部若干残存で、推定口径約19.4cm。底径約9cm。器高17.6cm。口縁部は横なで、外反。口端部は上に若干挽き出される。頸部無段。外体面は縦の篦なで、内体面は横の篦なで痕がある。2は、口・体部各1/4残存で、推定口径約18cm。頸部径約15.4cm。体部最大径約15.6cm。口縁部は横なで、外反。口端



第 7 図　Bb 59住居跡出土遺物

部は丸みをもつ。頸部無段。外体面は縦の篦なで、内体面は横の刷毛目痕がある。3は、口・体上部各1/3残存で、推定口径約16cm。頸部約13.2cm、体部最大径約15.1cm。口縁部は横なで、内湾外傾。口端部は上に挽き出される。頸部無段。外体面は縦の篦なで、内体面は横の刷毛目痕がある。4は、口・体上部各1/3残存で、推定口径約19cm。頸部径約16.6cm。体部最大径約17cm。口縁部は横なで、内湾外傾。口端部は上に挽き出される。頸部無段。体部は内外面共に横なでである。5は、口・体上部各1/4残存で、推定口径約17cm。頸部径約14.4cm。体部最大径約14.6cm。口縁部は横なで、外反。口端部は丸く、やや上に挽き出される。頸部有段。外体面は篦なで、内体面は刷毛目痕がある。6は、口・体上部各1/6残存で、推定口径約17cm。頸部径約14.7cm。残存体部最大径約15cm。口縁部は横なで、外反。口端部は丸く、やや上に挽き出される。頸部無段。体部内外面共に刷毛目痕がある。7は、口・体上部各1/8以下残存で、推定口径約16cm。頸部径約14.4cm。残存体部最大径約15.8cmで、胴がやや張ると思われる。口縁部は横なで、内湾外傾。口端部は上に挽き出される。外体面は磨滅し、調整痕は認められない。内体面は横位の刷毛目痕がある。8は、口・体部1/6、底部1/2残存の小型長胴で、器高7.5cm。推定口径約9cm。底径3.6cm。口縁部高さ0.8cm。頸部径約8.2cm。体部最大径約8.8cm。底部中心の厚さ1.1cm。体壁厚さ0.3～0.6cm。口縁部は横なで、外反。口端部は丸みがあり薄くなる。頸部は、体部との境に沈線が2本施される。外体面は、横に篦なで後、縦に篦なで、内体面は横に刷毛目痕がある。底下面には切離し痕は認められない。他に131点の小破片が発見された。遺物一覧の通り、長胴甕と思われるもの128点、球胴甕と思われるもの3点で、図示した甕を合わせると、長胴甕135点。球胴甕4点になる。図示しない131点の中には、外体面が篦削り篦なで調整のものの他に、平行叩き目痕のあるものが1点。底部破片では図版2―16の如く木葉痕のあるもの2点、丸底で平行叩き目痕のあるものが1点発見された。

内黒坏10点共小破片で、実測不能、全容不明である。4点は口縁部、6点は体部破片で、底部は発見されなかった。口縁部破片中2点はろくろなで成形。1点は、外面が黒色、磨き、篦削りの痕が認められ、1点の外面は、端部黒色処理の外は磨滅著しく、成形と調整は不明である。体部破片中2点は、磨きと篦削り痕が認められ、1点は、篦削り痕が認められる。他の3点は、磨滅し小破片であるため、成形と調整は不明である。(図版2―17)

須恵器　壺(7図9　図版2―9)9は、頸部若干、体部約1/4残存で、16点同一個体と思われる破片で、推定頸部径約14.8cm、体部最大径約24cm。外面は頸部と肩部が横なで、体部が平行叩き後、篦削り篦なで調整である。器形と成形技法は須恵器の壺と同様であるが、胎土は砂混入で軟質、色調は浅黄橙色に近く、焼成は不良で、土師質である。他に、同一個体と思われる、口縁部5点、頸部1点、体部1点の小破片は、口縁部が横なで、口端部は上に挽き出され、頸部は平行叩き後横なで、外体面は平行叩き目痕、内体面は篦なでである。他に、同一個体と

思われる、体部24点の小破片は、外体面が平行叩き目痕、内体面が篦なで、外体面の1部に灰釉が付着する。胎土硬質、色調灰色～黒色、焼成良好である。他の同一個体と思われる、体部2点の小破片は、外面が平行叩き後、横に篦なで、内面は同心円紋の当て工具痕、胎土硬質、色調は表面が褐灰色、胎部がにぶい橙色。焼成良好である。他の同一個体と思われる体下底部2点の破片は、体部内外面共に篦なで、底下面は砂粒の圧痕がかなりあり、中央が上に張り出す。胎土硬質。色調黒色。焼成良好である。他の同一個体と思われる、体下底部2点の破片は、内外面共に篦なでで、かなり歪みがある。内面に灰釉が付着する。胎土硬質。色調褐灰色～黒色。焼成良好である。

須恵器坏（7図10～14　図版2－10～14）10は、口体部1/8、底部5/6残存で、器高4.2～4.3cm。推定口径約14.7cm。底径7.3cm。ろくろなで成形無調整。回転篦切りである。体部は、ほゞ直線的に外傾し、底部との境は丸みをもつ。胎土軟質砂粒を含む。色調浅黄橙色。焼成不良である。11は、口体上部1/5残存で、推定口径約15.2cm。ろくろなで成形無調整。体部はやや丸みをもち外傾する。胎土軟質砂粒を含む。色調浅黄橙色。焼成不良である。12は、口体上部1/8残存で、推定口径約18cm。ろくろなで成形無調整。口縁部はわずかに外反し、体部はわずかに丸みをもち、かなり外傾する。胎土やや軟質砂粒を含む。色調灰白色。焼成やや不良である。13は、口体上部1/8残存で、推定口径約15cm。ろくろなで成形無調整。口体部は直線的に外傾する。胎土軟質砂粒を含む。色調浅黄橙色。焼成やや不良である。14は、口体上部1/8残存で、推定口径約13cm。ろくろなで成形無調整。口体部は直線的に外傾する。胎土軟質砂粒を含む。色調灰褐色。焼成不良である。他に、口体部6点。体部7点。底部3点が出土している。口体部13点は、何れもろくろなで成形無調整。胎土軟質砂粒を含む。色調は橙色系。焼成は酸化炎焼成である。底部3点は、共に回転篦切りで、体下端との境は丸みがある。7図16は、体下端に篦削り痕が認められ、7図17と共に底下面は、回転篦切りである。

刀子（7図15、図版2－15）棟区と刃区を中心に若干の刀身部と茎が残存する。刀身部の巾6㎜。棟の厚さ4㎜。茎の巾10～8㎜。厚さ3㎜。残存部の長さ4.6cmである。平造り、平棟、甲伏鍛と思われる。

(3)Cc 65住居跡（第8図　図版3）

〔遺構の確認〕基準点240＋40から南へ37.87～41.76m。東へ15.92～19.42mの地点、Cc 65地区とその周囲に、黒色の落込みを確認した。遺構確認面は明褐色火山灰層である。

〔重複・増改築〕住居跡の南隅とピットの南半が、Cd 65溝状土壙と重複する。増改築の痕跡は確認されない。

〔平面形・規模・方向〕ＮＥ－ＳＷ：3.1m。ＮＷ－ＳＥ：2.75mの四辺形で、軸線は南東方向

で、E－40°－S。

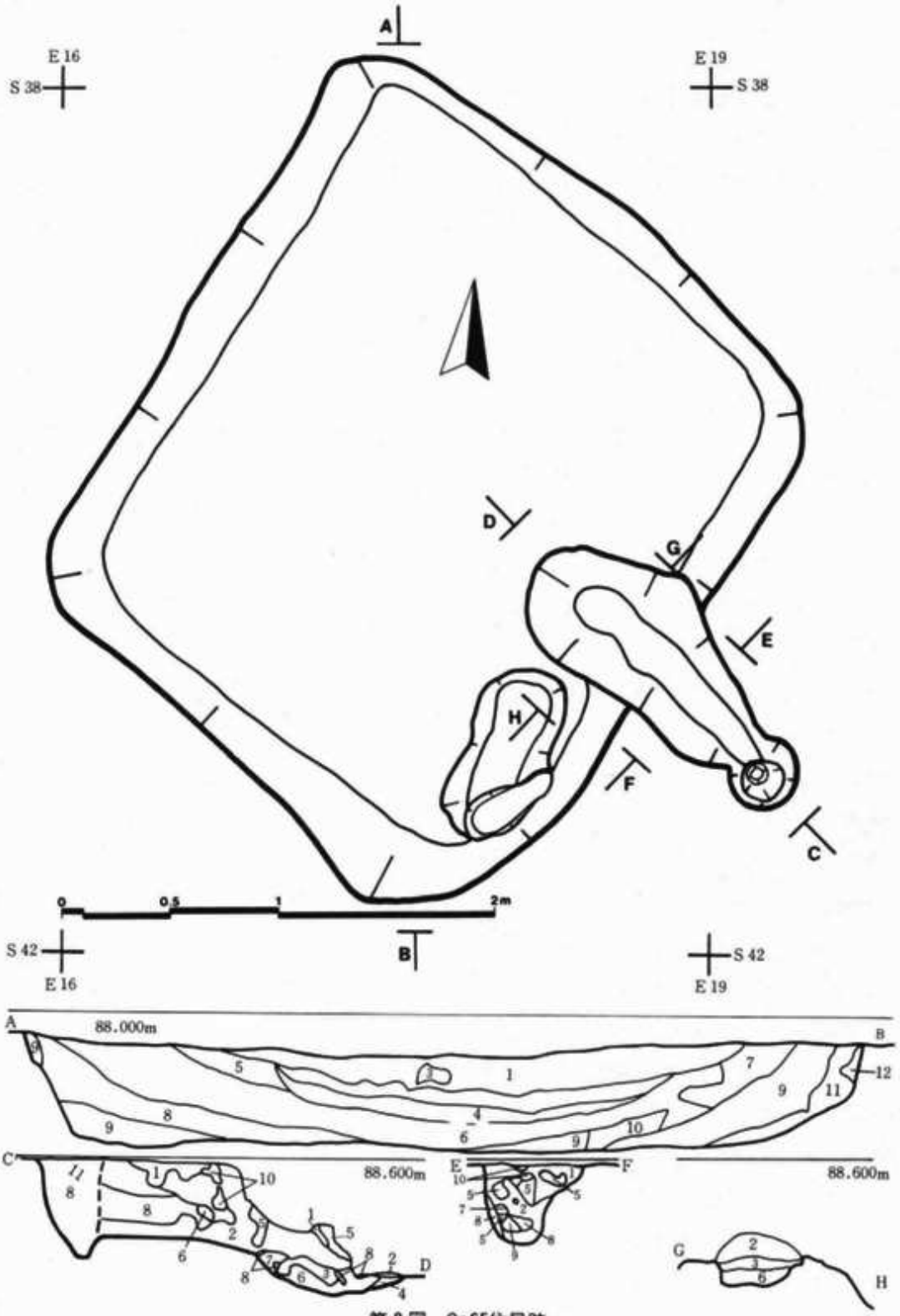
〔堆積土〕1層：7.5YR2/1黒色腐植土、指痕つく、粘性ややあり、火山灰と焼土を少量含む。2層：7.5YR3/2黒褐色火山灰土、指痕つく、粘性なし、腐植土、粉状パミスを含む。3層：7.5YR3/2腐植土粉状パミス混合土、指痕つく、粘性なし。4層：2.5YR6/4粉状パミス、火山灰土、腐植土混合土、指痕若干つく、粘性なし。5層：7.5YR4/4暗褐色火山灰土腐植土混合土、指痕若干つく、粘性ややあり。炭化物少量含む。6層：7.5YR4/6褐色火山灰土、指痕若干つく、粘性ややあり、腐植土、炭化物、焼土を少量含む。7層：7.5YR4/6褐色火山灰土、指痕つかない。粘性ややあり、軽石、腐植土、炭化物、焼土を少量含む。8層：7.5YR4/6褐色火山灰土、指痕つく、粘性ややあり、腐植土若干混入。9層：7.5YR4/3褐色火山灰土腐植混合土、指痕つく、粘性なし、炭化物わずか含む。10層：7.5YR4/3褐色火山灰土腐植土混合土、指痕つく、粘性なし、焼土炭化物わずか含む。11層：7.5YR4/4褐色火山灰土腐植土混合土、指痕つかない、粘性なし、焼土炭化物わずか含む。12層：7.5YR5/6明褐色火山灰土、指痕つく、粘性なし。

〔床面〕地山面を直接利用し、貼床や掘り方は確認されなかった。壁への立上りは緩やかで、壁高は約45cm前後である。

〔柱穴〕確認されなかった。

〔かまど〕南東壁中央にある、燃焼部は、巾約60cm。奥行き約55cm。床面より約10cm掘下げている。両袖は欠損している。煙道は長さ約70cm。巾23～65cm。深さは検出面から36～40cmで、やや先上りになる。煙出しは東側路線境下にあり、最終確認の段階で発見された。上場径34cm。下場径5cm。深さは検出面から46cmである。堆積土（8図C－H）は、1層：7.5YR4/3褐色火山灰腐植土混合土、指痕若干つく、粘性ややあり、炭化物わずか含む。2層：7.5YR3/2黒褐色腐植土火山灰混合土、指痕つく、粘性ややあり、焼土炭化物少量含む。3層：7.5YR3/4明褐色火山灰土、指痕若干つく、粘性ややあり、腐植土、焼土ブロック、炭化物混入。4層：7.5YR4/4褐色火山灰土、指痕若干つく、粘性ややあり、腐植少量含む。5層：7.5YR4/4褐色火山灰土、指痕つかない、粘性なし。6層：2.5YR4/6赤褐色焼土、指痕つかない、粘性なし。7層：7.5YR4/3暗褐色火山灰土、指痕つく、粘性ややあり、腐植土少量含む。8層：7.5YR4/2灰褐色火山灰土、指痕つく、粘性ややあり、腐植土、焼土を少量含む。9層：5YR3/6暗赤褐色火山灰土、指痕つかない、粘性なし、焼成を受ける。10層：5YR3/4暗赤褐色火山灰土、指痕つかない、粘性なし、焼成を受ける。11層：7.5YR4.6赤褐色火山灰土、指痕つかない、粘性ややあり、腐植土を若干含む。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴状ピットは、かまどの南西側に隣接し、長軸84cm、短軸約40cm。中央部がやや括れる瓢箪形で、深さは床面下約18cmである。


A
E 16
S 38
E 19
S 38
D
G
E
H
F
C
0
0.5
1
2m
S 42
E 16
B
S 42
E 19
88.000m
88.600m
88.600m

第 8 図　Cc65住居跡

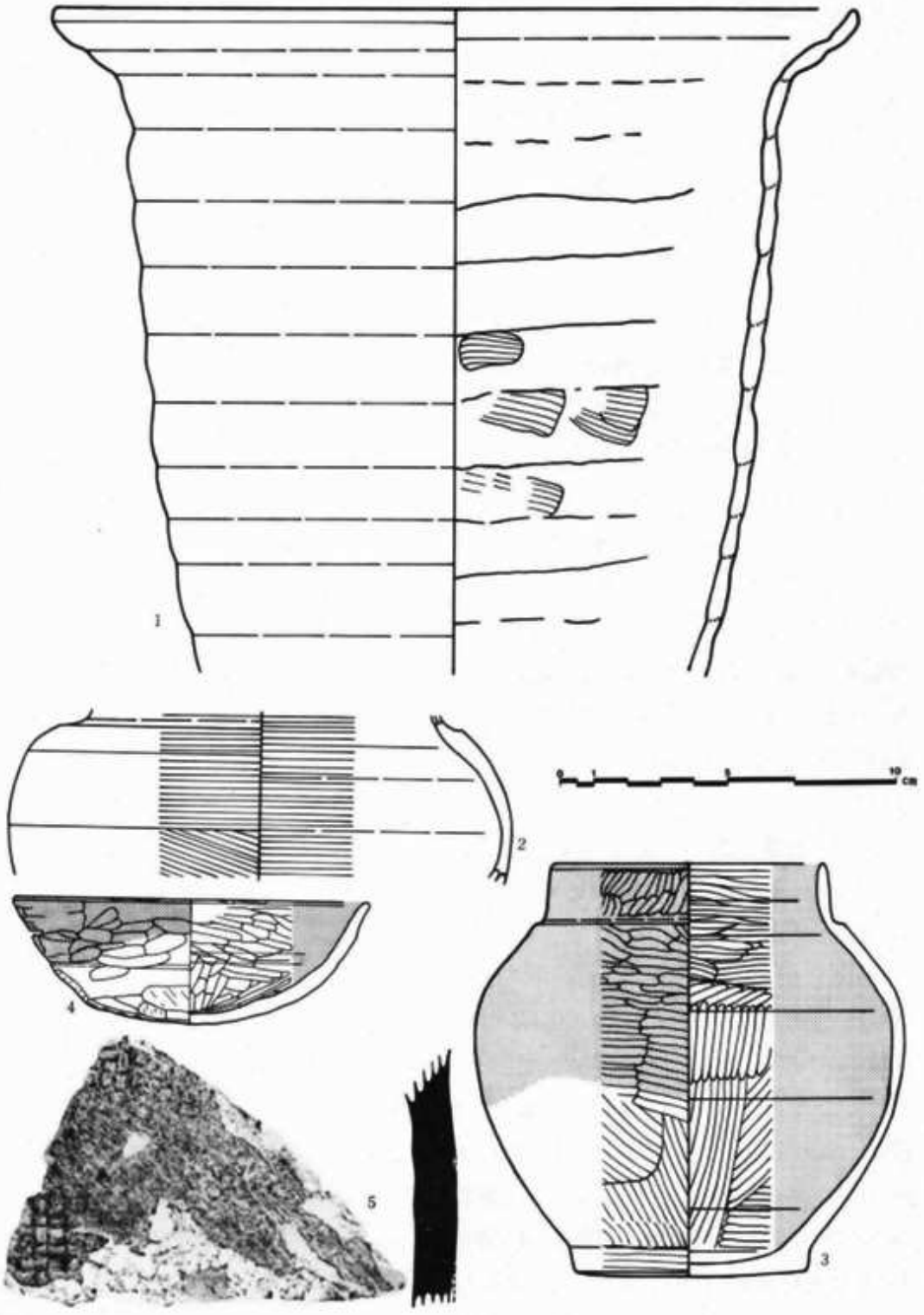
〔その他の施設〕確認されなかった。

〔年代決定資料〕遺物一覧の如く、土師器、長胴甕26点、球胴甕４点、内黒坏９点。須恵器、壺１点が出土した。球胴甕には、円塗りのものや、内外面磨き、黒色処理のものが各１点ある。坏は、有段、丸底のものがみられる。他に縄文中期土器（22図15　図版13—15）や、敲石？（15図４、図版８－４）、剝片５点が出土した。

出土遺物

土師器　長胴甕（９図１　図版３－１）１は、口体上部1/4残存で、推定口径約24cm。頸部径約22cm。体部最大径19.4cm。残存部高さ19.8cm。口縁部高さ1.9cm。口縁部は横なでで、やや内湾しかなり外傾する。口端部は若干上に挽き出される。頸部無段。体壁は凸凹と歪みが著しく、かなり内外面が磨滅し、内面の一部に刷毛目痕が若干認められる。胎土軟質砂を多く含む。色調灰白～浅黄橙色。焼成不良。かまど焚口出土である。他に25点出土しているが、１点（図版３－２）は、口縁部1/8、体上部1/4残存で、口縁部は横なで、外反。口端部は若干上に挽き出される。頸部無段。体壁は凸凹が著しく、外面は縦の刷毛目、内面は横の刷毛目痕が施される。胎土軟質砂粒を含む。色調浅黄橙色。焼成不良。かまど焚口出土である。１点は、口縁部1/8以下残存で、口縁部は横なで、外反。口端部は若干上に挽き出される。頸部無段。胎土軟質砂を多く含む。色調浅黄橙～橙色。焼成不良。かまど南西側ピット出土である。１点は、口縁部1/8以下残存で、口径10cm前後の小型と思われる破片である。直線的に外傾し外面は横なで、内面は刷毛目痕がある。他に体部の小破片が20点、底部破片が１点発見された。体部破片は、外面に縦の刷毛目痕のあるもの6点。外面に篦削り篦なで痕のあるもの５点。磨滅し不明のもの９点である。底部破片は、縁部が外側に張り出し、下面は篦なで。外体部下端は縦の刷毛目痕が認められる。

球胴甕（９図２・３　図版３－２・３・６）２は、肩・体上部2/3残存で、頸部径約10.4cm。体部最大径約15cm。頸部横なで有段、肩・体部は、２次焼成を受け磨滅変質しているため、成形調整痕は不明である。胎土軟質砂を多く含む。色調浅黄橙色。焼成不良。かまど燃焼部から出土した。３は、口体底共1/3残存で、器高12.3cm、推定口径8.2cm、頸部径約8.8cm。体部最大径約12.8cm。底径約７cm。口縁部高さ1.8cmである。口縁部は、ほゞ直線的で垂直。口端部は丸みをもつ。外面は横なで後右上一左下に篦磨き黒色処理。内面は横に篦磨き黒色処理。頸部有段。肩部体上部外面は横磨き黒色処理。体下半部底下面は篦削り篦なで。内体面は縦と右上一左下の篦磨き黒色処理である。胎土やや軟質砂を含む。色調浅黄橙色。焼成はやや不良。かまど焚口出土である。図版３－６は、肩部体上部1/5残存で、頸部有段。体部外面は左上一右下方向に磨き、丹塗り。内面は頸部付近が刷毛目、他は篦なでと刷毛目痕がある。胎土軟質砂を含む。



第 9 図　Cc65住居跡出土遺物

色調浅黄橙色。焼成やや不良。かまど燃焼部出土で、1部変質磨滅が著しい。他の1点は、頸部肩部1/8以下残存で、頸部有段。外面篦など。内面縦の磨き黒色処理。胎土軟質砂を含む。色調浅黄橙色。焼成やや不良である。

内黒坏（9図4　図版3－4・7・8）4は、ほゞ完形で、器高3.6cm。口径10.8cm。口縁部はわずかに外反し、横に篦なで黒色処理。体部外面は明確ではないが段がある。底部は丸底で、篦削り後刷毛目が施され、体部から底部に丹を塗っている。内面は、横又は斜めに磨き黒色処理をしている。胎土やや軟質砂粒を含む。色調灰白～浅黄橙色。焼成やや不良。底部下面に籾か藁片と思われる圧痕がある。図版3－7は、口体部1/8以下残存で、口縁部は直線的に外傾し、外面は横なで黒色処理。体部外面は篦削り、篦磨きで、有段である。内面は磨き黒色処理である。胎土軟質砂を若干含む。色調浅黄橙～にぶい橙色。焼成やや不良である。図版3－8は、口体部1/8以下残存で、口縁部はわずかに外反し、口端部は薄くなる。体部外面は、篦削り、篦磨きで、1部刷毛目痕が認められる。内面は横磨き黒色処理で、黒色処理は若干消えかかっている。胎土やや軟質。色調にぶい橙色。焼成やや不良である。他に、底部2点(丸底)。体部小破片4点が発見された。

須恵器　壺（9図5　図版3－9）体部1/8以下残存の小破片で、外面は格子目叩き文、内面は篦なで。胎土硬質。色調灰白色。焼成良好である。

2　ピット（ピット一覧表）

(1)Ad 53ピット（10図上段左）

〔遺構の位置〕基準点より北へ17.04～18.89m。東へ4.62～6.4m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰土混合土。密で、粘性あり。パミス、焼土を含む。2層7.5Y R3/3暗褐色腐植土。密で、粘性あり、火山灰を含む。3層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性あり。腐植土・遺物（22図1　図版12－1）を含む。4層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土、粗で、粘性あり。

(2)Ad 56ピット（10図上段左から2　図版4－上段左）

〔遺構の位置〕基準点より北へ19.5～20.44m。東へ7.16～8.15m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土。密で、粘性なし。2層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性若干あり、炭化物を含む。3層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性若干あり、腐植土を含む。4層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。密で、粘性ありパミスブロックを若干含む。5層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土。密で、粘性なし、パミスブロックを若干含む。

〔出土遺物〕縄文土器口縁部1点。土師器長胴甕体部1点。球胴甕肩部1点。

ピット一覧表

名称	上場径cm		下場径cm		深さcm	平面形	下場の状態	断面形	備考
	N－S	E－W	N－S	E－W					
Ad53ピット	194	194	245	234	62	円形	周溝（巾20cm、深さ10cm）	フラスコ形	縄文早期土器片22図1
Ad56ピット	94	98	85	88	30	〃	周溝（巾6cm、深さ5cm）	ピーカー形	中心部に小ピット
Ad59ピット	118	123	105	122	26	〃	中心部に小ピット	〃	溝No.1と切り合い
Ag56ピット	117	112	99	104	40	〃	平坦	〃	溝No.1と切り合い
Ah62ピット	80	70	65	55	30	やや方形	東端に小ピット	浅鉢形	南北に長い溝下面にあり
Ah65ピット	80	105	56	75	30	不整楕円形	中央に小ピット	〃	
Ai56ピット	154	170	125	125	44	円形	平坦	ピーカー形	縄文早期土器片22図7、8
Bj62ピット	165	180	140	150	20	〃	中央に小ピット	〃	西壁不鮮明
Ca65ピット	196	168	155	134	55	〃	平坦	〃	〃
Cb62ピット	190	172	150	140	20	四辺形	〃	浅鉢形	〃
Cc62ピット	190	190	167	165	40～74	円形	周溝（巾50cm、深さ2cm）	ピーカー形	Cc62土壙と切り合い
Cd53ピット	142	140	113	103	36	〃	平坦	〃	下場東へ寄る
Cd59ピット	200	200	230	210	70	〃	周溝、小ピット2、溝4	フラスコ形	溝の巾40cm、深さ3cm
Ce53ピット	197	190	171	160	40～65	〃	北縁、南東縁に溝	ピーカー形	北溝巾15cm、深さ5cm 南東溝巾10cm、深さ5cm
Ce59ピット	198	193	182	175	60	〃	平坦	〃	
Cf65ピット	145	143	150	160	80	〃	中央に小ピット	フラスコ形	小ピット径30cm、深さ10cm
Cg56ピットNo.1	171	113	154	92	40	〃	南東隅に小ピット	ピーカー形	Cg56ピットNo.2とと切り合い
Cg56ピットNo.2		110		83	40	〃	中央に小ピット	〃	Cg56ピットNo.1と切り合い
Cg62ピット	186	180	214	202	60	〃	平坦	フラスコ形	
Cg65ピットNo.2	100	94	115	110	45	〃	〃	〃	Cg65溝状土壙と切り合い
Cg65ピットNo.1	120	115	90	86	28	〃	〃	ピーカー形	
Ch59ピット	220	220	200	190	56～70	〃	周溝	〃	周溝巾20cm、深さ3cm
Ch62ピット	207	200	180	180	60	〃	中央、北東、南東に小ピット各1、溝	〃	溝は中央、北東ピット間
Ch65ピット	50	50	40	35	30	〃	平坦	〃	
Ci62ピット	160	165	120	130	50	〃	〃	〃	
Ci65ピット	95	65	NE 15×15	SW 30×25	NE 60 SW 50	不整形	北東側と南西側に小ピット各1	フラスコ形?	
Da62ピット	186	185	165	164	40～60	円形	平坦	ピーカー形	
Da65ピット	128	116	80	87	70	〃	〃	〃	Db65ピットと切り合い
Db62ピット	150	145	135	130	40	〃	〃	〃	
Db65ピット	195	200	170	183	50	〃	〃	〃	Da65ピットと切合い
Dc62ピット	172	164	135	142	40	〃	中央・南端に小ピット	〃	小ピット2の平面形は不整形、深さ44cmと20cm
Dc65ピット	155	160	132	135	30～40	〃	平坦	〃	
Dd62ピット	145	145	130	116	14～22	〃	中央西寄りに小ピット	〃	小ピット径約10cm、深さ5cm

(3)Ad 59ピット（10図上段左から3　図版4―上段右）

〔遺構の位置〕基準点より北へ17.45～18.68m。東へ11.32～12.5m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性あり、火山灰混入。

〔出土遺物〕なし。　　付記：底面の小ピットは、木根跡と思われる。

(4)Ag 56ピット（10図上段右　図版4―2段左）

〔遺構の位置〕基準点より北へ8.88～10.05m。東へ7.13～8.39m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。密で、粘性若干あり。パミスブロックを若干含む。2層：7.5Y R4/4褐色腐植土。密で、粘性あり。火山灰を含む。3層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性あり。腐植土、パミスを含む。4層：7.5Y R6/8橙色火山灰土。密で、粘性あり。各層共に遺物を含まない。

(5)Ah 62ピット（10図2段左）

〔遺物の位置〕基準点のり北へ8.34～9.21m。東へ13.94～14.8m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。密で、粘性なし。遺物を含まない。

(6)Ah 65ピット（10図2段左から2）

〔遺構の位置〕基準点より北へ7.38～8.25。東へ14.32～15.39m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。密で、粘性なし。遺物を含まない。

(7)Ai 56ピット（10図2段左から3　図版4―2段右）

〔遺物の位置〕基準点より北へ4.84～6.45m。東へ6～7.72m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。火山灰を含む。2層：7.5Y R2/1黒色腐植土。粗で、粘性なし。火山灰、炭化物を若干含む。3層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性なし。炭化物わずか含む。4層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性なし。

〔出土遺物〕縄文土器片5点。1点（22図7　図版12―7）は、体部破片で、繊維を含み、内外面に縄文が施される。1点（22図8　図版12―8）は、口縁部破片で、単節斜縄文の下に、横位の綾絡文が施される。他に、剥片石器6点（18図46、18図50、19図55、19図70、20図89、22図148）が出土した。

(8)Bj 62ピット（10図2段右　図版4―3段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ27.92～29.6m。東へ13.6～15.08m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土を含む。2層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土、パミスを若干含む。3層：7.5Y R3/4暗褐色火山灰腐植土混合土。密で、粘性あり。パミスブロック若干含む。4層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。密で、粘性あり。パミス混入。

〔出土遺物〕遺物一覧表の通りで、甕は、口縁部5点、体部19点で、体部破片の外面は、縦の刷毛目痕があるもの2点。横に刷毛目痕があるもの3点。横なでのもの2点。篦削り篦なでのもの9点。不明のもの3点である。内黒坏で平底（23図31　図版31—13）のものは、器高が4.2cm。口径14.1cm。底径7.0cm。外体面と底下面は、篦削り調整がなされ、内面は山形に磨きが施される。他の2点は、口縁部1、体部1の小破片である。非内黒坏は、口縁部1、体部1の細片である。縄文土器片は文様のない体部破片である。剝片石器は、19図68、21図122、21図123である。

⑼Ca 65ピット（10図3段左　図版4—3右）

〔遺構の位置〕基準点から南へ30.03～32.0m。東へ15.64～17.33m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。密で、粘性なし。軽石、火山灰、炭化物を少量含む。2層：7.5Y R4/4褐色火山灰腐植土混合土。密で、粘性ややあり。軽石パミス少量含む。3層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土を含む。4層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。5層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。6層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土、密で、粘性ややあり。小円礫、軽石パミス多数混入。

〔出土遺物〕甕は体部破片で、外面に縦の刷毛目痕のあるもの4点。他は篦削り篦なでである。内黒坏は、口体上部小破片。非内黒坏は、口体上部小破片である。

⑽Cb 62ピット（10図3段左から2　図版4—4段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ32.3～34.3m。東へ13.9～15.92m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/4暗褐色火山灰腐植土混合土。密で、粘性ややあり。焼土を少量含む。2層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。3層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土、炭化物を若干含む。

〔出土遺物〕小型長胴甕（23図25・26　図版13—25・26）のうち1点（25）は、口径約10.6cm。頸部径約9.8cm。体部最大径10.1cm。頸部に2本の沈線状の段がある。外体面は、縦に篦磨き？を施す。内体面は、横と斜の刷毛目痕がある。他の1点（26）は、口径約14cm。頸部径約11.4cm。体部最大径約12.7cm。頸部に3本の沈線状の段がある。外体面は、磨滅し成形・調整は不

明。内体面は、横の刷毛目痕がある。他の9点は、口縁部4点の内外反するもの3点、内湾外傾するもの1点。体部5点の内外面に縦の刷毛目痕があるもの1点、篦削り篦なでのもの2点、他は不明である。内黒坏丸底は、口体部2点、体底部4点で、5点が篦削り篦なで、1点が刷毛目痕がある。内黒坏平底（23図28）は、口縁部1/8、体底部1/4残存で、器高4.8cm。推定口径約13cm。底径6.8cm。外体面と底下面は篦削り篦磨き、体底の境に稜線はあるが、底中央は下に張り出す。不明の2点は、口体上部の小破片である。紡錘車（23図33）は土製、上面径約4cm、下面径約4.8cm。高さ2.7cm。孔径7mm。縄文土器は、体部細片。

⑾Cc 62ピット（10図3段右　図版4―下段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ36～38.48m。東へ10.8～13m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土。密で、粘性なし。パミスブロックを若干含む。2層：7.5Y R4/4褐色腐植土、密で、粘性なし。パミスブロックを含む。3層：7.5Y R3/3暗褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土を含む。4層：5Y R4/4にぶい赤褐色火山灰土。密で、粘性若干あり。腐植土を含む。5層：5Y R4/6赤褐色火山灰土。密で、粘性あり。パミスを若干含む。6層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性あり。パミス若干含む。7層：7.5Y R5/8明褐色パミス層、密で、粘性あり。

〔出土遺物〕剥片石器2点（19図76・20図100）が出土した。

⑿Cd 53ピット（10図下段）

〔遺構の位置〕基準点より南へ40.52～41.94m。東へ5.06～6.46m。

〔堆積土〕1層：10Y R4/3黄褐色腐植土。粗で、粘性なし。火山灰、パミスを含む。2層：10Y R4/4褐色腐植土、密で、粘性ややあり。火山灰、パミスを含む。3層：褐色火山灰土、密で、粘性ややあり。4層：10Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土を若干含む。5層：10Y R5/6黄褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。パミスを少量含む。

〔出土遺物〕縄文土器体部小破片1点。

⒀Cd 59ピット（10図下段中　図版5―上段左右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ39.77～41.91m。東へ10.06～12.16m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土火山灰混合土。密で、粘性あり。パミスブロック若干含む。2層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性あり。腐植土、パミス若干含む。3層：7.5Y R3/3暗褐色火山灰腐植土混合土。粗で、粘性あり。パミスを若干含む。4層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。5層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性あ

り。パミス若干含む。6層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。粗で、粘性若干あり。パミス混入。7層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。粗で、粘性あり。

〔出土遺物〕縄文土器体部小破片1点。

⒁Ce 53ピット（10図下段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ42.33～44.32m。東へ5.42～7.33m。

〔堆積土〕1層：10Y R5/6黄褐色火山灰土。粗で、粘性なし。2層：10Y R4/4褐色腐植土、粗で、粘性ややあり。パミスを含む。3層：10Y R5/8黄褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。パミスを少量含む。4層：10Y R5/6黄褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土を少量含む。5層：10Y R5/8黄褐色火山灰土、やや密で、粘性ややあり。6層：10Y R8/7黄橙色パミス。密で、粘性ややあり。

〔出土遺物〕土師器甕体部破片1点で、外面に縦の刷毛目痕がある。

⒂Ce 59ピット（11図上段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ42.03～44.02m。東へ9.88～11.82m。

〔堆積土〕1層：10Y R2/3黒褐色腐植土。密で、粘性なし。パミスブロックを若干含む。2層：7.5Y R3/3暗褐色火山灰土。粗で、粘性ややあり。腐植土、パミスを含む。3層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性あり。パミスを若干含む。4層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土、粗で、粘性あり。各層共、遺物を含まない。

⒃Cf 65ピット（11図上段左2　図版5－3段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ46.82～48.55m。東へ15.24～16.7m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。密で、粘性ややあり。火山灰、焼土、炭化物を含む。2層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土火山灰混合土。密で、粘性ややあり。炭化物、焼土を含む。3層：7.5Y R4/3褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土、炭化物、焼土を少量含む。4層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土。密で、粘性ややあり。火山灰、炭化物、焼土を少量含む。5層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土、炭化物を少量含む。6層：7.5Y R4/3褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土、焼土を少量含む。7層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。粗で、粘性ややあり。腐植土を若干含む。8層：7.5Y R2/1黒色腐植土。焼土、炭化物を少量含む。

〔出土遺物〕縄文土器体部小破片4点。

⑰Cg 56ピットNo.1（11図上段左3　図版5―4段左）

〔遺構の位置〕基準点から南へ49.47～？m。東へ6.82～7.96m。

〔堆積土〕1層：10YR4/4褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性ややあり。2層：10YR4/6褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性ややあり。パミスを含む。3層：10YR5/6黄褐色火山灰土。やや密で、粘性ややあり。各層共に遺物を包合しない。

⑱Cg 56ピットNo.2（11図上段左3　図版5―4段左）

〔遺構の位置〕基準点から南へ？～51.2m。東へ6.86～7.86m。

〔堆積土〕1層：10YR4/6褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。2層：10YR5/6黄褐色火山灰土。密で粘性ややあり。3層：10YR4/4褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。

〔出土遺物〕3層より縄文土器体部破片4点。

⑲Cg 62ピット（11図2段左　図版5―2段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ49.6～51.48m。東へ12.76～14.56m。

〔堆積土〕1層：7.5YR2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。火山灰、焼土、炭化物を少量含む。2層：7.5YR4/6褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土、焼土、炭化物を少量含む。3層：7.5YR3/4暗褐色火山灰腐植土混合土。粗で、粘性なし。軽石パミス、炭化物を少量含む。4層：7.5YR4/3褐色火山灰土。粗で、粘性なし。腐植土、軽石パミス、炭化物を含む。5層：7.5YR4/4褐色火山灰土。粗で、粘性なし。腐植土、軽石パミス、炭化物を少量含む。6層：7.5YR5/6明褐色火山灰土。粗で、粘性なし。腐植土、炭化物を少量含む。7層：7.5YR5/8明褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。8層：7.5YR5/6明褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土、炭化物を少量含む。

〔出土遺物〕土師器長胴甕、体部破片1点は、外面が縦の箆なで、内面が横に箆なでしている。内黒坏（12図19・30）29は、有段丸底、内外面箆磨き。口縁部内外面黒色処理。30は、無段丸底。外面の1部と内面が箆磨き。外面体底部の1部に箆削り痕がある。縄文土器は、体部小破片である。剝片石器は、18図26、19図63、20図86である。

⑳Cg 65ピットNo.2（11図2段左2、図版5―3段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ48.54～49.85m。東へ15.89～16.85m。

〔堆積土〕1層：7.5YR2/2黒褐色腐植土。やや密で、粘性ややあり。火山灰を含む。

〔出土遺構〕なし。

㉑Cg 65ピットNo.1（11図上段右　図版5－3段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ48.4～49.6m。東へ17.08～18.24m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土火山灰混合土、密で、粘性ややあり。2層：7.5Y R 3/2黒褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土、炭化物、焼土を少量含む。3層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土を含む。4層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性なし、腐植土を少量含む。5層：7.5Y R3/3暗褐色火山灰腐植土混合土。密で、粘性ややあり。6層：7.5Y R2/1黒色腐植土。密で、粘性なし。炭化物を少量含む。7層：7.5Y R4/3褐色火山灰土。粗で、粘性なし。腐植土、炭化物を少量含む。8層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土を若干含む。

〔出土遺物〕縄文土器体部小破片1点。剥片石器（21図110）1点。

㉒Ch 59ピット（11図2段左3　図版5－4段右）

〔遺構の位置〕基準点から南へ50.01～52.37m。東へ9.09～11.43m。

〔堆積土〕1層：10Y R4/6褐色火山灰腐植土混合土。粗で、粘性ややあり。パミス、炭化物を含む。2層：10Y R3/4暗褐色火山灰腐植土混合土。密で、粘性なし。パミスを少量含む。3層：10Y R3/4暗褐色火山灰腐植土混合土。粗で、粘性あり。パミスを少量含む。4層：10Y R3/4暗褐色火山灰腐植土混合土。粗で、粘性あり。5層：10Y R6/8明黄褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。6層：10Y R6/8明黄褐色火山灰土。密で、粘性あり。7層：10Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。

〔出土遺物〕剥片石器（20図85）1点。

㉓Ch 62ピット（11図3段左、図版5－下段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ52.81～53.32m。東へ16.41～16.91m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土層。粗で、粘性なし。炭化物、パミスブロックを含む。2層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性ややあり。腐植土、炭化物を含む。3層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。粗で、粘性ややあり。パミスブロック若干含む。4層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。粗で、粘性ややあり。5層：7.5Y R6/8橙色火山灰土。粗で、粘性なし。

〔出土遺物〕土師器、長胴甕口縁部小破片1点。直線的に外傾し、口端部は薄くなる。外面は横なで、内面は横の刷毛目痕がある。体下底部小破片1点。体部内外面共刷毛目痕がある。

㉔Ch 65ピット（11図2段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ52.81～53.32m。東へ16.41～16.91m。

〔堆積土〕 1層：10Y R4/6褐色火山灰腐植土混合土。やや密で、粘性ややあり。
〔出土遺物〕縄文土器、体部小破片3点。

㉕Ci 62ピット（11図3段左2　図版5—下段右）
〔遺構の位置〕基準点より南へ55.43～57.07m。東へ11.44～13.10m。
〔堆積土〕 1層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性あり。腐植土、パミスを含む。2層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性あり。腐植土、パミスを少量含む。3層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。密で、粘性あり。パミスブロック若干混入。4層：7.5Y R2/3暗褐色腐植土。密で、粘性あり。火山灰、焼土を含む。
〔出土遺物〕繊維を含む縄文土器片は、体部破片（22図11　図版12—11）と、体部小破片2点。剥片石器は、21図112。

㉖Ci 65ピット（11図3段右）
〔遺構の位置〕基準点より南へ54.02～54.92m。東へ15.89～16.8m。
〔堆積土〕 1層：10Y R4/4褐色火山灰腐植土混合土。やや密で、粘性ややあり。遺物含まず。

㉗Da 62ピット（11図5段右　図版6—上段左）
〔遺構の位置〕基準点より南へ59.27～61.2m。東へ12.26～14.11m。
〔堆積土〕1層：10Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性なし。パミスを含む。2層：10Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性ややあり。パミスを含む。3層：10Y R6/8明黄褐色火山灰土。粗で、粘性ややあり。
〔出土遺物〕縄文土器体部破片（22図12　図版12—12）1点。土師器長胴甕、体部破片1点。石錘（16図10　図版8—10）1点。

㉘Da 65ピット（11図4段右　図版6—上段右）
〔遺構の位置〕基準点より南へ61.84～63.12m。東へ16.98～17.17m。
〔堆積土〕 1層：7.5Y R5/4にぶい橙色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性あり。2層：10Y R4/6褐色火山灰土。やや密で、粘性若干あり。3層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。やや密で、粘性若干あり。パミスを若干含む。4層：10Y R4/6褐色火山灰土。やや密で、粘性あり。
〔出土遺物〕縄文土器、繊維を含むもの口縁部1点。口端部丸み、外面文様なし、地文L—R。繊維を含まないもの、口縁部1点、口端部平坦、外面文様なし、地文R—L。体部4点、内1点は綱縄文。他の3点は磨滅著しく不明。剥片石器19図72。20図101の2点。

㉙Db 62ピット（11図下段左　図版6－2段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ62.34～64.35m。東へ15.18～17.52m。

〔堆積土〕1層：10Y R3/4～4/6褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性若干あり。炭化物、パミスを若干含む。2層：10Y R3/4暗褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性なし。パミスを含む。3層：10Y R4/4褐色火山灰土。粗で、粘性なし。パミスを含む。

〔出土遺物〕縄文土器、繊維を含むもの体部7点、1点は羽状文。繊維を含まないもの体部小破片3点。

㉚Db 65ピット（11図下段中　図版6－2段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ64.46～66.02m。東へ13.23～14.70m。

〔堆積土〕1層：10Y R4/6褐色火山灰土。やや密で、粘性若干あり。2層：7.5Y R5/6暗褐色火山灰土。密で、粘性若干あり。パミス若干混入。2層共遺物を含まない。

㉛Dc 62ピット（12図上段左　図版6－3段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ66.20～67.90m。東へ13.92～15.56m。

〔堆積土〕1層：10Y R3/4～4/6褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性若干あり。炭化物、パミスを若干含む。遺物を含まない。

㉜Dc 65ピット（12図上段左2　図版6－3段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ66.58～68.13m。東へ15.70～17.30m。

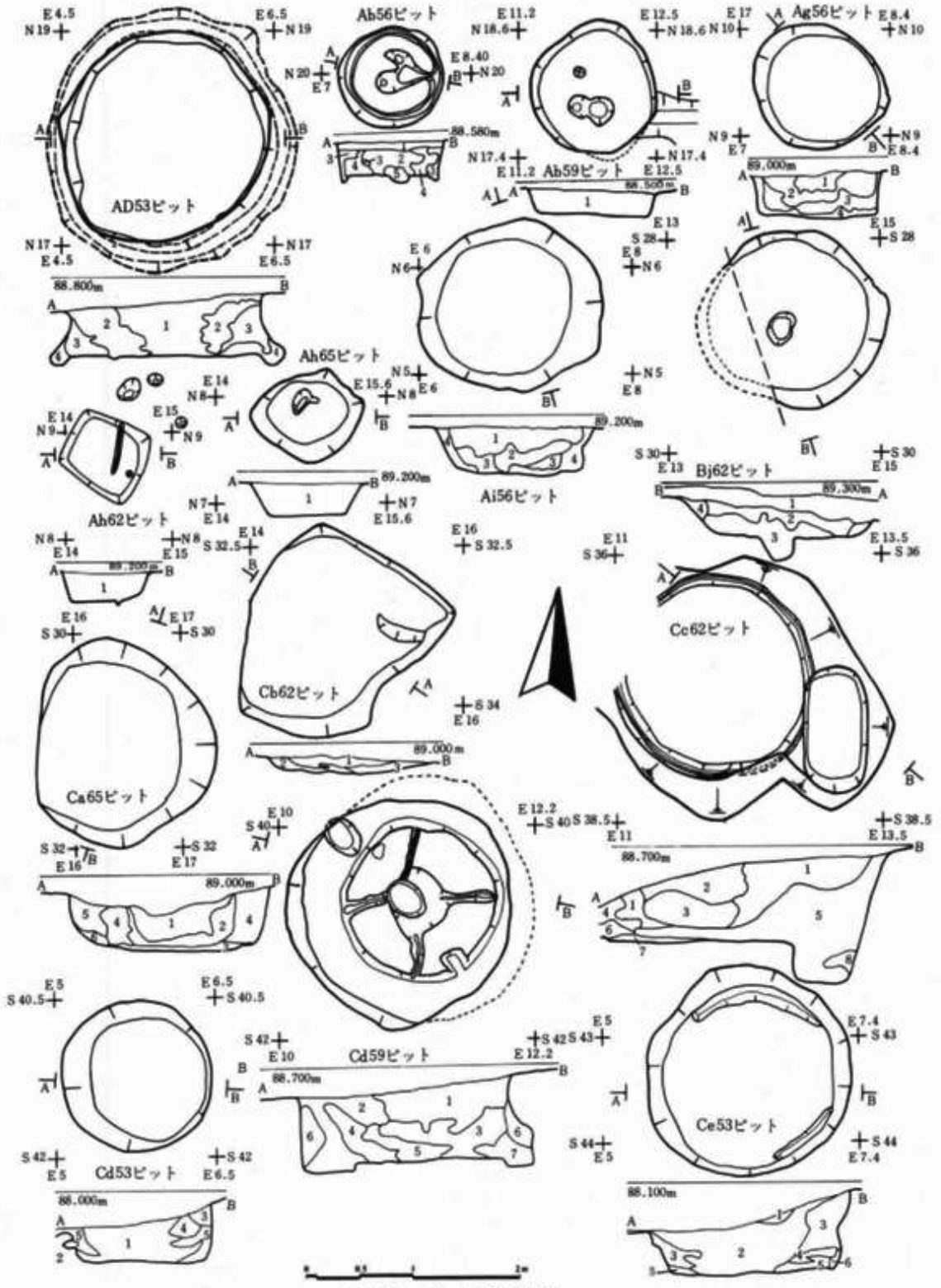
〔堆積土〕1層：10Y R3/4暗褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。2層：10Y R3/3暗褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。パミスを少量含む。3層：10Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。パミスを少量含む。各層共に遺物を含まない。

㉝Dd 62ピット（12図上段左3　図版6－4段左）

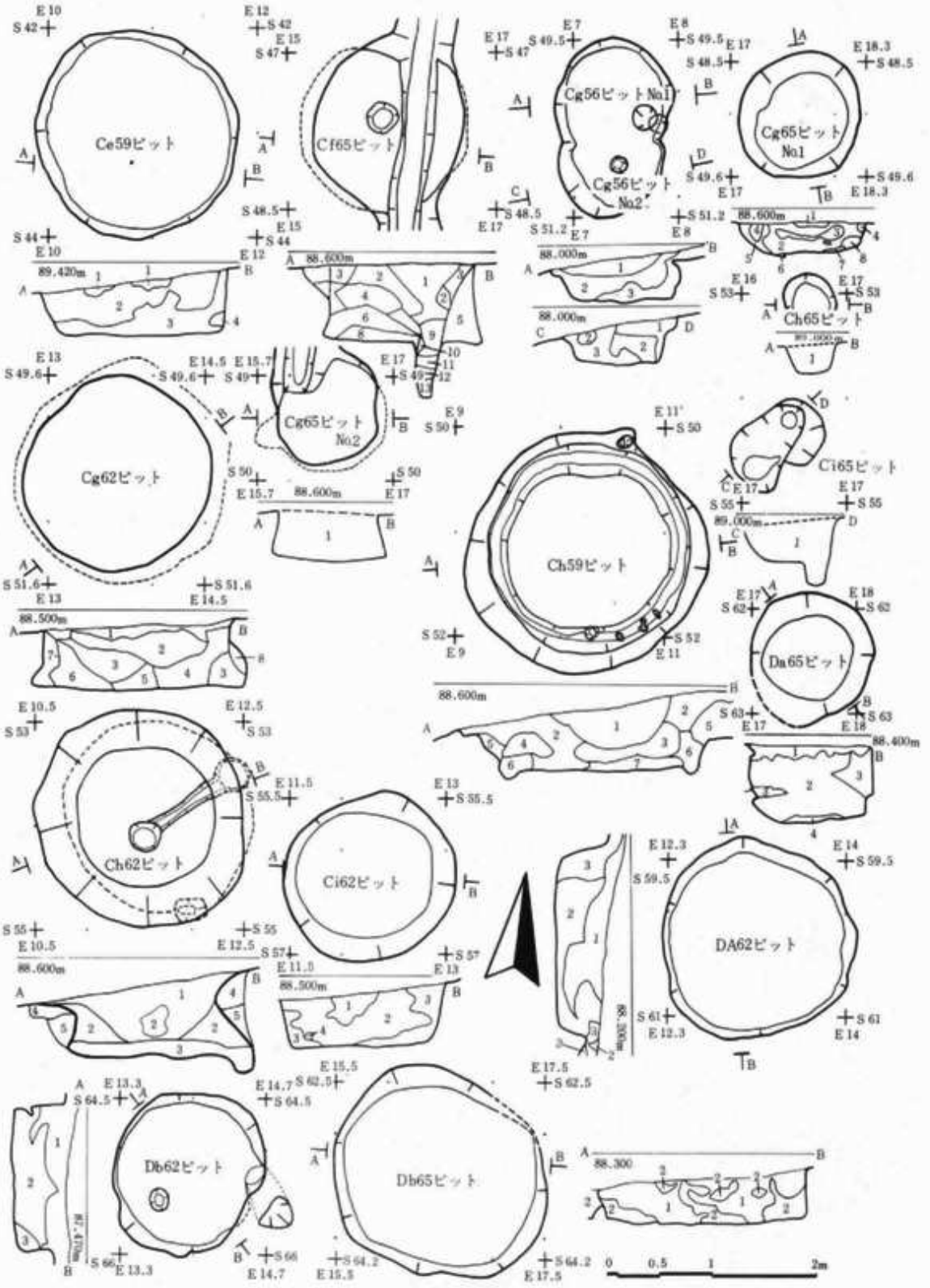
〔遺構の位置〕基準点より南へ68.60～70.08m。東へ14.03～15.50m。

〔堆積土〕1層：10Y R3/4暗褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。パミス、炭化物を若干含む。2層：10Y R5/6黄褐色火山灰土。やや密で、粘性若干あり。パミスを若干含む。3層：10Y R 4/4褐色腐植土。やや密で、粘性若干あり。パミスを若干含む。4層：10Y R5/6黄褐色粘土腐植土混合土。粗で、粘性あり。各層共に、遺物を包含しない。

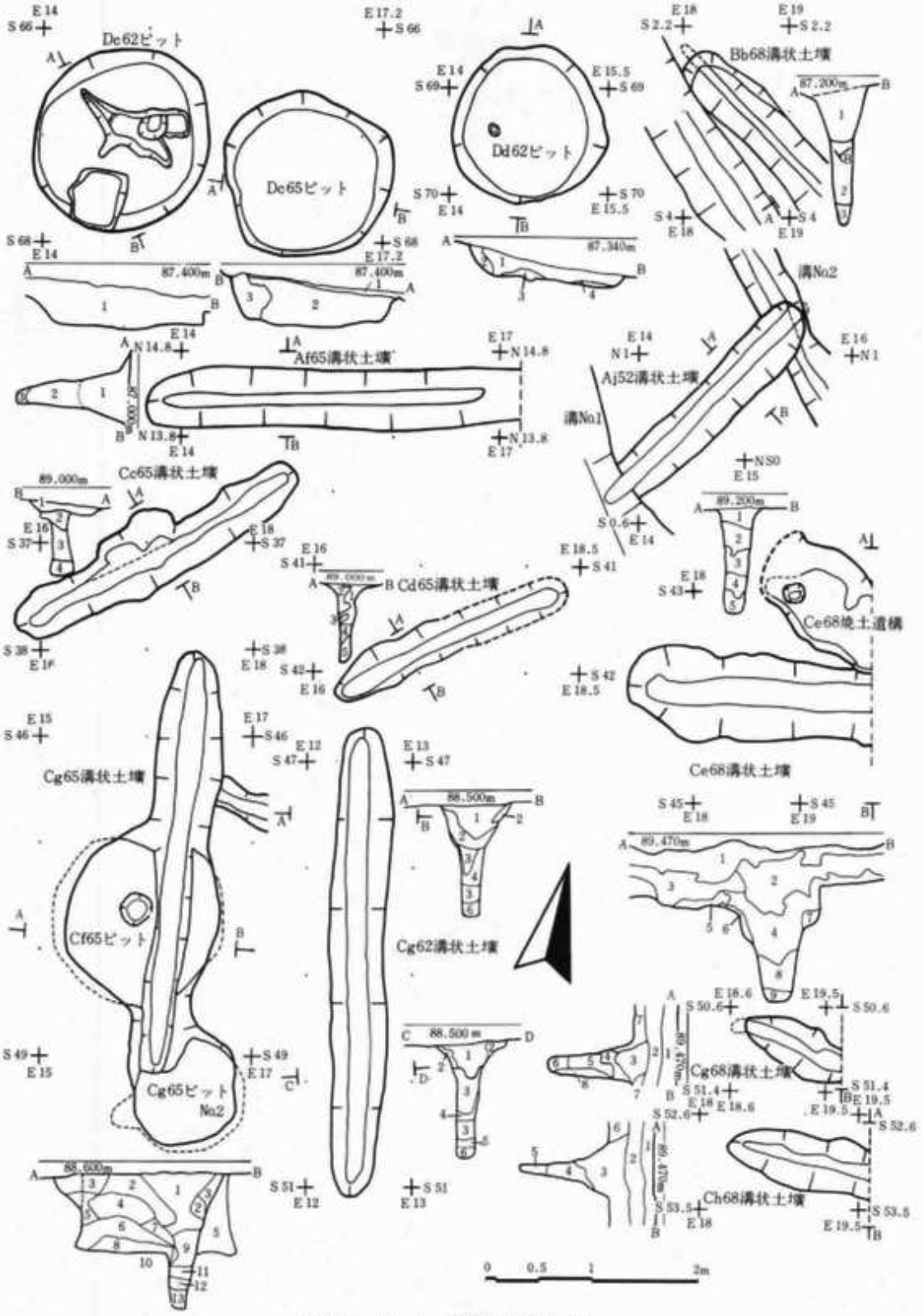
㉞その他、Cb 68土壙群（図版4－下段右）は、大部分路線外のため記述省略。



第10図　ピット実測図 I



第11図　ピット実測図II



第12図　ピット・溝状土壙実測図

溝状土壙一覧表

名称	上場長さ cm		下場長さ cm		深さ cm	断面	長軸方向	上場長さと下場長さ	備考
	長軸	短軸	長軸	短軸					
Af65	408	53	302	11	100	V	N－83°－E	上>下	東端路線外
Aj62	－	40	268	13	100	U	N－40°－E	上<下	溝1、2と切合い
Bb68	－	40	－	7	130	V	N－50°－W	上<下	東半分路線外
Cc65	300	45	279	7	70	U	N－60°－E	上>下	下場両端膨む
Cd65	300	30	224	7	70	U	N－60°－E	上>下	Cc65住と切合
Ce68	－	70	－	22	140	U	N－90°－E	上>下	東半分路線外
Cg62	440	50	418	15	110	U	N－ 5°－W	上>下	
Cg65	400	74	382	28	130	U	N－－°－S	上>下	Cf65ピット Cg65ピット2と切り合い
Cg68	－	40	－	10	63	U	E－15°－S	上<下	東半分路線外
Ch68	－	50	－	5	125	V	N－85°－E	上>下	東半分路線外
Cj68	－	90～120	－	65～25	86	V	N－65°－E	上>下	東半分路線外

土壙一覧表

名称	上場長さ cm		下場長さ cm		深さ cm	平面形	長軸方向	備考
	N－S	E－W	N－S	E－W				
Ae56	184	56	152	41	40	長方形	N－30°－W	刀子出土
Cc62	117	60	98	50	120	小判形	N－ 5°－W	Cc62ピットと切り合い
Db65	110	50	70	35	116	小判形	N－27°－E	

焼土遺構一覧表

名称	上場径 cm		下場径 cm		深さ cm	平面形	出土遺物	備考
	N－S	E－W	N－S	E－W				
Af53	104	87	80	78	15	不整円形	なし	断面浅鉢形
Af56	72	97	63	78	13	〃	なし	断面浅鉢形
Af59	92	95	70	77	16～20	〃	なし	断面浅鉢形
Af62	44	46	33	36	11	円形	なし	断面浅鉢形
Af65	74	70	54	44	14	〃	なし	断面浅鉢形
Ce62	240	117	140	80	65	楕円形	土師器甕1平等19 縄文土器片2、剥片5	長軸方向N－40°－E
Ce68	85	－	55	－	55	－	縄文土器10片	東半分路線外
Ch62	100	65	40	45	50	楕円形	土師器甕2片	長軸方向N－40°－E

3　溝状土壙（溝状土壙一覧表）

(1)Af 65溝状土壙（12図２段左）

〔遺構の位置〕基準点より北へ13.86～14.46m。東へ13.68～路線外。

〔堆積土〕１層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。密で、粘性なし。２層：10Y R5/6黄褐色火山灰土。密で、粘性ややあり。腐植土を若干含む。３層：10Y R2/1黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。

各層共に遺物を含まない。

(2)Aj 62溝状土壙（12図２段右）

〔遺構の位置〕基準点から北へ1.5～南へ0.40m。東へ13.68～15.56m。

〔堆積土〕１層：極暗褐色腐植土。密で、粘性なし。２層：暗褐色腐植土火山灰混合土。粗で粘性あり。炭化物を若干含む。３層：7.5Y R4/6明褐色火山灰土。密で、粘性あり。４層：7.5Y R5/8褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。５層：7.5Y R5/8明褐色火山。粗で、粘性あり。各層共に遺物を含まない。溝№１、№２に切られる。

(3)Bb 68溝状土壙（12図上段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ2.44～4.10？m。東へ18.0～19.44？m

〔堆積土〕１層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。やや密で、粘性なし。２層：10Y R5/6黄褐色火山灰土。やや密で、粘性若干あり。腐植土を若干含む。３層：10Y R2/1黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。各層共に遺物を含まない。

(4)Cc 65溝状土壙（12図３段左　図版６－下段中）

〔遺構の位置〕基準点より南へ36.24～37.90m。東へ15.75～18.42m。

〔堆積土〕１層：7.5Y R3/5暗褐色腐植土火山灰混合土。密で、粘性あり。２層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。３層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。粗で、粘性あり。４層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。

〔出土遺物〕１層より剝片石器（20図84、20図90、21図106）３点。

(5)Cd 65溝状土壙（12図３段中　図版６－下段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ41.10～42.28m。東へ16.20～18.40m。

〔堆積土〕１層：10Y R2/3黒褐色腐植土。密で、粘性若干あり。炭化物を含む。２層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。密で、粘性あり。３層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。粗で、粘

性あり。4層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性あり、5層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。密で、粘性あり。

〔出土遺物〕1・2層より、土師器甕口縁部小破片（頸部有段）1点。体部破片2点、1点は内外面共刷毛目痕あり、1点は内外面共箆なで。体下底部小破片1点。縄文土器？体下底部破片1点。

⑹Ce 68溝状土壙（12図3段右　図版6—下段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ43.60～44.35m。東へ17.46～路線外m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土。密で、粘性若干あり。火山灰を含む。2層：10Y R2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。4層：7.5Y R2/4暗褐色火山灰土。粗で、粘性あり。腐植土を含む。6層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性あり。7層：7.5Y R2/3極暗褐色腐植土。粗で、粘性なし。8層：7.5Y R3/4暗褐色火山灰土。粗で、粘性あり。腐植土を含む。9層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土層。粗で、粘性なし。3・5層は Ce 68 焼土遺構の堆積土。

各層共に遺物は含まない。

⑺Cg 62溝状土壙（12図下段左2　図版7—上段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ46.69～51.09m。東へ12.21～12.82m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。密で、粘性若干あり。火山灰、炭化物を少量含む。2層：7.5Y R3/4：暗褐色火山灰土。粗で、粘性若干あり。腐植土、炭化物を少量含む。3層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性若干あり。腐植土を少量含む。4層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。粗で、粘性若干あり。5層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。やや密で、粘性若干あり。腐植土を含む。6層：7.5Y R4/6褐色火山灰土。粗で、粘性若干あり。腐植土を含む。

各層共に遺物を含まない。

⑻Cg 65溝状土壙（12図下段左　図版7—上段中）

〔遺構の位置〕基準点より南へ45.21～49.32？m。東へ15.83～16.72m。

〔堆積土〕1層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。やや密で、粘性若干あり。火山灰、炭化物、焼土を少量含む。2層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性若干あり。炭化物、焼土を少量含む。3層：7.5Y R4/3褐色火山灰土。密で、粘性なし。腐植土、炭化物、焼土を少量含む。9層：7.5Y R3/3暗褐色火山灰土。粗で、粘性若干あり。腐植土、炭化物を少量含む。10層：7.5Y R3/1黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。11層：7.5Y R3/4暗褐色火山灰土。粗で、粘性なし。腐植土を少量含む。12層：7.5Y R3/1黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。火山灰

を少量含む。13層：7.5Y R4/3褐色火山灰土。粗で、粘性なし。腐植土、軽石パミスを含む。4層～8層は重複するCf 65ピットの堆積土。各層共に遺物を含まない。

⑼Cg 68溝状土壙（12図5段右　図版7―上段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ50.70～51.31m。東へ18.75～路線外。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。2層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土。やや密で、粘性若干あり。3層：7.5Y R2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。4層：7.5Y R2/3極暗褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。5層：7.5Y R5/6明褐色火山灰土。粗で、粘性あり。腐植土を少量含む。6層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。粗で粘性あり。7層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性若干あり。8層：7.5Y R5/6明褐色火山灰山。密で、粘性あり。各層共に遺物を含まない。

⑽Ch 68溝状土壙（12図下段右　図版7―2段右）

〔遺構の位置〕基準点から南へ52.75～53.40m。東へ18.27～路線外。

〔堆積土〕7.5Y R3/4暗褐色腐植土。粗で、粘性なし。根毛多量にあり。2層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土。粗で、粘性あり。根毛多量にあり。3層：7.5Y R2/3極暗褐色腐植土。密で、粘性あり。4層：7.5Y R4/6褐色火山灰腐植土混合土。粗で、粘性あり。5層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。6層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。密で、粘性若干あり。根毛あり。各層共に遺物を含まない。

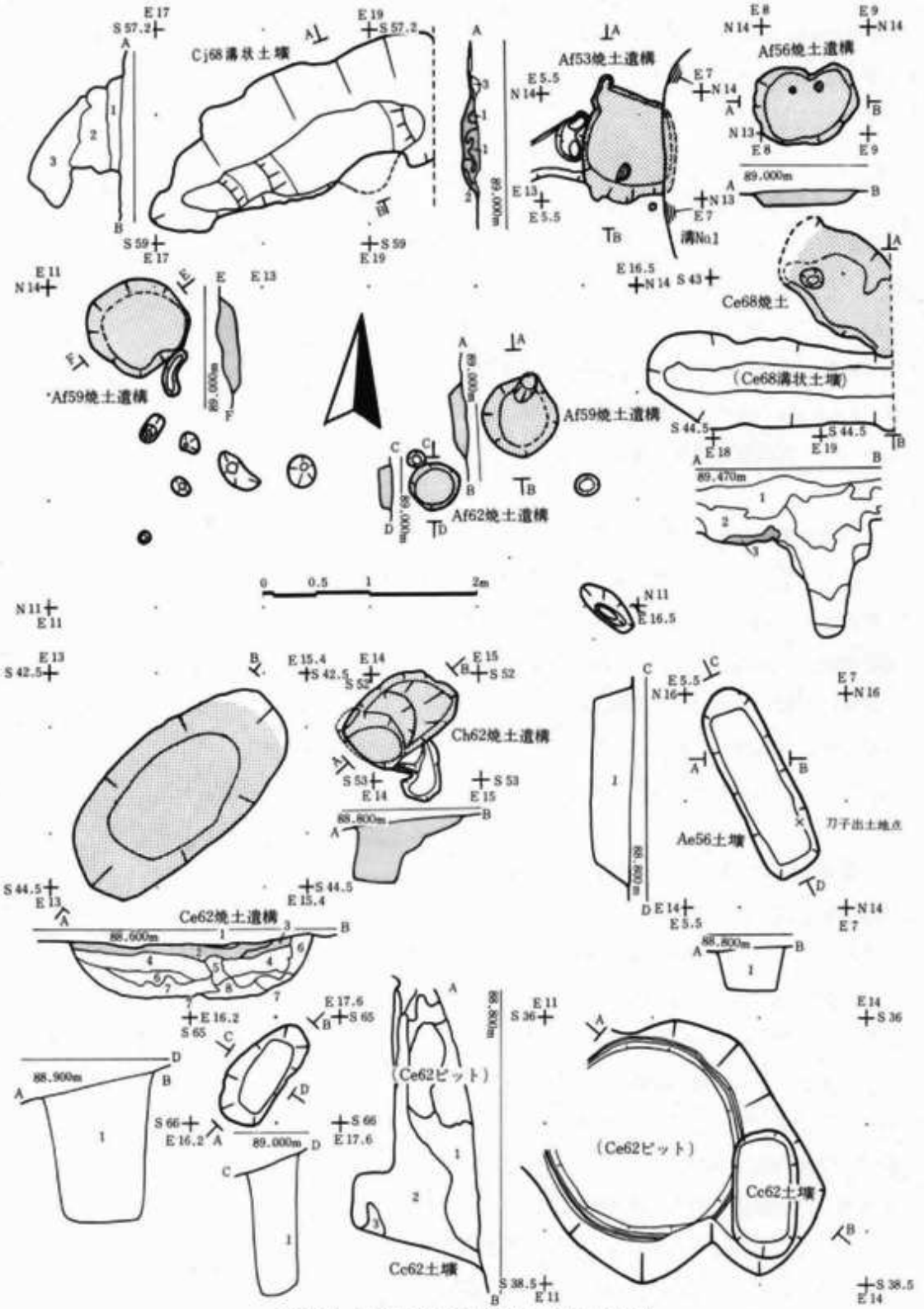
⑾Ci 68溝状土壙（13図上段左　図版7―2段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ57.23～59.10m。東へ16.94～路線外。

〔堆積土〕1層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土。やや密で、粘性若干あり。炭化物を含む。2層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土。粗で、粘性あり。火山灰、炭化物を少量含む。3層：10Y R3/4暗褐色腐植土火山灰混合土。粗で、粘性あり。

〔出土遺物〕縄文土器、繊維を含む体部破片1点。外面がかなり磨滅しているため明確ではないが、羽状縄文で、結節らしき痕跡がある。繊維を含まないものは、口縁部1点、体部破片2点で、口縁部破片（22図5　図12―5）は、わずかに外反し、口端部と地文の間約1cmは横なでされ、口端部は平坦で、外縁に刻みが約1cm間隔に付される。地文はL―R。胎土は砂粒を多量に含む。色調は橙色である。体部破片2点は小破片で、磨滅著しい。

この溝状土壙は、平面形、断面形、堆積土の状態等、他の溝状土壙と異なっており、この項に入れるのは適当でないと思われるが、他に例がないため便宜上ここに記入した。



第13図　溝状土壙・焼土遺構・土壙実測図

4　土壙（土壙一覧表）

(1)Ae 56土壙（第13図３段右　図版７―３・４段右）

〔遺構の位置〕基準点より北へ14.27～16.06m。東へ5.66～6.74m。

〔堆積土〕１層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。密で、粘性あり。単層で、堆積土の状態や、壁面上部の土が埋土に入り込んでおらず、自然堆積ではないように思われる。

〔出土遺物〕刀子（23図34、図版13―34）１点。刀身先半部欠損で、茎の長さ4.5cm。巾0.4～1.1cm。厚さ0.3cm。刀身残存部長さ5.3cm。巾0.6～1.1cm。棟の厚さ0.3cmである。

(2)Cc 62土壙（第13図下段右　図版７―３段左）

〔遺構の位置〕基準点より南へ37～38.40m。東へ12.55～13.6m。

〔堆積土〕１層：7.5Y R3/4暗褐色腐植土。密で、粘性なし。パミスを若干含む。２層：7.5Y R4/4褐色腐植土。密で、粘性なし。パミスブロックを含む。３層：7.5Y R6/8にぶい橙色火山灰土パミス混合土。粗で、粘性あり。各層共に遺物を含まない。

(3)Db 65土壙（第13図下段左　図版７―４段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ65.07～66.20m。東へ16.48～17.31m。

〔堆積土〕１層：10Y R3/3暗褐色腐植土。密で、粘性なし。遺物を含まない。

5　焼土遺構（焼土遺構一覧表）

(1)Af 53焼土遺構（第13図上段中）

〔遺構の位置〕基準点より北へ12.96～14.05m。東へ5.88～6.76m。

〔堆積土〕１層：2.5Y R4/8赤褐色焼土。密で、粘性なし。２層：7.5Y R5/8明褐色火山灰土。密で、粘性あり。焼土を含む。３層：10Y R5/6黄褐色シルト腐植土混合土。密で、粘性なし。焼土を若干含む。各層共に遺物を含まない。

(2)Af 56焼土遺構（第13図上段右）

〔遺構の位置〕基点より北へ12.90～13.65m。東へ7.94～8.90m。

〔堆積土〕１層：2.5Y R4/8赤褐色焼土。密で、粘性なし。遺物を含まない。

(3)Af 59焼土遺構（第13図２段左）

〔遺構の位置〕基準点より北へ13.16～14.06m。東へ11.36～12.32m。
〔堆積土〕1層：2.5Y R4/8赤褐色焼土。密で、粘性なし。遺物を含まない。

(4)Af 62焼土遺構（第13図2段左2）
〔遺構の位置〕基準点より北へ11.94～12.40m。東へ14.35～14.84m。
〔堆積土〕1層：2.5Y R4/8赤褐色焼土。密で、粘性なし。遺物を含まない。

(5)Af 65焼土遺構（第13図2段左3）
〔遺構の位置〕基準点より北へ12.40～13.14m。東へ15.05～15.76m。
〔堆積土〕1層2.5Y R4/8赤褐色焼土。密で、粘性なし。遺物を含まない。

(6)Ce 62焼土遺構（第13図3段左　図版7—下段左）
〔遺構の位置〕基準点より南へ42.65～44.63m。東へ13.22～15.20m。
〔堆積土〕1層：2.5Y R6/6明黄褐色パミス。やや密で、粘性なし。2層：7.5Y R4/4褐色火山灰土。密で、粘性若干あり。焼土、炭化物が粒状で全面に含まれる。3層：10Y R4/6褐色火山灰土。密で、粘性若干あり。4層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土。やや密で、粘性なし。炭化物粒を含む。5層：7.5Y R3/2黒褐色腐植土。密で、粘性なし。火山灰を含む。6層：7.5Y R4/4褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性なし。7層：7.5Y R4/3Y R褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性なし。8層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土火山灰混合土。やや密で、粘性なし。
〔出土遺物〕土師器。長胴甕。口縁部1/8以下残存2点。1点は頸部有段、1点は無段。体部小破片9点。内4点は外面が箆なで、5点は磨滅により不明。底部小破片4点、内2点は下面に木葉痕がある。他の2点は外体面下半から底下面が箆削り痕がある。球胴甕（23図27）は、体下半と底部1/1残存で、外体面と底下面は箆削り箆なで、底径8.7～9.0cmで、2次焼成を受ける。接合しないが、Cc 65住居跡出土の甕（9図2）に類似する。内黒坏は、体部小破片2、体底部破片1点で、体底部破片は丸底風と思われるが、明確でない。縄文土器片（22図14、図版13—14）口体部1点。剥片石器（18図28・37・48、19図66、20図87）5点。

(7)Ce 68焼土遺構（13図2段右）
〔遺構の位置〕基準点より南へ42.45～43.78m。東へ18.64～路線外。
〔堆積土〕1層：7.5Y R3/3暗褐色腐植土。密で、粘性若干あり、火山灰を含む。2層：10Y R3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性あり。火山灰を含む。3層：5Y R2/3極暗赤褐色焼土層。粗で粘性あり。

〔出土遺物〕縄文土器、口縁部小破片（22図16　図版13―16）口縁部は内湾内傾し、外面に粘土帯貼付文とそれに平行して沈線が内側に施される。口端部は1本の沈線状の凹みが横位に施される。体部破片の内1点（22図13　図版13―13）は、L―Rの地文の上から三本単位の沈線が横位に施される。器壁は外反する。他に6点の体部小破片が出土した。

⑻Ch 62焼土遺構（13図3段左2　図版7―下段右）

〔遺構の位置〕基準点より南へ51.98～52.89m。東へ13.72～14.80m。

〔堆積土〕1層：7.5YR4/4褐色焼土腐植土混合土。粗で、粘性なし。

〔出土遺物〕土師器、長胴甕2点。1点は口頸部の小破片で、口縁部はわずかに外反し、外面横なで、内面は横の刷毛目痕がある。口縁部高さ2.3cm。頸部有段である。1点は、体下底若干の破片で、外体面は箆削り箆なで、内面は箆なで。底部周縁は外側に張り出す。

6　溝（第14図）

№1、№2共に、調査開始時には、堆積土は無く、最近掘られた様な状態であった。それが重機が入って、表土除去と抜根を実施した際に、一部掘削して消滅し、表土が埋めたてられた。溝の両端は東側路線外に続いており、これと平行して、東側路線外にもう1本溝があった。

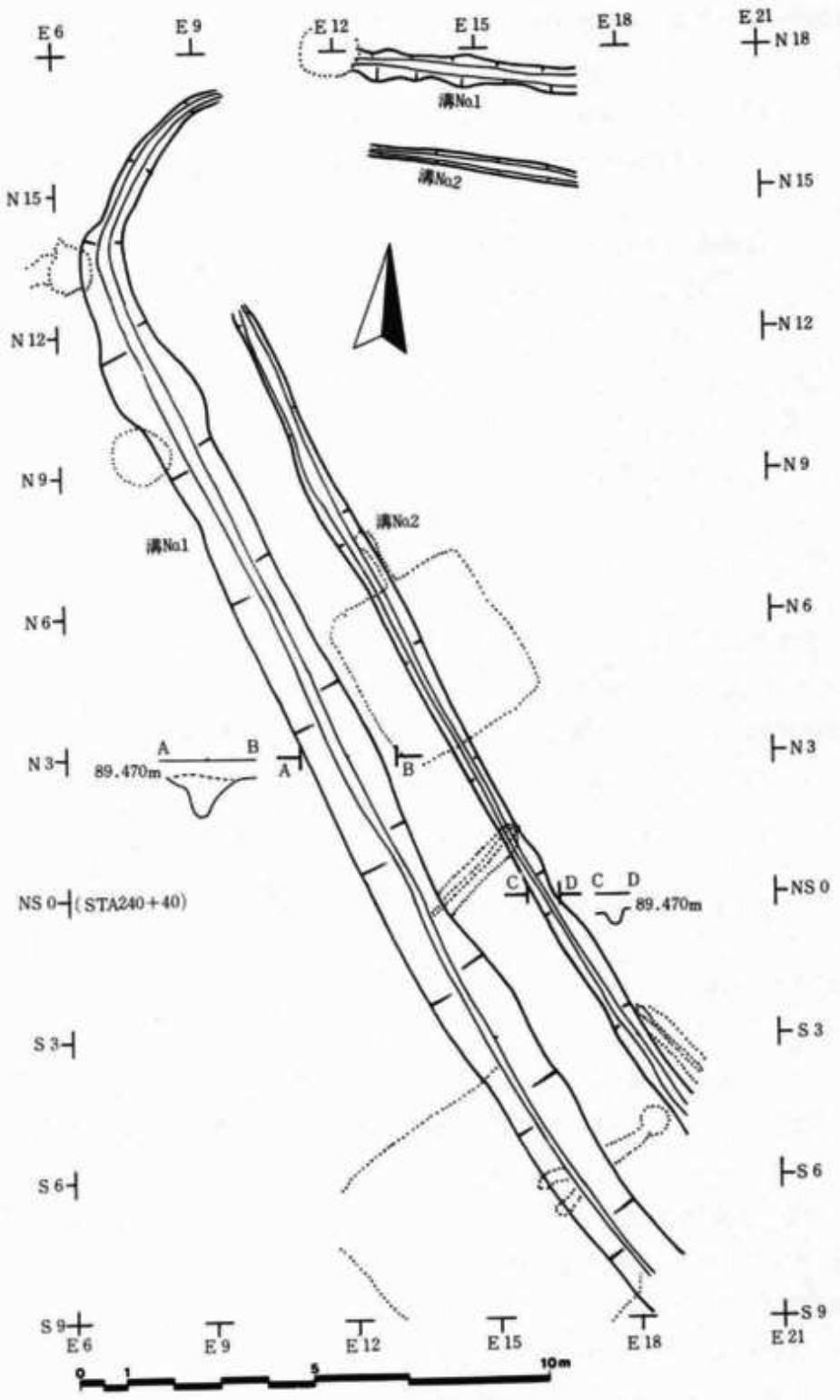
溝の性格は不明であるが、溝の内側に土地所有者名を記した杭があったことから、何らかの境界を示すものであるかもしれない。北側にある木立の中にも同様の溝が存在する。

7　表採等の遺物（遺物一覧表）

⑴縄文時代の遺物

縄文土器（22図1～7・10～17　図版12・13―1～7・10～17）

1は、瓜形と条痕文、口端部に刻みがある。Ad 53ピット出土。2は、綾杉文。A区表土採集。3は、口端部に粗い刻みがある。Cb 68ピット出土。4は、胎土に繊維を含む。D区表土採集。5は、口端部に刻みがある。Ci 68溝状土壙出土。6は、口端部に刻み？、撚糸文が施される。A区表土採集。以上口縁部破片。7は、体部破片、胎土に繊維を含み、内外面に縄文が施される。10は、体下半部破片。撚糸文が施される。Ce 62焼土遺構出土。以上は縄文早期と思われる。11は、体部破片。外面は羽状縄文で結節があり、胎土に繊維を含む。Ci 62ピット出土。12は、体部破片。孔が穿たれ、胎土に繊維を含む。Da 62ピット出土。以上2点は縄文前期かと思われる。13は、体部破片で、3本単位2組の平行沈線と、もう1本の沈線がある。Ce 68焼土遺構出土。14は、口体部破片で、波状口縁。頂部下に隆帯渦巻文。体部は、2本の平行粘土帯貼付の


E 6
E 9
E 12
E 15
E 18
E 21
N 18
溝No.1
溝No.2
N 15
N 12
N 9
N 6
N 3
NS 0
S 3
S 6
S 9
溝No.1
溝No.2
A
B
89.470m
C
D
(STA240+40)
0
1
5
10m

第14図　溝実測図

両脇に沈線が施される。Ce 62焼土遺構出土。15は、口体部破片で、頸部に3本、その下に2本の平行沈線。体部は、3本の平行沈線を施し、その下に3本組の縦の沈線を4個所位施し、その中に3本組の渦巻状沈線を施す。Cc 65住居跡かまど燃焼部出土。小型で接合しないが底部破片も出土している。16は、口縁部破片で、口端部に沈線状の凹みがあり、外面に粘土帯貼付文とそれに沿って沈線が内側に施される。Ce 68焼土遺構出土。以上4点は、縄文中期かと思われる。17は、口縁部破片で、5本の沈線が横位に施され、内面に1本隆帯？が横位に施される。A区表土採集。縄文晩期かと思われる。8は、口縁部破片で、単節斜縄文と綾絡文が施される。Ai 56ピット出土。9は、体下底部破片で、撚糸文が施される。B区表土採集、共に縄文土器か弥生式土器か判断がつきかねる。他に胎土に繊維を含む体部破片34点。胎土に繊維を含まない体部破片139点が、出土した。

石器（遺物一覧表、石器実測図説明Ⅰ～Ⅳ）

1） 石剣（石器実測図説明Ⅰ、第15図1　図版8－1）半欠で、断面形は楕円形である。長軸の両端と先端部に、かなりの打痕が認められる。

2） 敲石（石器実測図説明Ⅰ、第15図2～5　図版8－2～5）2は、半欠で、断面形は四辺形、角は丸い。1部に擦痕があり、上下面は平坦である。先端に打痕が若干みられる。3は、完形品で、断面形は卵形。一方の端は擦痕があり、他の端は打痕がある。4は、半欠で、断面形は長楕円形。全面に擦痕がある。先端部には打痕がある。5は、両端と面の1部が欠損する。面の1方に擦痕がある。両端は自然欠損でなく、打ち欠いた加工痕かもしれない。

3） 石皿（石器実測図説明Ⅰ、第15図6、第16図7・8　図版8－7・8）6は、2辺が縁部で、かなり傾斜する。上面が若干磨滅するが、擦痕や凹みは認められない。7は、小破片で、下辺が縁部と思われる。上面の線刻は、最近鉛筆で書いたにも思える。8は、小破片で、上面が若干磨滅している。何れも石質は軟質である。

4） 石錘（石器実測図説明Ⅰ、第16図9・10　図版8－9・10）9は、ほゞ三角形で、両側辺に、各1ヶ所打ち欠いて凹みをつくる。10は、四辺形で、両側辺に、各1ヶ所打ち欠いて凹みをつくる。

5） 磨石（石器実測図説明Ⅰ、第16図11～13、第17図14・15　図版8－11～15）11・12・13は両端が欠損し、13は下面も欠損する。14・15は完形品である。上面と側面の1部に研磨痕があり、13以外の下面は擦痕がある。

6） 舟底形石器（石器実測図説明Ⅰ、第17図16　図版8－16）完形品で、断面形は三角形である。後端部に自然面が残る。旧石器との教示を得ている。

7） 石鏃（石器実測図説明Ⅰ、第17図17　図版8－17）先端部が欠損する。

8） 剝片（遺物一覧表、石器実測図説明Ⅰ～Ⅳ、第17～22図　図版8～12）

剝片石器の分類については、形態や大きさ、用途等によってなされているが、こうした分類に該当するのかどうか疑問のものがかなり有るため、刃部加工の部位と使用痕の部位によって分類してみた。中には第17図16と同様旧石器と思われるものも含むが、明確ではない。

①：刃部加工痕（2次調整）が、ほぼ全辺にみられるもので、これを2つに細分した。

1－1：楕円形で、一端が尖るもの。(18～20)

1－2：楕円形で、両端が尖るもの。(21)

②：刃部加工痕（2次調整）が、1部にあるもので、これを7つに細分した。

2－1：刃部加工痕が、両側辺と上辺か下辺のいずれかにあるもの。(22～35)

2－2：刃部加工痕が、1方の側辺と上辺か下辺のいずれかにあるもの。(36～50)

2－3：刃部加工痕が、上下両辺と1方の側辺にあるもの。(51)

2－4：刃部加工痕が、両側辺のみにあるもの。(52～70)

2－5：刃部加工痕が、1方の側辺のみにあるもの。(71～90)

2－6：刃部加工痕が、上辺と下辺のみにあるもの。(91)

2－7：刃部加工痕が、上辺か下辺のいずれかにあるもの。(92～105)

③：刃部加工痕が認められず、使用痕のみがあるもので、6つに細分した。

3－1：使用痕が両側辺のみにあるもの。(106～119)

3－2：使用痕が1方の側辺のみにあるもの。(120～135)

3－3：使用痕が上辺か下辺のいずれかと、1方の側辺にあるもの。(136～142)

3－4：使用痕が上辺か下辺のいずれかと、両側辺にあるもの。(143・144)

3－5：使用痕が上辺か下辺のいずれかにのみあるもの。(145～147)

3－6：使用痕が上辺と下辺のみにあるもの。(148)

⑵弥生時代の遺物（遺物一覧表）

弥生式土器（第22図18～24　図版13－18～24）

18は、口縁部小破片で、外面に2本、内面に1本の沈線が横位に施される。口端部は平坦である。19～22は、体部小破片で、沈線と、縄文の磨り消しが認められる。20には、そのほかに点状の刺突文がある。23は、弥生式土器かどうか明確ではないが、体下半底部の小破片で、外体面は撚糸文、底下面には網代痕がある。24は、高坏の台部約1/2の破片で、胎土に石英粒を主とする砂粒をかなり多く含む。無文で、内外面共に、不定方向の篦なで調整である。7点共に胎土に砂粒を含み、色調は黄橙色～橙色、焼成はやや不良である。18の外面は丹塗と思われる赤色部分が、かすかに残っている。

(3)古代の遺物（遺物一覧表）

土師器長胴甕は、遺物一覧表にある通り合計112点で、頸部有段が4点。頸部無段のもの6点。小型甕2点。不明100点。頸部有段のものは、口縁部破片1点、頸部破片3点。頸部無段のものは、口縁部破片2点、頸体上部破片4点。段の有無不明のもの100点で、A区表土採集のもの34点は、口縁部破片1点。体部破片32点、内刷毛目を施した後に箆削りをしているもの1点。箆削り箆なでを施しているもの17点。磨滅著しく調整痕の不明なもの14点である。底部破片1点である。B区表土採集のもの9点は、いずれも体部破片で、平行叩き目文を施した後に横なでしているもの2点。平行叩き目文を施した後に縦に箆削り箆なでしているもの1点。箆削り箆なでを施しているもの2点。縦に刷毛目痕のあるもの1点。磨滅著しく外面調整不明のもの3点である。C区表土採集のもの16点は、口縁部破片1点。体部破片14点、内7点は外面に縦の刷毛目痕があり、他の7点は箆削り箆なでで、中に磨滅著しく明確でないものもある。底部破片1点である。D区表土採集のもの1点は、体部破片1点で、外面は、縦の箆なでである。採集地点不明の表土採集のもの40点は、口端部破片3点。体部破片37点で、内外面に縦の磨きがあるもの2点。外面に縦の刷毛目痕があるもの5点。他の30点は、箆削り箆なで痕がある。

球胴甕は13点で、頸部有段が採集地点不明の表土採集のもの3点。3点共に頸・肩部小破片である。段の有無不明のもの3点は、1点が肩部破片。2点が体部破片で、3点共外面が磨滅著しく調整は不明である。かなり壁面が内湾している。C区表土採集の7点は段の有無は不明で、いずれも体部破片である。1点の外面には箆磨きが施され、6点の外面には刷毛目痕が施されている。

内黒坏16点のうち、A区表土採集の2点は、共に有段丸底で、1点は体底部破片、1点は口体部破片で、外面も黒色処理される。B区表土採集の3点は、口縁部破片。C区表土採集の3点は、口縁部1、体部1、底部1の小破片。D区表土採集の1点は、口縁部破片で外面にも磨きがある。採集地点不明の7点中、丸底の1つ（23図32　図版13—32）は、口体底1/4残存で、口体部外面は横なで、底部との境は1部に段が付く、底部は箆削り。内面の黒色は1部消えている。推定口径約11cm。器高5.2cm。他の2点は体底の小破片である。他に器形不明の体部小破片4点は、内外面共かなり磨滅している。

須恵器、壺。採集地点不明の4点のみで、口縁部1点。肩部2点。体部1点の小破片で、口縁部破片は口端が上下に強く挽き出される。肩部と体部破片は3点共外面に平行叩き目文が施され、肩部破片の1点は内面に当て工具痕がある。

須恵器坏A区出土5点は、共に酸化炎焼成で、口体部3点、底部2点で、みなろくろ使用である。B区出土3点は、共に還元炎焼成で、口縁部2点、底部1点、3点共ろくろ使用、底部破片は下面が回転糸切りである。C区表土採集の1点は、体下底部1/5残存で、回転箆切り、体

石 器 実 測 図 説 明 I

登録番号	実測図番号	図版番号	種別	形状	出土地点	最大長 cm 縦	横	厚さ	重量 g	調整 a 面	b 面	材質
57	15－1	8－1	石 剣	－	Bb59住埋土	(15.5)	(4.0)	1.8	147.02	(両側面に打痕)		粘 板 岩
55	15－2	8－2	敲 石	－	〃	(15.2)	(4.3)	4.1	327.08	－	－	〃
56	15－3	8－3	〃	球 形	〃	9.0	7.3	6.5	630.00	(先端擦痕)	(先端打痕)	安 山 岩
58	15－4	8－4	〃	－	Cc65住埋土	(7.9)	(4.3)	2.5	131.04	－	－	粘 板 岩
59	15－5	8－5	〃？	長方形	C区表土	9.1	4.4	2.3	125.02	－	－	〃
73	15－6	8－6	石 皿	－	〃	(16.0)	(15.4)	2.3	798.00	擦 痕	擦 痕	安 山 岩
74	16－7	8－7	〃	－	〃	(9.0)	(6.2)	2.3	228.47	〃	〃	〃
75	16－8	8－8	〃	－	〃	(8.2)	(7.1)	1.2	58.56	〃	〃	〃
60	16－9	8－9	石 錘	三角形	〃	12.9	11.9	4.6	945.00	両側部剥離	両側部剥離	流 紋 岩
61	16－10	8－10	〃	四辺形	Da62ピット	10.6	12.6	3.1	640.00	〃	〃	プロピライト
64	16－11	8－11	磨 石	－	C区表土	8.1	6.4	5.1	358.18	下面擦痕	－	〃
65	16－12	8－12	〃	－	A区表土	6.1	6.8	4.9	279.26	〃	－	〃
66	16－13	8－13	〃	－	〃	5.5	4.0	3.2	79.48	－	－	〃
62	17－14	8－14	〃	三角形	〃	12.2	11.9	4.7	830.00	下面擦痕	－	凝 灰 岩
63	17－15	8－15	〃	〃	〃	14.8	10.1	5.3	1,140.00	〃	－	プロピライト
54	17－16	8－16	舟(底)形石器	舟底形	Bb59住埋土	11.3	2.0	2.5	66.40	1部両側辺	一部左辺	流 紋 岩
12	17－17	8－17	石 鏃	不 柄	A区表土	(1.2)	1.3	0.3	0.46	全辺全面	全辺全面	泥 岩
3	17－18	8－18	剝 1－片 1	楕円形	Bb59住埋土	2.7	1.7	0.5	1.92	ほゞ全辺	両 側 辺	〃
22	17－19	8－19	〃 〃	〃	A区表土	2.2	1.2	0.4	1.06	〃	ほゞ全辺	玉 ず い
6	17－20	8－20	〃 〃	〃	〃	4.2	2.5	0.8	7.82	両 側 辺	〃	凝 灰 岩
11	17－21	8－21	1 〃 2	〃	〃	5.1	3.3	1.0	17.46	〃	両 側 辺	〃
26	17－22	8－22	2 〃 1	円 形	〃	3.4	3.2	0.9	12.18	両側下辺	右 辺	〃
30	18－23	8－23	〃 〃	楕円形	〃	3.9	3.8	0.6	7.45	両側下辺	な し	〃
68	18－24	8－24	〃 〃	〃	Cc65住埋土	4.4	6.2	1.5	47.18	〃	〃	〃
67	18－25	8－25	〃 〃	不整形	Bb59住埋土	3.9	4.9	0.9	19.08	〃	両 側 辺	〃
33	18－26	8－26	〃 〃	横 長	Cg62ピット	5.3	7.2	1.1	39.23	上下・左辺	な し	凝 灰 岩
29	18－27	8－27	〃 〃	縦 長	A区表土	7.1	3.3	1.5	40.06	上両側辺	上両側辺	泥 岩
27	18－28	8－28	〃 〃	〃	Ce62焼土遺構	6.6	4.7	1.1	29.58	両 側 辺	下両側辺	〃
72	18－29	9－29	〃 〃	〃	Bb59住埋土	7.5	3.5	1.6	37.67	下両側辺	両 側 辺	〃
92	18－30	9－30	〃 〃	〃	〃	6.2	4.5	1.3	32.65	下両側辺	(使用痕のみ)	〃
16	18－31	9－31	〃 〃	〃	D区表土	7.9	3.4	1.4	32.56	〃	両 側 辺	凝 灰 岩
137	18－32	9－32	〃 〃	〃	表 土	4.9	2.0	0.7	6.58	〃	(使用痕のみ)	〃
140	18－33	9－33	〃 〃	〃	〃	3.8	1.8	1.0	5.95	〃	(〃)	泥 岩
119	18－34	9－34	〃 〃	台 形	C区表土	3.1	3.0	0.5	4.97	下 辺	下両側辺	凝 灰 岩
113	18－35	9－35	〃 〃	多角形	〃	5.7	5.0	1.0	26.32	両 側 辺	上・右辺	〃
28	18－36	9－36	2 〃 2	横 長	A区表土	3.5	6.6	1.1	22.58	下両側辺	(使用痕のみ)	泥 岩
31	18－37	9－37	〃	縦 長	Ce62焼土遺構	7.1	3.3	1.1	27.44	左 辺	下・右辺	凝 灰 岩

石器実測図説明 II

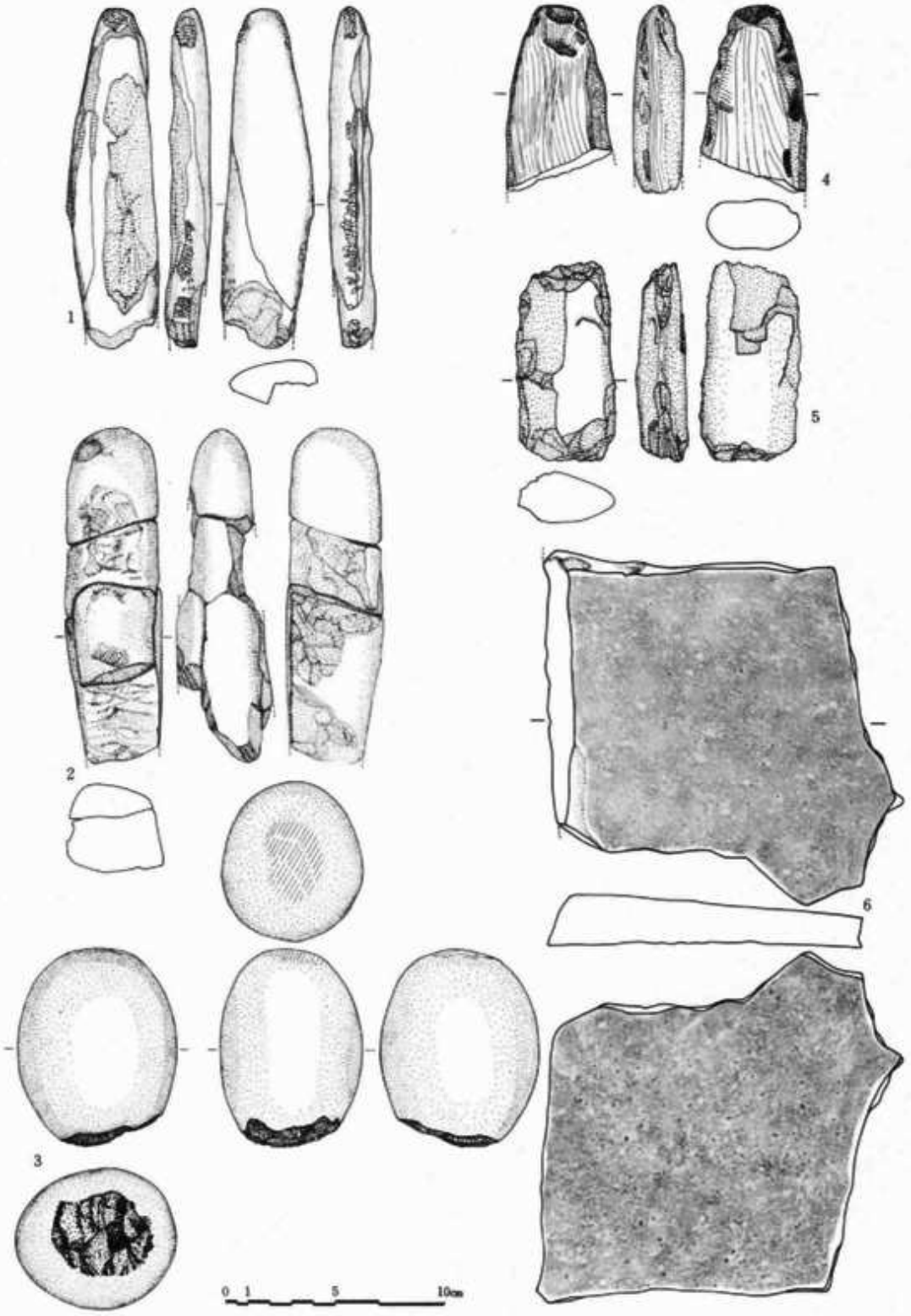
登録番号	実測図番号	図版番号	種別	形状	出土地点	最大長 cm 縦	横	厚さ	重量g	調整 a面	b面	材質
37	18−38	9−38	剝片 2−2	縦長	Bb59住埋土	5.2	2.8	0.9	13.14	下・右辺	(使用痕のみ)	泥岩
21	18−39	9−39	〃 〃	〃	C区表土	3.7	5.5	0.9	16.06	〃	(〃)	凝灰岩
5	18−40	9−40	〃 〃	〃	A区表土	4.5	2.5	0.6	7.84	上左辺	(〃)	めのう
13	18−41	9−41	〃 〃	〃	〃	11.8	5.0	1.6	98.40	下右辺	(〃)	泥岩
133	18−42	9−42	〃 〃	方形	表土	2.0	1.9	0.7	2.97	下左辺	(〃)	〃
105	18−43	9−43	〃 〃	縦長	Bb59住埋土	2.8	2.1	0.6	3.77	下右辺	下辺	〃
110	18−44	9−44	〃 〃	〃	〃	3.0	2.5	0.6	5.41	上辺	右辺	凝灰岩
79	18−45	9−45	〃 〃	〃	A区表土	3.8	2.2	1.0	8.47	下右辺	(使用痕のみ)	〃
89	18−46	9−46	〃 〃	不整形	Ai56ピット	5.3	4.7	1.1	25.84	右辺	下辺	〃
85	18−47	9−47	〃 〃	縦長	A区表土	1.8	1.2	0.2	0.45	下・左辺	(使用痕のみ)	泥岩
147	18−48	9−48	〃 〃	不整形	Ce62焼土遺構	2.2	2.3	0.5	2.03	下・右辺	(〃)	〃
102	18−49	9−49	〃 〃	〃	Ah59住埋土	4.7	5.7	0.7	19.23	下辺	左辺	〃
84	18−50	9−50	〃 〃	〃	Ai56ピット	3.1	2.4	1.0	8.27	下・左辺	右辺	〃
90	19−51	9−51	剝片 2−3	〃	Bb59住埋土	5.7	5.5	1.6	60.17	上・下右辺	下・右辺	流紋岩
1	19−52	9−52	剝片 2−4	縦長	Cc65住埋土	7.0	5.0	1.2	44.82	両側辺	左辺	凝灰岩
103	19−53	9−53	〃 〃	〃	Bb59住埋土	4.2	3.9	1.0	21.26	—	両側辺	泥岩
118	19−54	9−54	〃 〃	三角形	C区表土	5.8	3.9	0.6	13.08	両側辺	左辺	凝灰岩
80	19−55	9−55	〃 〃	〃	Ai56ピット	5.1	4.8	0.7	22.64	〃	(使用痕のみ)	〃
97	19−56	9−56	〃 〃	縦長	Cj68溝状土壙	7.9	2.9	0.9	17.94	〃	(〃)	泥岩
9	19−57	9−57	〃 〃	〃	A区表土	7.3	2.6	0.8	16.72	〃	(〃)	〃
7	19−58	9−58	〃 〃	〃	C区表土	5.9	3.4	0.9	19.56	〃	(〃)	〃
69	19−59	9−59	〃 〃	〃	A区表土	8.1	4.9	1.4	51.82	〃	(〃)	〃
145	19−60	9−60	〃 〃	横長	〃	5.1	5.8	1.3	49.83	〃	(〃)	凝灰岩
15	19−61	10−61	〃 〃	縦長	C区表土	4.8	3.1	0.9	9.66	〃	(〃)	〃
14	19−62	10−62	〃 〃	〃	〃	(3.3)	(2.2)	0.8	4.52	右辺	右辺	泥岩
34	19−63	10−63	〃 〃	〃	Cg62ピット	5.8	3.5	0.6	12.15	両側辺	(使用痕のみ)	凝灰岩
71	19−64	10−64	〃 〃	横長	A区表土	4.2	4.5	1.0	18.27	〃	(〃)	〃
19	19−65	10−65	〃 〃	縦長	Ch65ピット2	3.9	3.0	0.8	9.84	〃	(〃)	泥岩
148	19−66	10−66	〃 〃	不整形	Ce62焼土遺構	2.7	2.1	0.5	2.43	右辺	右辺	〃
25	19−67	10−67	〃 〃	縦長	A区表土	2.8	2.1	0.7	4.48	両側辺	〃	〃
108	19−68	10−68	〃 〃	〃	Bj62ピット	3.6	2.4	0.9	6.86	(使用痕のみ)	両側辺	凝灰岩
18	19−69	10−69	〃 〃	〃	C区表土	5.7	3.2	0.9	13.54	両側辺	(使用痕のみ)	泥岩
24	19−70	10−70	〃 〃	ナイフ形?	Ai56ピット	3.5	0.7	0.3	1.36	〃	両側辺	〃
43	19−71	10−71	剝片 2−5	縦長?	Bb59住埋土	(2.8)	(3.2)	0.5	6.28	右辺	(使用痕のみ)	〃
20	19−72	10−72	〃 〃	〃	Da65ピット	(2.8)	2.6	0.5	3.69	〃	(〃)	〃
45	19−73	10−73	〃 〃	〃	Bb59住埋土	4.0	3.1	0.5	8.42	(使用痕のみ)	右辺	凝灰岩
78	19−74	10−74	〃 〃	〃	A区表土	4.2	3.0	0.6	6.25	右辺	(使用痕のみ)	泥岩

石器実測図説明 III

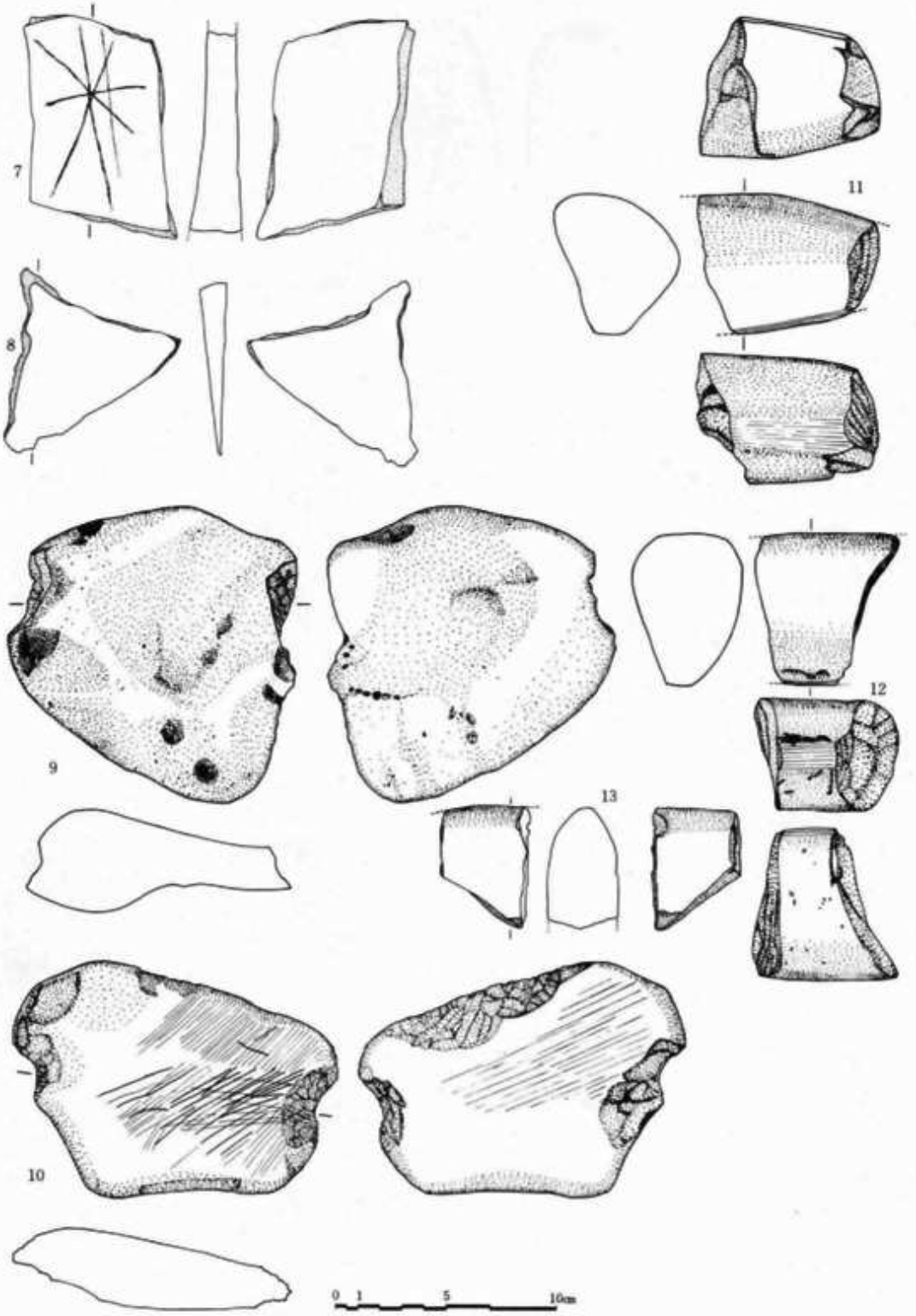
登録番号	実測図番号	図版番号	種別	形状	出土地点	最大長 cm 縦	横	厚さ	重量g	調整 a面	b面	材質
2	19−75	10−75	剝2−片5	縦長	Cc65住埋土	4.5	1.4	0.7	4.93	右辺	(使用痕のみ)	泥岩
36	19−76	10−76	〃	〃	Cc62ピット	3.3	2.0	0.4	3.94	(使用痕のみ)	左辺	〃
96	19−77	10−77	〃	〃	Cb68ピット	4.1	2.1	0.7	6.04	右辺	(使用痕のみ)	〃
126	19−78	10−78	〃	不整形	C区表土	2.5	2.0	0.4	1.95	左辺	(〃)	〃
121	19−79	10−79	〃	四辺形	〃	2.5	2.9	1.6	10.95	右辺	左辺	〃
136	19−80	10−80	〃	横長	表土	2.4	3.7	1.0	10.53	(使用痕のみ)	右辺	凝灰岩
146	19−81	10−81	〃	不整形	Cd59ピット	3.4	3.8	0.9	12.16	(〃)	〃	泥岩
122	19−82	10−82	〃	横長	C区表土	2.8	4.2	1.0	12.58	左辺	(使用痕のみ)	凝灰岩
107	19−83	10−83	〃	四辺形	Bb59住埋土	3.4	3.6	0.5	6.62	右辺	(〃)	泥岩
17	20−84	10−84	〃	縦長	Cc65溝状土壙	5.0	3.5	1.0	20.88	左辺	(〃)	〃
32	20−85	10−85	〃	〃	Ch59ピット	6.2	3.5	0.7	17.06	〃	右辺	〃
35	20−86	10−86	〃	〃	Cg62ピット	7.2	4.3	1.5	41.68	右辺	左辺	凝灰岩
51	20−87	10−87	〃	〃	Ce62焼土遺構	5.3	3.5	0.6	12.48	〃	(使用痕のみ)	〃
128	20−88	10−88	〃	〃	C区表土	8.1	6.6	1.0	50.13	(使用痕のみ)	左辺	泥岩
46	20−89	10−89	〃	不整形	Ai56ピット	3.7	1.9	1.2	7.76	左辺	(使用痕のみ)	〃
81	20−90	10−90	〃	縦長	Cc65溝状土壙	1.6	1.4	0.3	0.82	右辺	(〃)	凝灰岩
77	20−91	10−91	剝2−片6	〃	A区表土	4.4	2.3	1.0	7.76	(使用痕のみ)	上・下辺	〃
39	20−92	10−92	剝2−片7	不整形	Bb59住埋土	3.1	3.1	0.5	4.96	下辺	(使用痕のみ)	泥岩
93	20−93	10−93	〃	縦長	〃	4.3	2.4	0.4	4.06	〃	(〃)	〃
95	20−94	10−94	〃	四辺形	〃	2.4	2.1	0.9	4.36	(使用痕のみ)	下辺	〃
142	20−95	10−95	〃	不整形	表土	4.0	2.5	0.4	3.68	下辺	(使用痕のみ)	〃
23	20−96	10−96	〃	台形	C区表土	3.3	3.4	0.9	11.46	〃	(〃)	凝灰岩
4	20−97	10−97	〃	〃	A区表土	2.3	4.0	0.9	9.63	〃	(〃)	泥岩
111	20−98	10−98	〃	不整形	C区表土	3.1	4.3	1.2	16.07	〃	(〃)	〃
8	20−99	10−99	〃	〃	〃	5.6	3.7	1.0	23.36	上辺	(〃)	凝灰岩
70	20−100	10−100	〃	横長	Cc62ピット	3.8	7.3	1.2	42.28	下辺	(〃)	〃
10	20−101	10−101	〃	〃	Da65ピット	6.8	3.0	0.7	20.86	〃	(〃)	〃
117	20−102	10−102	〃	縦長	C区表土	5.2	4.2	1.2	25.14	〃	下辺	〃
44	20−103	10−103	〃	不整形	Bb59住埋土	4.8	4.3	0.9	14.08	〃	〃	〃
104	20−104	10−104	〃	〃	Ah59住埋土	4.9	6.4	1.1	44.78	〃	(使用痕のみ)	〃
125	20−105	10−105	〃	〃	C区表土	5.8	7.2	1.7	72.96	〃	(〃)	泥岩
82	21−106	11−106	剝3−片1	〃	Cc65溝状土壙	5.0	4.3	1.1	21.96	(使用痕のみ)	(〃)	〃
129	21−107	11−107	〃	三角形	D区表土	5.2	2.8	0.8	16.28	(〃)	(〃)	〃
130	21−108	11−108	〃	〃	〃	4.5	2.2	0.7	8.02	(〃)	(〃)	〃
149	21−109	11−109	〃	四辺形	表土	8.4	4.5	1.7	47.36	(〃)	(〃)	〃
98	21−110	11−110	〃	〃	Cg65ピット1	3.9	2.6	0.8	6.43	(〃)	(〃)	〃
47	21−111	11−111	〃	縦長	表土	5.4	2.3	0.9	8.08	(〃)	(〃)	凝灰岩

石器実測図説明 Ⅳ

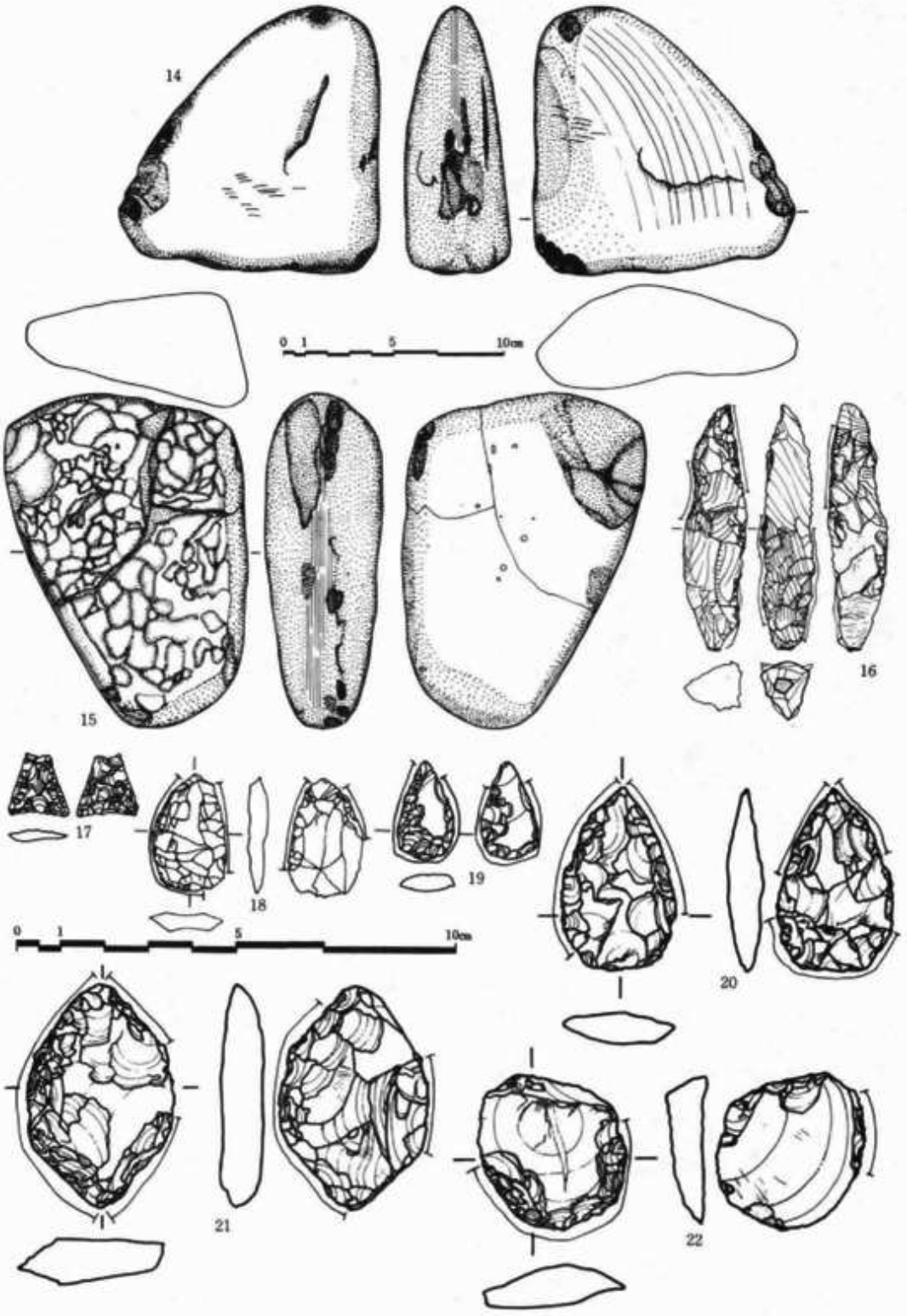
登録番号	実測図番号	図版番号	種別	形状	出土地点	最大長 cm 縦	横	厚さ	重量g	調整 a面	b面	材質
100	21－112	11－112	剝3－片1	縦長	Ci62ピット	5.0	2.8	0.9	14.14	(使用痕のみ)	(使用痕のみ)	凝灰岩
141	21－113	11－113	〃	〃	表土	3.7	1.3	0.5	3.36	(〃)	(〃)	泥岩
50	21－114	11－114	〃	〃	Cc65住埋土	8.0	4.2	1.6	35.56	(〃)	(〃)	凝灰岩
76	21－115	11－115	〃	〃	A区表土	4.8	2.4	0.4	5.93	(〃)	(〃)	〃
109	21－116	11－116	〃	〃	Bb59住埋土	3.1	2.4	0.4	3.16	な し	(〃)	〃
94	21－117	11－117	〃	不整形	〃	5.1	4.6	1.1	19.53	(使用痕のみ)	(〃)	泥岩
135	21－118	11－118	〃	四辺形	表土	3.3	3.5	1.2	14.64	(〃)	(〃)	〃
112	21－119	11－119	〃	横長	C区表土	2.8	4.3	0.6	6.65	(〃)	な し	〃
139	21－120	11－120	剝3－片2	縦長	表土	5.1	3.3	1.0	14.72	(〃)	〃	凝灰岩
99	21－121	11－121	〃	〃	B区表土	4.0	2.8	1.3	20.92	(〃)	(使用痕のみ)	〃
86	21－122	11－122	〃	四辺形	Bj62ピット	4.4	3.9	1.2	19.82	(〃)	(〃)	〃
87	21－123	11－123	〃	縦長	〃	6.5	2.8	1.0	16.42	な し	(〃)	〃
115	21－124	11－124	〃	不整形	C区表土	2.9	2.4	0.5	3.42	(使用痕のみ)	(〃)	〃
123	21－125	11－125	〃	〃	〃	3.1	2.3	0.8	5.78	(〃)	(〃)	泥岩
48	21－126	11－126	〃	縦長	表土	6.0	3.9	0.5	11.32	(〃)	(〃)	凝灰岩
52	21－127	11－127	〃	不整形	Ah59住埋土	4.0	4.0	1.5	22.45	(〃)	(〃)	〃
91	21－128	11－128	〃	横長	Bb59住埋土	3.6	5.5	1.5	35.58	(〃)	(〃)	泥岩
114	21－129	11－129	〃	不整形	C区表土	5.7	5.2	1.1	26.72	(〃)	(〃)	凝灰岩
131	21－130	11－130	〃	〃	表土	4.8	4.6	1.4	29.04	(〃)	(〃)	泥岩
53	21－131	11－131	〃	縦長	Cc65住埋土	3.3	2.0	0.8	6.72	(〃)	(〃)	〃
127	21－132	11－132	〃	〃	C区表土	3.4	2.3	0.6	4.24	(〃)	(〃)	〃
134	21－133	11－133	〃	四辺形	表土	2.9	2.9	0.8	6.48	(〃)	(〃)	〃
40	21－134	11－134	〃	不整形	Bb59住埋土	3.0	3.4	0.9	5.93	(〃)	(〃)	凝灰岩
132	21－135	11－135	〃	縦長	表土	5.1	2.2	0.7	6.24	(〃)	(〃)	泥岩
143	21－136	12－136	剝3－片3	三角形	〃	2.6	2.4	0.3	1.89	(〃)	(〃)	〃
41	21－137	12－137	〃	縦長	Bb59住埋土	5.6	3.8	0.7	17.56	(〃)	(〃)	〃
106	21－138	12－138	〃	〃	〃	4.7	3.3	1.0	15.53	(〃)	(〃)	〃
49	21－139	12－139	〃	〃	A区表土	5.2	3.3	1.2	14.26	(〃)	(〃)	〃
38	22－140	12－140	〃	〃	Bb59住埋土	5.5	3.7	0.9	19.81	(〃)	(〃)	凝灰岩
101	22－141	12－141	〃	〃	〃	5.5	3.3	1.0	16.92	(〃)	(〃)	〃
124	22－142	12－142	〃	〃	C区表土	5.3	3.8	1.1	25.36	(〃)	(〃)	泥岩
120	22－143	12－143	剝3－片4	〃	〃	4.4	4.7	1.3	23.76	(〃)	(〃)	〃
138	22－144	12－144	〃	不整形	表土	4.1	4.2	0.6	11.32	(〃)	(〃)	〃
88	22－145	12－145	剝3－片5	縦長	Bb59住埋土	3.4	2.2	1.1	7.30	(〃)	な し	〃
116	22－146	12－146	〃	不整形	C区表土	1.9	1.9	0.3	1.98	(〃)	(使用痕のみ)	〃
42	22－147	12－147	〃	縦長	Cb59ピット	6.6	2.9	0.7	16.04	な し	(〃)	凝灰岩
83	22－148	12－148	剝3－片6	〃	Ai56ピット	3.2	2.9	0.3	3.12	(使用痕のみ)	(〃)	〃



第15図　石器実測図 I

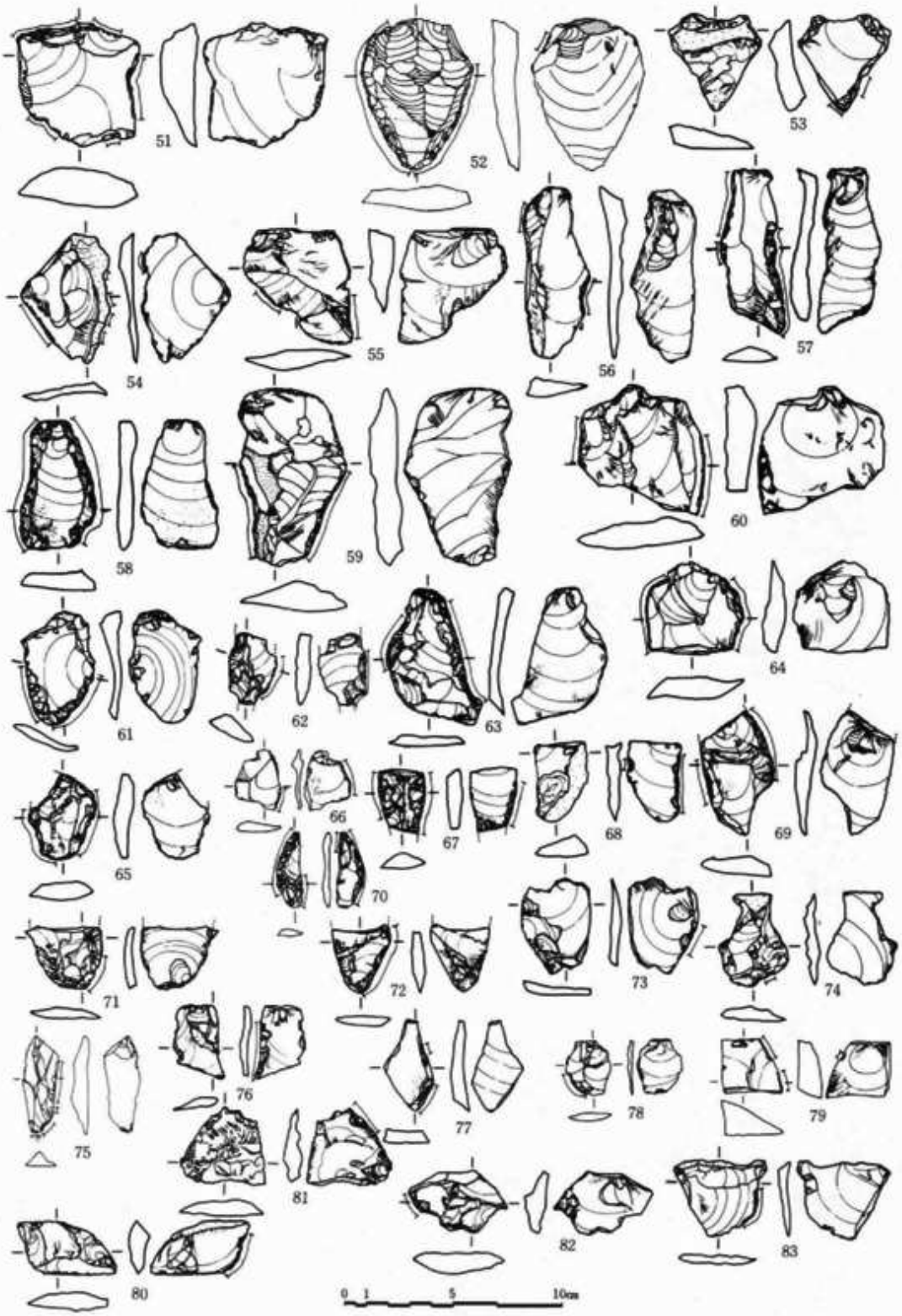


第16図　石器実測図II

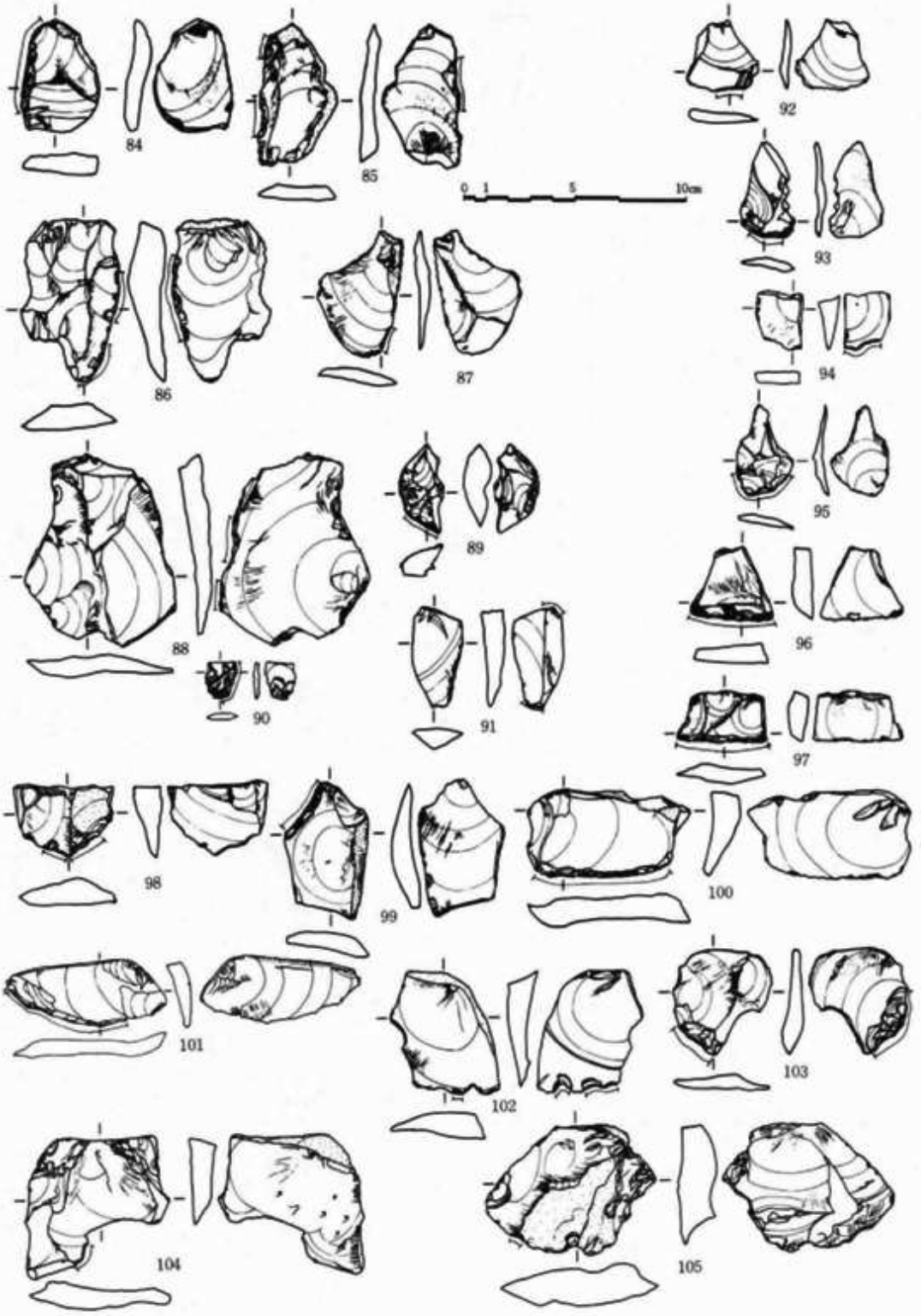


第17図　石器実測図Ⅲ

第18図　剝片石器実測図Ⅰ

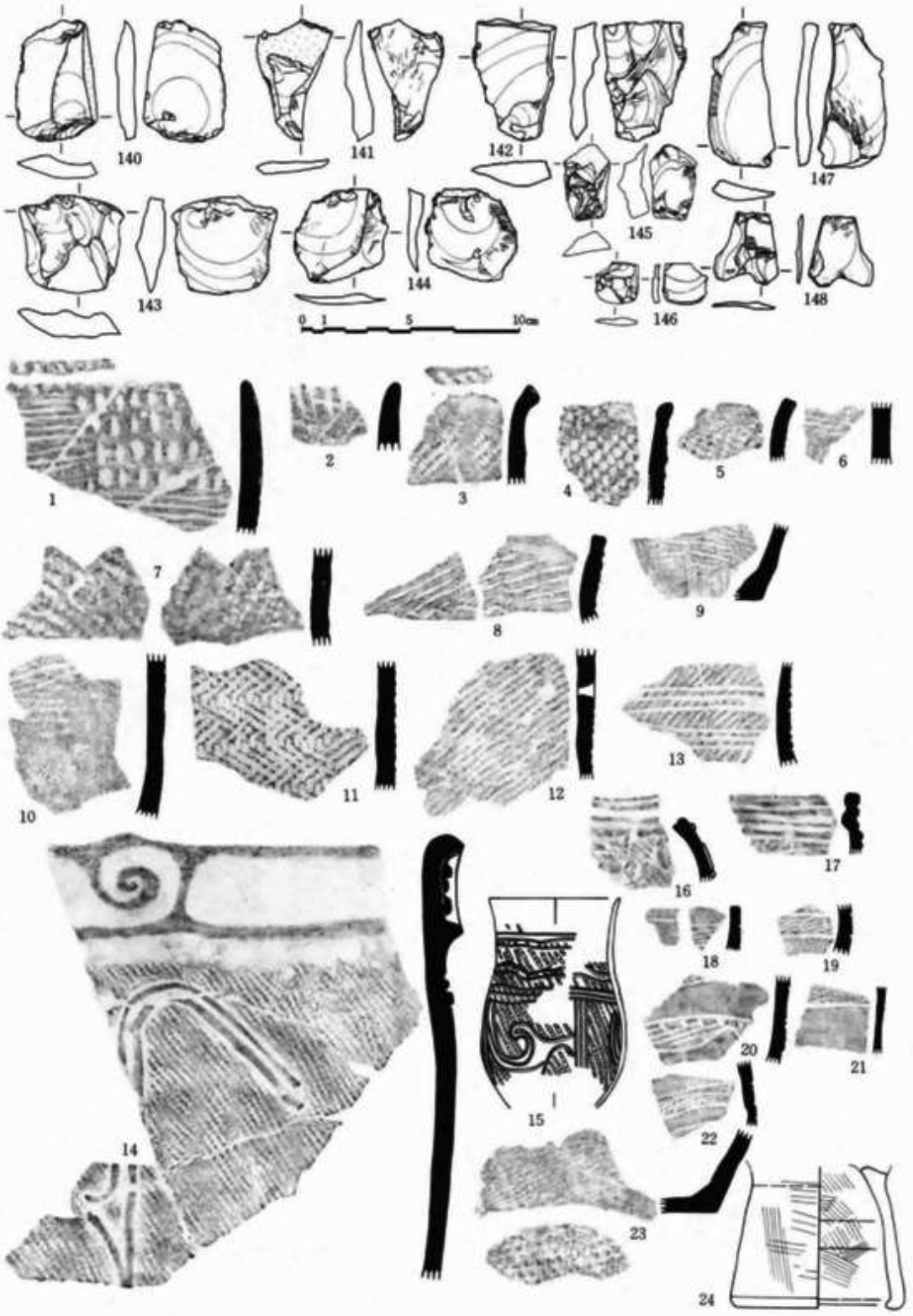


第19図　剥片石器実測図II

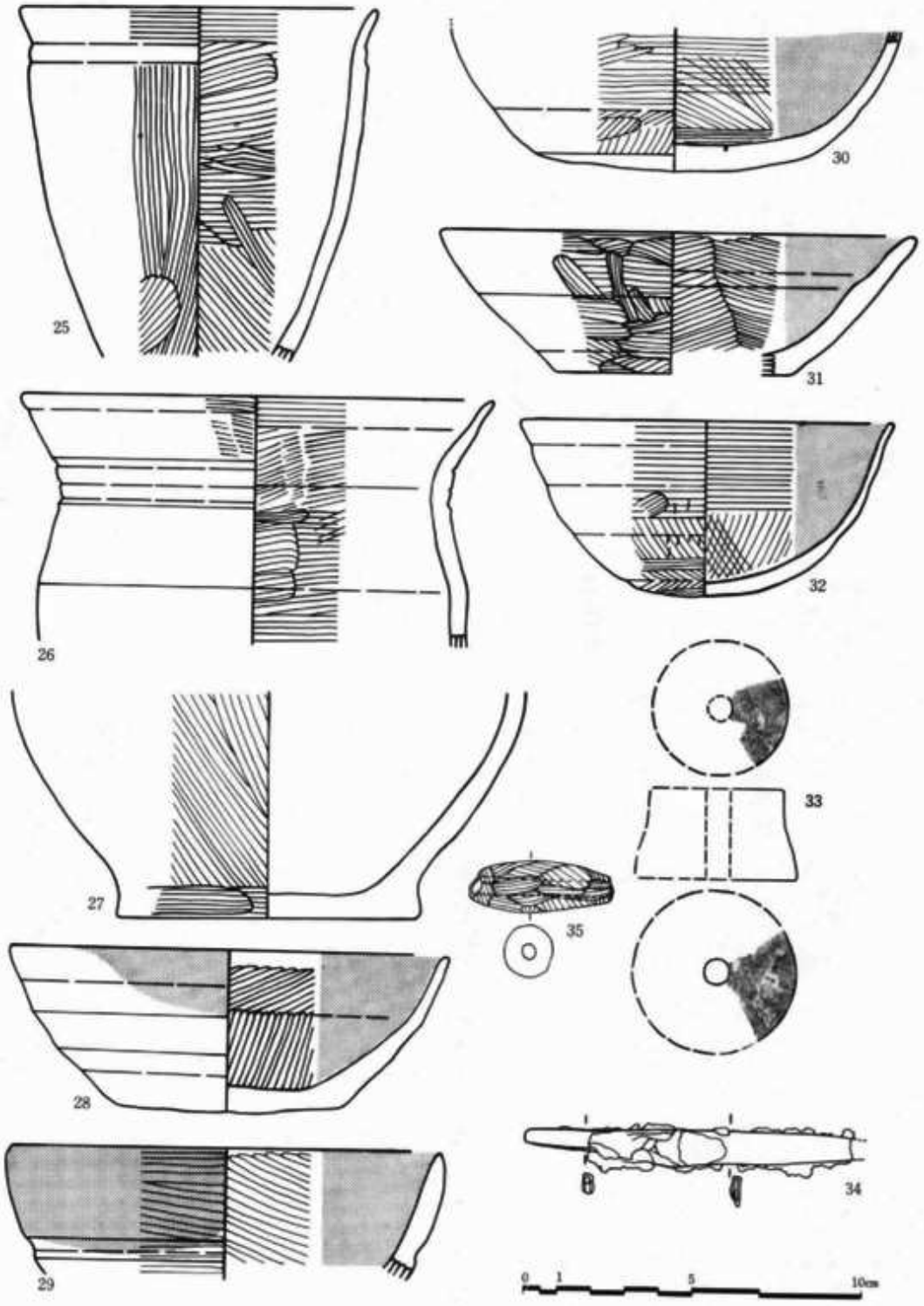


第20図　剝片石器実測図Ⅲ

第21図　剝片石器実測図Ⅳ



第22図　剥片石器実測図Ⅴ・土器実測図



第23図　土器・鉄器実測図

遺物一覧表

出土地点	長胴甕				球胴甕			内黒坏			高坏	紡錘車	刀子	須恵器				縄文式土器		弥生土式器	石器							
														壺	坏													
	類部有段	類部無段	小型	不明	類部有段	類部無段	不明	丸底	平底	不明					箆切り	糸切り	不明	せんい	無せんい		石剣	敲石	石皿	石錘	磨石	舟底形	石鏃	剥片
Ab59住居跡	4	7		70	1	1		2			1																	3
Bb59 〃	1	23	1	110	3	1				10			1	53	4		17				1	2				1		25
Cc65 〃		3	1	21	4			3		6				1					2			1						5
Ad53ピット																			1									
Ad56 〃				1	1														1									
Ai56 〃																		2	3									6
Bj62 〃	2	2		20					1	2					1		1		2									3
Ca65 〃			2	41						1							2											
Cb62 〃			2	9				6	1	2		1						1	3									
Cb68 〃																			2									1
Cc62 〃																												2
Cd53 〃																		1										
Cd59 〃																		1										2
Ce53 〃				1																								
Cf65 〃																		3	1									
Cg56No.2 〃																			4									
Cg62 〃				1				2											2									3
Cg65No.1 〃																		1										1
Ch59 〃																												1
Ch62 〃				2																								
Ch65 〃																			3									1
Ci62 〃																		3										1
Da62 〃				1														1						1				
Da65 〃																		1	5									2
Db62 〃																		7	3									
Cc65溝状土壙																												3
Cd65 〃	1			3															1									
Cj68 〃																		1	4									1
Ce62焼土遺構	1	1		13			1			3									1									5
Ce68 〃																			8									
Ch62 〃	1			1																								
Ae56土壙													1															
A区表土				34				2									5	8	44	7								21
B区 〃				9						3						1	2		21						4		1	1
C区 〃	2	6		16			7			3					1			4	13			1	3	1	1			25
D区 〃	1			1						1								4	4									3
表土	1		2	40	3		3	3		4				4			3		27									16

部外面に火襷の痕がある。採集地点不明の3点は、共に還元炎焼成で、体部破片2点、体下底部破片1点である。みなろくろなで成形。底部破片の下面は磨滅著しく切り離し痕は明確でない。

土錘（23図35　図版13—35）長さ4.2cm、最大径1.5cm、孔径0.4cm。Ｃａ区表土出土。

V　まとめ

当調査地区から発見された遺構と遺物は、住居跡3棟、フラスコまたはビーカー形のピット33基。陥し穴状遺構といわれる溝状の土壙11基。土壙3基。焼土遺構8基。及び、縄文土器193点。旧石器と考えられるものを含む石器148点＋α。弥生式土器と思われるもの7点。土師器甕483点。土師器内黒坏55点。須恵器壺58点。須恵器坏37点。土師質の高坏1点。紡錘車1点。刀子2点である。

旧石器との教示をうけた石器は、舟底形、或は舟形石器や、剝片石器中のいずれかと思われる。剝片石器には縄文早期のものと思われるものが、かなり含まれており、その区別は明確になし得ない。掻器や彫器、削器といわれているものと思われる。

縄文時代の遺構は、ピットと溝状土壙の大部分と、焼土遺構の1部と思われる。ピットの中で、Bj 62, Ca 65, Cb 62等は、包蔵された遺物が古代のものが多く、古代の住居跡の存在した頃に造られて使用されたか、縄文時代につくられたものを再利用したかと思われる。

フラスコ形、或はビーカー形のピットは、底面の状態が、中央に小ピットのあるもの、周溝のあるもの。中央から周縁に溝が造られているもの。周縁に小ピットのあるもの。平坦であるものが認められる。また、2つのピットが重複しているものが、2ヶ所にみられ、Cg 56については、底面や堆積土に明確な新旧関係を示すものはなく、Da 65とDb 65については、底面のレベルと堆積土に若干の相違があり、Da 65が新しいのではないかと思われる。

溝状土壙は、遺物の包含層が上部で、年代決定資料にはならないが、他遺跡の例により、縄文時代ではないかと判断した。長軸方向が、等高線と平行するのが、Af 65, Bb 68, Cg 62, Cg 65の各遺構。ほゞ直行するのがAj 62, Cc 65, Cd 65, Ce 68, Cg 68, Ch 68, Ci 68の各遺構である。Ci 68については、溝状ではあるが、平面形や断面形、短軸の長さ等が他の溝状土壙と異なっており、性格が違うのではないかと思われるが、東半分が路線外で全体の形状が不明のため、この項目に入れた。

焼土遺構では、焼土層の中に縄文土器のみを包含しているCe 68が、縄文時代と判断した。路線境でCe 68溝状土壙の北壁を切っているようにみえるが、明確でない。出土した縄文土器片中2点（22図13・16　図版13—13・16）は、中期と思われる。

縄文時代の遺物は、早期（22図1～7・10　図版12—1～7・10）と思われる土器片が8点

と、明確でないがそれらしいもの若干が出土している。早期末か前期と思われる繊維を含んだ体部土器片（22図11・12　図版12—11・12）が36点出土している。中期（22図13～16　図版13—13～16）と思われる土器は、Ce 62, Ce 68の2焼土遺構とCc 65住居跡から出土している。Cc 65住居跡の貯蔵穴状ピットは、Cd 65溝状土壙を切って造られており、そこから出土（22図15　図版13—15）している。晩期（22図17　図版13—17）と思われる破片は1点で、A区表土から出土した。

弥生時代と思われる遺構は確認されず、遺物のみが、A区表土から7点（22図18—24　図版18—24）出土している。いずれも石英粒を主とする砂粒をかなり含んだ破片で、口縁部1点、体部4点、体下底部1点、台部1点である。

古代と思われる遺構は、住居跡3棟と、1部のピット・焼土遺構・土壙である。

Ah 59住居跡は、北壁中央にかまどが設けられ、球胴の甕や、ろくろ使用前の丸底の内黒坏、高坏の底・台部が出土している。

Bb 59住居跡は、東壁中央にかまどが設けられ、頸部有段の長胴・球胴の甕も出土しているが、須恵器の壺、坏が出土し、坏は酸化炎焼成で回転篦切りである。

Cc 65住居跡は、南東壁中央にかまどが設けられ、球胴の甕や、外壁有段で丸底のろくろ使用前の内黒坏が出土している。

以上の事から、Ah 59, Cc 65の各住居跡は、ろくろ使用前の住居跡、Bb 59住居跡は、ろくろ使用期の住居跡と思われ、前者の2住居跡出土の内黒坏は、国分寺下層期の内黒坏に類似する点があり8世紀前後と思われる。後者の住居跡出土の須恵器坏は、底部と体部との境がはっきりせず丸味をもっており、調整が行なわれていない点やはり8世紀前後と思われるが、前者より後者の方が、若干時代が新しくなるのではないかと思われる。

古代と思われる1部のピットは、Bj 62, Ca 65, Cb 62の各ピット等で、3者は他のピットより浅く、Bj 62ピットは中央に小ピットがあり、縄文期のピットに類似するが、3者共に古代の遺物を堆積土下層に包含している。遺物は、Bj 62ピット出土のものが、外面にも刷毛目痕のある長胴有段の甕や、体部外面や底部下面に手持ち篦削り調整のある内黒坏（23図31　図版13—31）、体底境が丸味のある還元炎焼成の須恵器坏等がある。Ca 65ピットのものは小破片で、遺物一覧表の通り甕の破片43点、内黒坏1点、須恵器坏2点である。Cb 62ピットのものは、長胴有段の甕（23図25　図版13—25）。球胴有段の甕（23図26　図版13—26）。内黒坏（23図28　図版13—28）は、体部外面や底部下面が篦削りで、他に丸底風のものや、底部下面に刷毛目痕のあるものがみられる。また、土製の紡錘車破片（23図33　図版13—33）が出土している。

古代と思われる焼土遺構は、Ce 62とCh 62の2焼土遺構である。Ce 62焼土遺構は、Cc 65住居跡の南西側にあり、長胴甕15点や、球胴甕（23図27　図版13—27）1点。内黒坏3点が出土

している。Ch 62焼土遺構からは、長胴甕2点が出土している。

古代と思われる土壙は、Ae 56土壙が長方形で、浅い。東壁下南寄り底面近くから刀子(23図32 図版13—34) は、平造り平棟で、古代刀の特色がみられる。

溝№1と№2は、最近造られた様な状態で、堆積土はほとんどなかった。

年代不明の遺構は、焼土遺構5基と、土壙2基である。焼土遺構は、Af 53、Af 56、Af 59、Af 62、Af 65で、いずれの焼土も、締りの状態、粘性、色調が類似し、同地区に集中している。Af 53焼土は溝№1に切られているが、年代決定の資料にはならない。

土壙2基は、Cc 62とDb 65で、ほゞ同じ様な規模である。Cc 62土壙は、Cc 62ピットの東端部を切っているが、年代決定資料にはならず、遺物も出土しなかった。

小ピット Ad 59ピット底面、Af 59焼土遺構からAh62ピットにかけて、Bb 59住居跡の西隣り、Da 62ピットからDc 62ピットとDb 65土壙にかけて存在する小ピットで、壁面がかなり屈曲するものや、下部側面で連絡するもの等があり、木根跡と思われる。

参 考 文 献

「日本の旧石器」(4)ほか 『考古学ジャーナル』5月号ほか芹沢長介 1967

「図録 石器の基礎知識」I 加藤晋平・鶴丸俊明 柏書房 1980

「大平山元II遺跡発掘調査報告書」 青森県立郷土館 昭和55

「大台野遺跡」 湯田町教育委員会 昭和50

「岩手県蛇王洞洞穴」『石器時代』第7号 芹沢長介・林謙作 昭和40

「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」『物質文化』27 今村啓爾 1976

「都南村湯沢遺跡」 (財)岩手県埋蔵文化財センター 昭和53

「弥生土器」 日本の美術125 佐原 真 至文堂 昭和51

「須恵器」 日本の美術170 八賀 晋 至文堂 昭和55

「刀剣のみかた」〈技術と流派〉 広井雄一 第一法規 昭和46

「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 氏家和典

「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要』I 岡田・桑原 宮城県多賀城跡調査研究所 1974

「胆沢城跡」昭和51年度発掘調査概報 水沢教育委員会 1977

「北奥古代文化」第4号 特集奥羽土師文化論 北奥古代文化研究会 昭和47

付記 旧石器について、小林達雄氏・林謙作氏・菊池強一氏からご教示を賜わった。

写　真　図　版

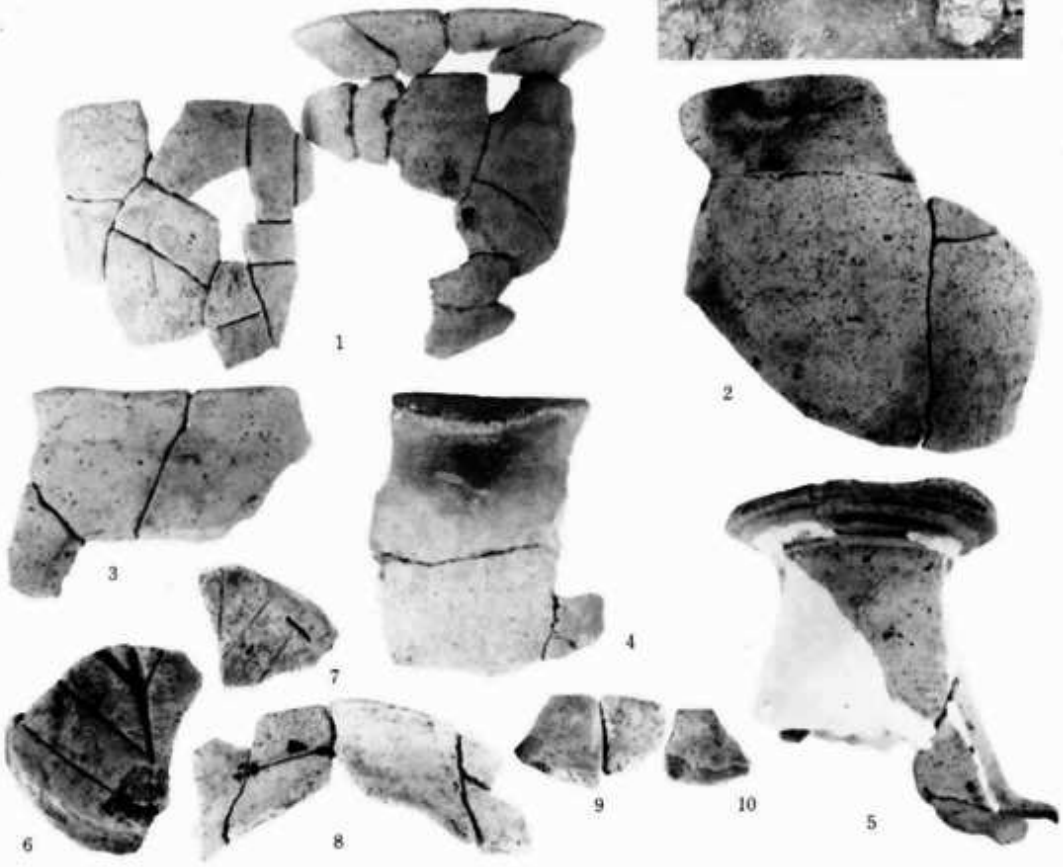
写真図版目次（藤沢）

Ah 59 住居跡・同出土遺跡……図版 1
Bb 59 住居跡・同出土遺物……図版 2
Cc 65 住居跡・同出土遺物……図版 3
ピット I ……図版 4
ピット II ……図版 5
ピット III・構状土壙……図版 6
溝状土壙 II・土壙・焼土遺構……図版 7
石器 I ……図版 8
石器 II ……図版 9
石器 III ……図版10
石器 IV ……図版11
石器 V・土器 I ……図版12
土器 II・鉄器……図版13
深掘り・全景……図版14

（南から）

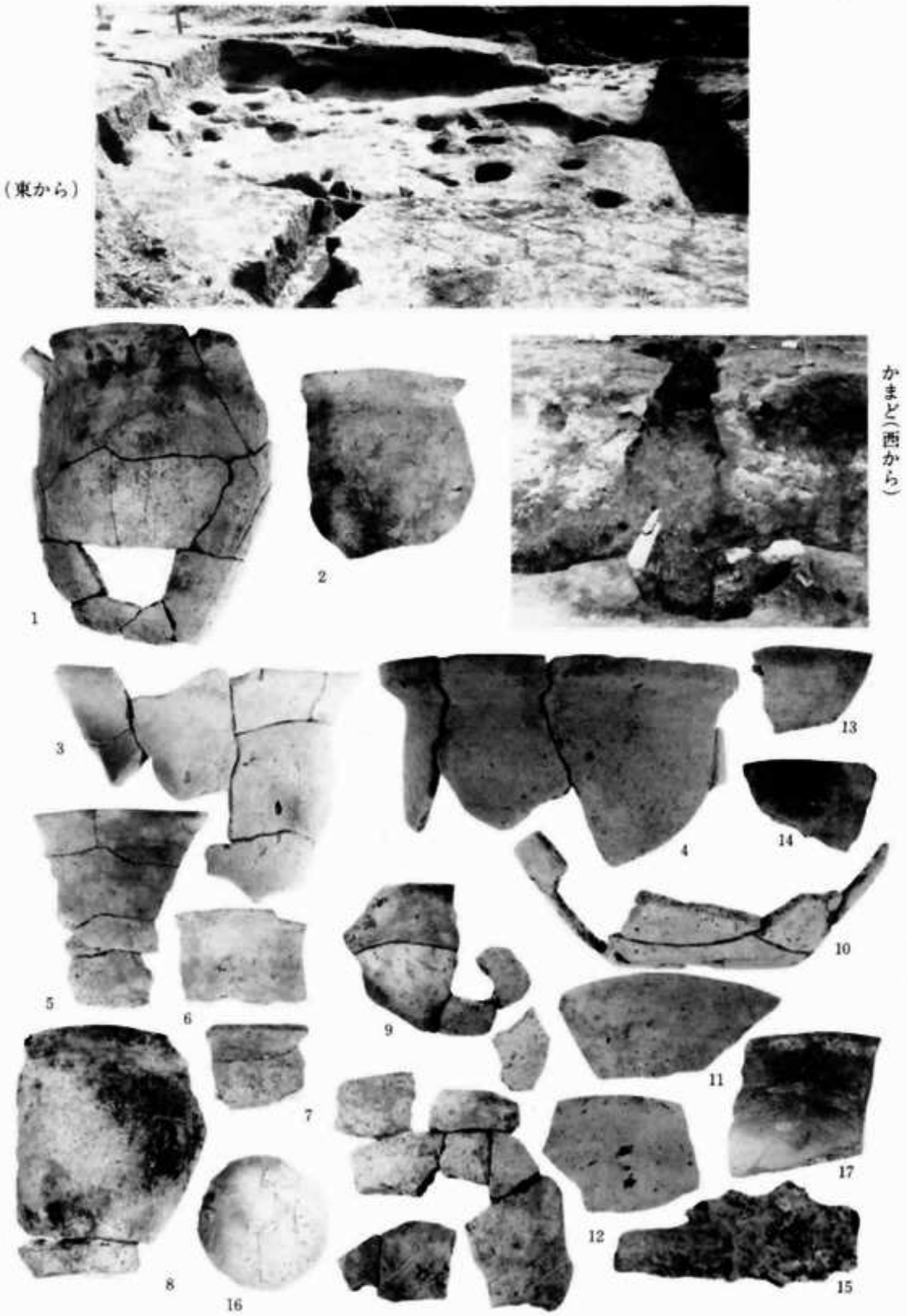
煙道煙出（右が北）

煙道煙出（上が北）



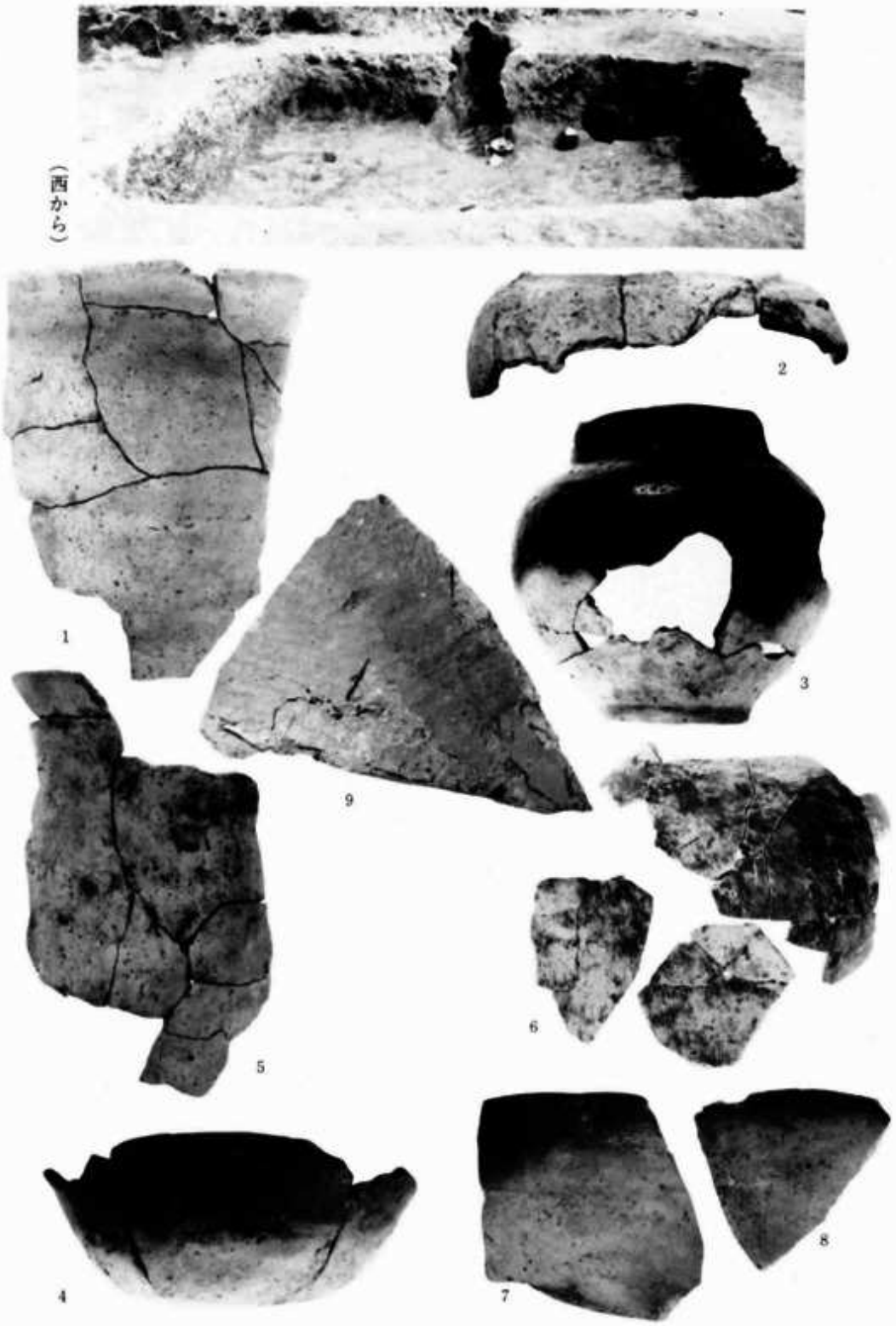
1・2：長胴甕　　5：高坏　　8～10：甕口縁部
3・4：球胴甕　　6・7：甕底下面　　6～10：甕底部ほか（実測図なし）

図版Ⅰ　Ah59住居跡・同出土遺物



1～9：甕　15：刀子　17：内黒坏破片（実測図なし）
10～14：坏　16：甕底部（実測図なし）

図版2　Bb59住居跡・同出土遺物

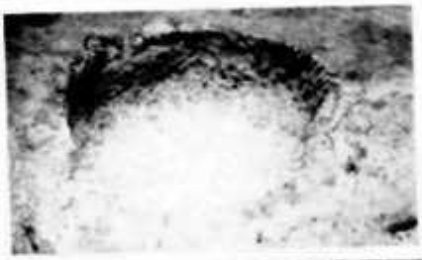


1・5：長胴甕　　4・7・8：内黒坏
2・3・6：球胴甕　　5～8：実測不能

図版3　Cc65住居跡・同出土遺物

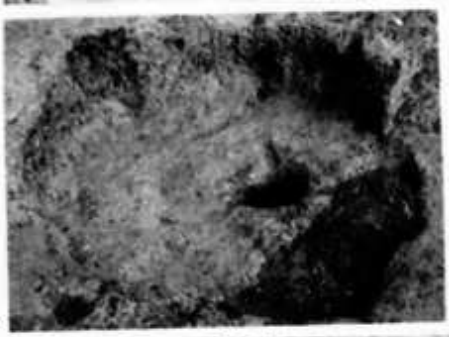
Ad56
ピット

Ad59
ピット

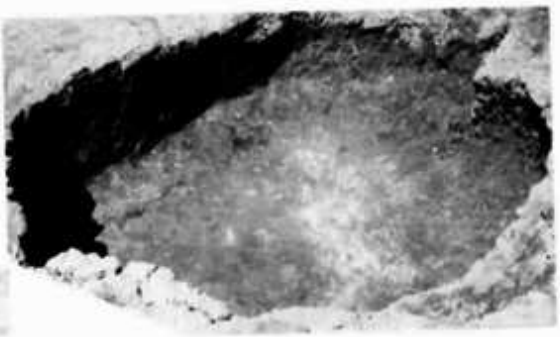


Ag56
ピット

Ai56
ピット



Bj62
ピット



Ca65
ピット

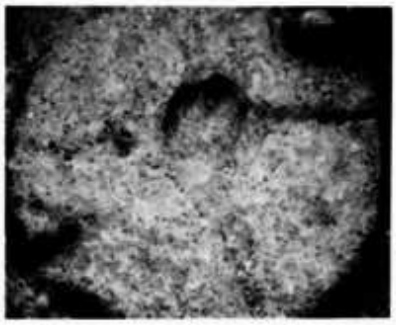
Cb62
ピット

Cb68
土壙群

Cc62
ピット
右はCc62
土壙

図版4　ピ　ッ　ト　I

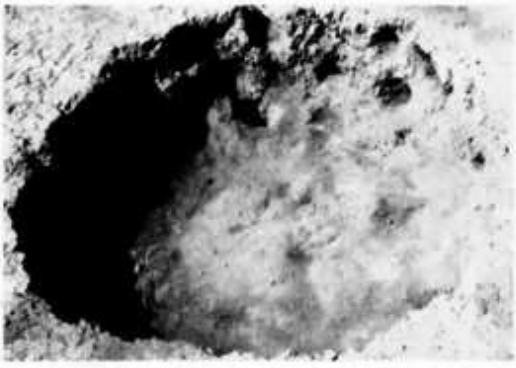
Cd59
ピット



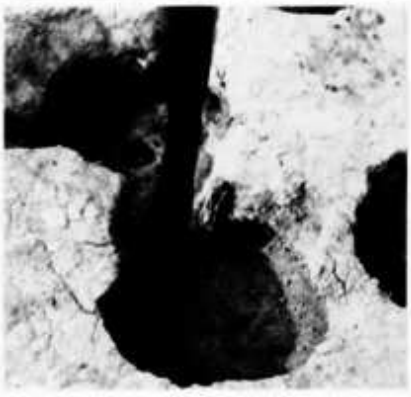
Cd59
ピット
底面

Cc59
ピット

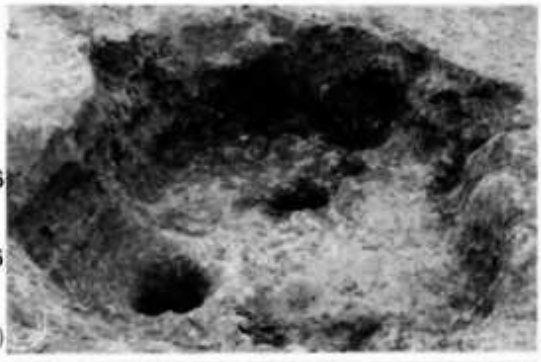
Cg62
ピット



Cg65
ピット
No. 1

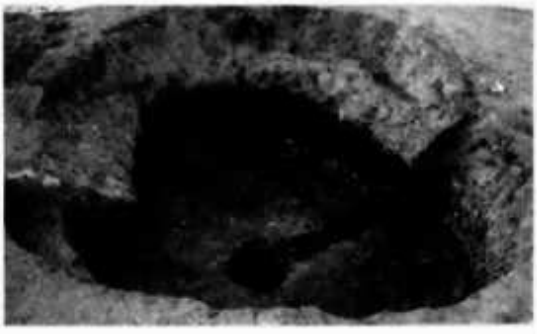


左上Cf65
ピット
中Cf65
溝状土壙
下Cg65
ピットNo. 2

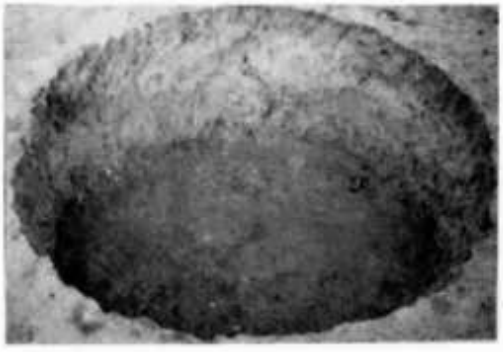


上Cg56
ピット
No. 2
下Cg56
ピット
No. 1
(北から)

Ch59
ピット

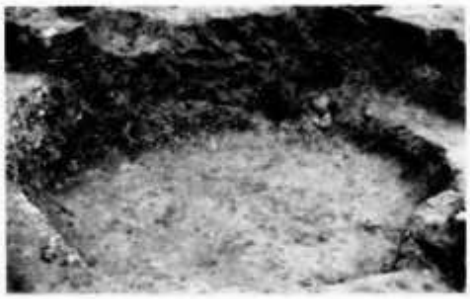


Ch62
ピット



Ci62
ピット

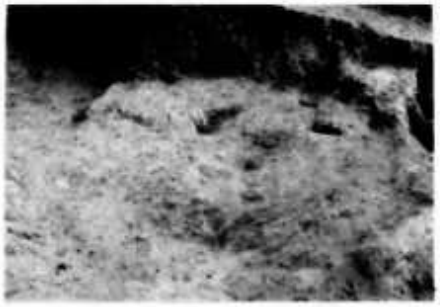
図版5　ピ　ッ　ト　II



Da62
ピット

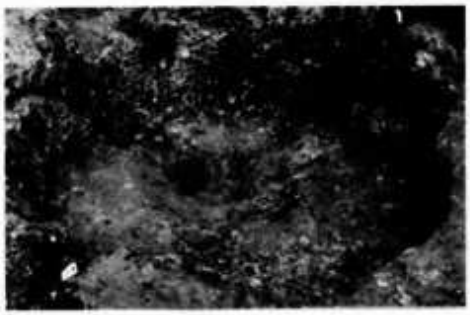
Da65
ピット

Db62
ピット

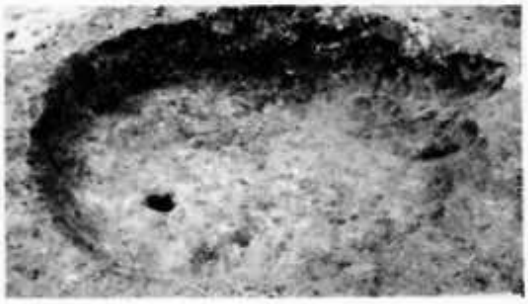


Db65
ピット

Dc62
ピット



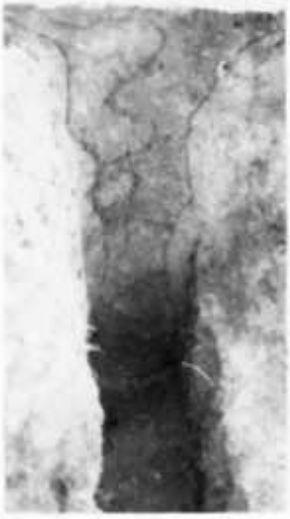
Dc65
ピット



Dd62
ピット

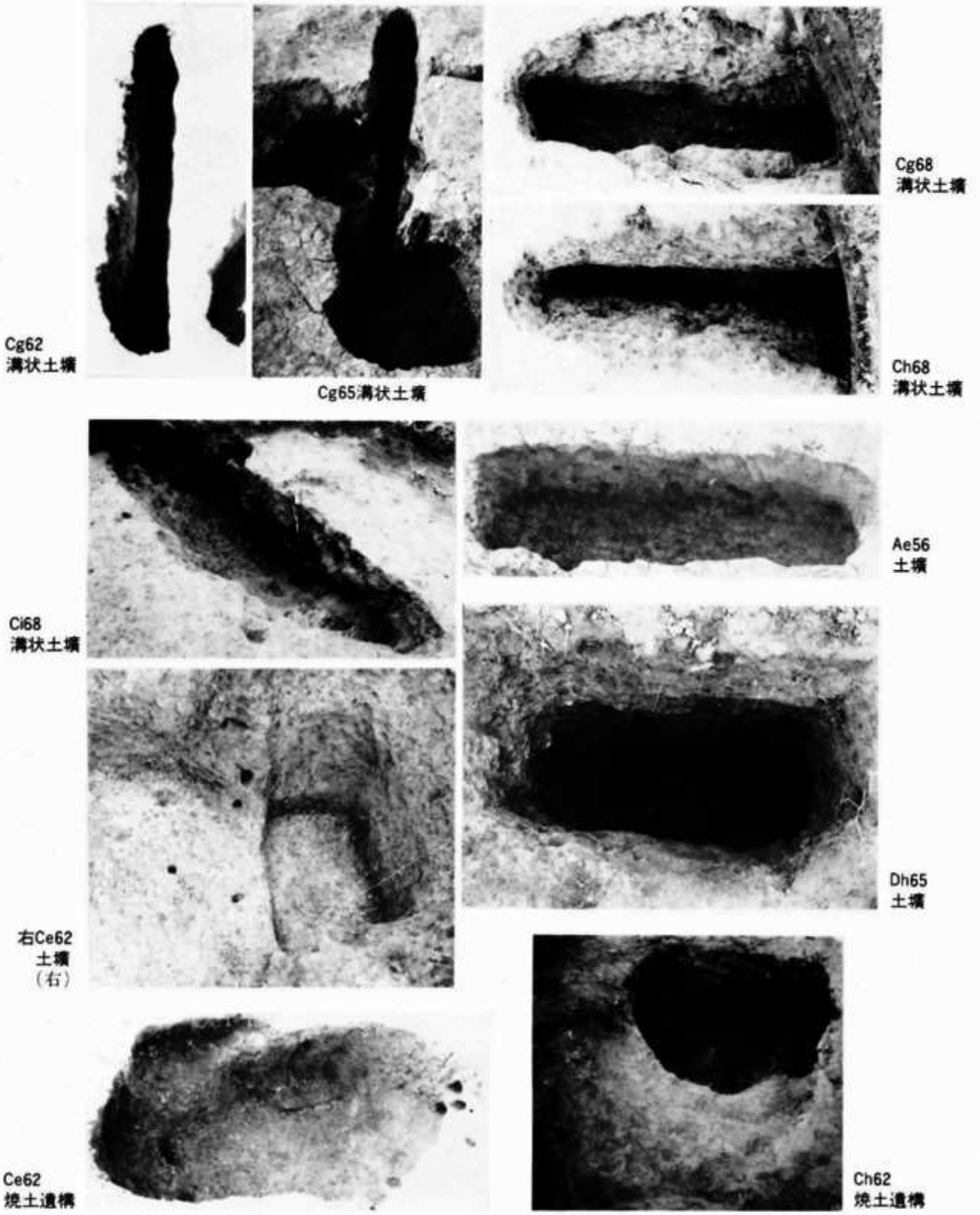
Ce68
溝状土壙

Cc65溝状土壙

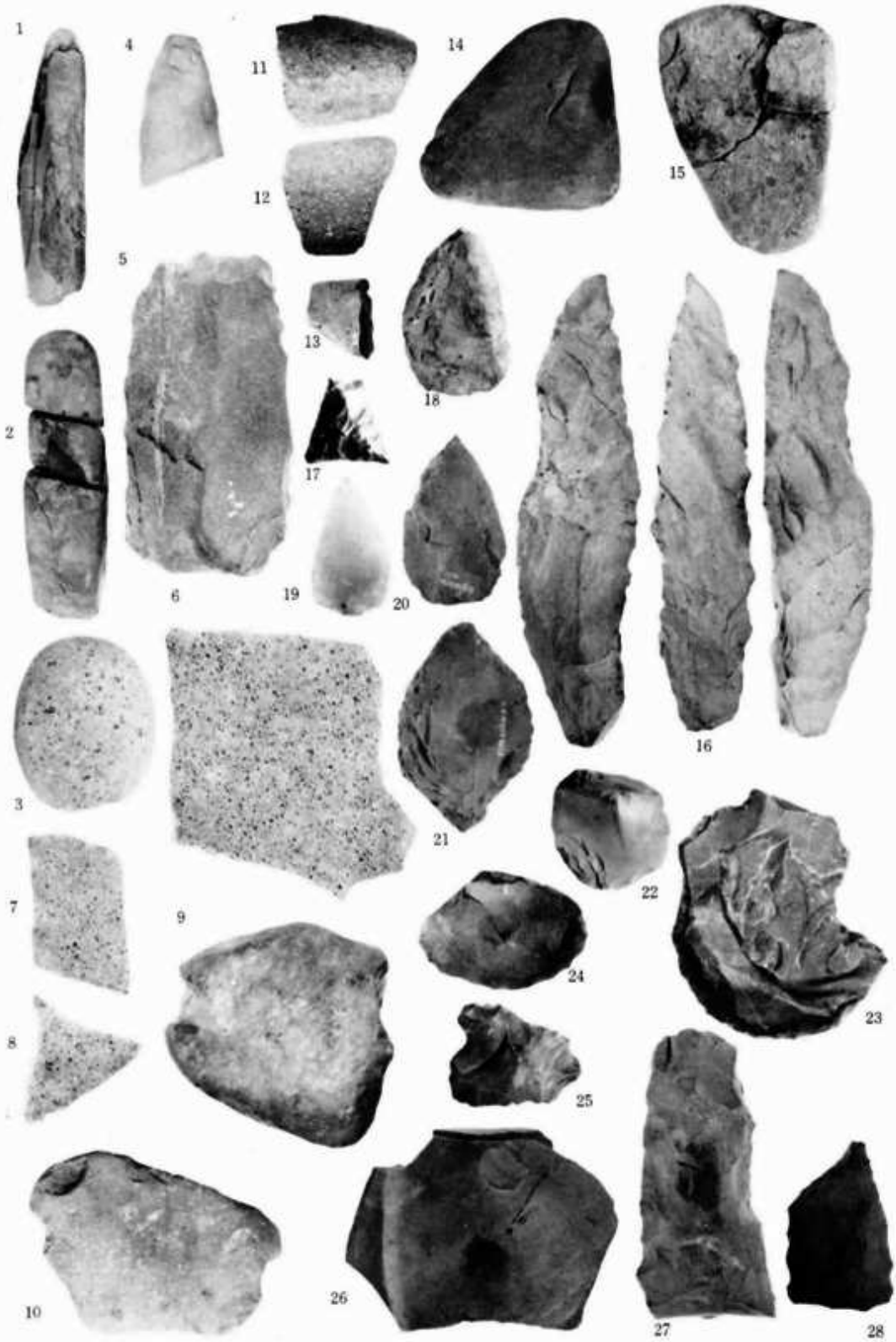


Cd65溝状土壙

図版６　ピットⅢ・溝状土壙Ⅰ



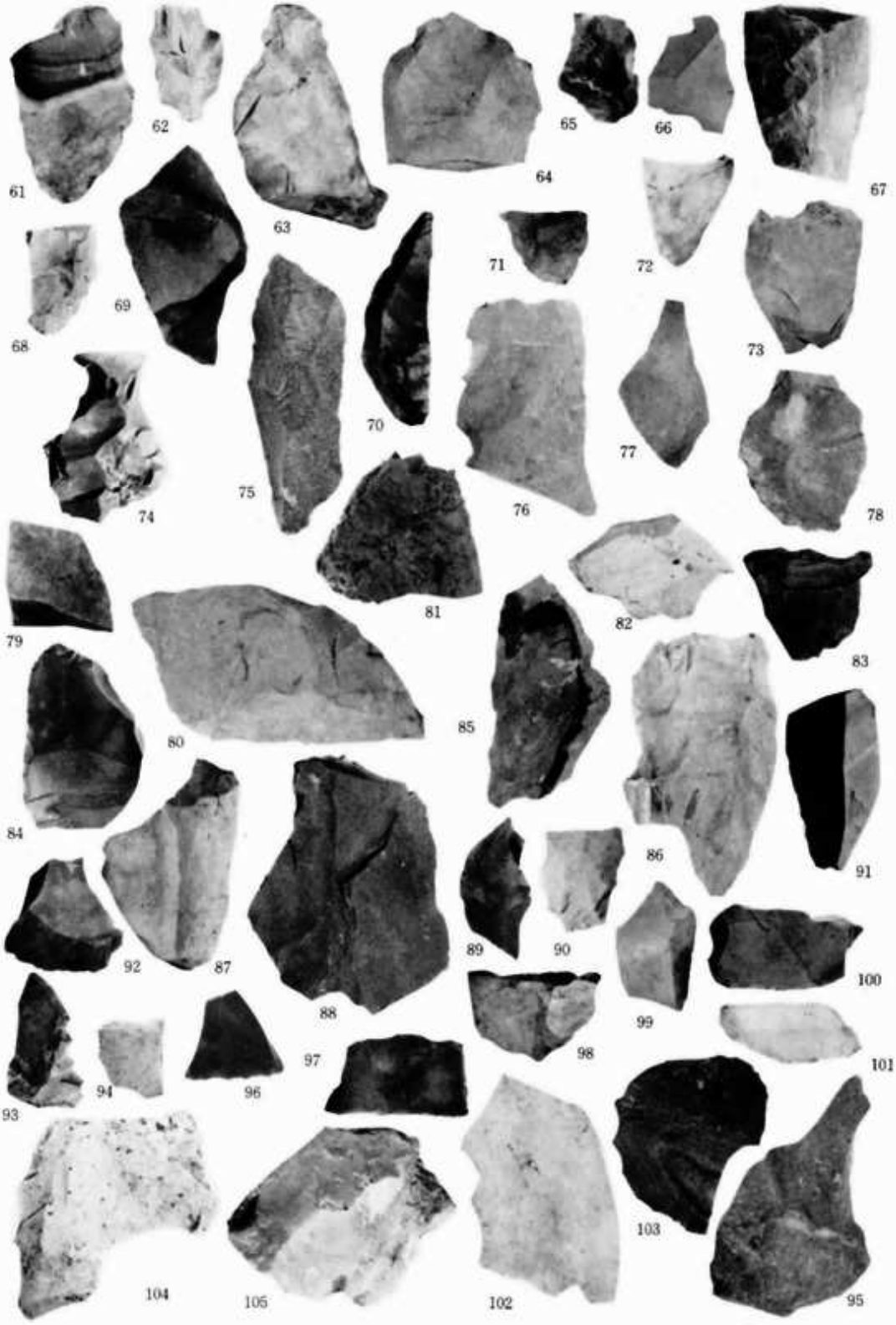
図版 7　溝状土壙Ⅱ・土壙・焼土遺構



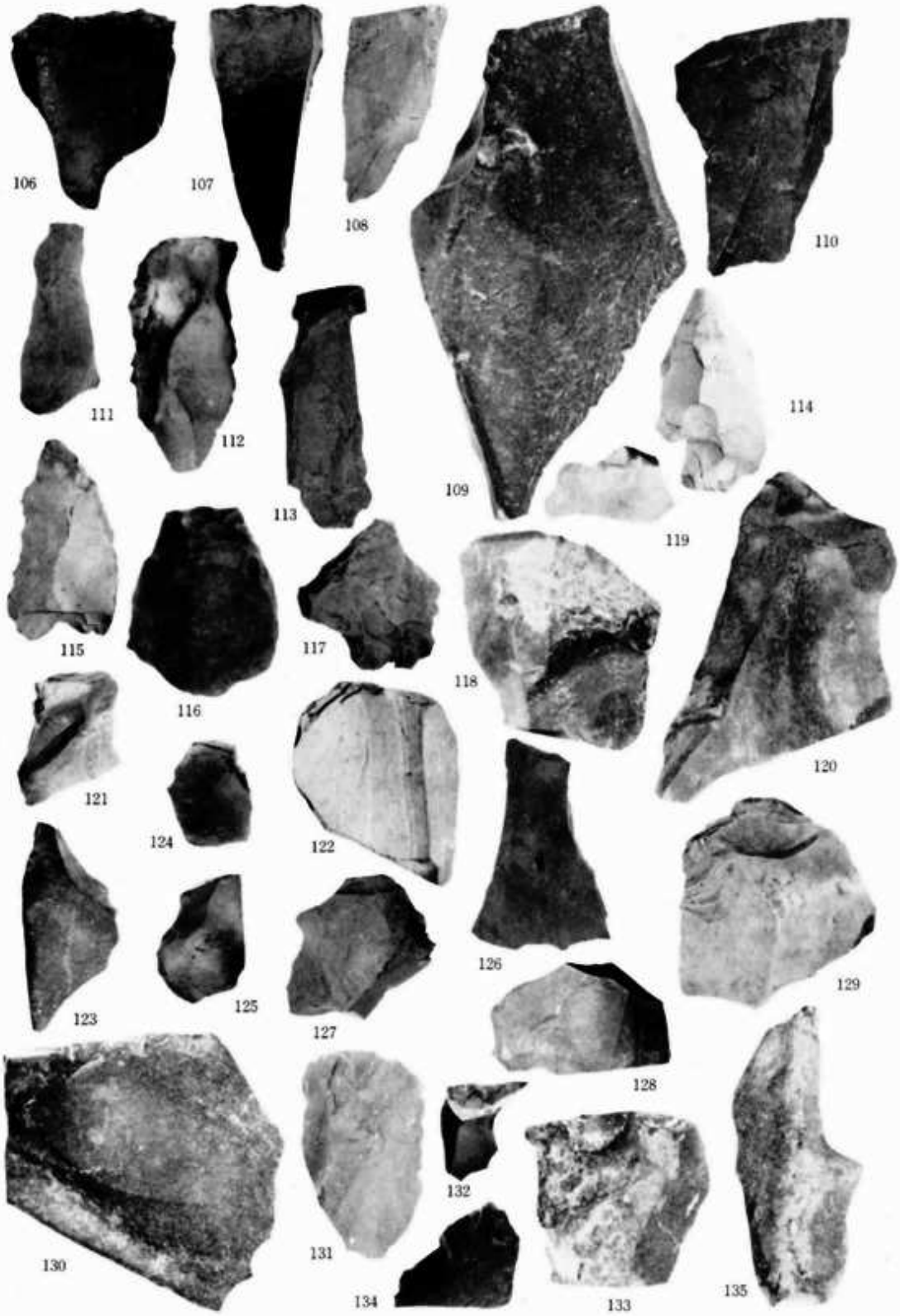
図版8　石　器　I

29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60

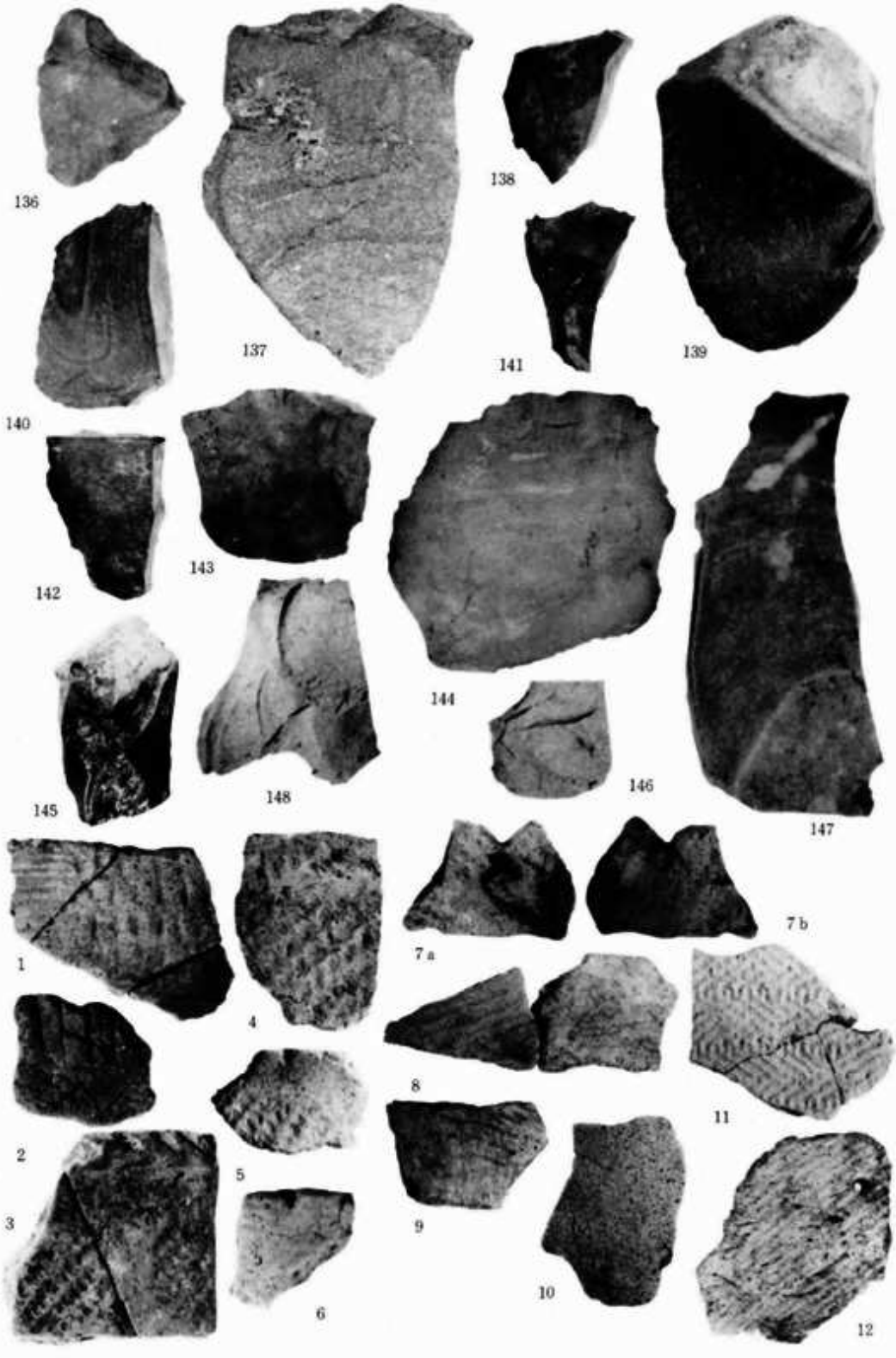
図版 9　石　器 II


61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105

図版10 石　器 III


106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135

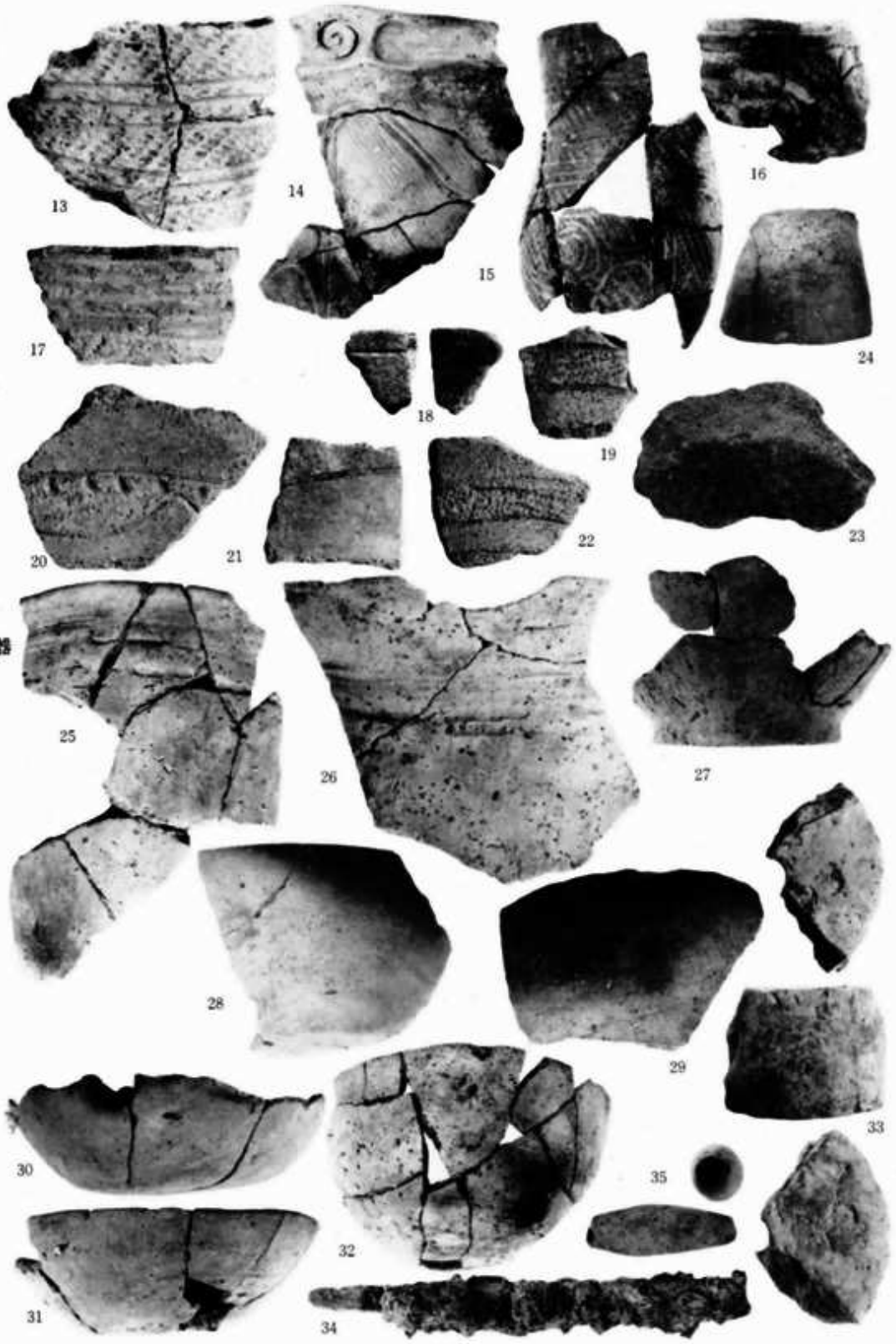
図版11 石　器 Ⅳ



1：Ad53ピット
2：A区表土
3：Cb68ピット
4：D区表土
5：Ci68溝状土壙
6：A区表土
7：Ai56ピット
8：　〃
9：B区表土
10：Ce62焼土遺構
11：Ci62ピット
12：Da62ピット

図版12　石器V・土器I

13：Ce68焼土遺構
14：Ce62焼土遺構
15：Cc65住居跡
16：Ce68焼土遺構
17：A区表土
18：A区溝No. 1
19：　〃
20：A区溝No. 2
21：　〃
22：A区溝No. 1
23：A区表土
24：　〃
25：Cb62ピット
26：　〃
27：Ce62焼土遺構
28：Cb62ピット
29：Cg62ピット
30：　〃
31：Bj62ピット
32：表　土
33：Cb62ピット
34：Ae56土壙
35：Ca区表土
13～17：縄文土器
18～24：弥生式土器
25～27：土師器甕
28～32：内黒坏
33：紡錘車
34：刀　子
35：土　錘



図版13　土器II・鉄器

深掘り

全　景（南から）

遠方鳩岡崎遺跡
全　景（北から）

図版14　深掘り・全景

下谷地A遺跡

遺　跡　名：下谷地A（略号SY73）
遺跡所在地：和賀郡江釣子村北鬼柳
　　第12地割13ほか
調査期間：昭和48年9月14日～10月8日
調査対象面積：3,500㎡
発掘調査面積：610㎡

図 表 目 次

第87図　下谷地A・B遺跡地形図……87
第88図　グリット配置図……88
第89図　土層断面図……89
第 4 図　出土遺物分布図……91
第91図　縄文土器……91
第 6 図　黒色処理の土器出土分布図……92
第 7 図　黒色処理の土器……93
第 8 図　非黒色処理の土器出土分布図……96
第 9 ～11図　非黒色処理の土器(1)～(3) ……97
第12図　須恵器出土分布図 ……104
第13～15図　須恵器(1)～(3)……105
第 1 表　出土遺物一覧表……90
第 2 表　黒色処理の土器観察表……93
第 3 表　非黒色処理の土器観察表(1)……98
第 4 表　非黒色処理の土器観察表(2)……99
第 5 表　非黒色処理の土器観察表(3) ……103
第 6 表　須恵器観察表(1) ……105
第 7 表　須恵器観察表(2) ……106
第 8 表　土器遺存率比較表 ……111

第1図　下谷地A・B遺跡地形図

I　位置と立地（第1図　図版1）

遺跡は、和賀郡江釣子村北鬼柳第12地割13ほかに所在し、国鉄北上線の江釣子駅より東北東1.1kmに位置する。

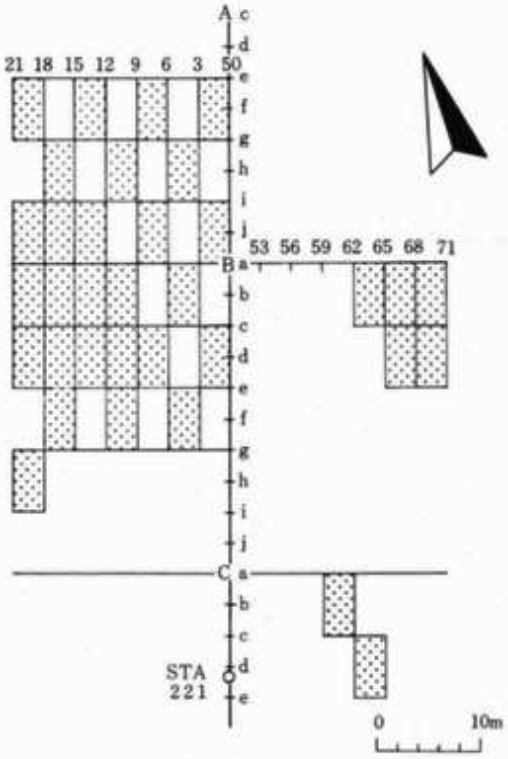
遺跡の南1.5kmには黒沢川が東流し、東へ低位となる下位段丘に立地する。現在低地の大部分は水田と化し、畑地、宅地が僅かに散見される。周辺の遺跡のうち、南は0.8kmの同一面に本宿遺跡が位置し、更に猫谷地遺跡に続いている。

調査地の現状は、畑地・宅地・水田の一部であり、標高は71.27～72.34mである。

II　調査の経過（第1・2図）

発掘調査は、畑地と隣接する水田を中心に進め、更に南の水田を対象としている。道路中心杭221＋40、222＋00の2点を基点にグリットを設定し、東西42m、南北60mに及んでいる。すべて東西3.0m、南北6.0mのグリットに基いて、人力による表土除去、遺構検出を行ない、合せて68グリットを調査する。

尚、畑地と水田を境する水路は、下谷地B遺跡として調査しており、分割して報告するものである。



第2図　グリット配置と調査区域

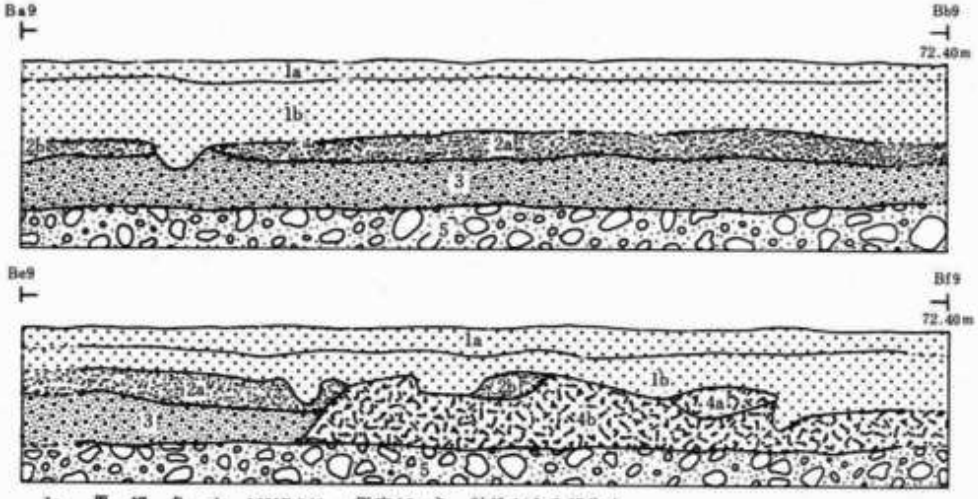
III　遺跡の層序（第2・3図）

調査区域の中央部より南へかけての層序は、以下の通りである。

第1層　黒褐色土　耕作土とシルト質土を含むa・b層に細分される。小礫・炭化物粒が点在する遺物包含層である。層厚は0.30～0.50mである。

第2層　にぶい黄褐色土、または暗褐色土シルト質で砂礫が混在する。南進して不明となり、黄褐色土層にのる。色調によってa・b層に識別される。層厚は0.10～0.20m。

第3層　明褐色土　シルト質土で礫が混入する。南側ほどやゝにぶい黄褐色土となる。層厚は0.25～0.45mである。



1a	黒褐色土	10YR2/2	指痕がつき、粘性がある耕作土
1b	黒褐色土	10YR1/3	指痕がつき、粘性になる　シルトが混在し、小礫・炭化物粒を含む
2a	にぶい黄褐色土	10YR3/3	指痕がつき、粘状になる　シルト・砂礫が混在する
2b	暗褐色土	10YR3/4	2a層に同様である
3	明褐色土	10YR6/6	指痕がつき、粘状になる　シルト質粘土に礫が混じる
4a	黄褐色土	10YR5/8	締り、粘性が弱い　黄褐色砂に礫が混在する
4b	にぶい黄褐色土	10YR4/3	微量の粘土を含み、やゝ砂礫が多い
5	砂礫		

第3図　土層断面図

第4層　黄褐色土、またはにぶい黄褐色土　黄褐色砂質土に礫が混じるa層、粘土を含み、砂礫の多いb層に2分される。共に南側に形成され、礫層を被っている。層厚は最大0.48mである。

第5層　砂礫　殆ど同一面をなして形成される。現地表面下0.85〜0.95mを計り、南に若干浅い。

遺物は第1層に包含され、特に1b層に多量に出土する。遺構の検出面は1b層、または第2層上面とみられ、第2層のにぶい黄褐色土、更に第3層の明褐色土を切る黒褐色土が部分的に認められるが、明確に遺構として確認されているものはない。

Ⅳ　調査の結果（第4図　第1表）

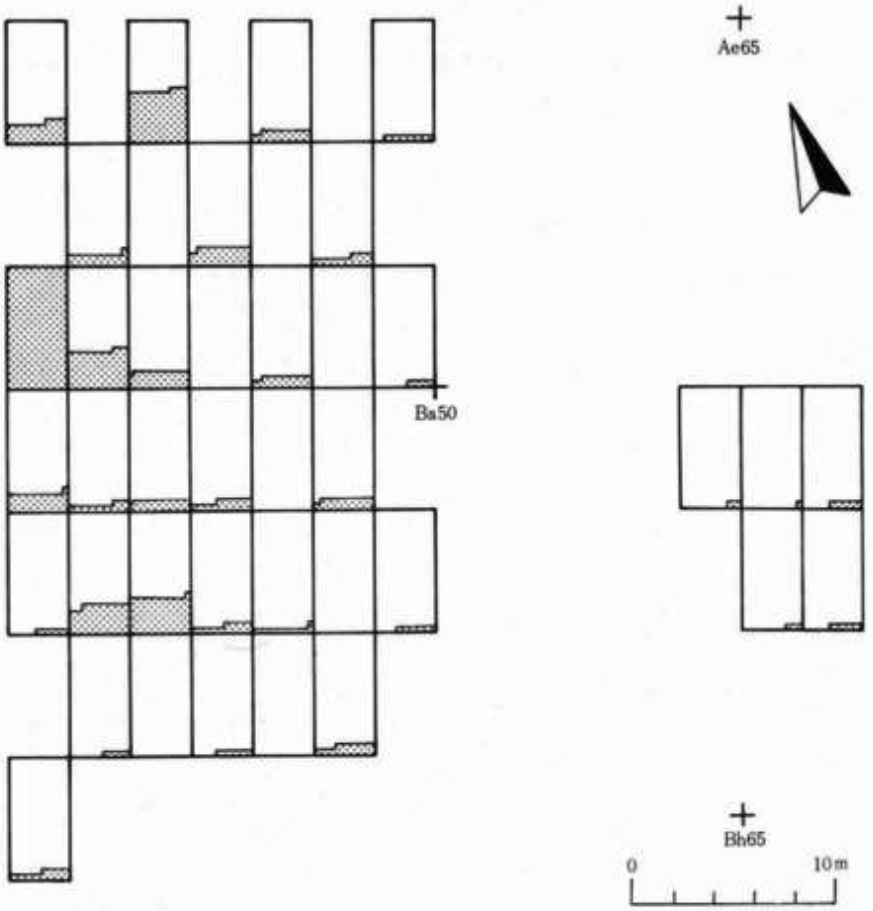
水路以北の調査区域全域に多量の遺物が出土する。しかし、明確な遺構として検出されるものは皆無である。また、南端の水田では遺構・遺物共に認められない。

出土遺物は縄文土器26点、石器1点、土師器7,616点、須恵器602点、陶器4点、石製品2点の合せて8,251点に及ぶ。その殆どは小破片となるものであり、比較的中央部より西方に偏在し、南・東に希薄となる。特にAij 21グリットには2,027点が集中し、遺物総数の24.6%に及んでいる。

遺物の出土分布に次表の通りである。

第1表 出土遺物一覧表

遺物／グリット	縄文土器	石器	土師器																須恵器							陶器		石製品	計	出土比
			黒色処理							非黒色処理																				
	鉢	フレーク	坏			台付坏		鉢・壺		坏			台付坏		甕		鉢		坏			蓋	甕・壺			甕	鉢	硯		
	体		口縁	体	底	底	台	体	底	口縁	体	底	底	台	口縁	体	底	口縁	体	底		口縁	体	底	口縁	体				
Aef21	4		5	30	8					30	85	12		1	17	78	8	8	5	7		2	38	1					337	%
Aef15	10		14	57	30	5		1		67	174	43	9	11	30	216	12	21	21	25	1	4	70		1				822	17.44
Aef 9			3	5	11	1		1		15	28	19			3	66	2	6	9	8	1	1	8					1	188	
Aef 3			2	1	3		1	1		3	3	5	1	1	3	34	8	6	2	5	1		12						92	
Agh18			5	6	3					44	45	21	12	5	9	29	9	8	1	2			10	1					210	
Agh12	1		5	5	8					52	99	33	2	5	6	48	8		3	5		1	4	2	1				288	7.68
Agh 6			1	4	4			1		20	42	18	1		2	20	4	3	1	1			13				1		136	
			67	43	37	4				714	528	248	54	50	34	171	11	6	5	5		3	45	2					2027	
Aij18			6	18	3	2				128	226	99	12	13	12	72	8	3	2	2		1	19						626	
Aij15			3	2	8	1				53	95	43	10	4	5	42		4	4	3		1	15	2					295	38.41
Aij 9			1	3	3					45	56	24	9	1	2	21	8	1	1	1			9						180	
Aij 3			1	3						6	14	7	4		2	4													41	
Bab21	1		8	8	5	2				120	47	48	12	5	9	28	6						8						307	
Bab18		1	1	1		1				19	40	25	6	2	3	10	1						14						124	
Bab15	1		1	4	1	1				35	69	26	10	7	3	25	2	1		1		1	9	1					198	11.79
Bab12			1	1	2	1				39	35	22	5	2	6	27	3		1				10						155	
Bab 6			2	8	6	1		2		29	45	40	8	4	3	30	4					1	5				1		189	
Bab62	2									1	2	3				8							4						20	
Bab65					1					1		1	1	1	1							2		1					9	0.99
Bab68				1	1					3	9	13			1	13	2		1			1	7	1					53	
Bcd21					1					12	20	4	4	3	1	5	1						5	2					58	
Bcd18	3		13	14	8	2				128	190	49	9	15	2	27	2			1			14	1					478	
Bcd15			7	12	9					181	226	54	22	29	11	33	9						11						604	17.73
Bcd12				2		1				32	54	21	6	4	2	16							11						149	
Bcd 9	1		1	1						24	30	18	5	1	6	12	3						5						107	
Bcd 3				1	3					7	14	12	7	5		13	3						2						67	
Bcd65										3	6		1			7							6						23	0.91
Bcd68				1	1					8	14	12			4	6	1	2	1				1					1	52	
Bef13					1					10	7	12		1	1	8							3						43	
Bef12			1	3						11	21	8	5			6	2						3						60	3.23
Bef 6			1	8					1	39	41	37	8	6	3	14	2			1		2	4						107	
Bgh21	3				1					49	41	29	6		3	5	1					1	6						146	1.77
計	26	1	149	242	158	22	1	6	1	1,928	2,306	1,006	229	177	182	1,094	115	69	57	67	3	21	371	14	2	2	2	8,251	100.0
			549			23		7		5240			406		1,391			193				406			4				
出土比	% 0.32	0.01	6.65			0.28		0.08		63.51			4.92		16.86			2.34			0.04	4.92			0.05		0.02	100.0	

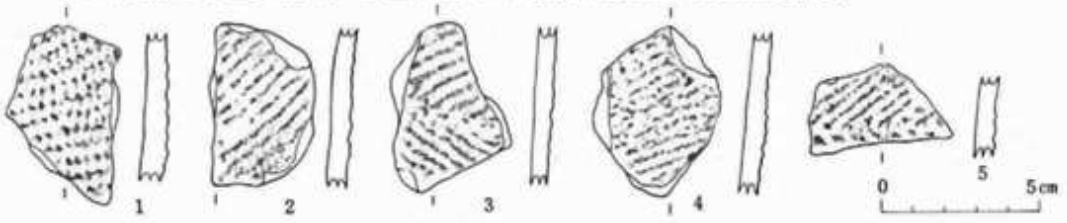


第4図　出土遺物分布図

V　出土遺物（第5～15図　第1～7表　図版2～7）

1　縄文土器（第5図　第1表　図版2）

26点の小破片である。調査区域の北東にもっとも多く分布するほか、比較的西方に散布し、中央部及び西方では僅か3点である。若干摩耗するものが含まれるが、21点は異原体による結節羽状縄文を施す深鉢型の体部片とみられる。焼成は固く、褐色、または灰褐色を呈し、黒褐色の1点が含まれる。また、撚糸文を有し、内面にミガキを施される赤褐色をなす1点がある。いずれも繊維を多量に含み、砂粒が目立つ。器厚は0.50～0.95cmを計る。



第5図　縄文土器

2　石器（第1表）

調査区域の西方に出土するフレーク1点である。長さ5.8cm、幅2.9cm、厚さ0.6cmの不定形をなす。石材は硬質頁岩である。

3　土師器（第6～11図　第1・2表　図版2～5）

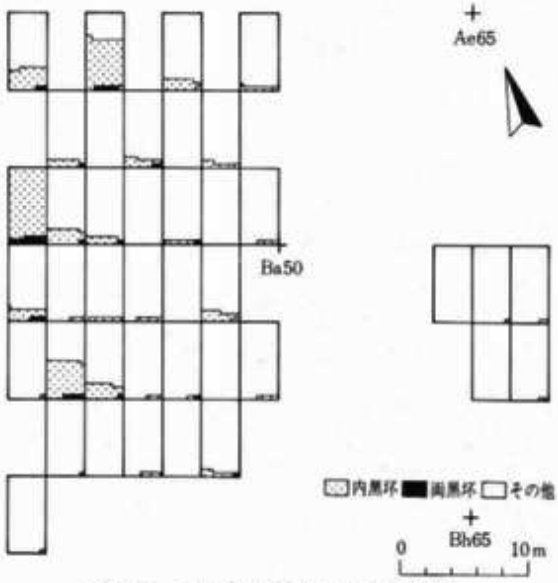
非黒色、または黒色処理をうける酸化炎焼成の土師器は、合せて7,617点である。その大部分は小破片であり、完形の土器1点を含めて器形の全体が推定可能なものは僅か19点である。推定される器種には坏のほか、高台付坏・甕・鉢・壺等が含まれる。その比率は非黒色処理の坏がもつとも多く、高台付坏を含めて5,645点で土師器全体の74.1%である。次いで甕・鉢が18.3%、黒色処理の坏・高台付坏が7.5%となり、黒色処理の壺・鉢が若干である。黒色処理の有無によっては、非黒色処理の土師器が92.4%を占めて圧倒的に多い。

分布は調査区域の南端を除いてほゞ全域に渡り、特に北西に密である。特に Aef15、Aij21 グリットに集中する傾向が認められる。

(1)黒色処理の土師器（第6・7図　第1・2表　図版2）

黒色処理の施される土師器は579点であり、全体の7.0%である。非黒色処理のものを含む土師器中では7.6%を占める。内面を黒色処理する549点には坏・高台付坏のほか、鉢とみられる体部・底部片7点がある。また、内外面共に黒色処理される35点には坏・高台付坏があり、外面の黒色処理する破片には鉢とみられる2点が含まれる。部位別によっては坏・高台付坏の口縁部及び底部片が57.6%を占め、非黒色処理のそれに殆ど近似する比率を占めている。

出土破片数による分布は、調査区域の南・東に少なく、北西に比較的密であるが、特に Aij21、Aef15 の4グリットに集中し、非黒色処理の甕の分布にほゞ共通している。部位別ではもっとも集中する Aij21 グリットで、口縁部及び底部片に比して体部片が少なく、全体28.5%となるほかは著しい相違は認められない。

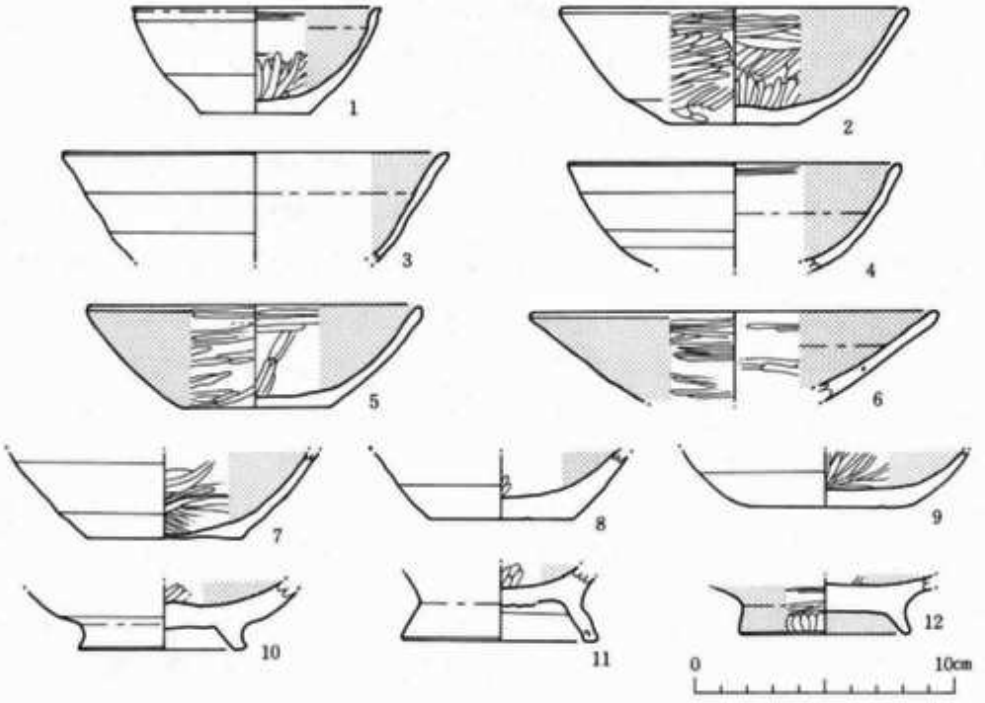


第6図　黒色処理の土器出土分布図

坏（第6・7図　第1・2表　図版2）

内面に黒色処理を施す坏は、高台付坏を含めて549点である。内外面黒色処理の坏は同様に32点であり、その比率は5.5%で著しく少ない。共に完形品は含まれず、全体の明らかなものはない。

内面黒色処理の坏は、高台付坏と識別で



第7図　黒色処理の土器　第2表　同観察表

実測図No	登録No	出土地点・層位	器種	残存率 口縁	残存率 底部	口径	底高台径	器高	径高指数	外傾指数	器面調整 内面	器面調整 外面	切り離し調整	外面色調	備考
1	15	Aij21 Ⅲ	坏	ゆがみ3	ゆがみ1	(9.6)cm	4.2cm	4.1cm	(42.7)	30.5	ロクロナデ ヘラミガキ 放射	ロクロナデ	糸切り	灰黄褐色	内面に炭化物付着
2	31	〃	〃	2	1	13.3	5.0	4.5	33.8	42.2	ヘラミガキ 横放	ヘラミガキ 横	ヘラケズリ	にぶい橙	黒色処理内面消失
3	5	〃	〃	9		(14.9)					〃 横	ロクロナデ		浅黄橙	
4	4	〃	〃	7		(12.9)					〃 横放	〃		にぶい橙	
5	16	〃	〃	7	3	(13.0)	(5.6)	3.9	(30.0)	48.7	〃 〃	ヘラミガキ 横	ヘラケズリ	黒	内外面黒色処理
6	2	〃	〃	3		(15.8)					〃 〃	〃		〃	〃
7	1	〃	〃		2		6.0				〃 斜	ロクロナデ	糸切り	にぶい橙	
8	2	〃	〃		2		5.5				〃 横放	〃	〃	灰白	
9	1	Bab27 Ⅱ	〃		2		5.6				〃 〃	〃	〃	にぶい黄橙	
10	1	Aef3 Ⅲ	高台付坏		2		6.5				〃 放	〃	〃	にぶい橙	
11	1	Bab15 Ⅲ	〃		1		7.5				〃 〃	〃	菊花状	浅黄橙	
12	1	Aij21 Ⅱ	〃		2		6.6				〃 〃	ヘラミガキ 縦	糸切り	黒	高台内に細線1条が走る。

（　）は推定値

きないものを含めて口縁部149点、体部242点、底部146点の破片である。口縁部より底部まで遺存するものは僅か2点である。

口縁部は3分の1以上の破片が3点であり、10分の1未満の細片は89.0%で大部分を占める。いずれもロクロ成形によるものとみられ、外面に凹凸の目立つものとやゝ滑らかなものがある。内面は篦磨き痕の判明する91点のうち、横方向のミガキ痕は72点に及ぶ。体部に続く破片では横・斜方向、横方向・放射状を呈し、摩耗して不明なものが多い。胎土はにぶい黄橙色のほか赤褐色7点、暗褐色9点等があり、大部分は均質な細粒である。粗粒を比較的多く含むものはにぶい黄橙色を呈する3点である。そのほか、内面に付着物を有する1点、打ち欠いたとみら

れる破片2点、二次加熱をうけているものが3点まで識別される。推定口経は9.6〜19.2cmであり、もっとも集中する14.0〜15.8cmの48点における平均は14.3cmである。口縁部の器壁は0.20〜0.55cmを計り、その86.8%は0.30〜0.45cmである。

体部片は232点である。外面は口縁部と同様にロクロナデ痕を残すほか、横方向5点、斜方向1点の篦磨き痕が認められ、うち1点はヘラ削り後の横ミガキ痕を有する。黒色処理される内面は不明な139点を除いて横、または斜方向のミガキ60点、底部より続く縦、または放射状のミガキ14点があり、他はいずれか2方向の組合せである。外面の色調は大部分にぶい黄橙色をなし、赤褐色を呈するものは28点である。やゝ粗粒の胎土を有するものは12点である。また、二次加熱をうける破片3点が含まれる。器厚は0.25〜1.20cmを計り、概して下方に厚手となる。全体では0.35〜0.65cmに集中し、82.5%を占める。

底部は146点のうち、4分の1以上を遺存するもの35点、5分の1〜9分の1が52点であり、口縁部に比して細片が少ない。外面は不明な27点を除いて回転糸切り痕を残すもの85.1%、回転糸切り後のヘラ削り痕7.0%、ヘラ削り痕のみを認めるもの7.9%である。内面は放射状のミガキ痕が74.6%でもっとも多い。他は横方向と放射状、横・斜方向、横、または斜方向のミガキ痕である。胎土や焼成は口縁部及び体部に同様であるが、雲母の点在するものが含まれる。底径は78点によって4.1〜7.0cmと推定され、5.5〜6.2cmが48点で61.5%を占める。底部の厚さは0.20〜1.05cmを計り、0.40〜0.65cmが109点、74.7%でもっとも多い。

図示する7点のうち、(1)は口径・器高共に小さい坏であり、口縁端部が僅かに外反する。(2)、(4)は内彎気味に立ちあがり、(3)はやゝ外反する。(2)は外面に篦磨きが施される内面黒色処理の坏である。

内外面を黒色処理する坏は、高台付坏と識別できない口縁部及び体部を含めて口縁部13点、体部10点、底部9点の破片である。口縁部より底部まで遺存するものは1点のみである。

口縁部は3分の1、7分の1を残す各1点のほかはすべて10分の1以下の細片である。外面は、横方向の篦磨き痕が認められ、横・斜方向のものが1点含まれる。内面のミガキは横方向のほか、体部に続いて横・斜方向、横・放射状のもの3点がある。推定口径は13.2〜15.6cmに分散している。口縁部における器厚は0.25〜0.55cmである。

体部は共に細片であり、内外面のミガキは口縁部と同様である。厚さは0.25〜0.80cmを計り、体部下端に肥厚する。

底部9点のうち6点の破片は、底径の8分の1以上が残存する。外面は回転糸切り痕4点、回転糸切り後のヘラ削り痕2点、全面ヘラ削り痕1点が認められる。内面のミガキ痕は、横方向3点、放射状3点が含まれる。底径は5.3〜6.4cmと推定され、器厚は0.30〜0.70cmを計る。

図示する(5)は内彎気味に立ちあがり、器高3.9cmを計る。推定値による径高指数は30.0となる。

(6)は高台付坏ともみなされる。

高台付坏（第6・7図　第1・2表　図版2）

内面黒色処理の高台付坏は、高台の一部を残す底部片22点、高台部片1点の合せて23点である。内外面黒色処理のものは同様に3点まで確認される。共に器形の全体が判明するものは含まれず、口縁部及び体部では坏のそれと識別できないが、それぞれ同様の比率で坏に含まれていると推定される。

内面黒色処理の底部片には2分の1以上を遺存する11点が含まれ、比較的大きい破片が多い。外面は回転糸切り痕15点、高台貼付けに伴うロクロナデによって不明となる2点がある。内面の箆磨き痕は、放射状11点、放射状と横、または斜方向の5点で他は摩滅して不明である。底径は4.7～6.2cm、器厚0.40～0.90を計る。

高台はロクロ成形され、胎土・焼成共に坏と同様である。高台径6.7～7.5cm、高台高2.0～2.2cmを計る。

内外面黒色処理の3点は、7分の1以上を遺存する。底部外面は回転糸切り痕1点があり、高台内は貼付けによって菊花状を呈する1点が含まれる。内面は放射状の箆磨き痕である。高台の外面は図示する(12)の縦方向のほか、横方向のミガキ痕が認められる。高台径は6.6～7.6cm、高台高1.2～2.1cm、器厚は0.40～0.55cmのほか、0.95cmの厚手のものが含まれる。

鉢（第6図　第1表）

内面黒色処理の体部5点、底部2点の破片があり、口縁部は明確でない。坏に比して底径がやゝ大きく、体部から外傾するものと推定され、鉢とするものである。

体部は外面にロクロナデ痕、内面に横方向のミガキ痕を有し、底部に続いて放射状を呈する。底部の切り離しは、回転糸切りによるものが1点含まれる。胎土・焼成は坏と同様である。底径は8.0cm前後と推計され、厚さは体部で0.55～0.85cm、底部では0.50～0.65cmを計る。

壺（第6図　第1表）

体部の小片2点である。北辺のAef 9、Agh 6グリットに出土し、同一個体の小型の壺と推定される。外面は横方向のミガキ痕を有し、黒色処理される。内面はロクロ成形痕を粗雑に残し、にぶい黄橙色を呈する。胎土は均質な細粒であり、焼成も良好である。器厚は0.60～0.70cmである。

(2)非黒色処理の土師器（第8～11図　第1・3～5表　図版3～5）

坏・高台付坏5,646点、甕・鉢1,391点である。総数7,037点で遺物全体の85.3%に達する。坏の完形品1点のほかはすべて破片であり、全体の器形の不明なものが大部分である。

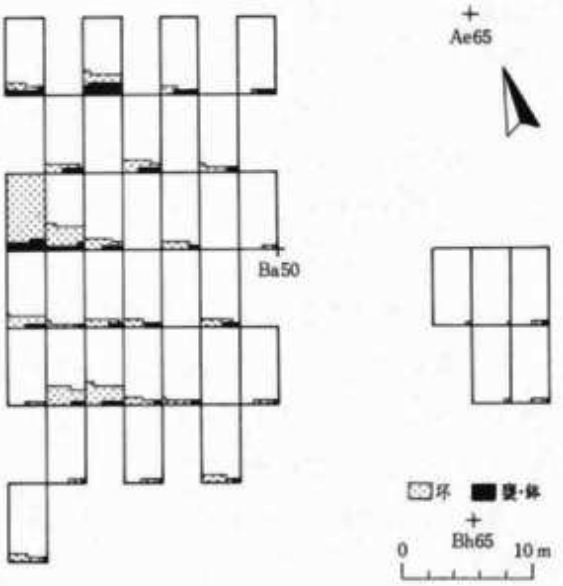
その分布は調査区域の南端を除いて全域に及び、西方に若干密になる傾向にあるが、特にAij 21グリットでは1,810点が集中し、非黒色処理の土師器中25.7%を占めて偏在する。器種によっては、坏・高台付坏がAij 21グリットに1,594点で全体の28.3%、甕・鉢は北東のAef 15、Aij

21グリットに528点、37.9%を占めて僅かに散布する南・東グリットと対称的である。

尚、高台付坏の口縁部及び体部の破片については識別が明瞭でないため、一括して坏の口縁部及び体部に含めるものである。

坏（第8～9図　第1・4表　図版3）

口縁部1,928点、体部2,306点、底部1,006点の合せて5,240点である。このうち口縁部より底部まで遺存し、器高の求められるものは完形の1点を含む19点である。他に口縁部より体部、体部より底部まで残存する破片があるが、それぞれ口縁部及び底部に含めると、10分の1以下の小片が口縁部で93.3%、底部では37.3%となり、口縁部に細片化するものが多い。9分の1以上の口縁部は、Aij 21、Bab 21、Bcd 18～15グリット等の西方に分布し、北辺に若干散布している。また、底部では口縁部及び体部の出土量にほゞ対応して分布し、残存率による分布の変化は特に認められない。



第8図　非黒色処理の土器出土分布図

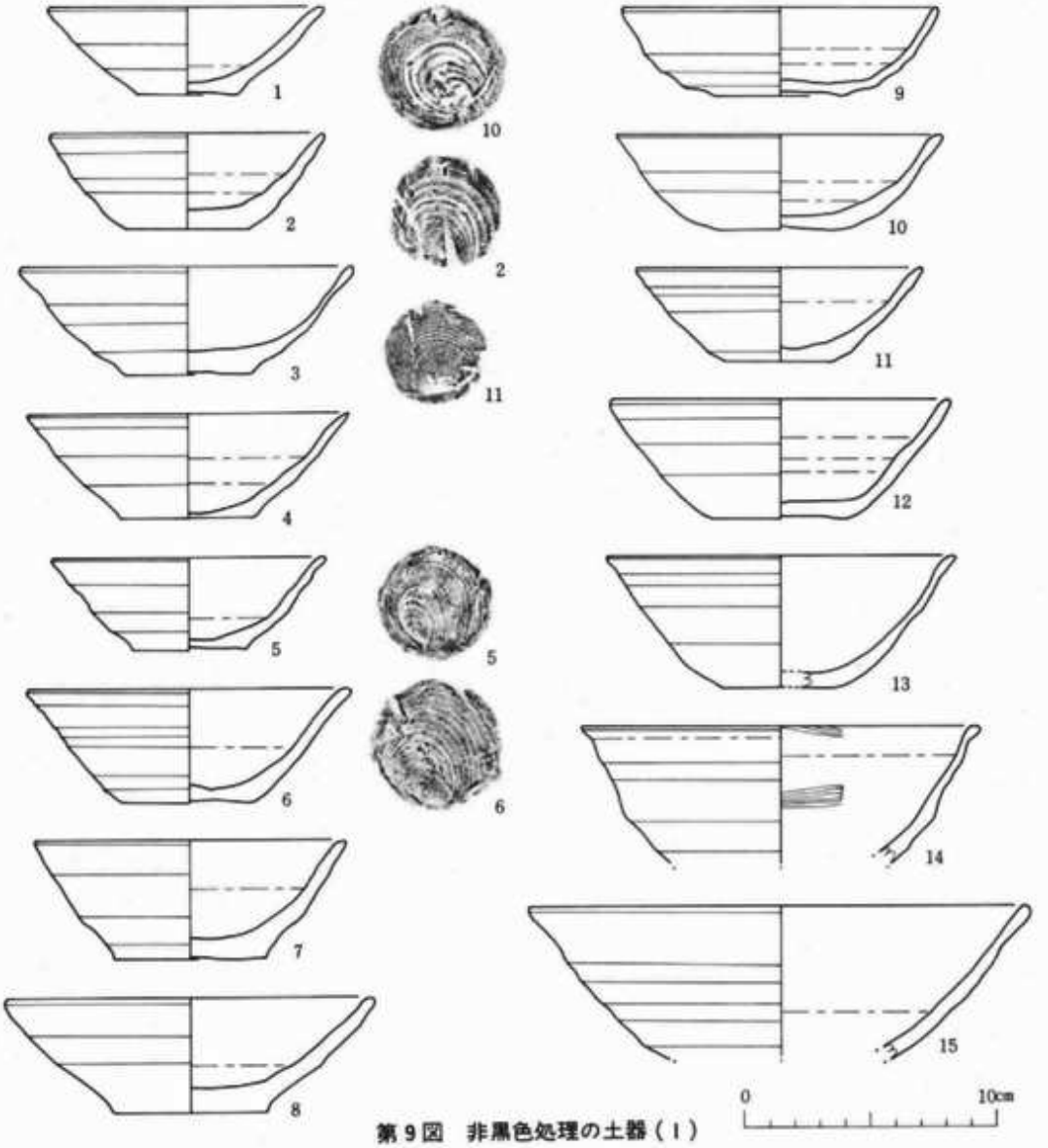
口縁部はすべてロクロによる成形である。体部より直線状に外傾して立ち上がるもの、僅かに内彎気味に立ちあがるものがあり、口縁端部で薄く逸き出されてやゝ外反するものや若干肥厚するものが含まれる。大部分はロクロナデ痕を有するが、歪みの大きいものや口縁部直下の外面に凹凸の著しいものが混在し、後者は高台付坏の口縁部と推定されるものに多い。また、横方向の篦磨き痕を有するものが含まれ、内外面1点、内面9点に認められる。色調はにぶい黄橙色、または黄橙色を呈するものが、全体の73.7%、赤褐色24.5%、暗褐色1.8%等である。胎土は均質な細粒であり、粗粒を含むものは少ない。焼成は比較的橙色を呈するものが良好である。そのほか、内面に煤に付着するもの、二次加熱をうけているものが若干含まれる。また、口縁部より体部まで遺存する2点に墨書があり、「風」、「平」と認められる。

口径は9.7～20.1cmまで推定され、838点中では13.8～15.5cmに618点が集中し、72.7%を占めている。口径の得られる12点では10.8～15.5cmを計って分散している。口縁部における器厚は0.15～0.70cmで厚薄があるが、1,872点中83.8%の1,586点が0.30～0.45cmを計る。

体部は殆ど外面にロクロ痕を残し、特に凹凸の目立つものは44点である。また、体部下端にヘラ削り痕を有するものが若干含まれるほか、横方向のミガキ痕が内面に18点、外面に4点まで認められる。色調はにぶい黄橙色、または黄橙色を呈するものがもっとも多く、78.3%を占

め、次いで赤褐色21.0%と口縁部の色調に近似する。胎土、焼成共に同様であり、やゝ粗粒なものは0.8%にすぎない。器厚は下方に厚手となって0.20〜1.05cmを計り、全体では0.30〜0.60cmに76.0%が集中する。

底部は摩滅して不明な97点を除き、回転糸切り痕を残すもの99.0%、回転糸切り後のヘラ削りされるもの0.2%、全面のヘラ削りによって切り離しが不明となるもの0.8%である。ヘラ削りはいずれも手持ちによるものである。内面ではロクロ痕の凹凸を残すものが混在する。また、放射状の篦磨き痕を認める2点が含まれる。そのほか、内面の一部に煤の付着するもの5点がある。胎土は口縁部・体部に同様であるが、砂粒の含まれるものがあり、比較的粗粒のものは



第9図　非黒色処理の土器（1）

第3表　非黒色処理の土器観察表

実測図No.	登録No.	出土地点・層位	器種	残存率 口縁	残存率 底部	口径	底高台径	器高	径高指数	外傾指数	器面調整 内面	器面調整 外面	切り離し調整	色調 内面	色調 外面	備考
1	25	Bcd21 Ⅲ	坏	1/4	1/4	10.9cm	3.9cm	3.5cm	32.1	60.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面磨滅
2	23	Aef21 〃	〃	2	1	10.9	4.9	3.8	34.9	42.1	〃	〃	〃	〃	〃	
3	5	Aij21 〃	〃	~10	2	(13.3)	4.9	4.2	(31.6)	52.4	〃	〃	〃	にぶい橙	〃	
4	21	〃	〃	~10	2	(12.7)	5.2	4.1	(32.7)	52.4	〃	〃	〃	〃	〃	
5	24	Bcd15 Ⅱ	〃	5	1	10.9	4.5	3.7	33.9	36.5	〃	〃	〃	明褐灰	明褐灰	内面に黒色付着物あり
6	2	Aij21 Ⅲ	〃	~10	1	(12.9)	5.1	4.6	(35.7)	48.9	〃	〃	〃	橙	橙	
7	3	〃	〃	~10	3	(12.3)	6.0	4.8	(39.0)	37.5	〃	〃	〃	〃	〃	
8	9	〃	〃	~10	1	(14.6)	6.0	4.6	(31.5)	57.6	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	
9	19	〃	〃	2	1	12.6	5.1	3.5	27.8	42.9	〃	〃	〃	橙	橙	
10	20	〃	〃	~10	1	(13.0)	4.3	3.8	29.2	46.1	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	
11	15	〃	〃	~10	1	(11.4)	4.3	3.7	(32.5)	55.4	〃	〃	〃	にぶい褐	褐灰	
12	1	Bcd15 Ⅱ	〃	2	1	13.5	5.4	4.7	34.8	46.8	〃	〃	〃	橙	橙・黒	外面磨耗
13	4	Aij21 Ⅲ	〃	~10	2	(13.8)	4.6	5.2	(37.7)	47.1	〃	〃	〃	にぶい褐	にぶい褐	
14	30	Bcd15 Ⅱ	〃	3		15.8					〃	〃		浅黄橙	浅黄橙	
15	29	Bcd18 Ⅱ	〃	3		19.9					ヘラミガキ	〃		にぶい橙	にぶい橙	

（）は推定値

44点である。色調はにぶい黄橙色、または黄橙色をなすものが84.0%、赤褐色14.6%、暗褐色、または黒褐色1.4%となり、口縁部及び体部に比して赤褐色を呈する破片の比率が若干減少している。

底径は489点で3.6～6.8cmを計る。5.0～5.2cmが17.0%、5.4～5.6cmが37.4%、5.8～6.0cmが21.3%を占める。総平均では5.46cmである。底部における器厚は計測不能な45点を除いて0.15～1.20cmであり、0.35～0.65cmに77.1%が集中している。

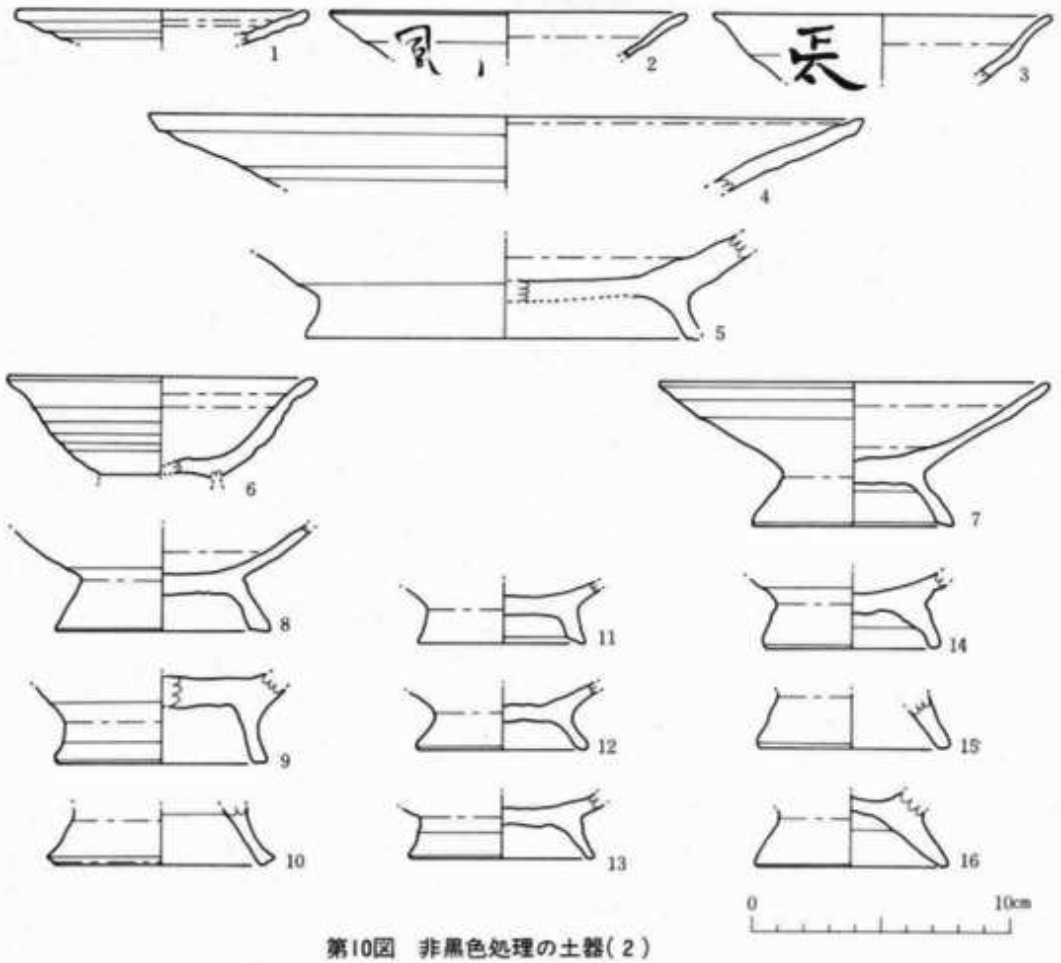
器高は口縁部より底部まで残存する18点によって3.15～5.30cmを計る。3.15～3.90cm 8点、4.25～4.90cm 7点、5.00～5.30cm 4点である。これによって径高指数を求めるならば、24.3～24.5が2点、30.0～33.6が8点、36.9～44.9が3点となる。

図示する(1)、(2)、(4)、(9)、(11)等はほゞ直線状に立ちあがるものであり、器高がやゝ低いものが多い。(9)は内彎して立ちあがる。口縁端部の外反する(10)は内面に篦磨きされるものである。また、(15)は口径のもっとも大きい坏とみられる。推定値を含む径高指数は29.2～39.0、外傾指数は36.5～60.0である。

尚、径高指数は器高に対する口径の比率であり、外傾指数は器高の3分の1を底部より体部に求め、この点より口縁端部までの幅を器高によって除した比率である。

高台付坏（第8・10図　第1・4表　図版4）

口縁部及び体部は、坏と識別できない破片があって坏に一括しているため、概数は明確でない。口縁部より高台部まで遺存するものは1点、口縁部より底部まで残存するもの1点であり、全体の器形の不明なものが多い。高台の痕跡及び高台の一部を欠損するものを含めて底部229点、高台部177点の合せて406点の破片である。坏を含む底部片全体の18.5%にあたり、口縁部



第10図　非黒色処理の土器（２）

第４表　同　観　察　表　（２）

実測図No.	登録No.	出土地点・層位	器種	残存率 口径	残存率 底・高台	口径	底径 高台径	器高	器面調整 内面	器面調整 外面	切り離し調整	色調 内面	色調 外面	備考
1	1	Aij21 Ⅲ	高台付坏？	1/2	1/2	11.4cm	cm	cm	ロクロナデ	ロクロナデ		〃	〃	
2	188	〃 〃	〃	～10		(13.8)			〃	〃		にぶい橙	にぶい橙	体部外面に墨書文字「風」あり
3	189	〃 〃	〃	6		(13.2)			〃	〃		浅黄橙	浅黄橙	体部外面に墨書文字「乙」あり
4	24	〃 〃	坏？	～10		(27.6)			〃	〃		〃	〃	
5	8	〃 〃	高台付坏？		5		(15.3)		〃	〃		〃	〃	内外面磨滅
6	16	〃 〃	高台付坏	10		(12.0)			〃	〃		橙	橙	
7	2	〃 〃	〃	～10	3	(15.1)	(7.8)	5.6	〃	〃	糸切り	明褐灰	にぶい橙	高台欠損
8	1	〃 〃	〃		1		8.3		〃	〃	〃	橙	〃	
9	7	〃 〃	〃		3		(8.3)		〃	〃	〃	明褐灰	にぶい橙	
10	2	Bcd21 〃	〃		1		8.8		〃	〃		浅黄橙	浅黄橙	
11	3	Bab6 〃	〃		3		(6.4)		〃	〃		にぶい橙	灰白	
12	4	Aij21 〃	〃		2		6.6		〃	〃	糸切り	〃	にぶい橙	
13	1	Bcd15 Ⅱ	〃		2		7.2		〃	〃	〃	〃	〃	
14	2	Bab6 Ⅲ	〃		3		(6.9)		〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	
15	5	Aij21 〃	〃		1		7.4		〃	〃		にぶい橙	にぶい橙	
16	1	Bcd12 〃	〃		2		7.5		〃	〃	ヘラケズリ	〃	〃	

（）は推定値

及び体部についてもほゞ同様の比率で含まれるものと推定される。

底部及び高台部の分布は、調査区域の中央部より西方にかけて密となり、北・東に著しく減少している。坏のそれと殆ど同様の傾向を示し、もっとも集中するのはAij 21グリットの104点であり、全体の25.6%を占める。また、遺存率によっては4分の1以上の底部が23.6%を占め、坏の底部の20.2%に近似する。同様に4分の1以上の高台は3.9%であり、5分の1未満の小破片が多い。

口縁部及び体部は、図示する3点によってみるならば共に坏に比して体部より外傾して立ちあがり、口縁端部にやゝ肥厚、または薄く逸き出される。2点は外面にロクロ成形痕を明瞭に残す。共に坏部の器高が低い皿状を呈する。そのほか、体部下半より高台まで遺存するものによっては、坏に比して口径の大きいもの、坏と同様のものが含まれていると推測される。

底部は切り離しの判明するものすべてに回転糸切り痕が認められる。切り離しの不明な11点は高台の貼付けによるものであり、ロクロナデ痕9点、菊花状のナデ痕2点がある。内面には明瞭なロクロ成形痕を有するものが多い。平滑なものには半円状に断続する細紐状の粘土が付着するもの1点が認められる。底径は坏と同様と推定され、胎土・焼成共著しい相違は認められない。色調はにぶい黄橙色、または黄橙色を呈するものが70.3%、赤褐色26.0%、暗褐色、または黒褐色1.3%である。

高台部はすべてロクロナデ仕上げによっており、直立するもの、若干の強弱を有して外傾するもの等が混在し、後者が圧倒的に多い。また、高台端部は大部分高台内に沿って沈線状の条線が認められる。高台径及び高台高は、比較的大小差が大きい。高台径は多少歪みのあるものが含まれるが、98点によって5.1〜15.5cmと推計される。8.8〜9.2cmにもっとも多く、31.6%を占め、6:0cm以下と12.0cm以上のものは極めて少ない。高台高は82点中0.75〜3.80cmを計り、1.5〜2.5cmが78.0%である。ほゞ高台径に対応するものと把えられ、高台高3.80cmを計る1点は、最大径を有するものである。高台部の器厚は0.25〜0.80cmであり、0.40〜0.55cmが全体の65.9%となる。胎土・色調はいずれも底部に準ずる。

図示するもののうち器高の得られる(7)は5.6cmであり、推定口径に対する高台径の比率は1.95となる。

鉢（第11図　第1・5表　図版5）

甕に比して器高が低く、体部より外傾する鉢形と推定される破片は合せて24点である。殆ど中央部以西に散布し、口縁部が比較的北・西に、体部及び底部が南に多いが、甕や高台付坏と識別できないため明確でない。

口縁部18点は、体部より直線状に外傾して立ちあがり、口縁部がやゝ外反するもの、口縁端に不明瞭な稜を残すもの、僅かに薄手となって丸味をなすもの、肥厚して上下に若干逸きださ

れるもの等が含まれる。共にロクロナデされる。胎土は粗粒を含むものが多く、殆ど浅黄橙色を呈する。口径は24.2〜30.4cmと推計される。器厚は0.45〜1.10cmを計り、0.60〜0.80cmに13点があって比較的厚手である。

体部は14点まで確認され、すべてロクロナデ痕を残す。全体に厚手となるが、胎土・焼成等は口縁部や底部と同様である。

底部は6点である。底部の切り離しは、回転糸切り痕2点、糸切り後のヘラ削り痕1点が判明する。底径は8.0cm、11.0cmの2点が推定され、器厚は0.55〜1.50cmを計る。

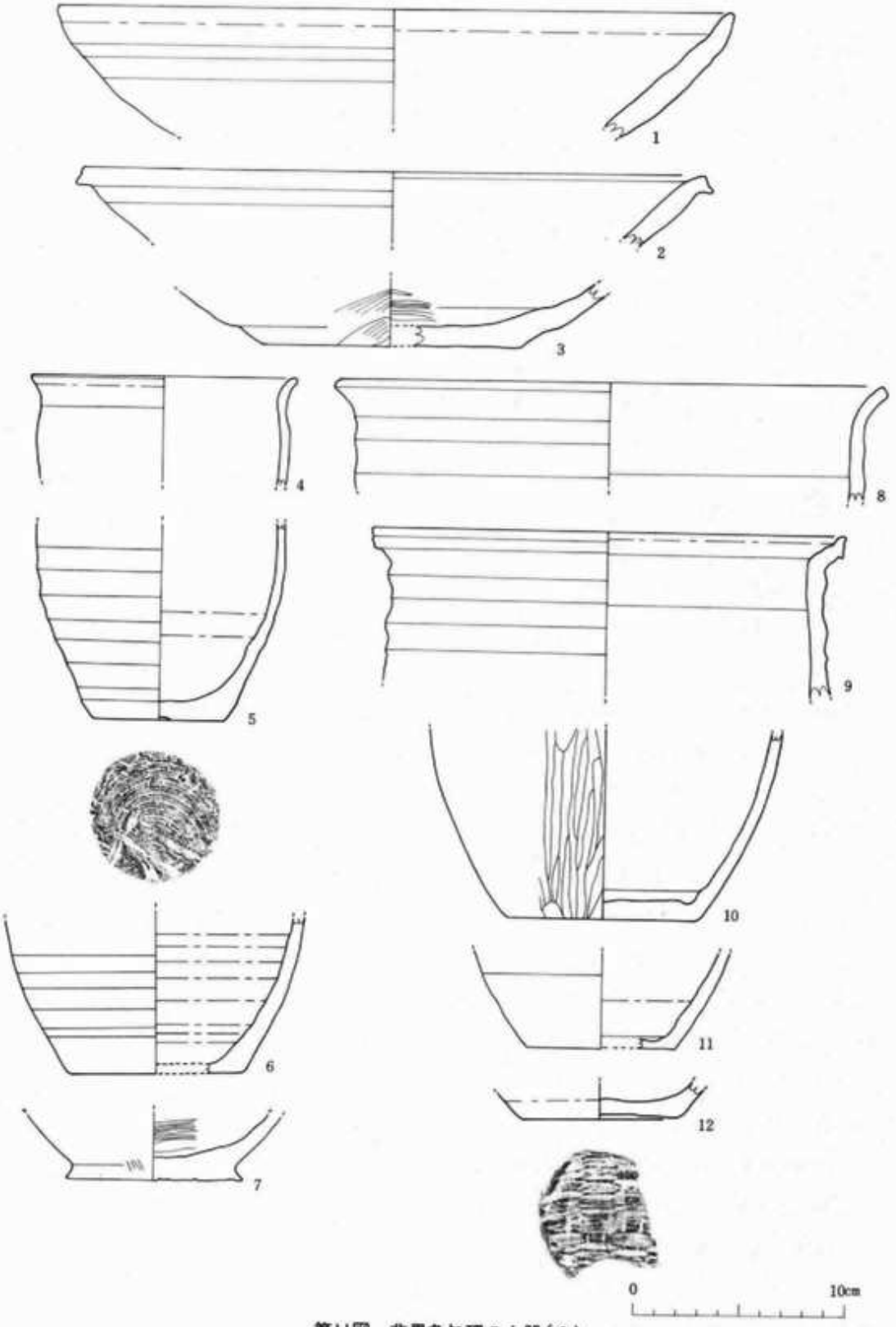
甕（第6・11図　第1・5表　図版5）

細片を含めて1,369点に及び、全体では坏に次いで16.6%を占める。いずれも破片で全体の明らかなものはない。部位によっては他と識別できない小片が含まれるが、口縁部12.0%、体部80.1%、底部7.9%となる。

分布は坏と同様に南端を除いて全域に及び、中央部より北西にかけて密である。特にAef 15及びAij 21の4グリットに集中し、甕全体の34.3%に達する。全体に希薄となる東方や中央部の一部に口縁部、または底部を欠いているが、部位別では全体の出土比率に対応する分布を示し、特に変化は認められない。また、遺存率によっては、口縁部及び体部に小片が多く、底部4分の1以上が16点となるが、分布における特徴は求め得ない。

口縁部は体部上半に続く破片を含めて164点である。大別してロクロ成形によるものと若干のロクロ不使用の口縁部が含まれる。前者は頸部よりやゝ薄手となってくの字状に外反し、滑らかに終息するものと短く上方に逸き出されるものがあり、共に強弱や厚薄が認められる。また、折り返し状に下方に逸き出されるものが若干含まれる。共に内外面に横ナデ痕を有し、不明なものを除いて157点にのぼる。うち3点は頸部に打圧痕が残る。後者の7点はすべて横ナデ痕が認められる。胎土はいずれも砂粒が目立ち、小石を含むものが多い。色調はにぶい黄橙色、浅黄橙色87.8%、赤褐色7.9%、暗褐色2.4%であり、内外面に黒色の付着物を有する2点がある。口径は歪みがあって一様でないが、11.2〜31.4cmと推計され、52点中26点が25.0〜29.6cmに集中する。口径部における器厚は0.20〜1.30cmを計り、0.45〜0.55cmが50.0%を占めている。

体部は1,081点である。外面の調整は不明なものを除く889点中主として縦、または斜方向のヘラ削り痕が59.3%でもっとも多く、以下ハケ毛目8.5%、ナデ8.4%、斜方向の叩き目0.2%、ミガキ0.2%等である。内面では846点中ロクロナデ50.9%、ハケ毛目25.2%、ナデ23.4%である。胎土は粗砂を含むものが多く、サンドイッチ状の色調を呈するものが若干認められる。また、外面に煤の付着するものが8点含まれる。内外面の色調は大部分にぶい黄橙色、または浅黄橙色を呈し、全体の83.4%を占め、ほかに赤褐色13.1%、暗褐色、または黒褐色3.9%である。器厚は下方ほど厚手となるが、0.25〜1.30cmを計り、0.35〜0.70cmに619点があって56.5%を占



第11図　非黒色処理の土器（3）

第5表　非黒色処理の土器観察表（3）

実測図No.	登録No.	出土地点・層位	器種	残存率 口縁	残存率 底部	口径	底径	器高	器面調整 内面	器面調整 外面	底部	色調 内面	色調 外面	備考
						cm	cm	cm						
1	1	Bab18 II	鉢	微小片～10	微小片	(31.9)			ロクロナデ	ロクロナデ ヘラケズリ		にぶい橙	にぶい橙	
2	1	Agh6 III	〃	～10		(29.4)			〃	ロクロナデ		〃	〃	
3	1	Bab6 〃	〃		3		(18.0)		ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り	にぶい橙	にぶい褐	
4	1	Bab21 II	甕	～10		(12.6)			ナデ	ナデ		橙	橙	
5	1	Bcd21 III	〃		1		6.0		ロクロナデ	ロクロナデ		浅黄橙	にぶい褐	
6	1	Aef21 〃	〃		2		8.1		〃	〃	糸切り	灰白	灰白	
7	2	〃	〃		3		(8.3)		ハケメ	ナデ	木葉底	にぶい褐	にぶい褐	
8	1	Aij21 〃	〃	～10		(26.1)			ロクロナデ	ロクロナデ		浅黄橙	淡橙	口縁部の歪み大きい
9	1	Bcd15 〃	〃	～10		(22.3)			〃	〃		にぶい褐	にぶい橙	
10	35	Bgh21 II	〃		2		8.9		〃	ヘラミガキ	砂底	にぶい橙	〃	
11	1	Agh6 IV	〃		4		(7.0)		〃	ロクロナデ		にぶい褐	にぶい褐	
12	1	Aij21 〃	〃		3		(7.4)		ナデ	ナデ	網代底	灰褐	にぶい橙	

（　）は推定値

めている。

底部は108点であり、その大部分は10分の1未満の小片である。外面は回転糸切り痕31点、糸切り後のヘラ削り3点、ヘラ削り13点、砂粒が全面に付着する5点、木葉痕5点、平編みの網代痕2点等である。内面はロクロナデ、またはナデ痕を残し、ロクロ成形痕を明瞭に残すものが含まれる。胎土・色調は体部と同様であり、黄橙色を呈するものが91.7%である。底径は24点で4.8～11.5cmと推定され、6.2～8.7cmに22点と分散して一定していない。

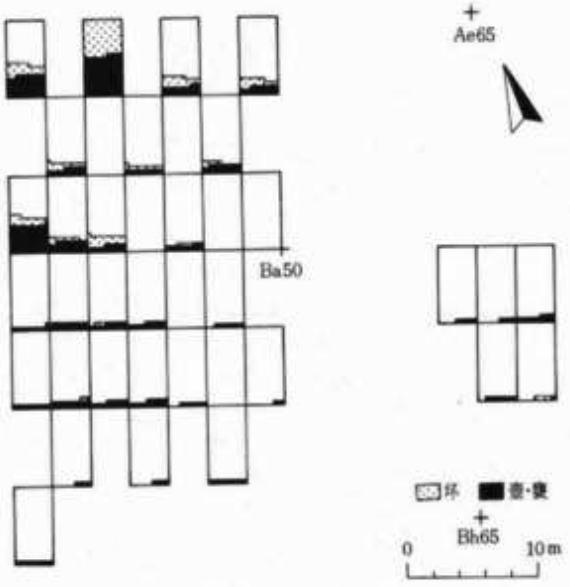
4　須恵器（第12～15図　第1・6表　図版6）

灰色、または灰白色を呈し、環元炎焼成をうける須恵器は、合せて612点である。完形のものは1点も含まれず、破片数による比率は遺物全体の7.4%である。推定される器種には、坏・蓋・壺・甕があり、坏は須恵器の31.5%、壺・甕は68.0%を占めている。

分布は南端を除く調査区域のほゞ全域に及び、北西グリットに密になり、特にAef15グリットにもっとも集中する。坏は同グリットに35.7%を占め、これを中心に次第に南・西に粗となり、南西では皆無となる。部位によってはAgh12グリットに口縁部が含まれていないが、他はいずれも口縁部より底部まで出土し、特に分布による相違は認められない。壺・甕はやゝ北西に多いが、口縁部及び底部の合せて35点が比較的点在して粗となり、体部は東方の1グリットを除いて全域に広がり、特に北西の4グリットに偏在している。特にAef15グリットでは底部を含まず、体部全体の19.0%に及んでいる。壺・甕の遺存率によっては、口縁部及び底部共4分の1以上のものが東西両端の8グリットに限られ、壺の底部3点が6～8分の1を残し、他は9～10分の1以下の細片となって分散している。また、蓋3点は北辺の6グリットに出土するものであり、1点は下谷地B遺跡出土片に接合する。

坏（第12・13図　第1・6表　図版6）

口縁部69点、体部57点、底部67点の合せて193点の破片である。口縁部より底部まで遺存するものは3点であり、全体の器形の明らかなものはない。色調や焼成によって灰色を呈する硬質の坏が43点、灰白色、または淡褐色がかった坏が24点であり、後者のうち軟質のものは12点含まれる。遺存率によってみると、口縁部は4分の1以上が3点、6～9分の1が13点であり、底部では2～6分の1までが40点あり、推定径に対しては底部の遺存率がやゝ高いといえる。しかし、焼成や底部の切り離し技法による分布の変化は特に認められない。

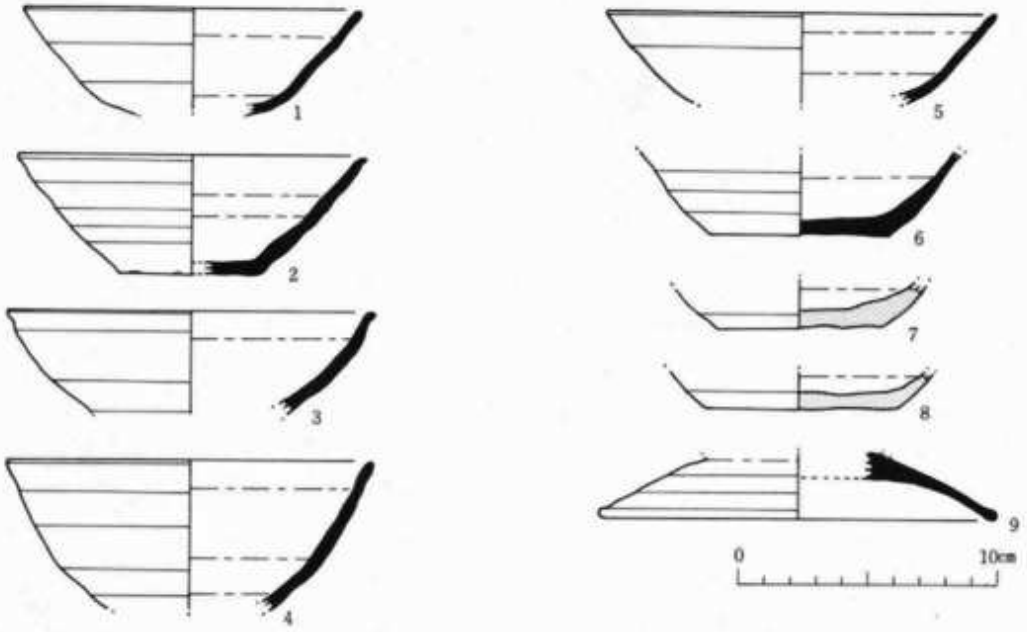


第12図　須恵器出土分布図

口縁部は体部より内彎気味に立ちあがり、やゝ外反するもの、直線状をなすもの、口縁端部のやゝ肥厚するもの等が含まれる。外面は概して灰色を呈するものにロクロ成形痕を残し、灰白色の軟質の坏では滑らかである。胎土は灰色で堅緻な43点、灰白色、灰褐色・淡褐色等を呈する26点があり、後者のうち特に軟質なものは12点である。また、灰色を呈し、中央部に褐色、または赤褐色となるサンドイッチ状をなす2点が含まれる。推定口径は灰色の43点で13.1～16.8cmであり、14.0～14.5cmが11点、15.0～15.4cmが13点である。白色がかった7点では15.2～16.2cmと推定され、前者に比してほゞ一定した推定値が得られる。器厚は0.20～0.50cmを計り、灰白色、白色かかった褐色のものに薄手となる。

体部は内外面共に滑らかであるが、外面にロクロ成形痕を明瞭に残す3点が含まれる。胎土は口縁部を準じ、硬質のもの20点、特に軟質のものは15点である。また、中央部が赤褐色を呈する破片は3点である。器厚は0.25～0.70cmを計り、0.35～0.05cmに70.0%が集中している。

底部は切り離しの相違によってヘラ切り12点、回転糸切り48点に分けられる。前者には摩耗するものが含まれるが、共に灰白色がかった褐色を呈して軟質であり、更にヘラ削りされる1点がある。10点における推定底径は6.0～8.0cmであり、6.5～7.0cmに7点がある。器厚は0.30～0.70cmである。後者は回転糸切り後のヘラ削りをうける1点が含まれ、ほかにヘラ削りによって切り離しの不明となる1点がある。共に灰色を呈する硬質の焼成であるが、前者に比して小片化するものが多い。底径は41点で推計され、5.0～7.1cmである。5.0～6.5cmが37点で90.2%を占め、底径の小さいものが多い。器厚は0.25～0.95cmを計る。



第13図　須　恵　器（1）

第6表　須恵器観察表(1)

実測図No.	登録No.	出土地点・層位	器種	残存率 口縁	残存率 底部	口径	底径 高台径	器高	径高指数	外傾指数	器面調整 内面	器面調整 外面	切り離し調整	色調 内面	色調 外面	備考
						cm	cm	cm								
1	1	Aij21 Ⅲ	坏	5/12	5/12	(13.0)					ロクロナデ	ロクロナデ		にぶい黄橙	褐灰	
2	22	Aef3 〃	〃	7	3	(13.4)	5.9	4.6	(34.3)	54.3	〃	〃	糸切り	灰白	灰白	
3	2	Aef21 〃	〃	5		(14.2)					〃	〃		黄灰	黄灰	
4	1	Aef21 〃	〃	3		(14.2)					〃	〃		灰	灰	
5	2	Aef15 Ⅰ	〃	~10		(15.0)					〃	〃		〃	〃	
6	1	Agh18 Ⅲ	〃		3		(6.8)				〃	〃	糸切り	灰白	灰白	
7	1	Aef3 〃	〃		2		6.4				〃	〃	ヘラ切り	〃	〃	
8	1	〃 Ⅰ	〃		3		(7.4)				〃	〃	〃	〃	〃	
9	4	AeF18 NY8 〃	蓋	5		(15.4)					〃	〃		灰	灰	抓部欠損

（）は推定値

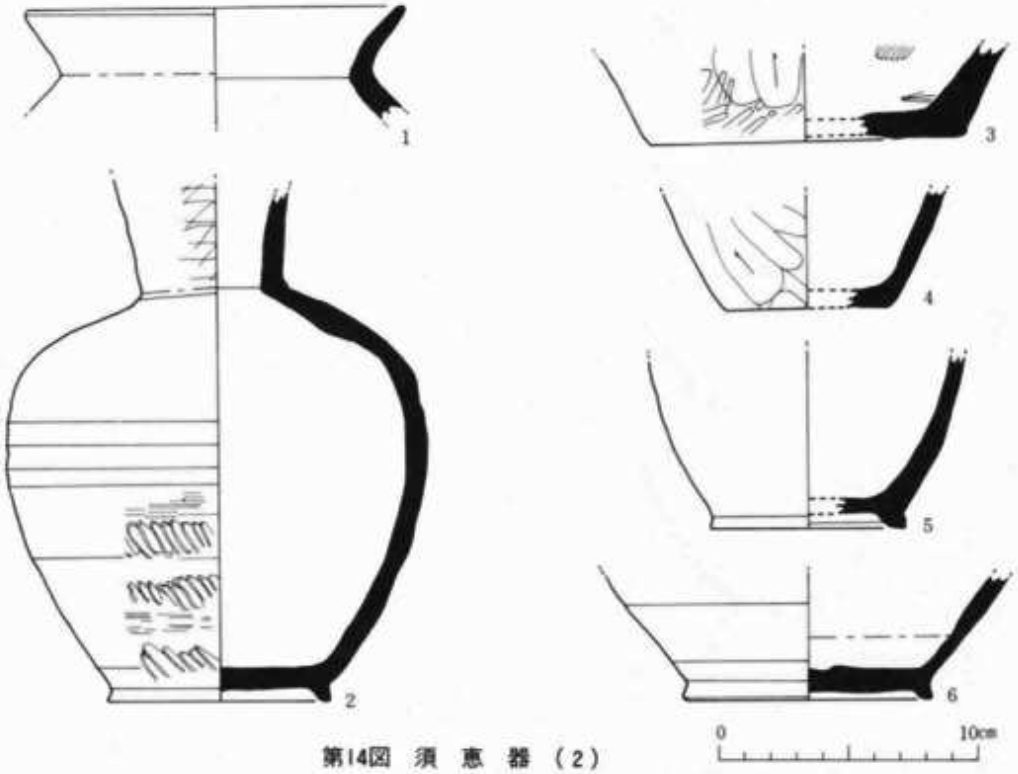
蓋（第13図　第6表　図版6）

身受部分の遺存する2点と天井部の細片1点である。図化する1点は抓部を欠いているが、円形に剝落痕が残る。天井部が緩やかに膨らみ、身受部分より外反して丸味を帯びる。口径は13.8cmと推定される。他の1点は身受部分で殆ど水平をなし、外縁は短く沈線状をなして上下に逸き出される。共にロクロナデ痕を残し、再調整は明らかでない。外面は暗緑色を呈し、灰被りが部分的に認められる。胎土は灰色を呈し、器厚は0.35～0.45cmを計る。

壺（第12・14図　第1・7表　図版6）

口縁部4点、体部55点、底部7点まで確認される。須恵器全体の10.8%を占める。完形のものは含まれず、口縁部を欠く長頸壺1点を除いてすべて破片である。

口縁部は共に小片であるが、やゝ外反して口縁端部が上方に逸き出され、ロクロ痕を残す。



第14図 須 恵 器 (2)

第7表 同 観 察 表 (2)

実測図No.	登録No.	出土地点・層位	器種	残存率 口縁	残存率 底部	口径	底径	器高	器面調整 内面	器面調整 外面	底部	色調 内面	色調 外面	備考
14-1	2	Aef15 I	甕?	5%以下 ~10	5%以下	(14.7)cm	cm	cm	ロクロナデ	ロクロナデ		褐灰	褐灰	
2	3	Bed12 ?	壺		1		8.7		〃	ロクロナデ タタキ	糸切り	灰	灰	高台内に細線1条が走る
3	1	Bad65 I	甕		4		(12.2)		〃	ヘラケズリ	ロクロナデ	〃	〃	
4	1	Aij21 III	〃		4		(6.2)		〃	ロクロナデ		褐灰	褐灰	
5	2	〃 II	壺		~10		(7.6)		〃	〃	ロクロナデ	オリーブ灰	オリーブ灰	
6	1	Bed18 II	甕		3		(9.6)		〃	タタキメ	〃	灰	灰	
15-1	1	Bab65 III	〃	3		24.7			〃	〃		〃	〃	
2	32	Aij21 III	〃	2		23.8			ロクロナデ ヤヤ工具痕	〃		〃	〃	
3	33	Bed21 III	〃		1				〃	〃	丸底	〃	〃	
4	1	Aij21 II	〃	~10	2	(49.8)	(18.0)							

( ) は推定値

内外面灰色を呈するほか、外面が黒色、または褐色がかる各1点が含まれる。口径は9.0～15.5cmと推定され、器厚は0.45～0.60cmを計って甕に比して薄手となる。

体部は外面にロクロナデ、ヘラ削り痕が認められるものがそれぞれ25、26点であり、前者には下半に斜方向の打圧痕を有するものが含まれる。内面は共に横ナデによっている。色調は大部分灰色、または灰黒色を呈するが、外面が灰褐色がかるもの7点、黒色5点、緑褐色2点等があり、光沢を有するもの1点が含まれる。内面では灰褐色8点、黒色1点、赤褐色1点がある。胎土は甕のそれに類似し、一様な灰色をなす28点、縞状となる27点があり、後者には中央部が赤褐色を呈するサンドイッチ状のもの22点が含まれる。器厚は0.35～0.90cmを計り、0.

45〜0.65cmが37点でもっとも多い。

底部は回転糸切り1点、ヘラ削り3点があり、他にロクロ痕を有するものに高台付1点がある。内面はロクロ、またはナデツケ痕を有する。色調は内外面灰色、または灰黒色を呈するほか、外面が緑灰色をなすもの1点、内面が暗赤褐色を呈する1点が含まれる。胎土は中央部が赤褐色、または褐色となる縞状の2点があり、他は灰色である。共に粗粒を含むものである。底径は6.6〜9.8cm、　器厚0.55〜0.70cmを計る。

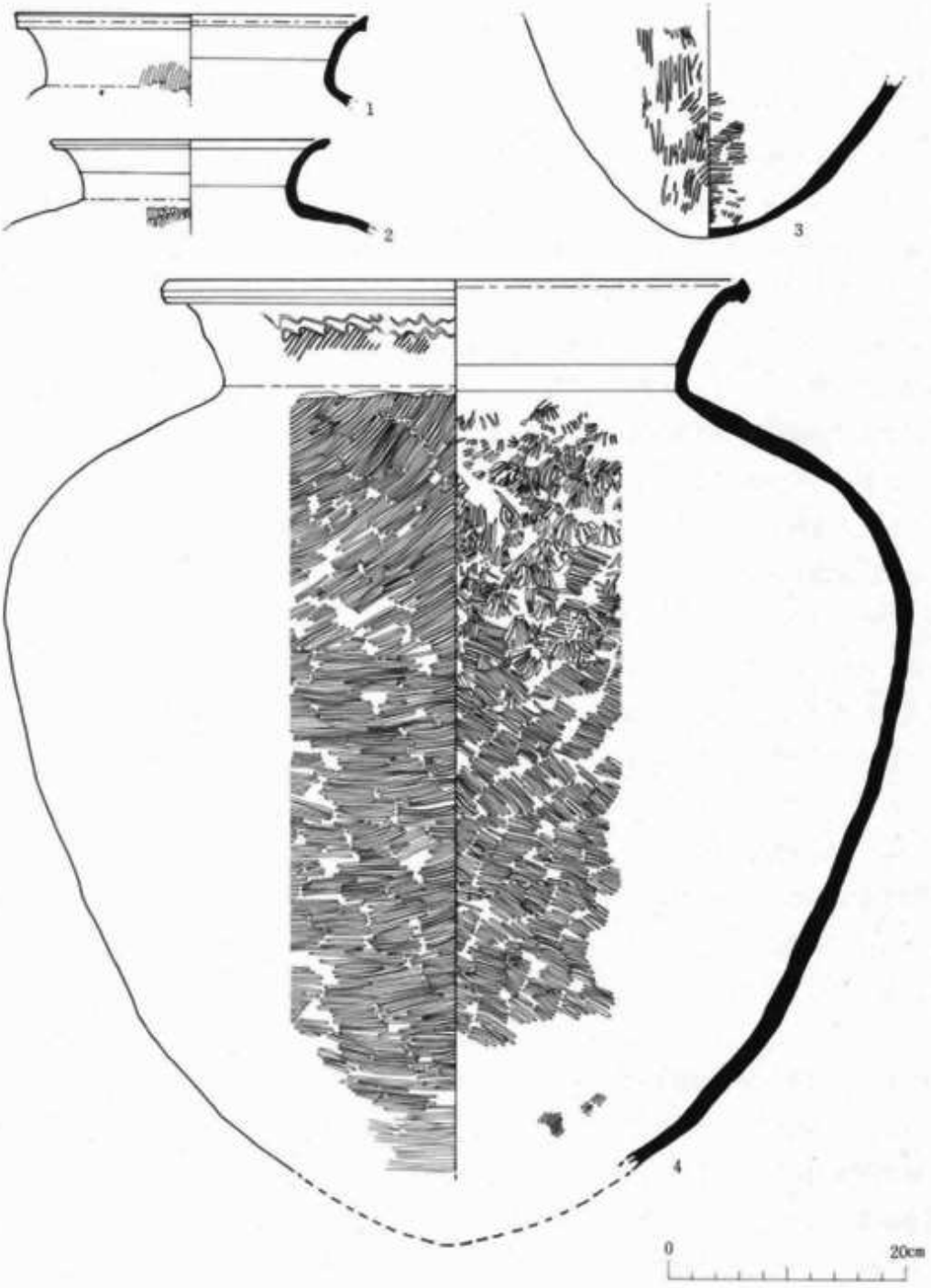
甕（第14・15図　第1・7表　図版6・7）

細片で識別できないものが含まれるが、口縁部17点、体部316点、底部2点である。須恵器中の66.3%を占めてもっとも多い。4分の1以上の遺存する口縁部及び底部は合せて6点であり、口縁部より底部まで残存するものは僅か1点である。

口縁部は外反して口縁端が上下に強く、またはやゝ弱く逸き出されるものと直線的に立ち上がり、短く丸味を有するものが若干含まれる。共にロクロナデ痕が認められ、頸部外面に斜方向の打圧痕を残すもの3点、波状の櫛目文を有する1点がある。色調は大部分一様な灰色を呈するが、外面が黒色をなすもの5点、暗褐色をなすもの2点がある。また、灰被りは外面に1点、内面に2点があり、斑点状に広がるものである。胎土は粗粒の目立つものが含まれ、硬質で灰色を呈し、淡褐色をなすものは1点である。口径は19.8〜23.8cmが5点、25.6〜32.0cmが7点である。器厚は0.40〜1.10cmを計り、0.40〜0.70cmの15点と0.85cm以上6点に2分される。

体部は同一個体をみられる破片を除いているが、壺と判別できないものが含まれる。外面は打圧痕を有するものが251点で全体の79.4%にあたり、他はヘラ削り30点、ロクロナデ21点等である。打圧痕は器形に平行、またはやゝ斜方向に認められるものが189点ともっとも多く、更に平行する叩き目に木目の観察されるもの44点、格子状4点、直交して重複する14点がある。また、肩部より頸部にかけては叩き目よりロクロナデに移行するものが含まれる。内面はロクロ痕、横ナデ痕を有するものがそれぞれ56、176点と合せて73.4%を占める。当て工具痕は66点あり、平行、または斜方向のもの44点、木目の残るもの1点、直交して重複するもの10点、青海波文6点、蓮ぐう文2点等である。また、体部に青海波文、肩部では蓮ぐう文に変化するものが含まれ、外面の打圧痕に対応しないものが含まれる。

体部の色調は灰色、また灰黒色を呈するもの198点、灰褐色18点、黒色50点、うち光沢を有するもの5点、赤褐色、また暗褐色2点、褐色、または淡褐色22点である。淡褐色をなすものは比較的軟質で平行する打圧痕が認められる。そのほか、斑点状に暗緑色がかった9点が含まれる。内面では灰色、または灰黒色246点、黒色12点、灰褐色14点、淡褐色14点、赤褐色、または暗褐色16点、灰白色6点等外面に相違するものが含まれる。胎土は一様の灰色186点、内外面に沿って2分するもの24点、内外面及び中央部にサンドイッチ状を呈するもの106点である。いず



第15図　須　恵　器(3)

れも砂粒を含み、特に色調等による変化を有しない。器厚は位置によって一様でないが、0.35〜1.70cmを計り、0.55〜1.00cmに74.1%が集中している。

底部は平底のもの5点と丸底2点が含まれる。前者はナデ、ヘラ削り痕が認められ、外面に砂粒の付着するもの1点が含まれる。後者は内外面に平行、または斜方向に叩き締めるものである。色調は外面が灰色、黒色、黒褐色等を呈し、内面はすべて灰色である。胎土は体部と同様に粗砂を含むものが多く、灰色4点、赤褐色と灰黒色に分かれる1点、赤褐色のサンドイッチ状を呈するもの3点である。丸底の2点は共に灰色である。器厚は0.50〜1.20cmを計り、厚手のものが含まれる。

図化する(4)は推定口径49.8cm、最大胴部径77.0cm、器高76.7cm以上であり、もっとも大きい甕とみられる。

5　陶器（第1表）

甕の体部、鉢の口縁部、摺鉢の口縁部各1点である。共に小片で全体は不明である。甕と小鉢は調査区域の北に、摺鉢は南辺に出土する。

甕は体部下半の破片とみられ、ロクロ成形される小型甕と推定される。内外面共に光沢の強い青味がかった褐色を呈し、胎土は灰褐色で粗粒が含まれる。器厚は1.10cmを計る。

小鉢は折り返し口縁で外面にロクロ成形痕を残す。薄い褐色釉で被われ、胎土は明褐色を呈し、磁器化している。器厚は体部で0.40cmを計る。

摺鉢の細片は口縁部を欠いているが、やゝ外反して丸く逸き出される。内外面共に褐色を呈し、光沢は殆どない。胎土は淡褐色をなす。器厚は0.60cmである。

その他、素焼きの焼成良好な破片1点がある。体部下端より3.8cm上方に穿孔の痕跡を有する。底径は12.2cmと推定され、下端の器厚は0.85cmである。

6　石製品（第1表）

石硯の2点であり、共に小片で硯式は明らかでない。調査区域の北辺及び東辺に出土する。東辺出土の1点は、現存長6.3cm、幅6.1cm、厚さ0.9cmである。墨堂と硯唇の一部であり、硯唇の大部分と硯背が全面に渡って剝落している。墨堂幅は5.0cmを計り、僅かに中央部が滑らかである。稚拙な硯縁に沿って滞墨が認められる。硯背には円形をなす打痕が残る。石材は紫色の輝緑凝灰岩である。

他の1点は、現存長2.2cm、幅3.0cmで硯面を欠いている。硯背とみられる裏面には細線状の擦痕が切断面に直交して走行する。黄褐色がかった粘板岩製である。

VI まとめ

調査区域が限定され、調査上明確でない点もあって遺跡の性格や遺物包含層の形成等については明らかではないが、黒沢川岸の段丘上に立地して多量の遺物、主として貯蔵・調理・食膳用の遺物が出土する点で調査区域の周辺、または近接して営まれる生活施設の存在が推定されるものである。

遺物の分布によっては、概して調査区域の北西方向に密であり、特に集中する区域に何らかの関連施設が推定され、特に須恵器の坏の偏在する傾向が認められる点で時間的経過と生活空間の推移を伺うこともできる。しかし、層位的には縄文時代より近代までの遺物が混入して出土し、後世の二次的移動を考慮するならば、いずれも不明といわざるを得ない。

出土遺物は縄文時代前期初頭とみられる繊維土器、近代以後の陶器、時期不明の石硯若干のほかは主として平安時代の土師器及び須恵器である。

土師器は若干のロクロ不使用の甕を除いてすべてロクロ成形によるものである。甕は大部分長胴形のものとみられ、口縁部がくの字状に外反して逸き出され、大部分体部下半に削り調整痕を、上半にロクロ成形痕を有するほか、叩き目の残るものが若干含まれる。そのほか、ロクロ成形により、糸切り無調整の底部を有する小型甕が認められる。坏はすべてロクロ成形され、底部の切り離しはすべて回転糸切りによるものとみられ、少量の手持ちヘラ削り調整されるものが混在する。大別して黒色処理の坏と非黒色処理の坏に分けられるが、後者は所謂赤焼き土器や須恵系土器と呼称されるものと思われる酸化炎焼成の坏である。そのほか、高台付坏・鉢があるが、いずれも器形の大小が推測され、比較的精良な胎土を有し、焼成も良好である。

須恵器は坏・蓋のほか、大型の甕と長頸壺が含まれる。坏は硬質の燻色を呈するものと白色がかった軟質のものが含まれ、底部の切り離しは前者がすべて回転糸切りによっているのに対し、後者はヘラ切りであり、焼成不良のものとみなされる。甕は丸底の大型のものが含まれるが、これより小型のものも推定される。内外面の調整や打圧痕によっては数種に分類されるものの、胎土や焼成に特徴は見いだし得ず、僅かに焼成不良の淡褐色を呈するものが若干含まれるにすぎない。

器種による個体数は全体の器形が明確でないため、その概数を求め得ないが、口縁部及び底部の遺存率によって試算するならば以下のようになる。土師器の坏では内面黒色処理のもの28点、内外面黒色処理のもの5点、非黒色処理のもの193点となり、高台付坏は同様に黒色処理14点、非黒色処理70点となる。須恵器では識別できる底部によって硬質の坏41点、白色がかった軟質の坏12点となり、合せて53点前後と推計される。そのほか、土師器の甕・鉢が24点である。須恵器では蓋3点、甕・壺合せて24点となる。これによって個体数による土師器と須恵器はほゞ

第8表 土器遺存率比較表

遺物＼遺存率			分の1 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
黒色処理	坏・台付坏	口縁		2	(1) 1			2	(2) 2	5	3	(10) 121	(13) 136
		底	2	13	(1) 8	(1) 12	(2) 16	(1) 14	8	(1) 13	1	(3) 59	(9) 146
		台底	7	(1) 4			1	3	(2) 1	1	1	5	(3) 23
	鉢	底								1		2	3
非黒色処理	坏・台付坏	口縁	1	3	4	3	12	16	15	40	35	1,799	1,928
		底	26	41	49	87	97	122	73	96	40	375	1,006
		台底	10	21	13	10	19	29	11	25	5	86	229
	甕・鉢	口縁										364	364
		底	3	3	6	8	1	6	4	7	5	72	115
須恵器	坏	口縁		1		2		1	6	4	2	53	69
		底	1	5	9	6	9	11	3	4	4	15	67
		蓋								1		2	3
	甕・壺	口縁		2	1						1	17	21
		底	2		1	2		2		1		6	14
計			52	96	94	131	157	207	127	199	97	2,989	4,149
比率			1.25%	2.31	2.27	3.16	3.78	4.99	3.06	4.80	2.34	72.04	100.0

（ ）は両面黒色処理

4：1であり、黒色処理のものと非黒色処理のものの割合は1：5.6となる。これを破片数による比率と比較するならば土師器と須恵器は12.5：1となり、器種と細片化の相違によるものと把えられる。しかし、いずれも不確定要素が大きく、器種を含めて組成については推定の域を出るものでない。

土師器及び須恵器の年代についてはこれを一括してみる場合、ロクロ未使用の甕を若干伴い、須恵器にはヘラ切り坏を含んでいるが、ロクロ使用の土師器を主体とする構成であり、ロクロ導入による量産体制が定着する段階と把えられるものである。これに基くならばその上限は、ロクロ土師器の普及する9世紀代に求められるが[注(1)(2)]、土師器の組成や技法によっては平安時代後半にその様相を求めることができるものとみられる。

注(1) 岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代坏形土器」『研究紀要』I 多賀城跡調査研究所（1974）

(2) 北上市教育委員会「尻引遺跡調査報告書」（1977）ほか

写　真　図　版

写真図版目次（下谷地A）

遺跡の位置……図版 1
縄文土器・黒色処理の土師器……図版 2
非黒色処理の土師器(1)……図版 3
同(2)……図版 4
同(3)……図版 5
須恵器(1)……図版 6
同(2)……図版 7

遺物の縮少率は大旨実測図に準じる。( )は実測図№である。

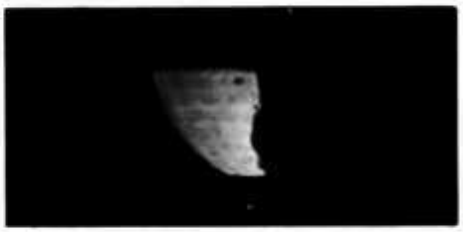
図版１　遺跡の位置

1 (5－1)　2 (5－2)　3 (5－3)　4 (5－4)　5 (5－5)

1 (7－1)

2 (7－2)

3 (7－3)

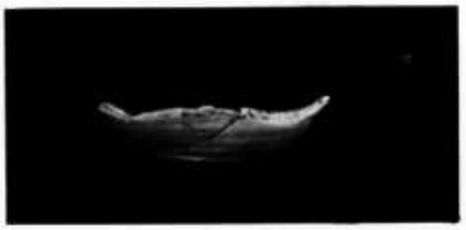


4 (7－4)

5 (7－5)

6 (7－6)

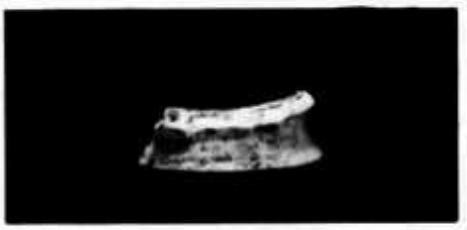
7 (7－7)



8 (7－8)

9 (7－9)

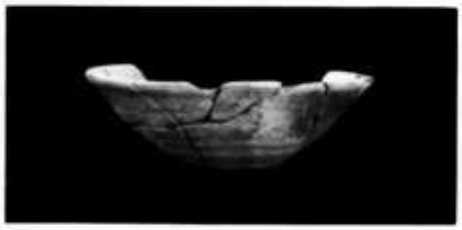
10 (7－10)



11 (7－11)

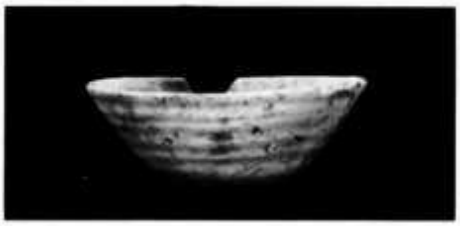
12 (7－12)

図版 2　縄文土器・黒色処理の土師器

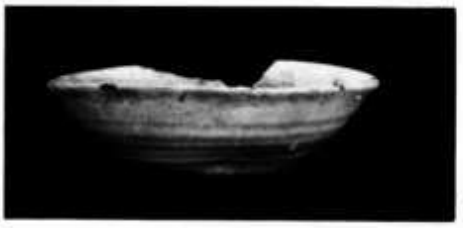


1
(9－1)

8
(9－8)

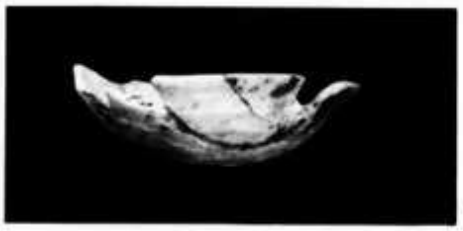


2
(9－2)



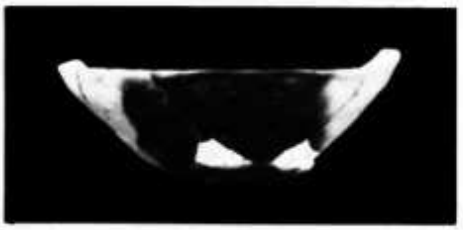
9
(9－9)

3
(9－3)

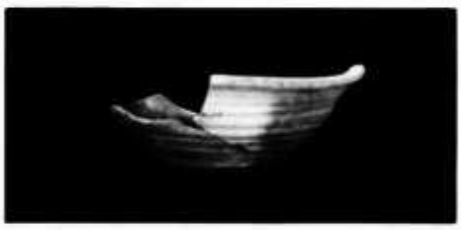


10
(9－10)

4
(9－4)



11
(9－12)

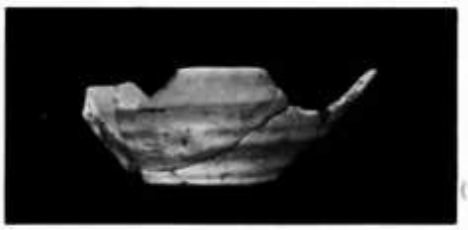


5
(9－5)

12
(9－13)

6
(9－
6)

13
(9－14)

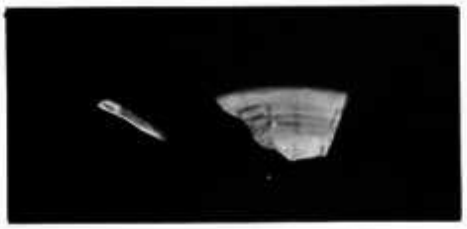


7
(9－
7)

14
(9－15)

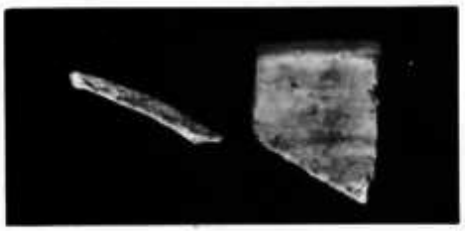
図版 3　非黒色処理の土師器

1
(10—1)



2
(10—2)

3
(10—3)



4
(10—4)

5
(10—5)

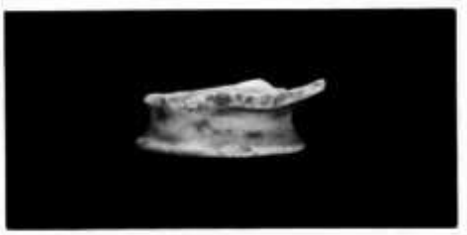
6
(10—6)

7
(10—7)

8
(10—8)

9
(10—9)

10
(10—10)



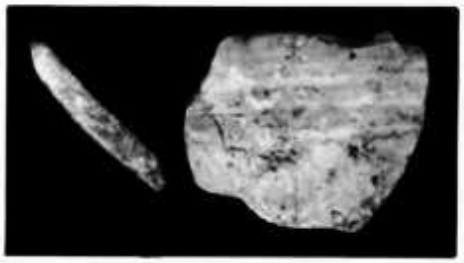
11
(10—12)

12
(10—13)

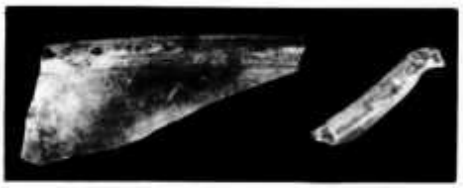
13
(10—15)

14
(10—16)

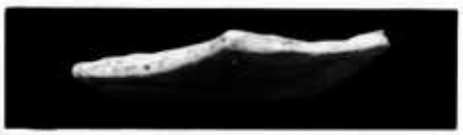
図版 4　非黒色処理の土師器



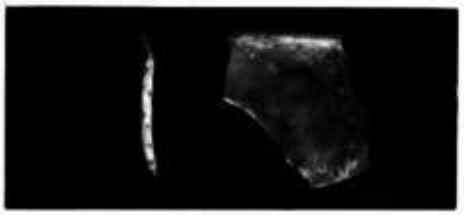
1
(11—1)



2
(11—2)



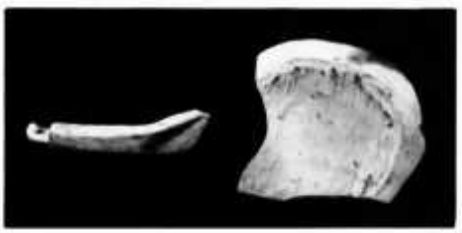
3
(11—3)



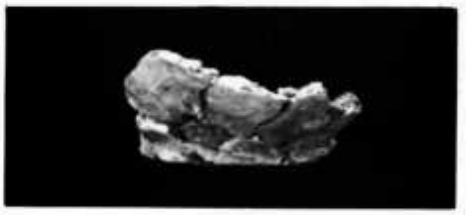
4
(11—4)

5
(11—5)

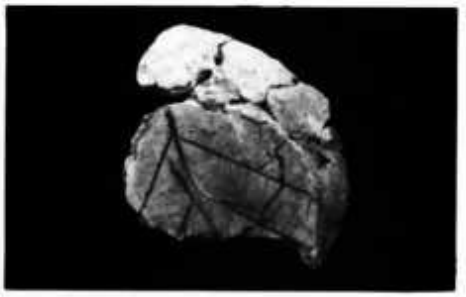
6
(11—6)



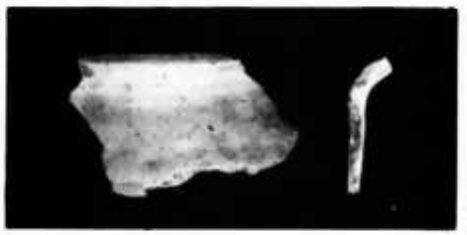
7
(11—12)



8
(11—7)



9
(11—8)

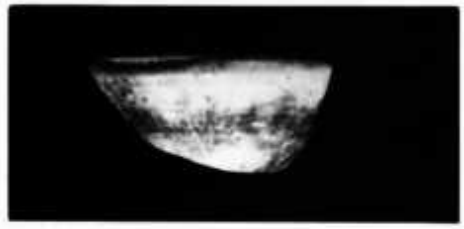


10
(11—9)

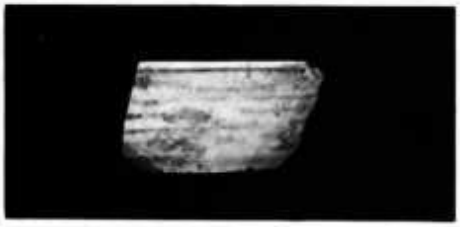
11
(11—10)

12
(11—11)

図版 5　非黒色処理の土師器

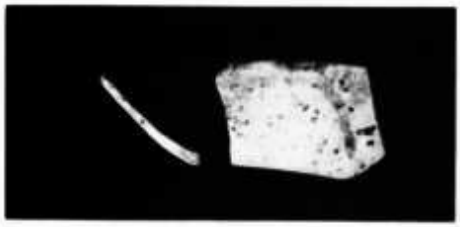


1
(13－1)



2
(13－2)

3
(13－4)

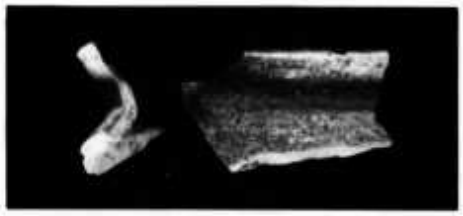


4
(13－5)

5
(13－6)

6
(13－7)

7
(13－9)

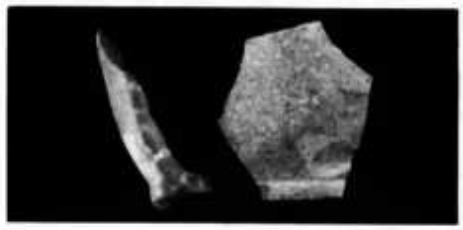


8
(14－1)

9
(14－2)

10
(14－3)

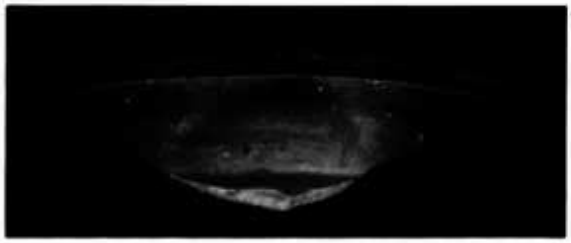
11
(14－4)



12
(14－5)

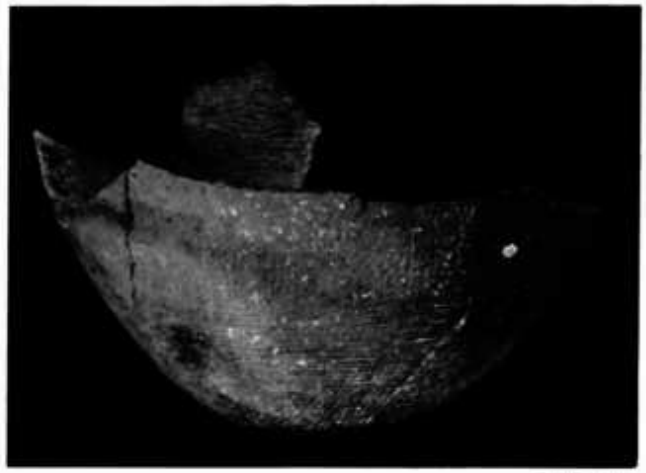
13
(14－6)

図版6　須　恵　器(1)



1 (15—1)

2 (15—2)



3 (15—3)

4 (15—4)

図版 7　須　恵　器(2)

下谷地（しもやち）B遺跡

遺　跡　名：下谷地B遺跡(略号SY74)
遺跡所在地：和賀郡江釣子村 北鬼柳
第12地割13ほか
調査期間：昭和49年6月19日～8月1日
調査対象面積：600㎡
発掘調査面積：580㎡

図表目次

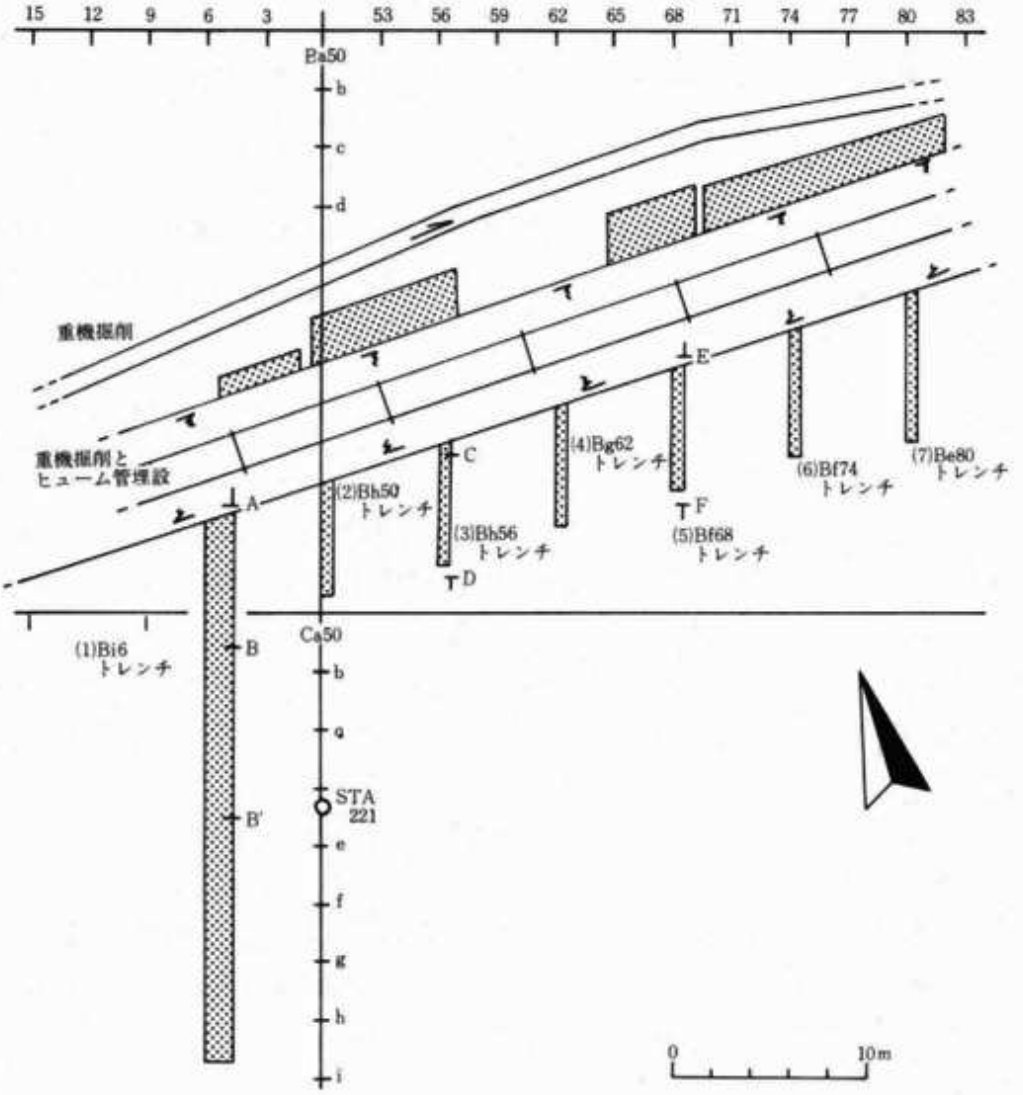
第1図　グリット配置と調査区域図 ……125
第2図　土層断面図 ……127
第3図　遺物包含状況図 ……129
第4～11図　トレンチ出土遺物(1)～(8)……131
第12図　縄文土器 ……142
第13～14図　石器(1)～(2)……143
第15～19図　黒色処理の土器(1)～(5)……147
第20図　黒色処理坏の法量比 ……155
第21～24図　黒色処理の土器(6)～(9)……157
第25～29図　非黒色処理の土器(1)～(5)……161
第30図　非黒色処理坏の法量比 ……168
第31～33図　非黒色処理の土器(6)～(8)……170
第34～36図　須恵器(1)～(3)……176
第37図　須恵器坏の法量比 ……180
第38～39図　須恵器(4)～(5)……181
第40図　陶磁器 ……185
第41図　鉄・石製品 ……187
第42～50図　木製品(1)～(9)……188
第51図　坏の法量比分布図 ……204
第52図　落合II遺跡出土坏の法量比分布図 ……205
第53～55図　墨書文字(1)～(3)……208

第1表　トレンチ出土遺物集計表 ……128
第2～4表　トレンチ出土
土器観察表(1)～(3)……132
第5表　トレンチ外出土遺物集計表 ……142
第6表　石器一覧表 ……144
第7表　坏における残存率集計表 ……145
第8表　黒色処理の土器観察表(1) ……152
第9表　黒色処理坏の法量値集計表 ……154
第10表　黒色処理の土器観察表(2) ……158
第11表　非黒色処理の土器観察表(1) ……165
第12表　非黒色処理坏の法量値集計表 ……168
第13～15表　非黒色処理の
土器観察表(2)～(4) ……171
第16表　須恵器観察表(1) ……178
第17表　須恵器坏の法量値集計表 ……179
第18表　須恵器観察表(2) ……183
第19表　器種別陶磁器一覧表 ……184
第20表　陶磁器観察表 ……186
第21～25表　木製品計測表(1)～(5)……189
第26表　遺物集計表 ……198
第27表　器形別土器一覧表 ……200
第28表　器面調整一覧表 ……202
第29表　器種別計測表 ……203
第30表　坏・高台付坏容量集計表 ……206
第31表　墨書文字一覧表 ……207
第32表　用途別木製品 ……212

I　位置と立地（下谷地A遺跡第1図　同図版1）

下谷地A遺跡に重複する主として南半部分にあたり、下谷地A遺跡に既述する通りである。現状は下谷地A遺跡における調査区域の大部分をなす水田及び畑地の南端より道・水路を境にして若干低位となる水田である。標高は道・水路に沿う畑地で72.20m、南の水田では71.27mである。

II　調査の経過（第1図）



第1図　グリット配置と調査区域図

下谷地A遺跡の南端を東西に走る道・水路が重機によって開削され、これに伴って多量の遺物が出土した。これにより、昭和49年に至って発掘調査したものである。

グリット配置は、下谷地A遺跡における基点を踏襲して区割する。調査区域は東西81.6m、南北47.0mに及び、B～C区にあたる。東西の道路に沿って東流する北水路以北では東西12.0m、南北2.6mを最大に4区域を設定し、南水路以南では東西1.5m、南北28.2mのBi 6トレンチのほか、6トレンチに設けて調査するものである。

III　遺跡の層序（第2図）

北水路に沿った畑地における層序は明らかでないが、南側水路以南では以下の通りである。

第1層　黒褐色土　植物根・礫を含み、粘性のある腐植質土である。層厚は一様でないが、0.20～0.30mを計る。耕作土とみられ、Bg 68トレンチ南端では消滅して明確でない。

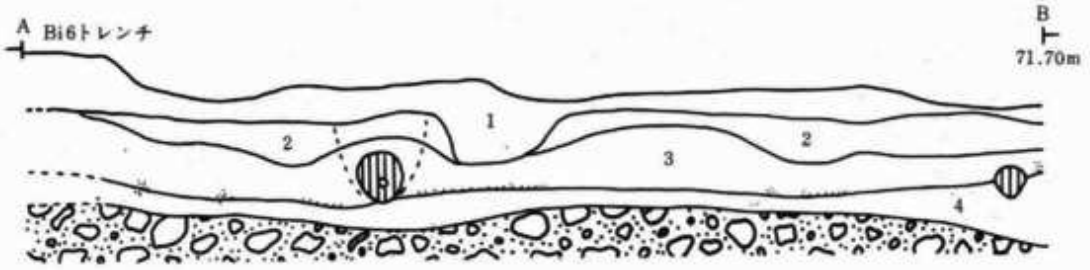
第2層　黒 色 土　植物根・礫のほか、炭化物・焼土粒を含む腐植質土である。層厚0.20～0.30mであり、Bh 56トレンチでは断続している。また、Bg 68トレンチでは川砂の混入するオリーブ黒色腐植質土がブロック状をなして認められ、共に第3層を被っている。

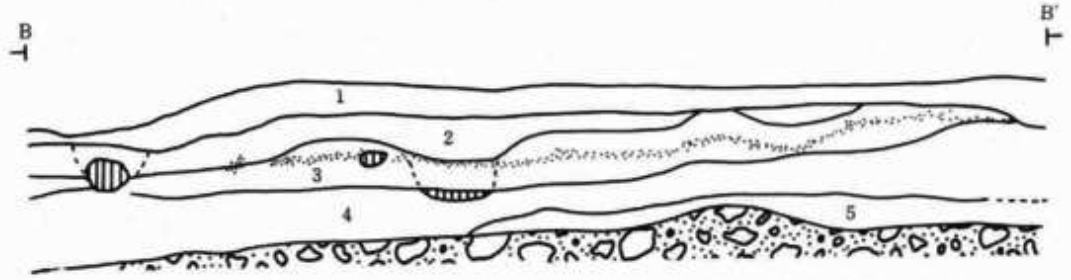
第3層　黒褐色土　僅かに粘性のある腐植質土であり、Bi 6トレンチ南端で消滅する。Bi 6・Bh 56トレンチには粉状パミスが混入し、北側では最下面に、南側では上・中位層にあって一様でない。層厚は最大0.50mである。

第4層　黒 色 土　植物根や炭化物粒を含み、やゝ粘性がある。層厚は0.20～0.50mを計り、大部分は砂礫層にのる。

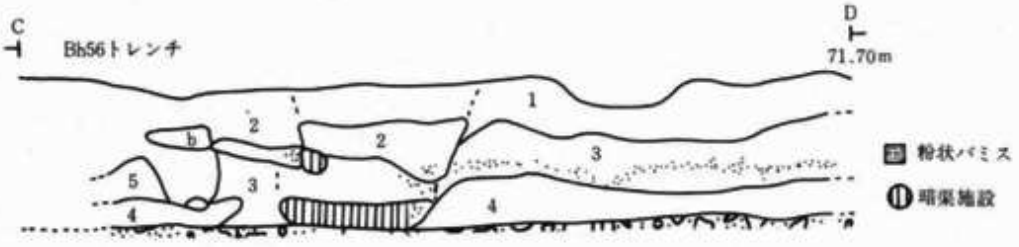
第5層　黒色粘土　粘性が強く、青白色粘土を若干混入する。Bi 6トレンチの南端では第4層によって、Bh 56・Bg 68トレンチではそれぞれ第1・3層によって被われ、共に断続している。また、Bg 68トレンチには炭化物を多量に混入するブロックがある。層厚はBg 68トレンチで0.05～0.15mである。これより下層は砂礫層である。

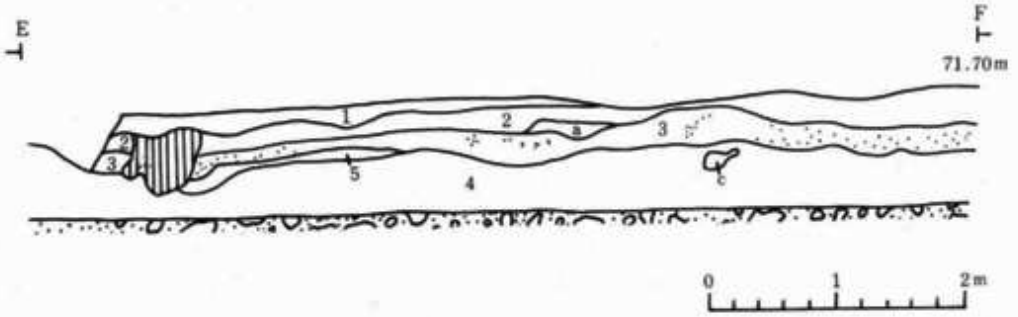
遺物はBi 6トレンチ北端に集中し、第1～4層に包含される。特に第3・4層では土器及び木製品を含む植物遺体が多く認められる。しかし、遺構は近・現代の暗渠施設を除いて確認されず、旧河道とされる部分も未確認である。





1．黒 褐 色 土(10YR2/2)粗粒で粘性がある　植物根・礫を含む
2．黒色腐植土(10YR1/2)粗粒で粘性が僅かにある　植物根・礫・炭化物・焼土粒を含む
3．黒色腐色土(2.5Y 1/3) 粗粒で粘性が僅かにある　植物遺体・粉状パミスが混入する
4．黒　色　土(N 2/0)　粗粒でやゝ粘性がある　植物根・炭化物を含む
5．黒 色 粘 土(N 2/0)　粗粒で粘性がある　青白色粘土を若干混入する　植物遺体を含む
a．オリーブ黒色腐植質土で川砂を混入する　b．黒色粘土ブロック　c．炭化物を多量に含むブロック





第2図　土層断面図

Ⅳ　トレンチの出土遺物

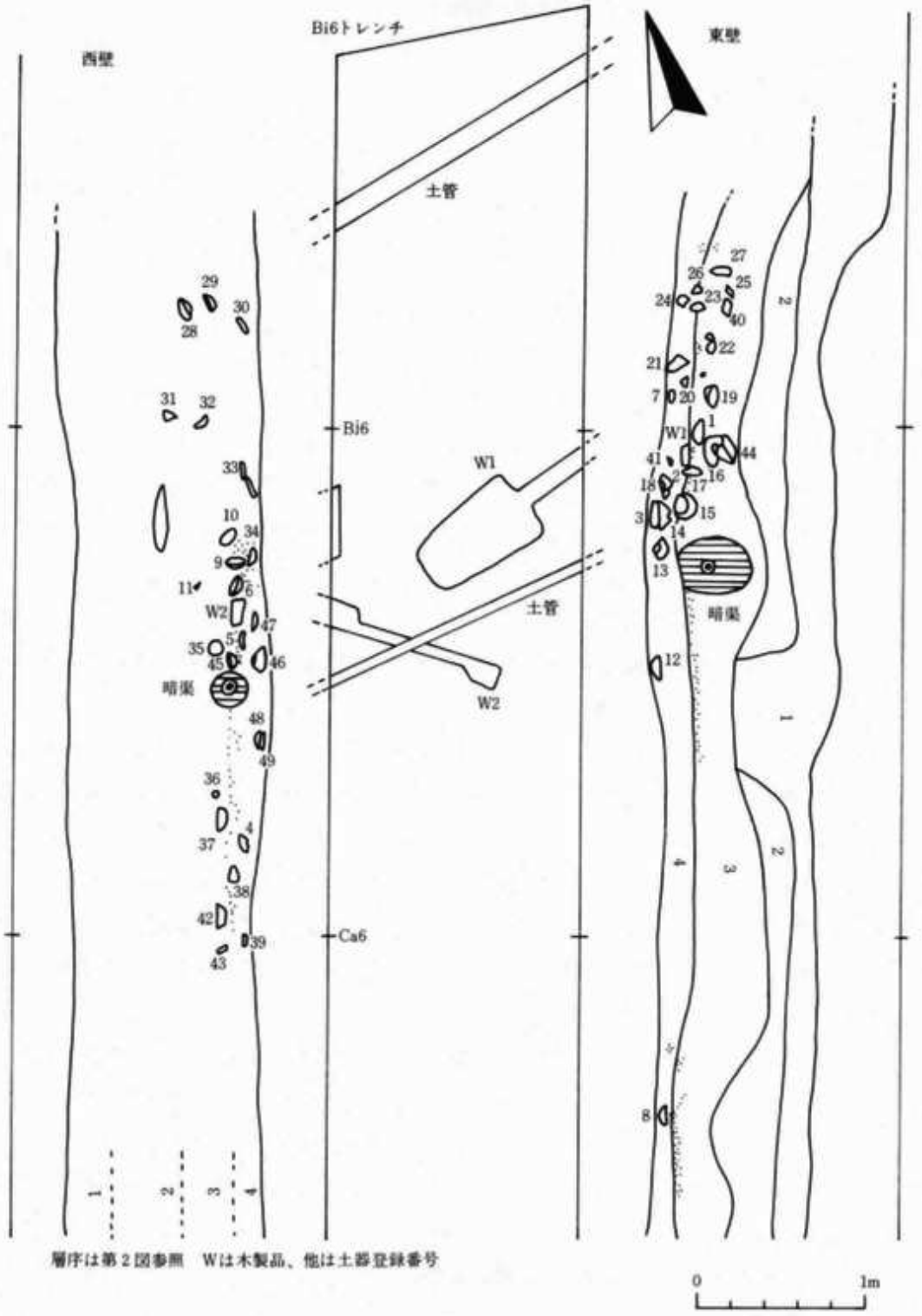
土師器・須恵器・石製品・木製品を合せて506点である。その大部分は小破片であり、出土地点や層位の不明なものが含まれるが、次表によって分類するならば土師器が449点で88.7%を占めてもっとも多く、次いで須恵器54点、10.7%、木・石製品0.6%の順となる。

トレンチ別では西端のBi 6トレンチに全体の61.3%が集中し、他はBg 62・Bh 56・Be 80トレンチに若干多い。前者はトレンチの規模に対応するものであるが、東西間にはやゝ波状に増減する傾向が認められる。

第1表　トレンチ出土遺物集計表

トレンチ				(1) Bi 6					(2) Ch50	(3) Bh56	(4) Bg62		(5) Bf68	(6) Bf74	(7) Be80	不明	計		
層位				1/2	3	3/4	4	不明	2	1/2	2	不明	1/2	2	2	1/2か	小計	合計	比率
土師器	黒色処理	坏	口	(4)4	(1)4	3	9	(1)6			2	3			2	1	42	114	%22.5
			体	3	1	1	3	3			4	4		1	1		21		
			底	4	1		4	(1)36	1		2				2		51		
		高台付坏	口	1			(1)								(1)		3	11	2.2
			体												1		1		
			底脚	2				2			2				1		7		
		鉢	口					1									1	1	0.2
	非黒色処理	坏	口	22	15	12	5	16	1	3		8	2	1	7	1	83	216	42.7
			体	13	1		1	3		5	1	4	2	3	5		38		
			底	18			1	50		6	2	12	2		4		95		
		高台付坏	口	3				1				6	2	1	8		21	48	9.5
			体					7		1		1			1		10		
			底脚	5				6		2		3			1		17		
		鉢・甕	口	1				1	1	3	2	3	1	1	1		14	59	11.7
			体	7						18	2	5	3		4		39		
			底	2				1		2		1					6		
須恵器		坏	口			1	6	8	1	3			2		1		22	35	6.9
			体				1			1					1		3		
			底	1			2	4		1	1		1				10		
		壺・甕	口		1												1	19	3.8
			体	2			1			4	2	4	3				16		
			底	1				1									2		
石製品										1							1	1	0.2
木製品						1	1										2	2	0.4
計	小計			93	14	18	35	150	4	50	20	54	18	7	41	2	506		100.1
	合計			310					4	50	74		18	7	41	2	506		
	比率			61.3 %					0.8	9.9	14.6		3.6	1.4	8.1	0.4	100.1		

口縁部～底部の破片は口縁部に含み、（　）は両面黒色処理



第3図　遺物包含状況図

1　土師器（第3～8図　第1・2表　図版1～5）

還元炎焼成によるくすべ色、または灰白色を呈する須恵器を除いて酸化炎による焼成とみられる橙色、褐色系の色調を有するものすべてを含むものである。大別して内面、または内外面に黒色処理の施されるものとこれを認めない非黒色処理の土器に2分される。黒色処理の土師器には坏と高台付坏、鉢があり、合せて126点である。非黒色処理のそれでは坏、高台付坏、鉢、甕が含まれ、323点である。その比率は2：5となり、非黒色処理の土器が圧倒的に多い。

器種別では小破片のため明確でないものが若干あるが、坏330点、高台付坏59点、鉢・甕合せて60点となり、坏は全体の73.5%を占めている。

(1)　黒色処理の土器（第3～5図　第1・2表　図版1・2）

内面、または内外面を黒色処理する土師器は合せて126点であり、全体の24.9%である。完形品は含まれず、小破片が多いが、器種は坏、高台付坏、鉢と推定される。坏がもっとも多く、坏と高台付坏の破片数による比率はほゞ10：1の割合となる。そのうち、内外面黒色処理される坏と高台付坏は合せて11点である。鉢は内面黒色処理の1点である。出土地点別ではBi 6トレンチに集中し、比較的上層に分布している。

坏（第3・4図　第2表　図版　）

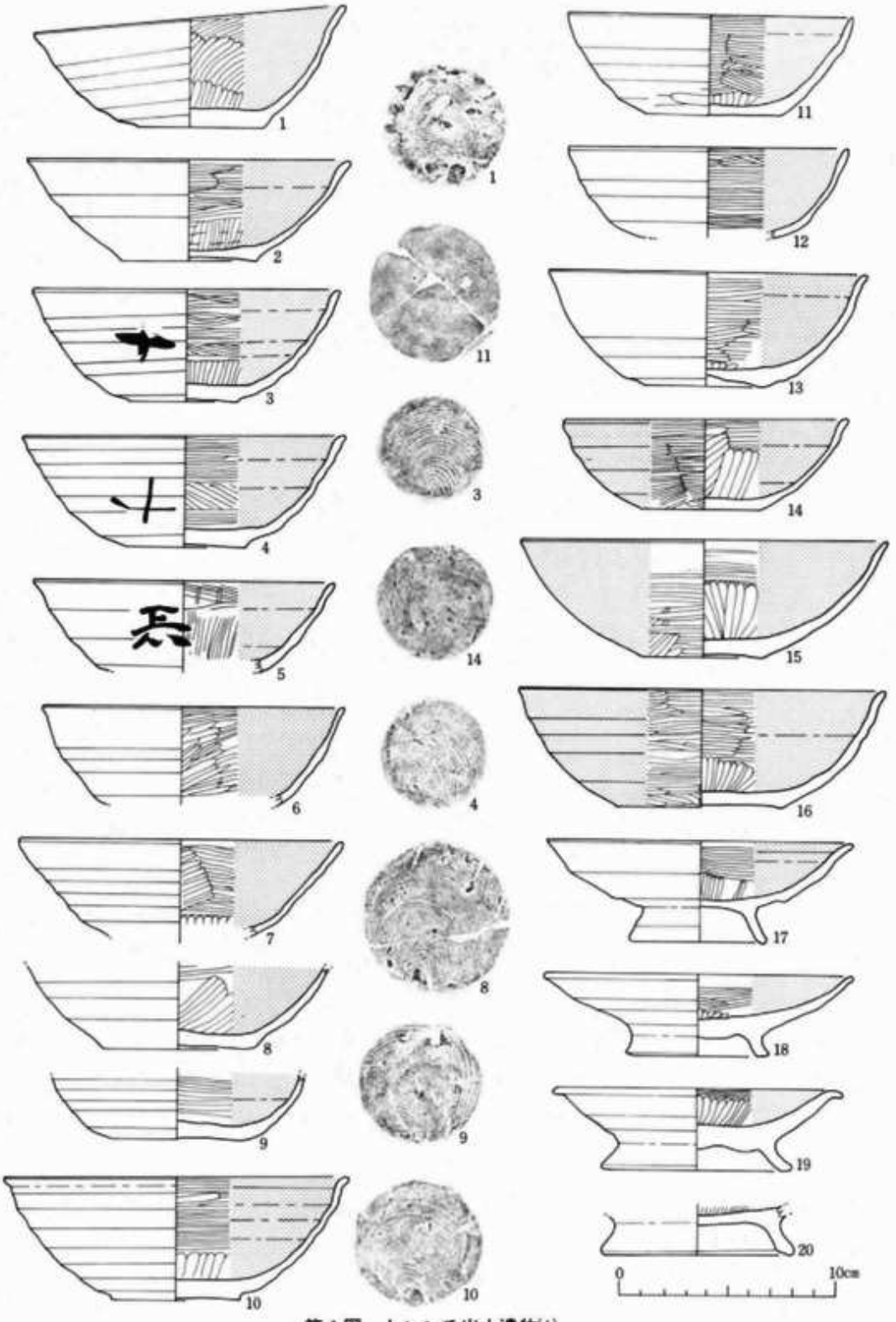
114点のうち、口縁部より底部まで残存するものは7点である。9点が内外面黒色処理されるほかは内面を黒色処理する坏である。

内面黒色処理の坏では、体部よりほゞ直線状に外傾するものとやゝ内彎して立ちあがるものがあり、後者では更に口縁部の外反するものが含まれる。共に強弱があり、口縁部にやゝ肥厚するものが多い。

体部は共にロクロ成形痕を残し、特に外面に強い。外面の篦削りされるものは少なく、体部下端に手持ち篦削りされるものは底部に篦削りされるものである。内面は底部が放射状に篦磨きされるのに対し、体部より口縁部にかけては横、または斜方向に認められ、底部に先行して調整されるものが多い。

底部は体部下端より厚手となり、体部境に稜を残して切り離されるものと滑らかに丸味をもって底部に続くものがある。共に回転糸切りによって切り離され、外面中央部に僅かにあがるものが多い。また、周縁には不整な凹凸を残すものや全体に歪みのあるものが含まれる。切り離しの不明なものは全面が篦削りされるものであるが、中央部に回転糸切り痕を残して篦削りされるものがあり、すべて回転糸切りによる切り離しと推定される。内面の篦磨きは肥厚する中心部より放射状を呈して認められ、横、または斜方向にのみよるものが若干含まれる。

胎土は細粒のものが多いが、砂質で粗粒のものや小石を含むものがあり、色調はいずれもにぶい褐色、または橙色系を呈する。底部、または体部外面に黒斑を残すものがある。



第4図　トレンチ出土遺物(1)

第2表　トレンチ出土土器観察表 (1)

実測図No.	登録No.	出土地点・(トレンチ)	層位	器種	残存率 口縁	残存率 底部	口径 cm	底径 cm	器高 cm	径高指数	外傾指数	器面調整 内面	器面調整 外面	切り離し調整	外面色調	墨書文字 文字	墨書文字 位置	墨書文字 No.	備考
1	1	Bi6	4	坏	分の1/2	分の1/1	14.4	5.7	5.7	39.6	29.8	ヘラミガキ	横放射 ロクロナデ	糸切り	にぶい橙色				容量(366.7)cc
2	6	〃	〃	〃	3	3	(14.0)	(5.8)	4.7	(33.6)	48.9	〃	〃 〃	〃	にぶい橙				
3	15	〃	3～4	〃	2	1	14.3	5.1	5.3	37.1	37.7	〃	〃 〃	〃	橙	十	体部	141	
4	21	〃	4	〃	3	1	(15.0)	5.1	5.2	43.3	43.3	〃	横斜 〃	〃	にぶい赤褐	〃	〃	74	底面に黒斑あり
5	22	〃	3	〃	3		(14.0)					〃	横放 〃	〃	にぶい橙	〃	〃	135	
6	20	〃	4	〃	4		(14.0)					〃	斜 〃		にぶい褐				
7	17	〃	〃	〃	6		(13.0)					〃	横斜 〃		〃				
8	41	〃	3～4	〃		1		7.3				〃	横放 〃	糸切り	にぶい橙				体部下端に黒斑あり
9	46	〃	4	〃		1		6.0				〃	〃 〃	〃	橙				黒色処理消失
10	38-1	〃	〃	〃	8	1	(16.0)	5.9	5.7	(35.6)	43.1	〃	〃 〃	〃	にぶい橙				
11	51	〃	?	〃	2	1	13.2	6.2	4.6	34.8	32.6	〃	〃 ロクロナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい黄橙				(335.2)cc
12	11	〃	3	〃	6		(13.0)					〃	横 ロクロナデ		にぶい褐				黒色処理消失
13	52	?		〃	4	2	(14.8)	5.6	5.3	(35.8)	35.8	〃	横放 〃	糸切り	褐・黒褐				
14	37	Bi6	3	〃	2	1	13.2	5.5	4.3	(32.6)	43.0	〃	〃 ヘラケズリ ヘラミガキ 横	ヘラケズリ	浅黄橙				一部黒色処理消失 (317.4)cc
15	5	〃	?	〃	10	1	(17.0)	5.6	5.4	(31.8)	46.3	〃	〃 ヘラミガキ 横	糸切り	黒				
16	3	〃	〃	〃	4	2	(17.0)	6.8	5.5	(32.4)	36.4	〃	〃 〃 〃	ヘラケズリ	〃				(568.5)cc
17	1	〃	2	高台付坏	5	1	(14.2)	5.5	4.7	(31.8)	47.7	〃	〃 ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい黄橙				
18	25	〃	?	〃	2	3	14.4	(6.1)	3.8	20.1	84.5	〃	〃 〃	唐花状	にぶい褐				(124.7)cc
19	14	〃	〃	〃	10	3	(13.4)	(8.8)	3.8	19.4		〃	〃 〃	ロクロナデ	〃				
20	2	〃	2	〃		3		(7.0)				〃	放 〃	糸切り	にぶい黄橙 褐 灰				
21	2	〃	?	鉢	7	～10	(23.6)	(10.6)	(9.1)			〃	横 ロクロナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい橙				口縁部のみ黒色

( ) は推定値

墨書文字は5点にあり、共に体部外面に位置する。「十」2点のうち1点は、底部を上方にして記される。

口径はやゝ歪みのあるものを含むが、13.0～16.0cmを計り、底径は5.1～7.2cm、器高4.7～5.7cmである。径高指数は33.6～39.6となり、若干大小のばらつきがある。しかし、器形上の変化は殆ど認められない。また、層位的にも混在して特徴は見いだし得ない。

内外面黒色処理の坏は、内黒処理の坏に更に外面に横方向の篦磨きが施される。器形は体部より内彎して立ちあがり、口縁部では僅かに外反して強弱がある。底部の切り離しは回転糸切りのほか、全面を篦削りされて不明となるものがある。その他は内黒処理の坏とほゞ同様である。

口径は(13)を含めて大小があり、最大17.0cmと推定される。底径は5.5～6.8cm、器高は4.3～6.8cmを計り、径高指数は31.8～32.6となって内黒処理のそれに比してやゝ低い。

高台付坏（第3・4図　第2表　図版2）

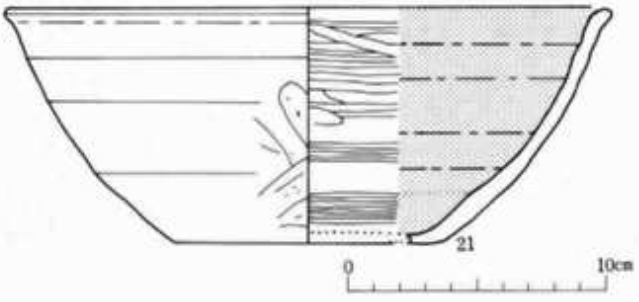
内外面黒色処理の2点を合せて黒色処理の高台付坏は11点である。口縁部より高台部まで遺存するものは内面黒色処理の坏1点である。坏部は器高が全体に低く、皿型を呈するものと内彎して立ちあがり、これより深いものに2分される。図化する3点は共に前者に含まれ、口縁部が外反して薄く逸き出されるものと端反りするものである。体部にはいずれもロクロ成形痕が残る。他はすべて坏の場合と同様である。

高台は付高台で全体に低く、直線状に外傾するが、高台端でやゝ外反して稜をなすもの、丸味をもつものがある。後者では高台端部に肥厚して幅広となり、高台内側に沈線状に微かな段を形成するものが含まれる。高台内外面は共に滑らかにロクロナデされ、底部の切り離しの不明となるものと回転糸切り痕を残存させるものがある。大部分は後者の形状をなすが、前者には全面ロクロナデされるものと菊花状に篦状工具の痕跡を有するものが含まれる。

口径は13.4〜14.4cm、高台径5.5〜8.8cm、器高3.8〜4.7cmを計る。坏部による径高指数は19.4〜21.8で小さく、外傾指数は67.7〜84.6と坏に比して著しく高い。

鉢（第5図　第2表　図版2）

口縁部より底部まで残存する破片1点である。体部より内彎気味に立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。体部は外面下半に不整な篦削り痕があり、内面は横方向の篦磨きが施される。底部は全面に篦削りされ、切り離しは不明である。



第5図　トレンチ出土遺物(2)

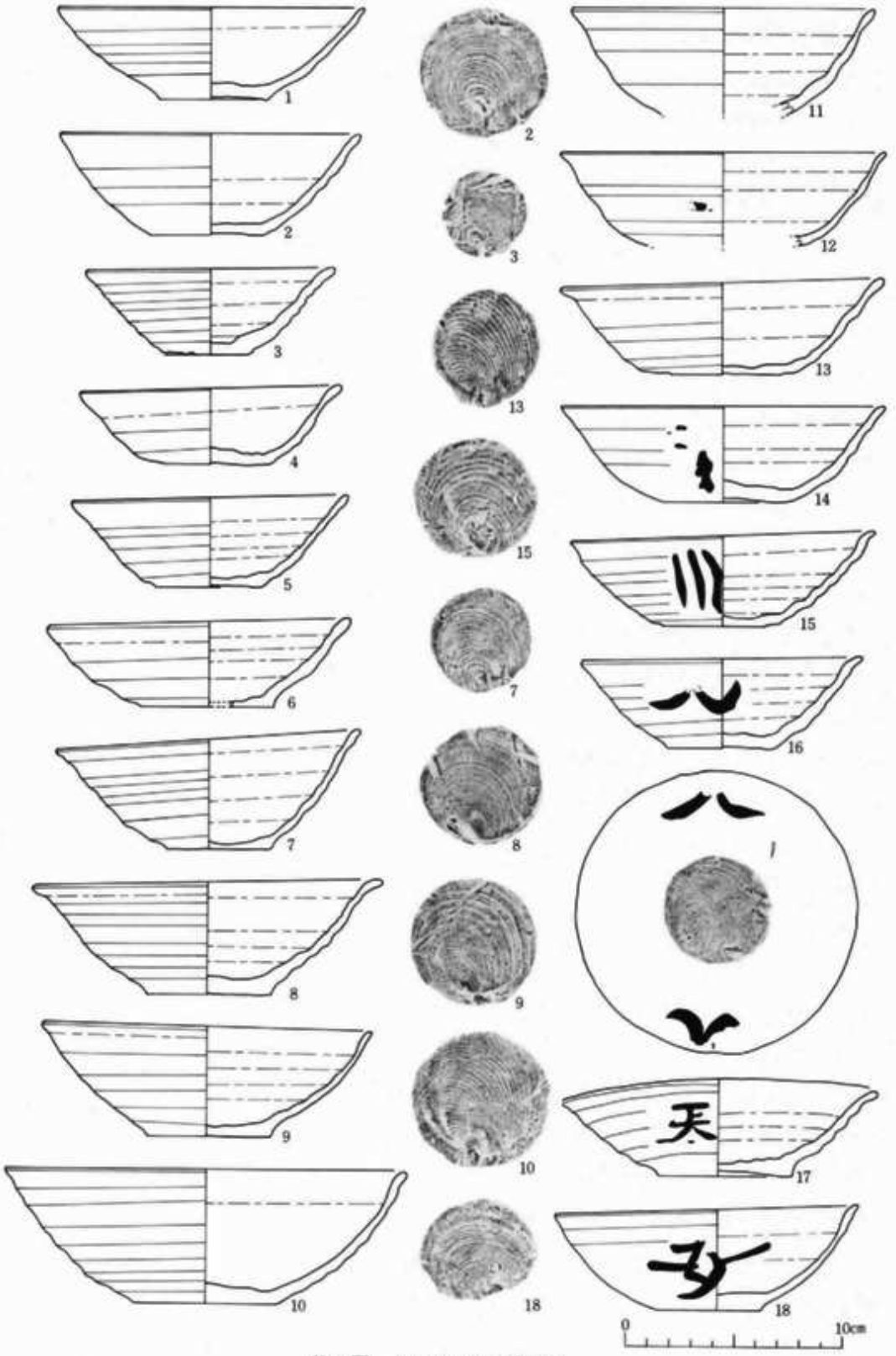
口縁部の内面を除いてにぶい橙色を呈し、胎土は0.3〜0.5cm前後の小石を含み、全体に粗雑である。口径23.6cmと推定され、器高は9.1cmを計る。

(2)　非黒色処理の土師器（第3・6〜8図　第1・3表　図版1・3〜5）

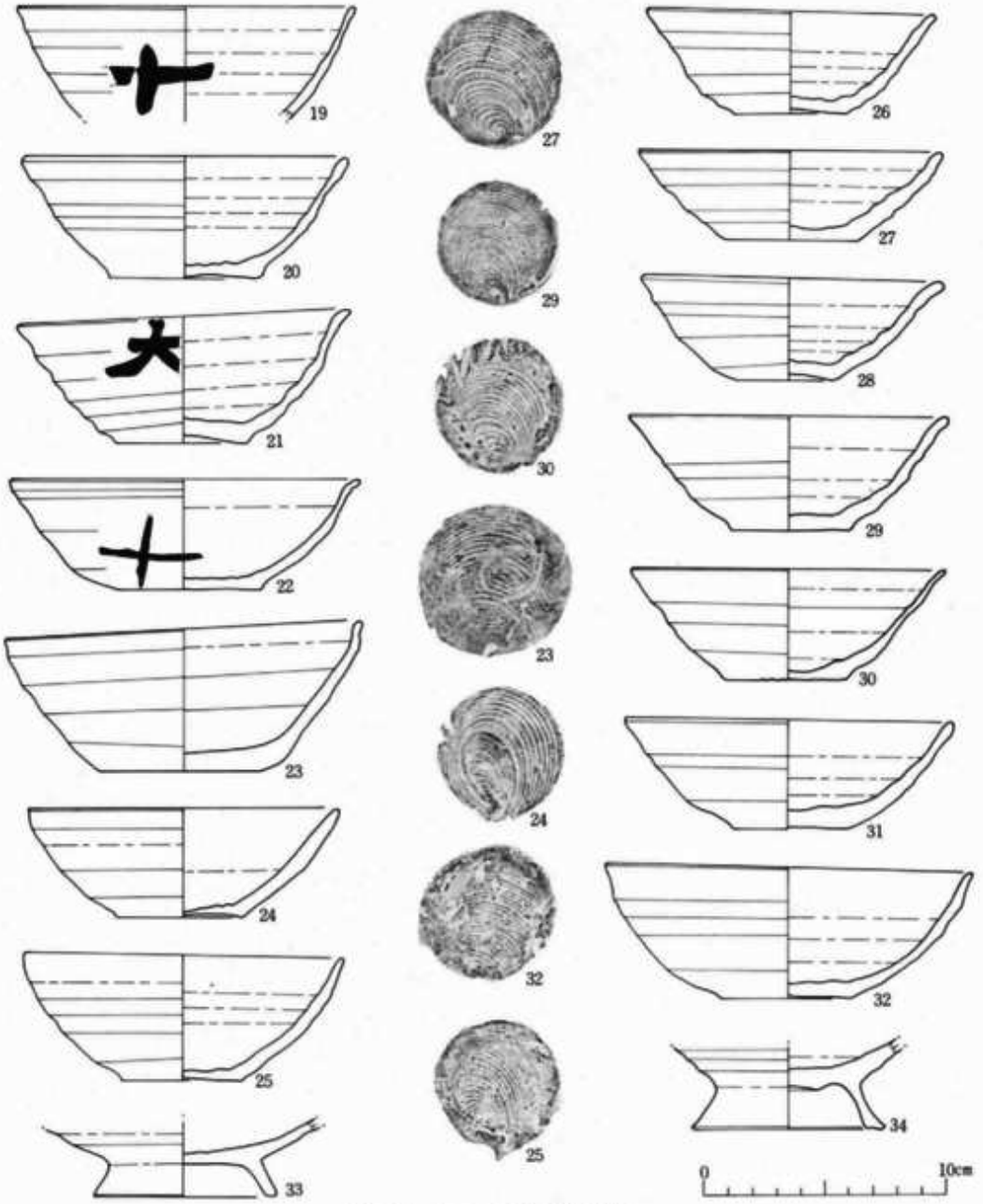
非黒色処理の土器は坏、高台付坏、鉢、甕を合せて323点である。坏の完形品4点が含まれるほかはすべて破片である。破片数による割合では、坏がもっとも多く66.9%を占め、高台付坏を含めて81.7%にのぼる。鉢・甕はそれぞれ1.5、16.7%である。

坏（第3・6〜7図　第1・3表　図版1・3・4）

口縁部83点、体部38点、底部95点であるが、口縁部及び体部片には坏と識別できないものが含まれ、実数では多少これより少ないものとみられる。完形品4点を含め、図化できたものは24点である。すべてロクロ成形される黄橙色、または褐色系の色調を呈するものである。



第6図　トレンチ出土遺物(3)



第7図　トレンチ出土遺物(4)

口縁部は体部に続いてほゞ直線状に外傾するもの、内彎して立ちあがるものがあり、後者は更に直上に逸き出されるものと外反して端反りするものがある。口縁端部はやゝ肥厚するものが大部分である。

体部は下方ほど肥厚するが、底部境が丸味をなすものは殆ど変化がない。内外面は口縁部直下よりロクロ成形痕を有し、特に体部外面に著しい凹凸を残すものが含まれる。また、底部と

第3表　トレンチ出土土器観察表 (2)

実測図No	登録No	出土地点・(トレンチ)	層位	器種	残存率 口縁	残存率 底部	口径	底径	器高	推高指数	外傾指数	器面調整 内面	器面調整 外面	切り離し調整	色調 内面	色調 外面	墨書文字 文字	墨書文字 位置	墨書文字 No	備考
					分の1	分の1	cm	cm	cm											
1	1	Bg62	2	坏	2	1	14.2	5.0	4.3	30.3	58.1	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				容量(309.3)cc
2	27	Bi6	2	〃	2	1	13.9	5.3	4.7	33.8	66.9	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄色				(320.4)cc
3	10	〃	3	〃	2	1	11.5	4.2	4.1	35.7	53.7	〃	〃	〃	にぶい黄橙	橙				(166.7)cc
4	28	〃	〃	〃	2	2	12.1	5.2	3.7	30.6	48.6	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙				
5	29	〃	〃	〃	2	1	12.8	5.0	4.4	34.4	47.7	〃	〃	〃	〃	橙				(250.0)cc
6	42	〃	〃	〃	2	1	14.0	6.3	4.5	32.1	42.2	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙				
7	19	〃	〃	〃	1	1	14.3	5.0	5.6	39.2	42.9	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙				305.6cc
8	16	〃	〃	〃	2	1	16.2	5.8	5.4	33.3	59.6	〃	〃	〃	〃	〃				
9	45	〃	〃	〃	2	1	15.2	6.1	5.6	36.8	41.1	〃	〃	〃	〃	橙				外面に煤付着 (453.7)cc
10	6	〃	〃	〃	2	1	18.6	6.6	6.6	35.5	40.9	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙				(805.5)cc
11	40	〃	〃	〃	4		(14.0)					〃	〃		橙	黒 褐				外面に煤付着
12	26	〃	3~4	〃	3		(15.0)					〃	〃	糸切り	にぶい橙	にぶい黄橙	□	体部	193	
13	44	〃	〃	〃	2	1	15.0	5.3	4.5	30.0	53.3	〃	〃	〃	にぶい黄橙	〃				(348.2)cc
14	43	〃	〃	〃	4	1	(15.0)	5.4	4.4	(29.3)	56.8	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい橙	□	体	304	
15	9	〃	〃	〃	2	1	14.1	5.6	4.5	31.9	56.7	〃	〃	〃	橙	暗 褐	川	〃	167	(281.5)cc
16	35	〃	〃	〃	1	1	13.0	5.0	4.2	32.3	53.6	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	人?	〃	169	237.3cc
17	27	〃	〃	〃	2	1	14.6	6.2	4.3	29.5	55.8	〃	〃	〃	橙	〃	天	〃	134	(205.6)cc
18	32	〃	〃	〃	4	1	(14.0)	5.3	4.9	(35.0)	45.3	〃	〃		にぶい橙	〃	安	〃	157	
19	46	〃	4	〃	5		(14.0)					〃	〃	糸切り	にぶい黄橙	にぶい黄橙	十	〃	303	
20	49	〃	〃	〃	8	2	(14.0)	6.3	5.0	(35.7)	41.0	〃	〃	〃	〃	〃				(250.0)cc
21	38.2	〃	〃	〃	2	2	13.8	5.6	5.5	39.9	44.0	〃	〃	〃	〃	〃	大?	体	192	
22	34	〃	〃	〃	2	1	14.5	6.2	4.6	31.7	46.7	〃	〃	〃	橙	にぶい橙	十	〃	142	(357.4)cc
23	4	〃	〃	〃	2	1	14.8	6.5	6.2	41.9	34.7	〃	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙				(468.5)cc
24	1	不明		〃	2	1	12.9	5.3	4.5	34.9	46.7	〃	ロクロナデ	糸切り	にぶい橙	にぶい褐				(233.3)cc
25	30	Bi6	不明	〃	2	1	13.2	5.0	5.2	39.4	36.5	〃	〃	〃	橙	橙				(298.2)cc
26	22	〃	〃	〃	2	1	11.9	4.6	4.2	35.3	45.2	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙				(166.7)cc
27	9	〃	〃	〃	1	1	12.6	5.5	3.7	29.4	53.2	〃	〃	〃	に 黄 橙	浅 黄 橙				203.7cc
28	7	〃	〃	〃	1	1	12.5	4.1	4.3	34.4	54.0	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙				213.7cc
29	15	〃	〃	〃	2	1	13.2	4.9	4.8	36.4	45.8	〃	〃	〃	橙	浅 黄 橙				(279.6)cc
30	19	〃	〃	〃	2	1	13.0	5.0	4.6	35.4	52.2	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙				煤付着 (257.4)cc
31	50	〃	〃	〃	2	1	13.6	4.8	4.6	33.8	39.6	〃	〃	〃	〃	〃				(253.0)cc
32	18	〃	〃	〃	2	1	15.2	5.3	5.4	35.5	38.9	〃	〃	〃	橙	にぶい橙				(435.2)cc
33	1	Bi56	2	高台付坏		3		(8.0)				〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙				
34	1	Bg62	不明	〃		1		7.5				〃	〃	糸切り ロクロナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙				
35	1	Bi6	〃	鉢	~10		(30.5)					〃	ロクロナデ ヘラケズリ		にぶい橙	にぶい橙				内面に煤付着
36	10	〃	〃	壺	~10		(14.0)					〃	ロクロナデ		にぶい橙	にぶい橙				
37	3	〃	〃	〃		1		(7.6)				ヘラナデ	ヘラミガキ	糸 底 痕	にぶい橙	浅 黄 橙				

( )は推定値

同様に体部下端に篦削りされるものが含まれる。

底部では体部境に明瞭に稜を残すものと丸味を有して体部下端に続くものがあり、器厚に厚薄がある。内面はロクロ痕を残すものと殆ど平滑になるものがあり、外面では中央部に凹んで薄手となるもの、水平に近いものが混在する。切り離しは篦削りによって不明となる1点を除いてすべて回転糸切り痕を残す。

胎土は均質・細粒のものが多く、粗悪なものは歪みのあるものを除いて特に認められない。そのほか、外面に煤の付着するものが含まれる。また、墨書土器は11点があり、いずれも体部外面に記される。判明するのは「十」、「川」、「丞」、「大」等である。

全体における口径は11.5〜18.6cmを計り、12.8〜15.2cmに集中している。底径は5.0〜6.5cmである。器高は比較的小さい3.7〜5.0cmと5.4〜6.6cmのものに2分される。径高指数は29.3〜41.9、外傾指数34.7〜59.6であり、黒色処理の坏に比してばらつきがある。

高台付坏（第7図　第1・3表　図版4）

口縁部21点、体部10点、底部及び高台部17点であるが、口縁部及び体部は坏と判別できないため、多少増加するものと思われる。口縁部より底部まで遺存するものは皆無であり、全体の明らかなものはない。

図化する2点は共に体部下半より高台の一部まで残存するが、体部より口縁部にかけては直線状に外傾するとみられ、器高の低い皿型に近いものと推定される。

坏部は内面が比較的滑らかであり、外面にロクロ痕が残る。高台は共に外傾して高台端に丸味をなすものと高台端に肥厚し、高台内に偏って沈線状に凹むものがある。高台内は前者が糸切り痕を残し、後者は全面をロクロナデしている。胎土や焼成は坏のそれと同様である。

他の破片における高台は殆ど同様であるが、高台内を全面に渡ってロクロナデするものは17.6%である。

鉢（第8図　第1・3表　図版5）

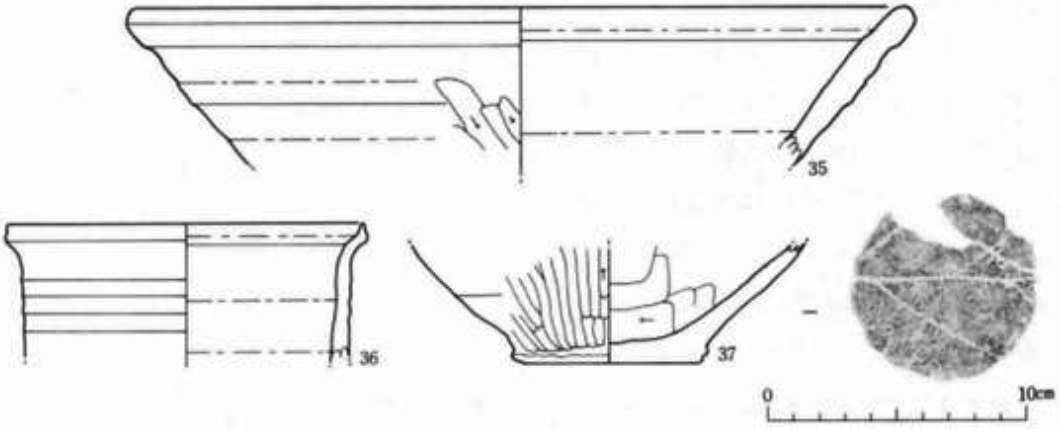
口縁部4点、体部1点の破片である。共に器高の低い極めて厚手の成形である。口縁部は内彎気味に逸き出されるものとやゝ外反して薄手となるものがある。体部はロクロ痕のほか、外面に篦削りされるものがあり、全体に粗雑である。焼成は他と同様であるが、胎土には径0.3cm前後の小石を含む。また、内外面に煤の付着するものがある。口径は30.0cm前後と推定され、体部における器厚は0.7〜1.2cmである。

甕（第8図　第1・3表　図版5）

口縁部10点、体部38点、底部6点であり、ロクロ不使用のものが含まれる。共に10分の1以下の小片で図化できるものは少ない。口縁部はくの字状に外反し、更に直上に逸き出されるもの、直線状に外傾するもの等が含まれ、口径20.0cm前後のものが含まれる。体部はロクロナデ

のほか外面に篦削りされるものが大部分であり、内面に刷け毛目を有するものが若干である。胎土には砂粒・石英を含むものが多い。

底部は砂粒が付着するもの1点と木葉痕を有する1点が含まれる。後者は内面に篦ナデ痕があり、外面に丁寧な篦磨き状の調整痕を残す。



第8図　トレンチ出土遺物(5)

2　須恵器（第3・9図　第1・4表　図版1・5）

還元炎焼成によるものとみられる灰色、灰白色を呈する土器は、坏が焼成良好な硬質のものとやゝ灰白色がかった軟質のそれを合せて35点、壺、または甕が19点である。その大部分が小破片であり、坏の完形2点を含めて図示できるのものは10点である。破片数による遺物全体の出土比率は10.7%を占め、須恵器中では坏が64.8%である。

坏（第3・9図　第1・4表　図版5）

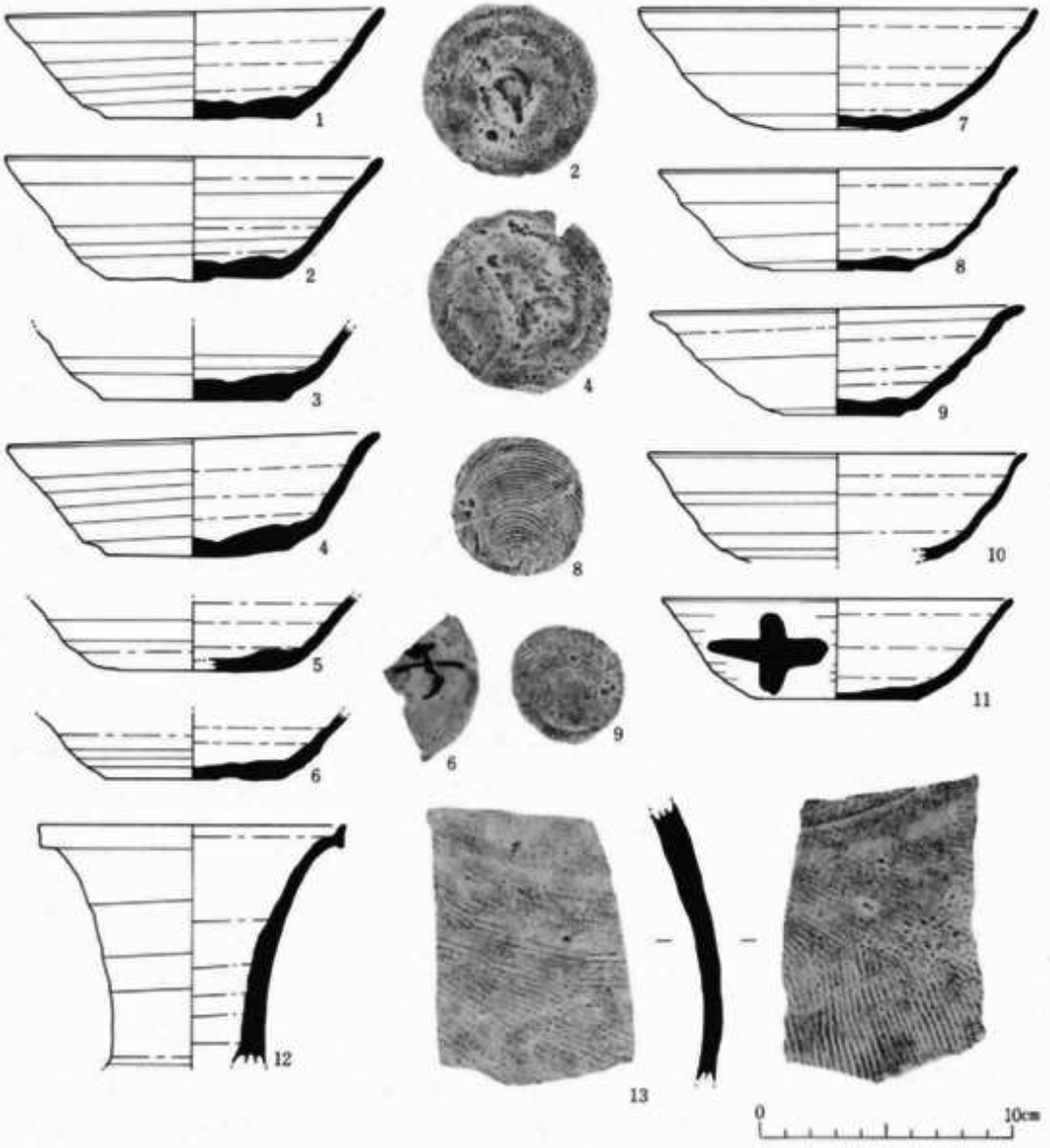
33点のうち口縁部より体部にかけての破片が多いが、器高の得られる坏は7点である。大別して灰白色を呈する軟質、またはやゝ硬質のものと灰色の硬質の坏に分けられる。破片数では灰白色のやゝ硬質の坏が14点でもっとも多い。層位的な変化は特に認められないが、下層では灰白色の軟質の坏が4層に集中している。しかし、出土状況の不明なものが多く、明確でない。

灰白色の坏は口縁部まで直線状に立ちあがり、口縁端部に僅かに薄手となる。体部は下半に弱い凹凸が残るが、口縁部ほど滑らかにロクロナデされる。内面は見込みに凹凸が残って平滑なものはない。底部の切り離しは粗粒な胎土で灰色かかった1点が糸切りされるほか、いずれも篦切りによっており、中央部に不整な残痕を有する。(1)〜(6)の口径は15.0cm、底径6.9〜7.7cm、器高4.3〜4.9cmを計り、ばらつきが小さい。墨書文字は底部に1点がある。

これよりやゝ硬質の坏では全体に薄手で内彎気味に立ちあがり、口縁端部に僅かに肥厚する。共に内外面に弱い凹凸を有するか、または平滑にロクロナデされる。底部の切り離しはすべて回転糸切りにより、再調整は認められない。口径は14.6〜15.8cm、底径4.9〜5.0cm、器高4.8〜4.

9cmと推定される。

灰色を呈する硬質の坏は薄手のものが多く、内彎気味に立ちあがって外反し、弱い端反り状をなすものと直線状に立ち上がるものがある。内外面は極めて滑らかで内面底部には平滑となるものと凹凸の目立つものがあり、後者は比較的底径が小さい。底部の切り離しは回転糸切りであり、全面を手持ち篦削りされて不明となるもの1点がある。4点による口径は13.4～15.4cm、底径4.8～5.6cm、器高4.4～4.6cmと推定される。灰白色の軟質の坏に比しては底径が小さく、口径のばらつきが大きい。墨書文字は体部外面に「十」1点がある。



第9図　トレンチ出土遺物(6)

第4表　トレンチ出土土器観察表 (3)

実測図No.	登録No.	出土地点(トレンチ)・層位	器種	遺存率 口縁	遺存率 底部	口径	底径	器高	径高指数	外傾指数	器面調整 内面	器面調整 外面	切り離し調整	色調 内面	色調 外面	墨書文字 文字	墨書文字 位置	墨書文字 No.	備考
				分の1	分の1	cm	cm	cm											
1	2	Bi 6　4	坏	2	1	15.0	7.7	4.3	28.6	46.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	灰白色	灰白色				容量(369.6)cc
2	3	〃　〃	〃	2	1	15.0	7.3	4.9	32.7	50.0	〃	〃	〃	〃	〃				(392.6)cc
3	7	〃　〃	〃		1		7.3				〃	〃	〃	〃	〃				
4	12	〃　〃	〃	1	1	15.0	7.4	4.9	32.7	62.9	〃	〃	〃	〃	〃				353.7cc
5	41	〃　〃	〃		3		(7.0)				〃	〃	〃	〃	〃				
6		不明	〃		3		(6.9)				〃	〃	〃	〃	〃	□方	底部	230	
7	5	Bi 6　4	〃	8	1	15.6	5.0	4.8	30.4	47.9	〃	〃	糸切り	暗灰 灰白色	暗灰 灰白色				
8	13	〃　〃	〃	2	1	14.2	5.6	4.6	32.4	39.1	〃	〃	〃	オリーブ灰	オリーブ灰				(327.8)cc
9	14	〃　〃	〃	1	1	14.9	4.8	4.4	29.5	61.4	〃	〃	〃	灰色	灰色				307.4cc
10	23	〃　3～4	〃	3		(14.0)					〃	〃		暗灰色	暗灰色				
11	18	〃　不明	〃	3	3	(14.4)	7.0	4.0	(28.6)	47.5	〃	〃	ヘラ削り	灰色	灰色	十	体	85	
12	36	〃　3	壺	2		12.2					〃	〃		灰白色	暗緑灰 灰白色				
13	30	〃　4	甕								ロクロナデ 平行アテ	タタキメ		〃	暗灰				体部片

（　）は推定値

壺・甕（第9図　第1・4表　図版5）

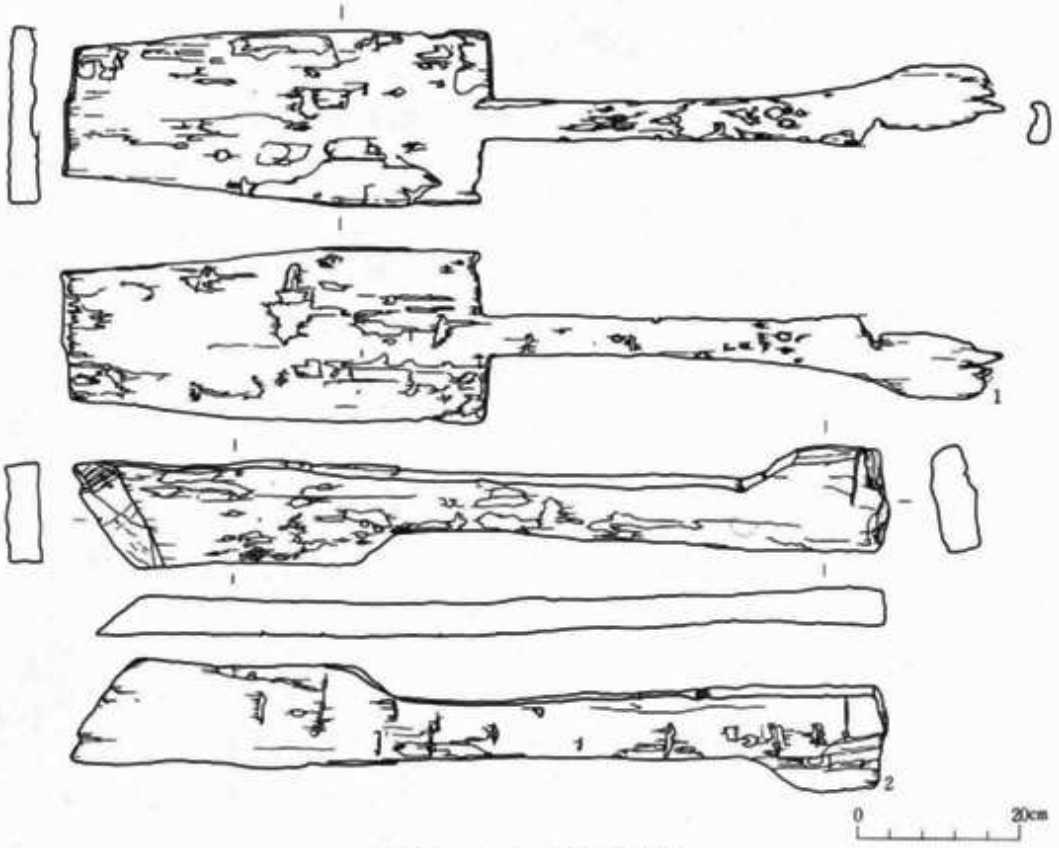
壺、または甕とみられる破片は19点である。共に全体の器形の判明するものはない。大別して小型の壺と大型のものに分けられ、前者には長頸壺が含まれる。

長頸壺は口頸部1点である。口縁部は頸部より外反し、口縁端部が上下に逸き出される。頸部は内外面滑らかにロクロナデされ、外面の大部分は光沢があり、黒灰色を呈する。内面は口縁部ほど斑点状に灰白色をなす。胎土は均質で暗赤褐色を呈し、下端の接合部では灰色となる。下端における頸部径は6.1cm、口縁部までの高さは9.5cmである。他の体部片3点は外面に箆削りされる小片である。

中・大型の壺、または甕の破片14点はすべて体部片である。外面は平行する叩き目痕を横、または斜方向に残すものが大部分であり、木目の観察されるもの1点、格子状を呈するもの1点が含まれる。内面は同様の平行する当て工具痕のほか、花弁状の蓮ぐう文1点がある。色調は灰色を呈し、胎土は中央部に赤褐色となるもの2点がある。図示する(13)は肩部に厚手となり、胎土は赤褐色を呈するが、中央部で灰黒色となる。

3　木製品（第3・10図　第1表　図版35）

用途不明の木製品2点であり、共にBi6トレンチの3～4層に出土するものである。(1)は箆状、または櫂状を呈し、上端で腐蝕欠損している。現存長115.8cm、最大幅21.4cm、厚さ3.8cm、重さ1.79kgを計り、板状をなす。両面共腐蝕しているが、刃痕とみられる木目に直交する加工痕が認められるほか、中央部の側縁に沿ってやゝ平滑な面が残存する。側面は先端に不整な切断痕があり、他は柄部を含めて面取りされる加工痕を有する。柄の上方では幅広となるが、一方を欠損して明確でない。そのほか、柄部に虫喰孔がみられる。

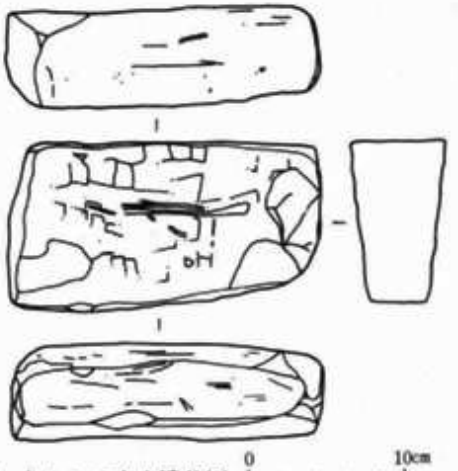


第10図　トレンチ出土遺物(7)

(2)は保存のよいアカシデである。全長100.6cm、最大幅13.2cm、厚さ4.8cm、重さ3.68kgを計る。全体に捩れた板状をなす。先端は斜方向に鋭く断ち切られ、上下面及び側面は平滑となる。中央部にもっとも狭まり、幅7.2cm前後となる。上方では再び幅広となり、上端ほど工具痕を粗雑に残す。この点では先端部分を主体とする使用が推定される。

4　石製品（第11図　第1表　図版6）

不整な長方形を呈する砥石1点である。現存長20.1cm、最大幅6.3cm、高さ10.6cm、重さ2,094gの流紋岩製である。上下2面の使用面には共に細線状の研磨痕が認められる。また、側面には幅1.5cm前後の鑿状石切り工具痕が重複している。Bi6 トレンチ1層の出土である。



第11図　トレンチ出土遺物(8)

V　トレンチ以外の出土遺物

縄文土器・石器・土師器・須恵器・陶磁器・石製品・鉄製品・木製品等すべてを合せて22,327点である。その殆どは小破片であるが、次表によって分類するならば、土師器及び須恵器が大部分を占めるものである。

出土地点は東西に走る水路開削によって盛土とされた掘削土中に含包される遺物であり、明確に位置や層位の把握できるものはなく、トレンチ外出土として一括するものである。従って遺物の分布や出土状況についてもすべて不明である。

第5表　トレンチ外出土遺物集計表

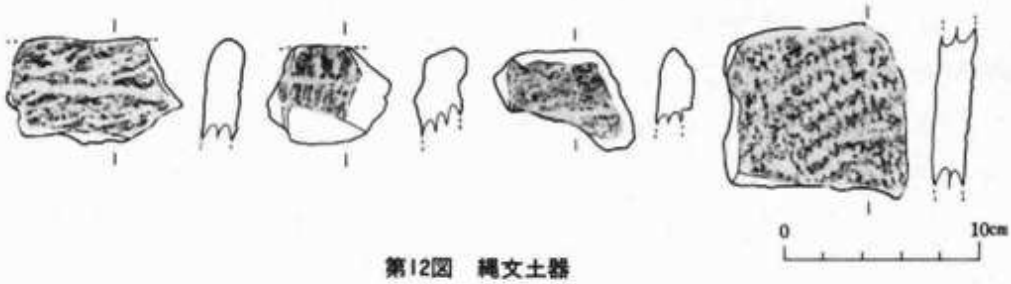
種類	点数	比率
縄文土器	11	% 0.05
石器	11	0.05
土師器	20,481	91.73
須恵器	1,692	7.58
陶磁器	47	0.21
石製品	1	0.01
鉄製品	2	0.01
木製品	46	0.21
植物種子など	36	0.16
計	22,327	100.00

器種		坏				高台付坏			鉢			壺・甕				その他	合計	比率
部位		口~底	口径	体部	底部	口~底	口~体	底・高	口縁	体部	底部	口~底	口縁	体部	底部			
土師器	内面黒色処理	126	2,163	1,484	855	20	17	102	6	6	7						4,786	% 21.6
	両面黒色処理	4	176	203	59			11							1	1	455	2.0
	非黒色処理	245	4,998	4,488	2,365	17	12	481	78	61	9	1	285	2,026	179	4	15,240	68.7
須恵器		68	339	220	100				2			1	52	888	22		1,692	7.6
小計		443	7,676	6,395	3,370	37	29	594	86	67	16	2	337	2,914	202	5	22,173	99.9
合計		17,884				660			169			3,455				5		
比率		80.7%				3.0			0.8			15.6				0.0	100.1	

1　縄文土器（第12図　第5表　図版6）

口縁部3点と体部8点の合せて11点の小破片である。口縁部の1点は斜縄文が施され、繊維を含んで黒褐色を呈する。他は刺突文の認められるものと隆帯下に沈線の巡るものである。

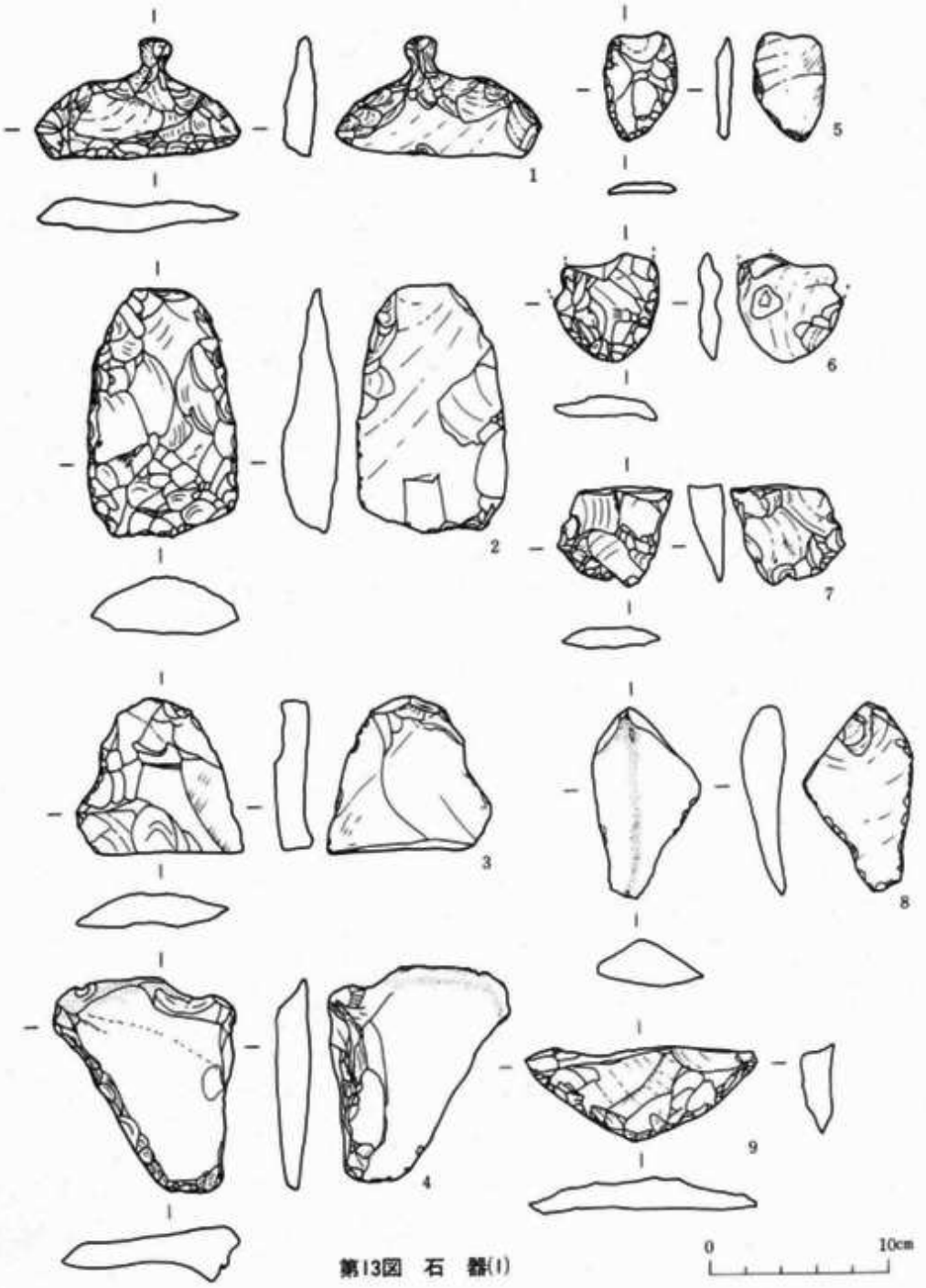
体部は4点が単節斜縄文を有し、うち3点が暗褐色を呈する繊維土器である。ほかに細かい原体による斜縄文の施される破片が含まれる。



第12図　縄文土器

2　石器（第13・14図　第5・6表　図版6）

剥片石器は石鏃1点、石匙1点、石篦状石器2点、不定形石器5点の合せて9点であり、ほかに磨石1点がある。



第13図　石　器(1)

第6表 石 器 一 覧 表 注(1)

実測図No.	写真No.	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	石材・産地等	備考
1	1	石匙	3.3 cm	5.7 cm	0.8 cm	14.0 g	珪質泥岩、奥羽山地、中新統	
2	2	石篦状	6.9	4.2	1.6	48.6	石質細粒凝灰岩 〃	
3	7	〃	4.3～	4.3～	0.9～	20.3～	〃 〃	欠損
4	8	不定形	6.0	5.1	1.5～	37.3	〃 〃	
5	5	石鏃	3.0	2.0	0.4～	2.6～	硬質凝灰質泥岩 〃	
6	4	不定形	3.0～	2.9～	0.6～	5.3～	珪質泥岩 〃	欠損
7	3	〃	2.8	2.8	0.9	7.2	硬質凝灰質泥岩 〃	
8	6	〃	2.6	6.5	0.9	13.7	珪質泥岩 〃	
9	9	〃	5.3	3.0	1.2	16.8	〃 〃	欠損？
10	10	磨石状	9.1	8.7	4.1	448.0	両輝石安山岩、焼石岳火山群、第4紀	

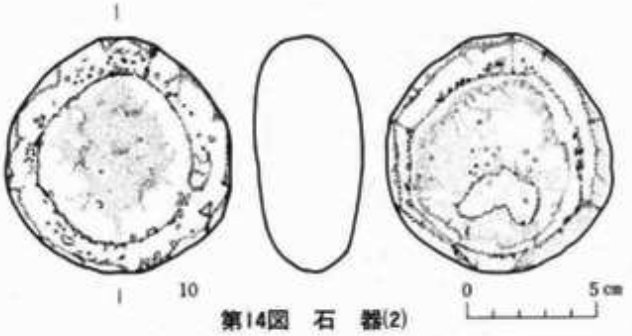
石鏃は基部の中央か僅かに抉られ、尖頭部の側縁が不整にやゝ張り出す。両面に調整剥離が加えられるが、背面には一次剥離面が残る。

石匙は抓部とこれに直交する刃部が幅広となる横型である。剥片上部の左右より抉られる抓部は刃部に直交して形成され、断面は三角形に近い。刃部及び側縁は両面より調整剥離されるが、背面には一次剥離面をもつ。

石篦状石器の1点は基部より両側縁が僅かに幅広となり、やゝ丸味をなして刃部に続く。全周縁に調整剥離を加えるが、背面では入念な調整は認められない。共に一次剥離面を有する。他の1点は同様の形状とみられるが、基部を除いて調整剥離される。

そのほか、不定形石器とするものには自然面を残す縦長の石器、全周縁に調整剥離される横長の石器等が含まれ、削器、または掻器に相当するものが含まれる。

磨石はやゝ不整な円形をなす扁平な安山岩礫である。磨面は上下両面のほか、側面にあって共に平滑となる。側面では最大3.5cm幅で不規則に巡るほか、更に上面境に小さい磨面が認められる。



第14図 石 器(2)

注(1) 石材等は佐藤二郎氏の御教示による

3 土師器（第15～33図 第5・7～15表 図版7～23 29・30）

酸化炎焼成によるとみられる橙色、または褐色系の色調を有する土器は合せて20,481点である。黒色処理の有無によって2分され、黒色処理されるものには内面のほか、更に外面に施されるものが含まれる。共に完形品は少なく、殆どが残存率10分の1以下の小破片である。

黒色処理の土師器には坏、高台付坏、鉢、または甕、壺、耳皿等があり、合せて5,241点である。そのうち坏がもっとも多く、高台付坏を含めて5,220点となり、黒色処理土師器の99.6%を占めている。

非黒色処理の土器はトレンチ外出土土器の68.7%を占める。器種別では坏、高台付坏、鉢、甕、その他若干が含まれ、黒色処理の場合と同様に坏が著しく多い。高台付坏を含めて82.7%である。甕は16.3%、鉢は僅か1.0%である。

破片数による黒色処理の施されるものと施されない土器の比率は大凡1：3となり、非黒色処理の土器が上回っている。器種別でもっとも多い坏では高台付坏を含めて2：5となる。また、須恵器の坏を含む坏類全体の黒色処理の坏と非黒色処理の坏は、それぞれ27.6、67.9%を占めている。

(1) 黒色処理の土師器（第15～24図　第5・7～10表　図版7～14）

内面を黒色処理する所謂内黒4,786点と内外面を黒色処理する両黒455点である。前者には坏高台付坏、鉢、または甕が含まれ、坏がもっとも多い。高台付坏を含む破片数では93.5%を占める。後者では坏、高台付坏、壺等に限られ、内黒処理されるものに比して極めて少数である。

坏（第15～20図　第7～9表　図版7～12）

4,528点のうち、完形品は1点も含まれず、口縁部より底部まで残存するものは132点であり、そのうち内外面黒色処理の坏は僅か4点である。図化するものは合せて95点であるが、器高の得られるものは80点である。

破片による口縁部及び底部の残存率はそれぞれ口径及び底径の10等分によって細分するものであり、10分の1とするものには更に10分の1未満の細片が含まれる。また、口縁部及び体部片には高台付坏と識別できない破片が多く、これを坏に含め、更に器高の得られる126点を加えるならば次表の通りとなる。黒色処理の坏では10分の1以下の小片が口縁部で82.9%を占めるが、底部では4分の1以上のものが49.6%を占めて細片化が低い。底部片によって個体数を推計するならば、各乗数によって346個体が得られる。しかし、実数では10分の1未満の細片が

第7表　坏における残存率集計表

残存率	口縁部				底部				合計比率
	内黒処理	両黒処理	非黒色処理	須恵器	内黒処理	両黒処理	非黒色処理	須恵器	
1			(9)	(1)	76 (60)	1 (3)	118 (98)	9 (30)	3.4%
2	4 (25)	(1)	2 (44)	(20)	70 (36)	1 (1)	245 (55)	15 (21)	4.5
3	7 (18)	(1)	14 (36)	1 (9)	103 (9)	2	270 (19)	14 (10)	4.3
4	9 (17)		28 (28)	4 (11)	140 (6)	6	302 (20)	17 (4)	5.0
5	37 (10)	1 (1)	74 (20)	10 (4)	93 (5)	11	256 (17)	14 (1)	4.6
6	33 (17)	1	91 (17)	16 (4)	103 (1)	8	143 (11)	5 (1)	3.8
7	65 (5)	2	121 (13)	25 (4)	68 (2)	7	65 (2)	10	3.3
8	81 (5)	3	161 (13)	12 (5)	29 (2)	2	28 (7)	3	2.9
9	72 (6)		130 (9)	15 (2)	8 (3)	3	7 (3)	(1)	2.2
10	1,853 (23)	169 (1)	4,377 (56)	256 (8)	165 (2)	18	922 (13)	13	66.0
計	2,163(126)	176 (4)	4,998(245)	339 (68)	855(126)	59 (4)	2,356(245)	100 (68)	100.0
合計	2,289	180	5,243	407	981	63	2,601	168	11,932

（）は口縁部～底部まで残存

含まれ、また、同一個体として換算できない点で更にこれを上回る個体数と推測される。

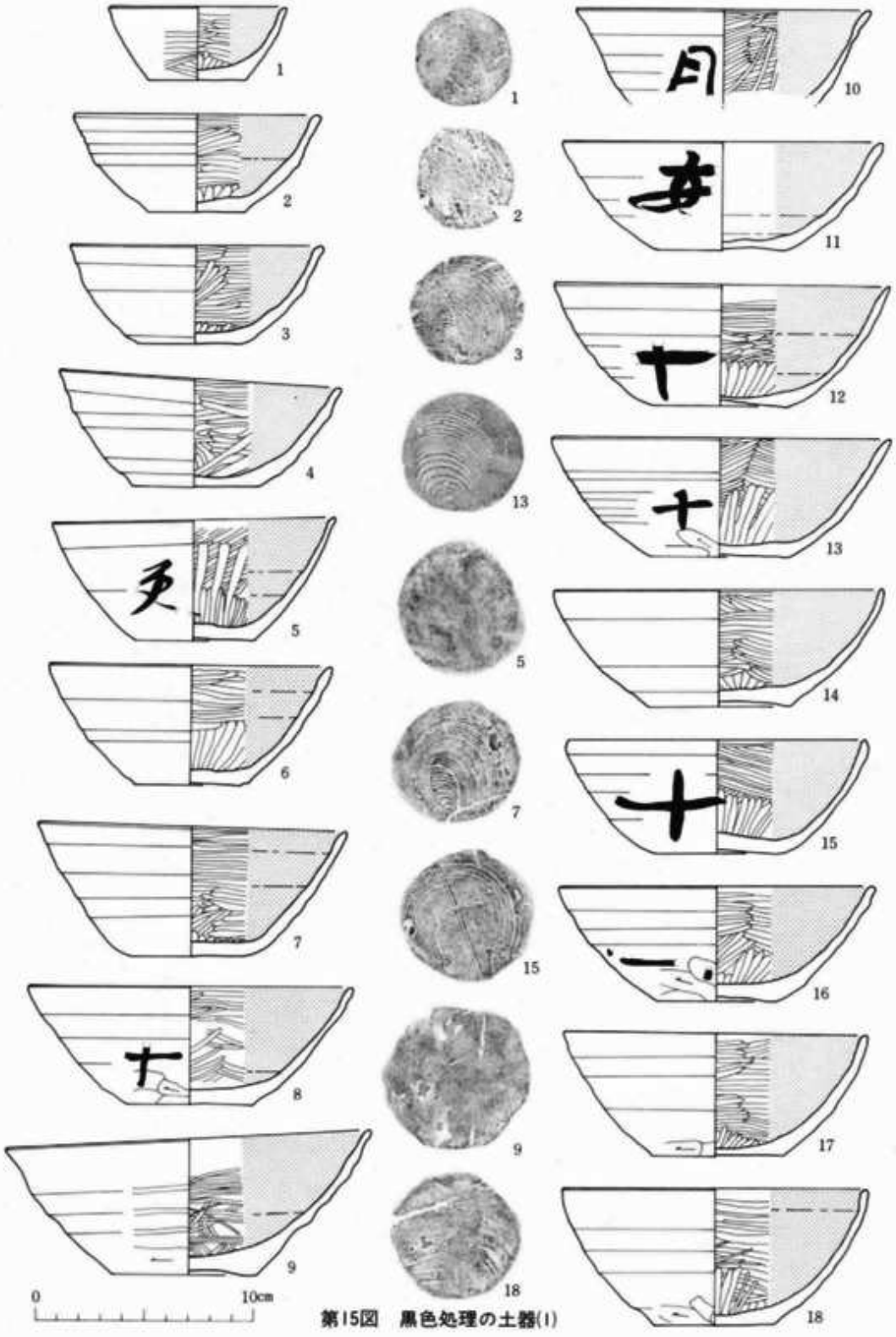
内黒処理される坏の口縁部は、その形状により3分され、体部に続いてほゞ直線状に立ちあがるもの、やゝ内彎して立ちあがるもの、端反り状に外反するものに分けられる。それぞれ強弱があり、前二者では薄手をなして逸き出され、後者ではやゝ肥厚するものが多い。内面は体部より横方向の篦磨きが施され、底部より放射状に続く篦磨きが口縁部、または口縁部直下に及ぶものも若干含まれる。そのほか、口縁部内外面に横方向の篦磨きを有し、口縁部の外傾する同一個体とみられる小片2点がある。底部境に稜をもち、篦削りされる丸底とみられる唯一のものである。また、内面に篦磨きの施されないもの1点が混入する。

体部は共にロクロ成形痕を有するが、著しく凹凸を残すものは少ない。体部下端に篦削りされるものは全体の20.8%であり、底部境より横、または斜方向に手持ち篦削りされるものが大部分である。内面は底部の磨きに先行して横、または斜方向に篦磨きされ、右回転によって施こされるものが多い。その単位は一定の規則性を認めないが、井桁状に巡るものが含まれる。また、下方ほど底部より続く放射状の磨きが重複し、磨き幅に大小があって一定していない。そのほか、内面横方向に篦磨きされる丸底とみなされる坏の体部片2点がある。

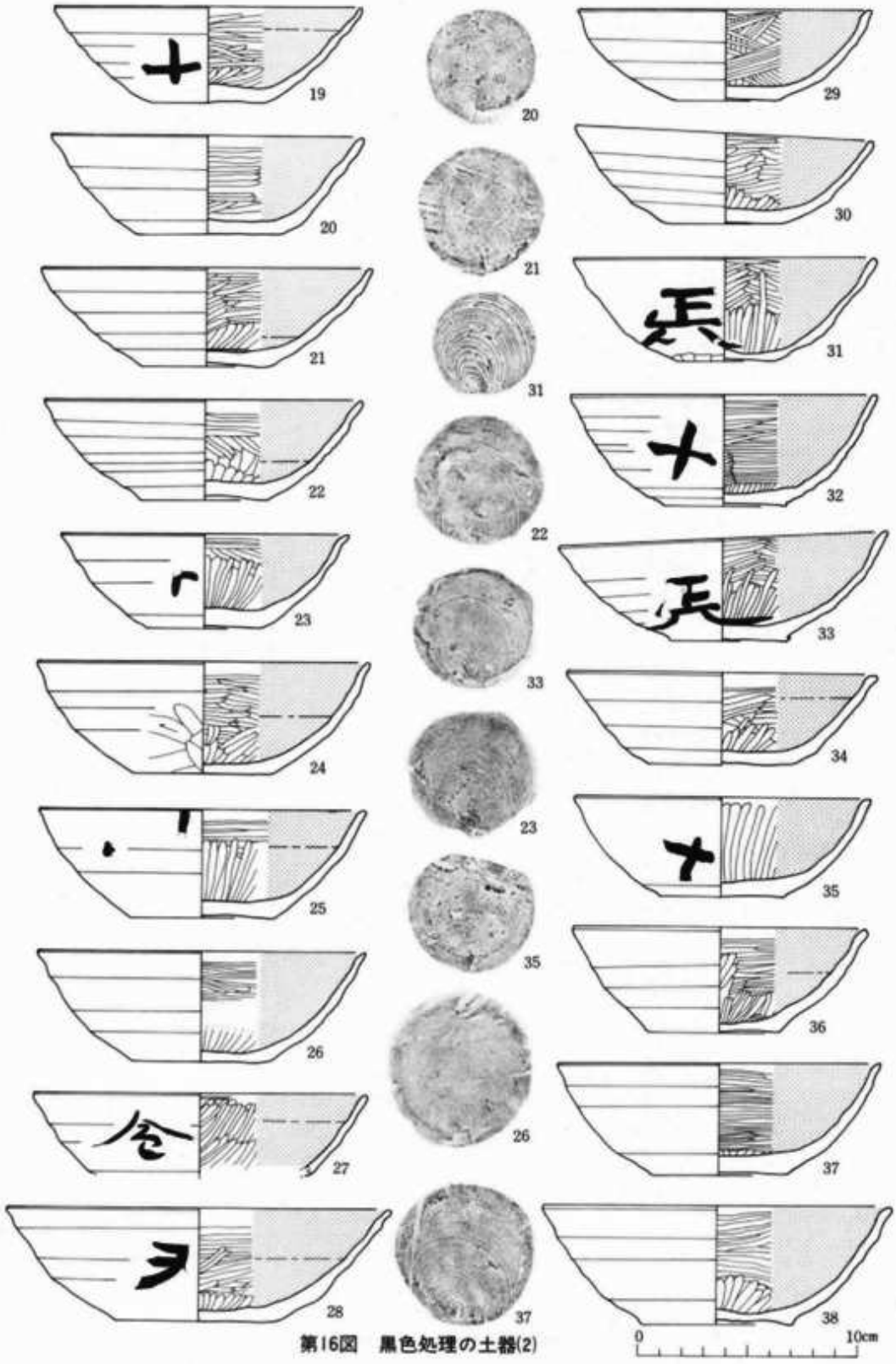
底部は体部境より肥厚するものが比較的多く、丸味をもつものと明瞭に体部境を形成するものがある。底部の切り離しは判明するものすべてが回転糸切りによっている。全面を篦削りによって不明となるものは749点中14.8%が含まれるが、糸切り痕を残して篦削りをうけるものが10.2%に達し、いずれも回転糸切りによる切り離しとみられる。底部の篦削りは一定方向のほか、井桁状に再調整されるものがあり、共に手持ち篦削りである。大部分は体部下半の篦削りに対応するが、底部・体部それぞれ個々に篦削りされるものが含まれる。内面は全体に平滑となるもの、中央部に僅かに盛りあがるもの、低く凹状を呈するものが混在し、器厚に厚薄がある。その殆どは中央部より放射状に篦磨きが施され、体部に続く。磨きは一様ではなく、重複して入念な磨きの施されるものと粗雑に間隙を有し、体部境に磨きの認められないものが含まれる。

胎土は全体に稠密であり、特に粗悪なものはない。外面の色調はにぶい褐色、またはにぶい橙色を呈するものが多く、暗褐色や褐灰色のものが若干含まれる。また、内面は黒色の失なわれるものや光沢のないものが混在するほか、全面に漆の固着するもの3点がある。

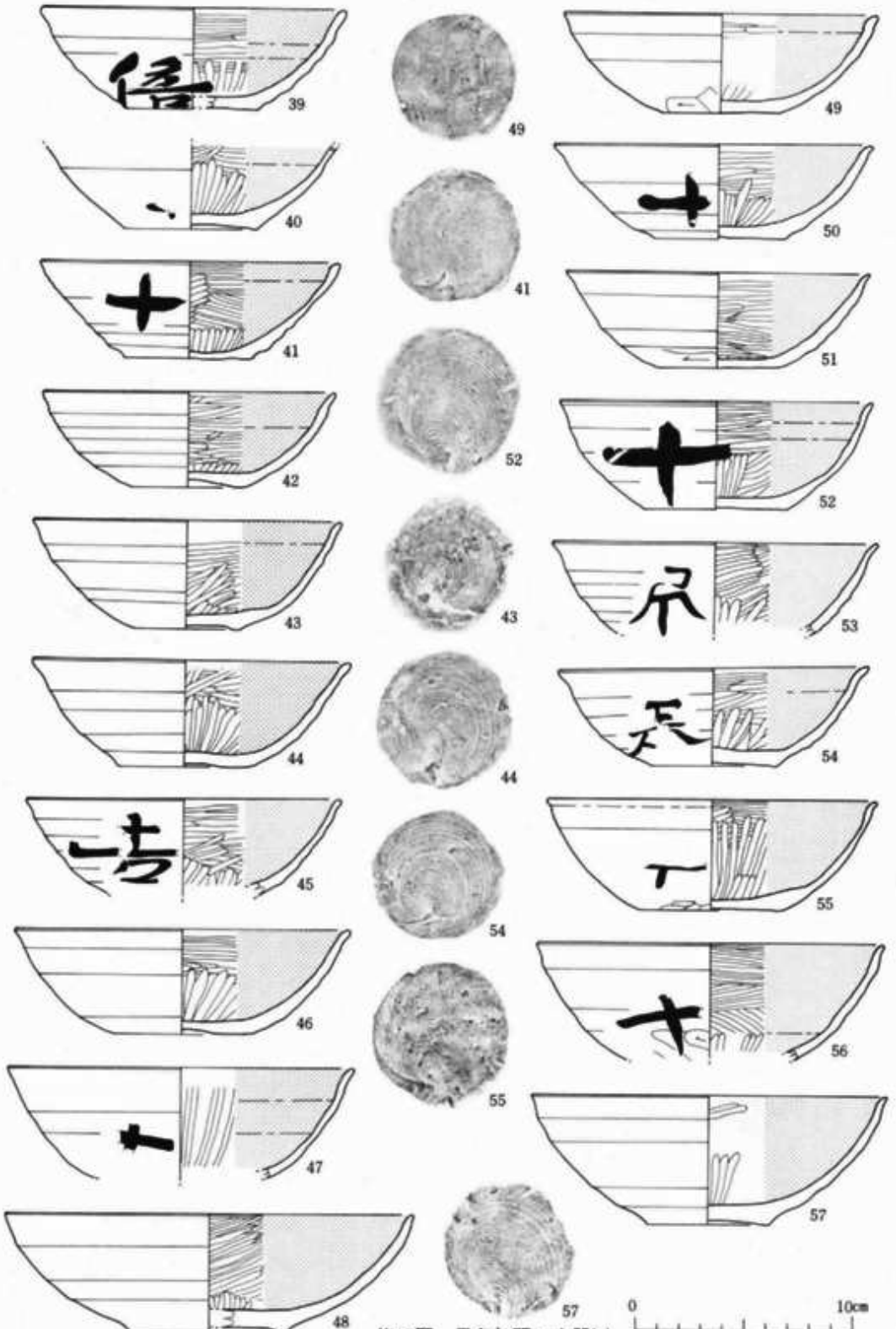
墨書土器は破片を含めて157点がある。うち体部に記されるものは155点で大部分を占め、更に口縁部にかかる1点がある。殆どは口縁部を上に墨書されるが、底部を上にする逆字が含まれる。また、同一個体に2字を記するもの3点がある。判明する文字は「十」、「令」、「尻」、「吉」、「安」、「守」、「平」、または「平」、「倍」があり、「十」が60点でもっとも多い。



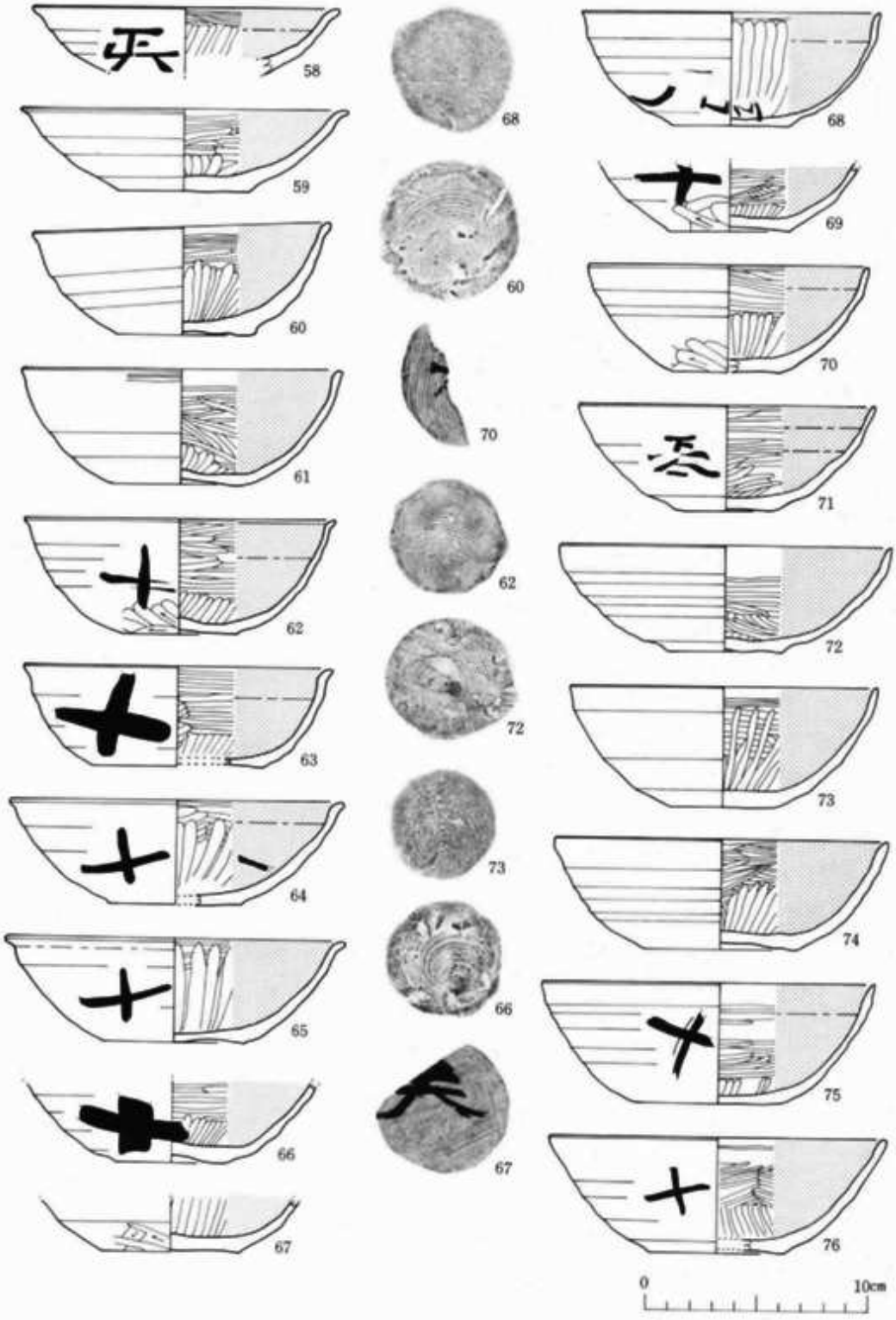
第15図　黒色処理の土器(1)



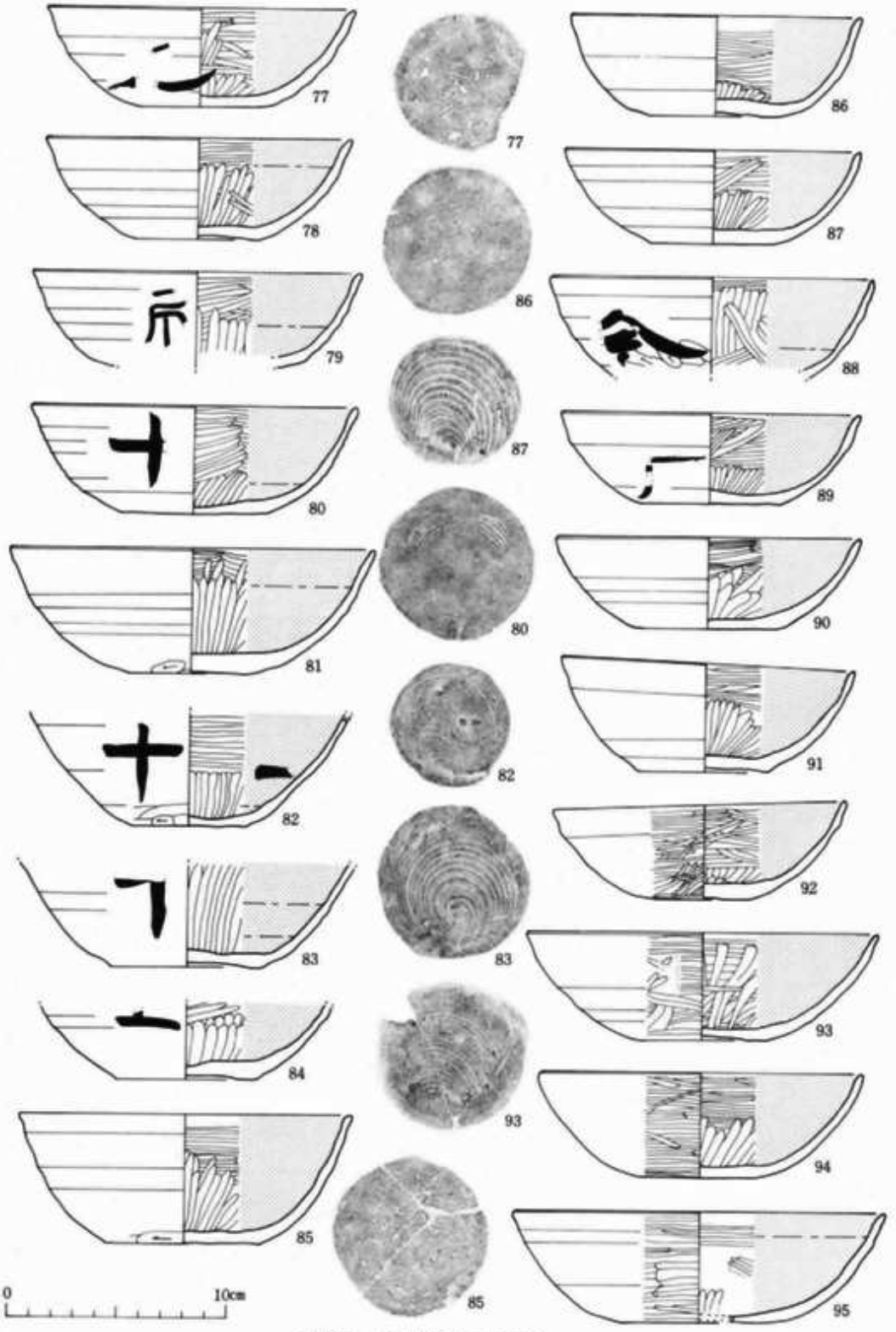
第16図　黒色処理の土器(2)



第17図　黒色処理の土器(3)



第18図　黒色処理の土器(4)



第19図　黒色処理の土器(5)

第8表　黒色処理の土器観察表（1）

実測図No.	登録No.	器種	残存率 口径	残存率 底部	口径	底径	器高	径高指数	外傾指数	器面調整 内面	器面調整 外面	切り離し調整	外面色調	墨書文字 文字	墨書文字 位置	墨書文字 No.	備考
1	16	坏	⅓	1	8.2	4.4	3.4	41.5	32.4	ヘラミガキ 横放射	ロクロナデ	糸切り	黒褐色				容量(92.6)cc
2	25	〃	3	1	(11.2)	4.5	4.5	(39.8)	37.8	〃 〃	〃	〃	褐				(213.7)cc
3	21	〃	2	1	11.6	4.8	4.5	38.8	38.9	〃 横斜放	〃	〃	〃				(213.0)cc
4	3	〃	2	1	12.9	5.7	5.0	38.8	32.1	〃 横斜	〃	〃	にぶい橙				(294.5)cc
5		〃	3	1	(13.0)	5.4	5.5	(42.3)	33.6	〃 横放	〃	糸切り ヘラケズリ	褐	夫?	体部	174	(359.3)cc
6	20	〃	2	1	13.0	5.2	5.5	42.3	36.9	〃 〃	〃	糸切り	暗褐				(364.8)cc
7	10	〃	2	1	14.1	5.3	5.9	41.8	35.5	〃 〃	〃	〃	〃				(409.3)cc
8	41	〃	10〜	1	(14.6)	5.7	5.5	(37.2)	42.2	〃 横斜	〃	ヘラケズリ	にぶい橙	十	体		
9	17	〃	2	1	16.7	6.1	6.2	37.2	52.4	〃 〃	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	にぶい橙				(527.1)cc
10		〃	6		(13.5)					〃 横	ロクロナデ		にぶい褐	□	体	260	
11		〃	10	1	(14.6)	6.1	5.0	(34.2)	40.0	ロクロナデ	〃	糸切り	にぶい褐 黒	安	〃	156	内面黒色のためこれを含む
12	34	〃	2	1	15.4	6.3	5.5	35.7	38.2	ヘラミガキ 横放	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	にぶい褐	十	〃	35	(520.4)cc
13		〃	2	1	15.5	6.4	5.5	35.5	40.0	〃 〃	〃	〃	にぶい橙	〃	〃	33	1127定形(442.6)cc
14	13	〃	4	1	(15.1)	6.5	5.4	(35.8)	29.6	〃 〃	ロクロナデ	糸切り	にぶい黄褐				
15		〃	4	1	(13.8)	5.8	5.2	(37.7)	33.9	〃 〃	〃	〃	橙	十	体	25	内面部付着、底部外面に条線あり
16	15	〃	4	1	(14.4)	5.3	5.3	(36.8)	43.8	〃 〃	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	にぶい褐	□	〃	305	
17	19	〃	4	1	(13.9)	6.0	5.7	(41.0)	32.5	〃 〃	〃	糸切り	にぶい黄橙				
18	12	〃	3	1	14.0	5.4	6.3	45.0	31.7	〃 〃	〃	糸切り ヘラケズリ	暗褐				(469.2)cc
19		〃	3	2	(14.0)	5.1	4.4	(31.4)	52.7	〃 〃	ロクロナデ	糸切り	にぶい橙	十	体	48 257	
20	24	〃	4	1	(14.2)	6.6	4.5	(31.7)	43.6	〃 〃	〃	〃	にぶい黄橙				
21	58	〃	9	1	(15.1)	5.9	4.5	(29.8)	51.6	〃 〃	〃	〃	灰黄褐				
22	30	〃	2	1	14.5	5.8	4.6	31.7	46.7	〃 〃	〃	〃	褐				(348.2)cc
23		〃	10	1	(13.1)	5.2	4.3	(32.8)	48.8	〃 〃	〃	〃	〃	十	体	43	
24	83	〃	2	2	15.2	6.2	5.1	33.6	38.2	〃 〃	〃	〃	にぶい褐				
25		〃	3	1	(14.9)	6.5	5.0	(33.6)	43.0	〃 〃	〃	〃	〃	□	体	263	
26	40	〃	9	1	(14.9)	6.1	5.1	(34.2)	42.2	〃 〃	〃	〃	褐				黒色処理一部消失
27		〃	6		(15.2)					〃 横斜	〃		にぶい褐	今	体	145	
28		〃	2	2	17.5	7.4	5.2	29.7	51.0	〃 横放	〃	糸切り ヘラケズリ	にぶい橙	□	〃	151	
29	18	〃	2	2	13.4	4.6	4.2	31.3	46.4	〃 〃	〃	糸切り	にぶい褐				(265.8)cc
30	11	〃	2	1	13.6	5.3	4.2	30.9	47.1	〃 横斜放	〃	〃	にぶい黄橙				
31		〃	2	1	13.8	4.5	4.7	34.1	46.4	〃 横放	〃	糸切り ヘラケズリ	にぶい褐	宗	体	119	(296.3)cc
32		〃	4	2	(14.0)	5.1	5.1	(36.4)	37.3	〃 〃	〃	糸切り	褐	十	〃	36	
33		〃	2	1	15.0	5.4	4.7	31.3	44.7	〃 〃	〃	〃	〃	民	〃	120	
34	6	〃	2	2	14.1	6.5	4.2	29.8	48.0	〃 〃	〃	〃	暗褐 にぶい黄橙				(298.2)cc
35		〃	5	1	(13.5)	5.6	4.5	(33.3)	40.4	〃 〃	〃	〃	にぶい橙	十	体	29	
36	14	〃	2	1	13.4	6.0	4.8	35.8	43.8	〃 〃	〃	〃	〃				(313.0)cc
37	23	〃	3	1	(14.7)	6.1	5.1	(34.7)	39.8	〃 〃	〃	〃	にぶい褐				
38	53	〃	3	2	(15.9)	6.8	5.4	36.0	43.5	〃 〃	〃		〃				

39		坏	6	3	(14.0)	6.0	4.6	(32.9)	43.5	ヘラミガキ	横放	ロクロナデ	糸切り	にぶい橙	普	体	170	
40	8	〃		1		6.0				〃	〃	〃	〃	〃	+□	〃		2字の墨書
41		〃	3	1	(13.8)	6.0	4.4	(31.9)	50.5	〃	〃	〃	〃	橙	+	〃	27	光沢を失なう
42	60	〃	3	2	(13.5)	5.0	4.4	(32.6)	40.0	〃	〃	〃	〃	にぶい橙				
43	7	〃	2	1	14.2	4.7	5.0	35.2	37.0	〃	〃	〃	〃	にぶい橙 橙 灰				内外面摩滅
44	8	〃	2	1	14.6	6.1	4.9	33.6	43.5	〃	〃	〃	〃	明 橙				(348.2)cc
45		〃	3		(14.4)					〃	横斜放	〃		にぶい黄橙	吉	体	121	
46	33	〃	2	2	15.4	6.4	4.9	31.8	41.8	〃	横放	〃	糸切り	にぶい橙				
47		〃	5		(15.9)					〃	〃	〃		明 橙	+	体	38	
48	113	〃	6	3	(18.6)	(7.1)	5.5	(29.3)	46.9	〃	〃	〃	糸切り	にぶい橙				
49	55	〃	4	1	(14.4)	5.4	4.6	(31.9)	43.0	〃	〃	ロクロナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい黄橙				内面摩滅
50	37	〃	7	2	(14.7)	6.0	4.3	(29.3)	45.3	〃	〃	ロクロナデ	糸切り	にぶい橙	+	体		
51	59	〃	5	2	(14.0)	5.7	4.4	(31.4)	45.5	〃	〃	ロクロナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	赤 橙				
52		〃	4	1	(14.4)	6.6	5.0	(34.7)	36.4	〃	〃	ロクロナデ	糸切り	橙	+	体	24	
53		〃	7		(15.0)					〃	横斜放	〃		にぶい橙	尼	〃	137	
54		〃	2	1	14.3	5.8	4.5	31.5	46.0	〃	横放	〃	糸切り	橙	密	〃	118	(337.5)cc
55		〃	8	1	(15.2)	6.6	5.1	(33.6)	39.2	〃	〃	〃	〃	にぶい橙	口	〃	40	
56		〃	8		(16.0)					〃	〃	ロクロナデ ヘラケズリ		橙	+	〃	31	
57	22	〃	5	1	(16.3)	5.6	6.0	(36.8)	42.7	〃	〃	ロクロナデ	糸切り	にぶい橙				内面摩耗(605.6)cc
58		〃	4		13.9					〃	横斜	〃		明 橙	荒	体	139	
59	82	〃	8	2	(14.7)	5.9	4.7	(32.0)	41.5	〃	横放	〃	糸切り	浅黄橙				
60	1	〃	2	1	13.4	6.2	4.8	35.8	31.4	〃	〃	〃	〃	橙				4回定形(334.1)cc
61	57	〃	7	1	14.4	6.0	5.2	36.1	31.7	〃	〃	〃	〃	にぶい橙				
62		〃	10~	1	14.0	5.2	5.2	37.1	35.6	〃	〃	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	橙	+	体	1	
63		〃	5	4	(13.6)	(7.4)	4.5	(32.6)	28.9	〃	〃	ロクロナデ	糸切り	にぶい橙	〃	〃	2	
64		〃	4	3	(15.0)	(5.9)	4.7	(31.3)	42.6	〃	〃	〃	〃	にぶい橙	〃	〃	22	
65	114	〃	2	2	15.2	6.4	4.7	30.9	46.8	〃	〃	〃	〃	にぶい橙	〃	〃	34	(390.8)cc
66		〃		1		5.1				〃	〃	〃	〃	橙	〃	〃	6	
67		〃		2		6.1				〃	〃	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	にぶい橙	□	底	238	
68		〃	7	1	(13.4)	5.2	5.1	(38.1)	30.4	〃	〃	ロクロナデ	糸切り	にぶい橙	□	体	256	底部外面に×印の線刻あり
69		〃		2		5.4				〃	〃	ロクロナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	橙	+	〃	54	
70		〃		3	12.6	(4.7)	4.8	38.1	35.4	〃	〃	〃	糸切り	黒 橙	□	底	239	
71		〃	6	2	(13.3)	4.2	4.7	(35.3)	43.6	〃	横斜	ロクロナデ	〃	明	荒	体	121	
72	31	〃	5	1	(14.9)	5.0	4.8	(32.3)	41.0	〃	横放	〃	〃	黒 橙				
73	50	〃	3	1	(13.8)	4.8	5.3	(38.4)	34.0	〃	〃	〃	〃	にぶい橙				
74	28	〃	3	2	(14.9)	6.8	4.9	(32.9)	34.3	〃	〃	〃	〃	にぶい橙				
75	84	〃	10	1	(15.0)	6.6	5.4	(36.0)	35.2	〃	〃	〃	〃	浅 〃 橙	+	体	18	
76		〃	6	3	(15.1)	(6.1)	5.2	(34.4)	41.3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	4	内外面摩滅
77		〃	6	2	(14.0)	5.7	4.5	(32.1)	37.8	〃	横斜放	ロクロナデ	ヘラケズリ	浅 橙 にぶい橙	口	〃	271	
78	26	〃	5	1	(13.9)	5.9	4.6	33.1	37.0	〃	横放	〃	糸切り	橙				外面に黒色付着物あり
79		〃	8		(15.0)					〃	〃	〃		〃	尼	体	138	

80	64	坏	4	1	(14.9)	6.9	5.0	(33.6)	33.0	ヘラミガキ 横位	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	にぶい橙	十	体	3	
81	27	〃	4	1	(16.6)	5.6	5.7	(34.3)	36.8	〃 〃	〃	〃	〃				(568.5)cc
82		〃		1		5.2				〃 〃	〃	糸切り	〃	十□	体	23	2字の墨書
83		〃		1		6.9				〃 〃	ロクロナデ	〃	にぶい橙	十?	〃	30	
84		〃		1		6.3				〃 〃	〃	〃	〃	□	〃	247	
85	112	〃	3	1	(15.2)	6.9	6.0	(40.3)	28.0	〃 〃	ロクロナデ ヘラケズリ	糸切り ヘラケズリ	にぶい橙				
86	25	〃	6	2	(13.2)	5.7	4.8	(34.8)	26.1	〃 〃	ロクロナデ	糸切り	にぶい黄橙				外面摩滅
87	9	〃	2	1	13.5	5.5	4.3	31.9	34.9	〃 〃	〃	〃	〃				(305.2)cc
88		〃	5		(14.7)					〃 〃	ロクロナデ ヘラケズリ		暗褐	今	体	147	
89		〃	4	1	(13.6)	6.3	4.2	(30.9)	37.0	〃 〃	〃	ヘラケズリ	にぶい赤褐	□	〃	20	
90	52	〃	6	2	(13.9)	6.0	4.2	(30.2)	40.5	〃 〃	ロクロナデ	糸切り	にぶい橙				
91	5	〃	2	1	13.4	5.9	5.0	37.3	36.2	〃 〃	〃	〃	浅黄橙 底				黒色処理消失(364.8)cc
92	1	〃	2	1	13.4	4.4	4.3	32.1	40.2	〃 〃	ヘラミガキ 横・斜	〃	褐 底				(259.3)cc
93	6	〃	10	1	(16.0)	5.8	4.9	(30.6)	43.9	〃 〃	〃	〃	黒				
94	2	〃	5	1	(14.8)	5.0	4.8	(32.4)	40.6	〃 〃	〃 横	ヘラケズリ	〃				
95	4	〃	3	2	(17.0)	7.0	5.1	(30.0)	38.4	〃 〃	〃 〃	〃	褐 黒 底				

法量値のうち、口径の得られるものは推定を含めて207点である。大小が混在し、8.2〜18.8cmを計る。次表によって8.2cm 1点、11.3〜11.6cm 2点が小さく、17.5〜18.8cm 3点がやゝ離れて分布するが、その間は殆ど連続し、特に13.0〜15.5cmに集中している。図化する84点によっては12.6〜15.5cmに86.9%が集中し、平均では14.3cmとなる。

底径は424点によって4.1〜8.2cmを計る。5.0〜6.5cmに80.4%が集中する。図化する73点では4.2〜7.4cmであり、平均は5.8cmである。また、口径に対する底径の比率は1.86〜3.17に及び、平均2.45となる。

器高は2.1〜7.4cmを計り、4.3〜6.1cmまでに77.1%が含まれる。器高4.0cm未満の坏はいずれも口径8.0〜9.0cmの小型の坏に限られる。図化する82点の平均では5.7cmである。口径及び底径に対する器高の割合はそれぞれ2.22〜3.42、0.86〜1.55であり、各平均では2.92、1.34となる。

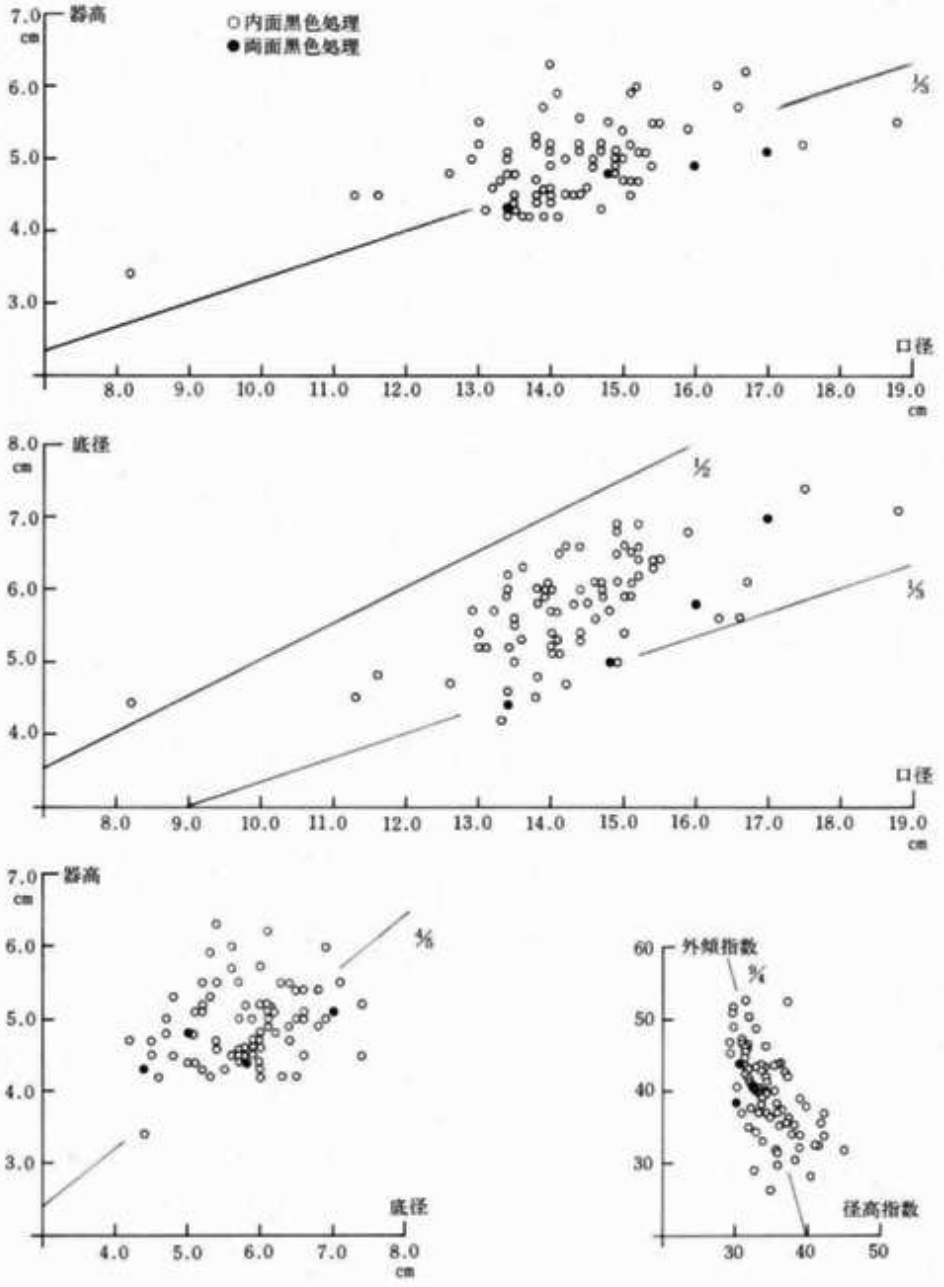
第9表　黒色処理坏の法量値集計表

口径	点数	比率	底径	点数	比率	器高	点数	比率
8.2 cm	1	0.5%	4.1〜 4.4 cm	6	1.4%	2.1 cm	1	0.8%
11.3〜11.9	3	1.4	4.5〜 4.9	15	3.5	3.4〜 3.8	3	2.3
12.0〜12.9	16	7.7	5.0〜 5.4	86	20.3	4.0〜 4.4	19	14.4
13.0〜13.9	68	32.9	5.5〜 5.9	104	24.5	4.5〜 4.9	25	18.9
14.0〜14.9	70	33.8	6.0〜 6.4	133	31.4	5.0〜 5.4	27	20.5
15.0〜15.9	37	17.9	6.5〜 6.9	51	12.0	5.5〜 5.9	25	18.9
16.0〜16.7	9	4.3	7.0〜 7.4	23	5.4	6.0〜 6.4	19	14.4
17.5〜17.8	2	1.0	7.5〜 7.8	4	0.9	6.5〜 6.9	10	7.6
18.8	1	0.5	8.1〜 8.2	2	0.5	7.1〜 7.4	3	2.3
計	207	100.0	計	424	99.9	計	132	100.1

但し、推定値を含む

また、外傾指数は26.1〜52.7となるが、特に他と相関する傾向は把握できない。

内外面黒色処理の坏は口縁部より底部まで残存するものは僅か4点である。他は口縁部176点、体部203点、底部59点の破片である。しかし、口縁部及び体部には高台付坏が若干含まれるものとみられる。底部によって算出される個体数は13である。



第20図　黒色処理坏の法量比

器形は殆ど内黒処理される坏と同様であり、更に外面に横方向の篦磨きが施される。底部の切り離しは32点中篦削りされる3点、篦磨きされる1点を除いて回転糸切りによるものである。

口径は11.4～17.0cm、底径3.6～8.0cm、器高4.3～5.1cmを計り、共に内黒処理の坏と差異はない。

高台付坏（第21・22図　第5・10表　図版14）

内面黒色処理の高台付坏は口縁部より高台部まで残存するもの20点である。口縁部及び体部片は坏に含めているが、ほかに識別できる底部及び高台部を合せて130点がある。高台によって算出される個体数は遺存率の乗数により、38個体以上と推計される。

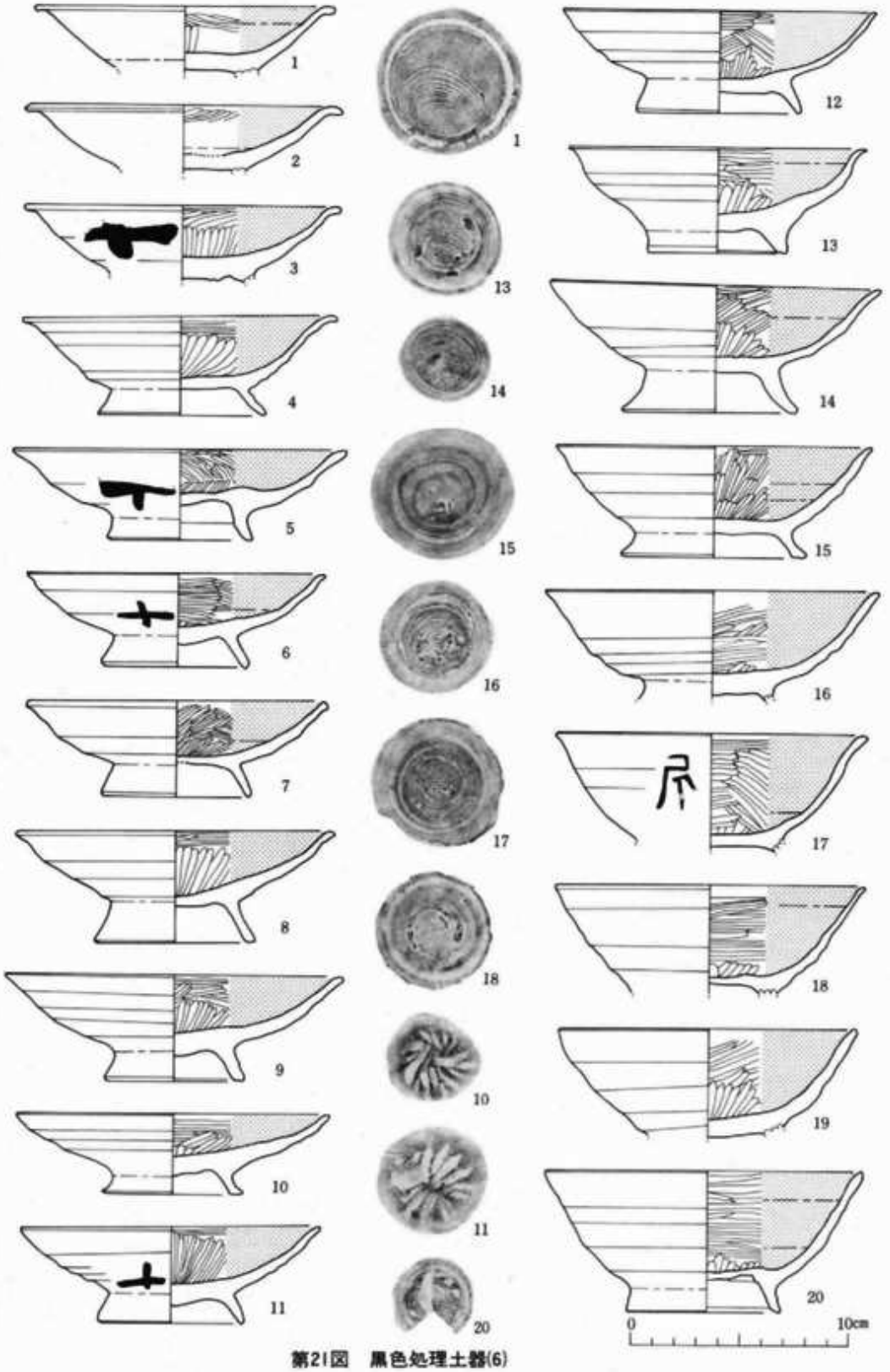
図化する28点によってみると、坏部は器高が低く、外傾指数の高い皿型をなすものとこれより器高の大きい外傾指数60以下のものに分けられる。前者には緩やかに内彎して立ちあがるもの、口縁部の端反りするものがあり、口縁部が薄く逸き出されるものや丸くなって肥厚するもの等が混在する。後者では内彎して立ちあがるもの、やゝ直線状に近いものがあり、全体に内黒処理の坏に類似する。内外面は体部、底部共に坏の場合と同様であるが、底部の器厚は高台の貼付けに伴って著しく薄手になるものが含まれる。また、坏部の器高の低いものでは粗粒の胎土を有するものが認められる。

高台は共に比較的低い安定した付高台である。底部より外傾するもの、外反するもの、内彎するもの等があり、高台端部は肥厚して幅広となるもの、丸味をなすもの、鋭く狭まるものが含まれる。高台内は89点中回転糸切り痕を残すもの64点、ロクロナデによって不明となるもの4点、菊花状の押圧痕を残してロクロナデされるもの20点となり、糸切り痕を残すものには更に菊花状の圧痕を有するもの1点がある。しかし、いずれも坏部や高台部の形状に対応する関係は認められない。

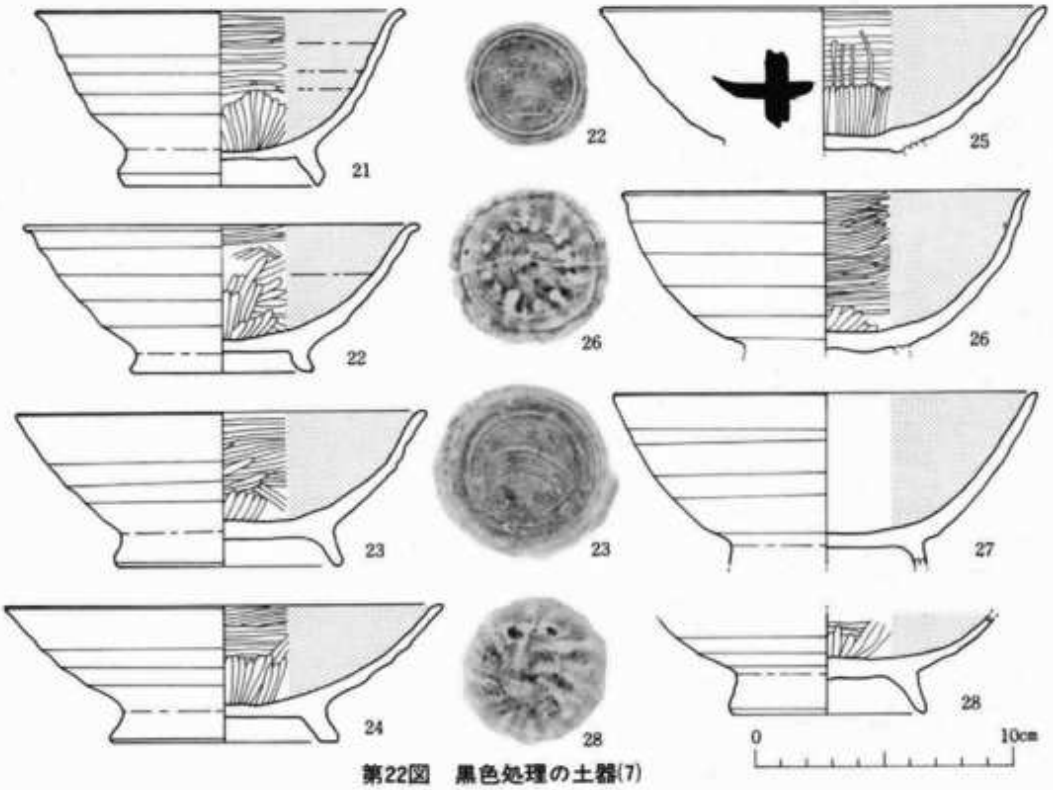
墨書文字のある高台付坏は5点まで確認され、いずれも体部外面に記される。「十」と判読されるもの4点、「冗」1点である。

法量値は推定値を含めて口径が13.4～17.2cm、高台径5.5～9.4cm、器高3.7～6.8cmを計る。図化する18点では口径13.6～15.3cmに76.5%が集中し、平均は14.7cmである。また、器高の平均は6.8cmとなる。高台高は0.7～1.9cmである。全体に口径の大きいものは高台径、器高共に大きいが、口径の小さいものに器高の大きいものが含まれる。

内外面黒色処理の高台付坏は、口縁部より高台部まで残存するものはなく、高台の欠損する底部、または一部高台の遺存する11点の破片である。内黒処理のそれと同様であるが、坏部外面に横方向、高台では横、または縦方向の篦磨きが施される。高台内はロクロナデされ、回転糸切り痕を有するもの6点、菊花状を呈するもの1点が含まれる。2分の1を残存する高台径は7.0～8.8cmを計る。



第21図　黒色処理土器(6)



第22図　黒色処理の土器(7)

第10表　同観察表(2)

実測図No.	登録No.	器種	残存率 口縁	残存率 高台	口径 cm	高台底径 cm	器高 cm	径高指数	外傾指数	器面調整 内面	器面調整 外面	切り離し調整	外面色調	墨書文字 文字	墨書文字 位置	墨書文字 No.	備考
1	26	高台付碗	2		13.7				80.0	ヘラミガキ 横放射	ロクロナデ	糸切り	褐				容量(151.9)cc
2	33	〃	3		(14.5)				89.3	〃 〃	〃	不明	にぶい黄橙				内外面摩滅
3		〃	~10		(14.5)				81.8	〃 〃	〃	糸切り ロクロナデ	にぶい赤褐	＋?	体	11	
4	32	〃	2	2	14.4	7.7	4.5	31.3	78.3	〃 〃	〃	〃	にぶい黄褐				(250.0)cc
5		〃	8	1	(15.2)	6.7	4.2	(27.6)	76.4	〃 横斜	〃	ロクロナデ	にぶい橙	＋?	体	9	
6	6	〃	2	2	13.7	6.8	4.3	31.4	76.5	〃 横放	〃	菊花状 ロクロナデ	〃	＋	〃	28	
7	7	〃	3	2	(13.8)	6.9	4.4	(31.9)	68.3	〃 〃	〃	不明	〃				
8	13	〃	8	2	(14.6)	7.4	5.1	(34.9)	88.4	〃 〃	〃	菊花状 ロクロナデ	〃				
9	22	〃	2	1	15.5	6.4	4.8	31.0	80.2	〃 〃	〃	〃	浅黄橙 にぶい橙				はぼ完形(216.7)cc
10	25	〃	2	3	14.3	(6.5)	3.7	25.9	102.5	〃 〃	〃	〃	橙				
11	11	〃	4	1	(13.7)	6.7	4.4	(32.1)	80.6	〃 〃	〃	〃	にぶい褐				
12	12	〃	8	2	(14.3)	7.6	4.7	(32.9)	69.3	〃 〃	〃	糸切り ロクロナデ	〃				
13	3	〃	4	1	(13.6)	6.4	4.8	(35.3)	60.2	〃 〃	〃	ロクロナデ	にぶい橙				
14	10	〃	2	1	15.2	8.1	5.9	38.8	65.1	〃 〃	〃	糸切り ロクロナデ	褐				(284.0)cc
15	8	〃	10	1	14.5	8.5	5.1	35.2	52.5	〃 〃	〃	〃	灰褐				
16	24	〃	2		15.3				56.9	〃 横斜	〃	〃	淡橙 橙				
17		〃	2		14.3				44.8	〃 横放	〃	〃	にぶい橙	尻	体	136	(401.9)cc
18	31	〃	2		14.2				63.5	〃 〃	〃	〃	浅黄橙 褐				内面摩滅(306.7)cc

19	35	高台付甲	2		13.6				40.3	ヘラミガキ	横位 ロクロナデ	不明	暗褐				(274.3)cc
20	1	〃	4	2	(14.6)	7.0	6.5	(44.5)	35.0	〃 〃	〃	糸切り 輪花状 ロクロナデ	にぶい橙 にぶい黄橙				
21	2	〃	3	1	(14.3)	8.0	6.8	(47.6)	36.2	〃 〃	〃	糸切り ロクロナデ	浅黄橙				
22	5	〃	4	2	(15.3)	7.1	5.7	(37.3)	51.0	〃 〃	〃	〃	明褐				
23	23	〃	4	1	(15.8)	8.8	5.9	(37.3)	57.1	〃 〃	〃	〃	にぶい黄橙 暗褐				
24	15	〃	~10	1	(16.9)	8.8	5.3	(31.4)	69.8	〃 〃	〃	ロクロナデ	にぶい橙 黒褐				
25		〃	~10		(17.2)				47.3	〃 〃	〃	糸切り ロクロナデ	にぶい橙	+	体	10	
26	4	〃	2		15.7				33.9	〃 〃	〃	輪花状 ロクロナデ	にぶい褐				(587.4)cc
27	30	〃	2		16.4				39.0	〃 〃	〃	糸切り ロクロナデ	褐				内面摩滅(635.2)cc
28	64	〃		1		7.6				〃 〃	〃	輪花状 ロクロナデ	にぶい褐				
29	1	鉢	4		(23.5)					〃	横位 斜 ロクロナデ ヘラケズリ						
30	2	〃	10		(24.2)					〃 〃	〃						
31	3	壺		底部 1		3.8				ヘラミガキ ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ					
32	6	耳皿	10							ヘラミガキ	〃						

( ) は推定値

鉢（第23図　第5・11表　図版14）

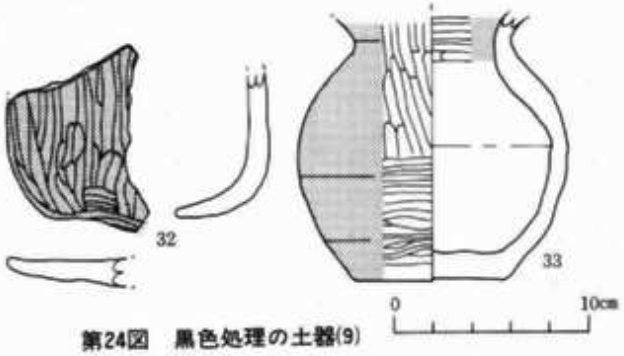
内面黒色処理の口縁部6点、体部6点、底部7点の破片である。口縁部は短かく外反し、口縁端部が上方に逸き出される。外面はロクロ痕を有し、下半が不整に篦削りされる。内面は横、または斜方向の篦磨きが施される。

体部は共に外面に縦、または斜方向の篦削りが不整に走る。内面は横方向の篦磨きが施される。底部は篦削りをうけるもの2点、回転糸切り痕を残すもの1点がある。後者は器高が低く口径の大きい鉢とみられ、底径は9.0cmと推定される。ほかに14.2cmの1点がある。胎土は共に砂粒、小石を含み、外面はにぶい橙色、または褐色を呈する。

第23図　黒色処理の土器(8)

その他（第24図　第5・10表　図版14）

内外面黒色処理される小壺1点と耳皿1点がある。壺は口縁部より体部にかけて欠損しているが、ロクロ成形される胴部の張る小壺である。外面は体部上半まで縦方向に、これより下半は横方向に篦磨きされ、内



第24図　黒色処理の土器(9)

面は頸部まで横方向に施される。底部は全面が不定方向に篦磨きされ、切り離しは不明である。胴部の最大径は6.9cm、底径は3.8cmを計る。

耳皿は口縁部の破片で歪みをもつ。内外面に入念な篦磨きが施され、やゝ光沢がある。

(2) 非黒色処理の土師器（第25～33図　第5・7・11～15表　図版15～23　29・30）

非黒色処理の土器は坏、高台付坏、甕、鉢、その他を含めて15,240点である。うち完形品は僅か4点である。破片数による比率は坏79.3%、高台付坏3.3%、甕・鉢0.2%である。

坏（第25～30図　第5・7・11・12表　図版15～21）

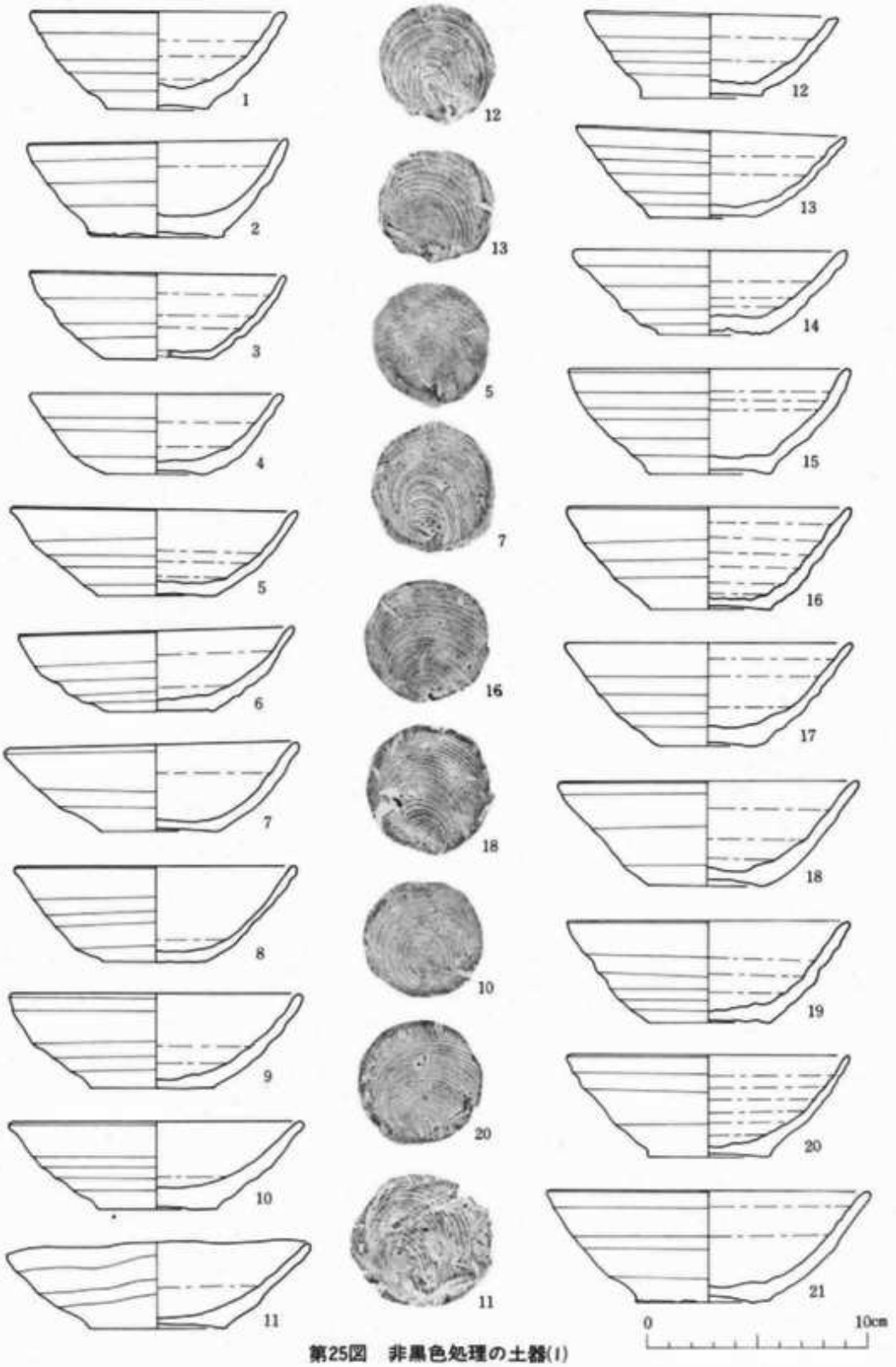
口縁部より底部まで残存するものは245点であり、他の破片は口縁部4,998点、体部4.488点、底部2,356点である。口縁部及び体部片には高台付坏と識別できない破片が含まれ、実数ではこれより減少するものとみられる。細片化傾向の小さい底部片によって推計される個体数は732であるが、細片が多い点では若干これを上回るものと推定される。

口縁部は体部に続いて外傾するもの、内彎して立ちあがるものがあり、後者では端反りするものが含まれる。共に強弱があって明確に分類できないが、口縁端部が外反して逸き出されるものがやゝ多い。口縁端部の外傾するものがやゝ肥厚するのに対し、内彎、または端反りするものでは体部に比して薄手となる傾向がみられ、全体に歪みのあるものが多い。ほかに内面が横方向に篦磨きされるものが1点含まれる。ほかに口縁部直下に穿孔される1点があり、径0.3～0.4cmの2孔がやゝ不整に対応する。1孔は外面より、他は内面より穿たれ、内外面に煤状の炭化物が付着する。

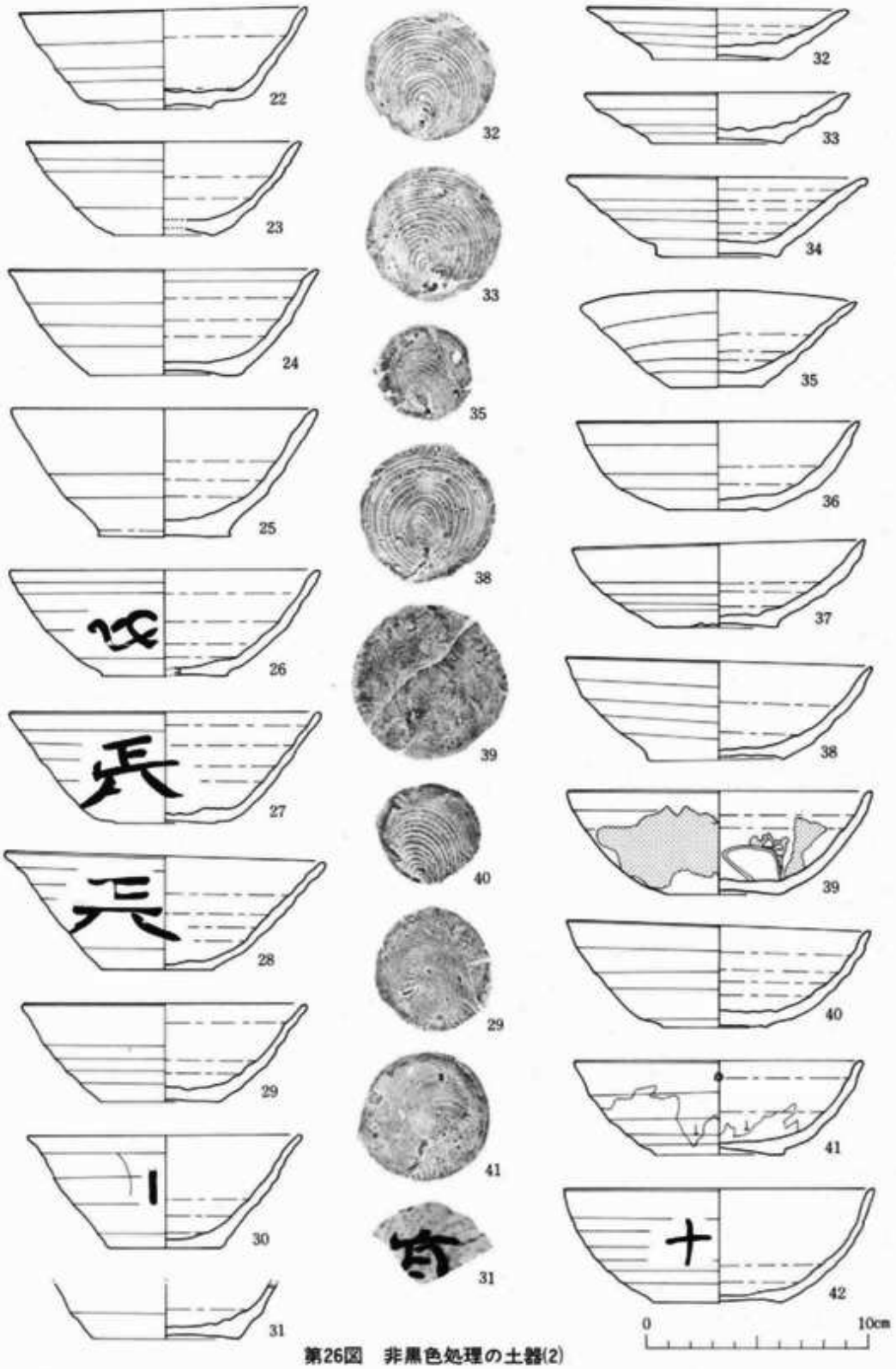
体部は内外面にいずれもロクロ痕を残し、特に外面の凹凸が顕著である。再調整をうけるものは図化する89点のうち5点で極めて少ない。外面全面に回転篦削りされる1点を除いては下端に横方向の手持ち篦削りが不整に認められるものである。共に底部の篦削りに対応するものである。内面では篦ナデとみられるものと既述の篦削りされる各1点がある。

底部は体部境より肥厚するものと逆に薄手となるものがあり、体部境が丸味をなすものは殆どない。共に底部外縁に比して中央部が高く、水平をなすものは少なく不整である。切り離しは篦削りによって不明となる6点を除いてすべて回転糸切りによっている。篦削りされるものは井桁状、または特定方向に認められるもの、不定となるものがある。また、糸切り底に更に糸切りされた底部を貼付け、その外縁を篦削りするものや二度切りによって底部を調整するものが含まれる。そのほか、長さ0.6cm、幅0.3cm、深さ0.1cmの籾の圧痕を有するもの、糸切り後細い条線を刻するものがある。

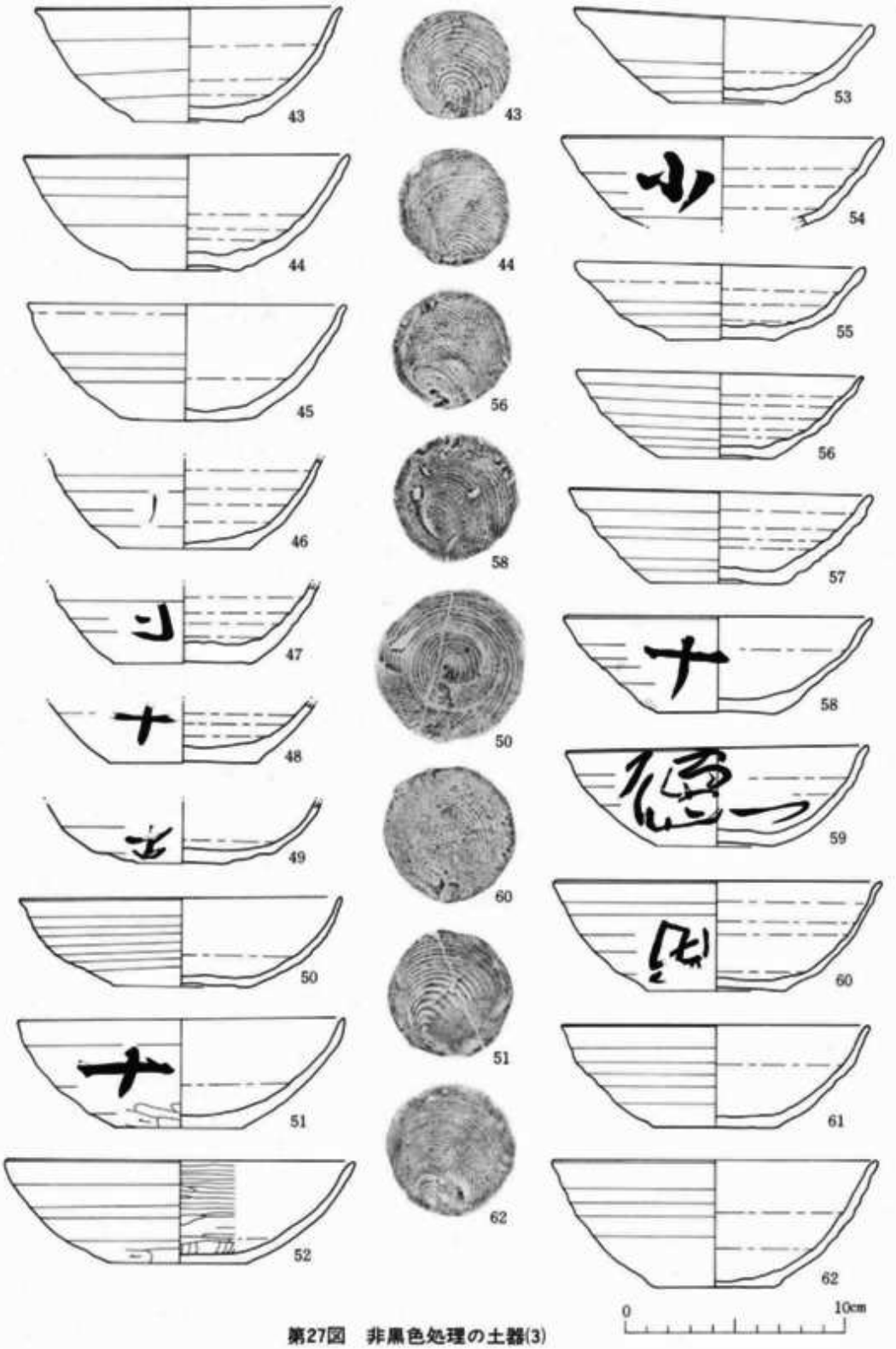
底部の内面はロクロ痕が残って平滑をなすものが少なく、凹凸のあるものが大部分である。篦磨きされる1点は内面黒色処理の坏と同様に放射状の磨きが施されるものである。そのほか内面に漆液の固着する漆とき用とみられるもの、燈心痕とみられる細紐状の痕跡や油痕・煤の



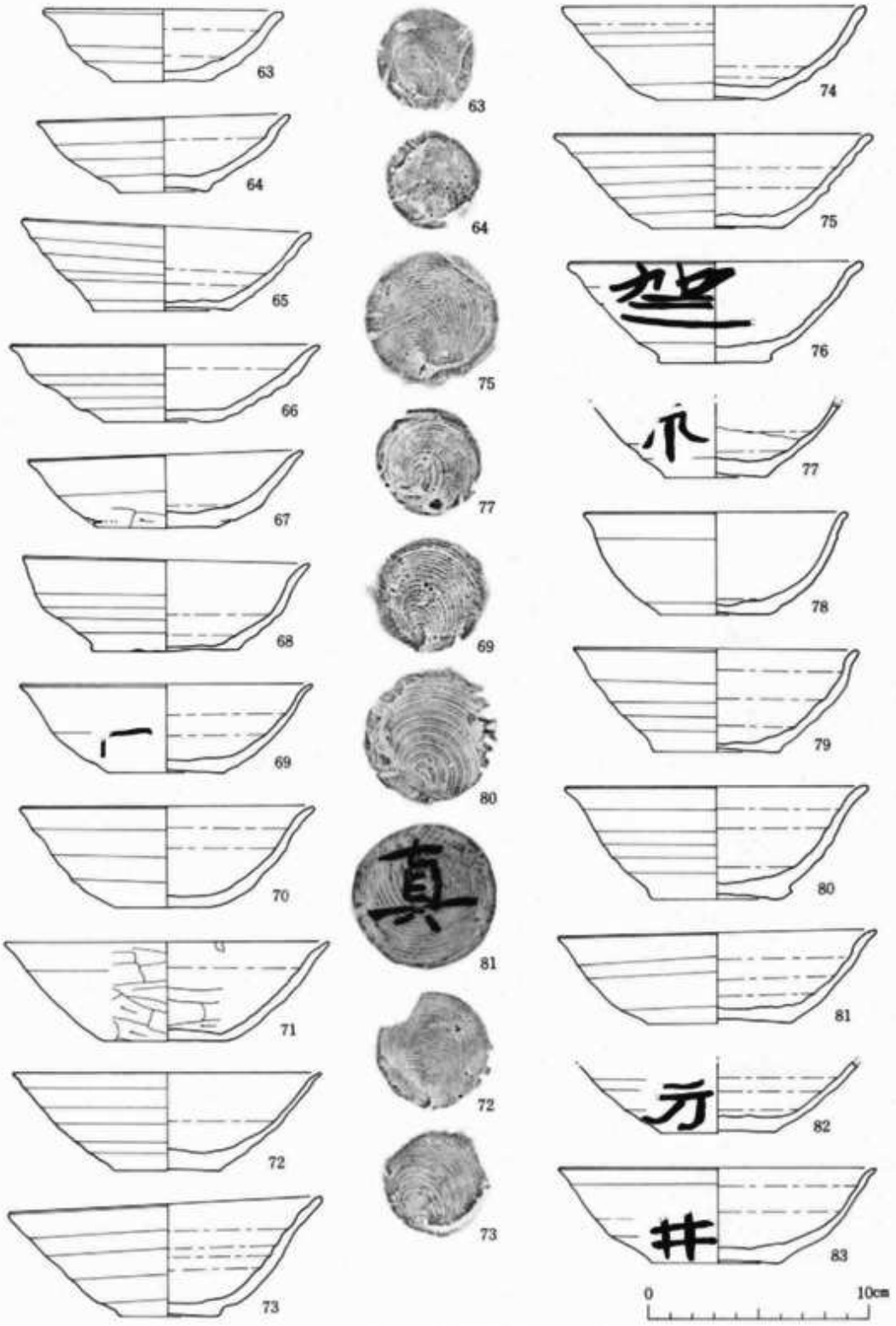
第25図　非黒色処理の土器(1)



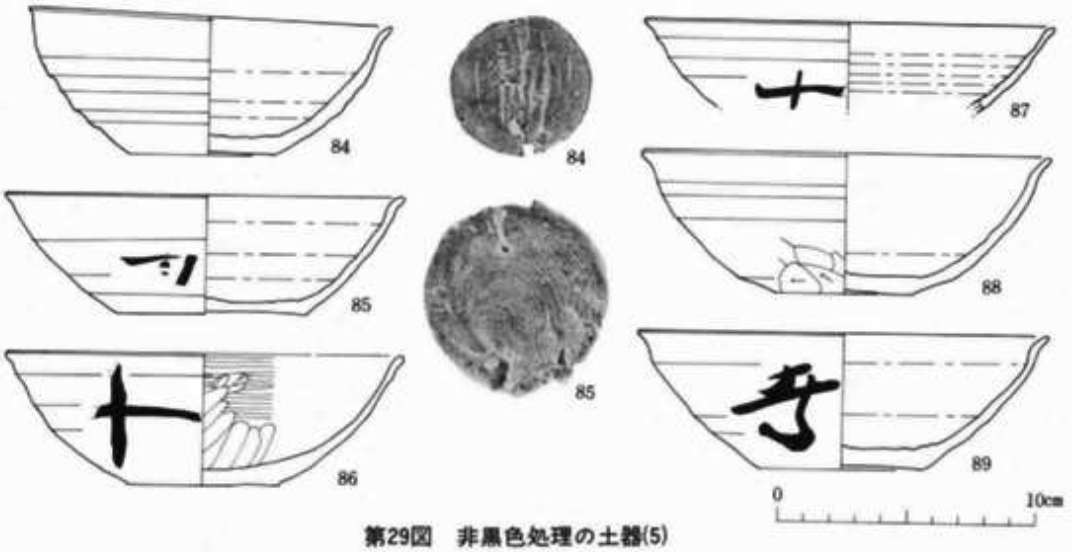
第26図　非黒色処理の土器(2)



第27図　非黒色処理の土器(3)



第28図　非黒色処理の土器(4)



第29図　非黒色処理の土器(5)

第11表　同観察表(1)

実測図No.	登録No.	器種	残存率 口縁	残存率 底部	口径	底径	器高	径高指数	外傾指数	器面調整 内面	器面調整 外面	切り離し調整	色調 内面	色調 外面	墨書文字 文字	墨書文字 位置	墨書文字 No.	備考
			9ｹﾀ/10	9ｹﾀ/10	cm	cm	cm											
1	219	坏	4	1	(11.6)	4.6	4.4	(37.9)	45.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	黒	にぶい黄橙				内面に炭化物付着
2	49	〃	2	1	11.8	6.2	4.3	36.4	36.0	〃	〃	〃	灰白	浅黄橙				容量(201.5)cc
3	26	〃	2	3	11.6	(5.0)	3.9	33.6	42.5	〃	〃	〃	浅黄橙	〃				(201.9)cc
4	67	〃	3	1	(11.5)	4.5	3.6	(31.3)	41.1	〃	〃	〃	にぶい橙	灰黄褐				
5	21	〃	2	1	13.0	5.4	3.9	30.0	55.6	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙				(205.6)cc
6	3	〃	1	1	12.5	4.9	3.7	29.6	45.6	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙				(194.5)cc
7	205	〃	2	1	13.4	5.5	3.9	29.1	45.0	〃	〃	〃	黒褐	黒褐				内・外面の一部に煤付着 (255.6)cc
8	32	〃	2	1	12.8	4.7	4.3	33.6	46.6	〃	〃	〃	橙	橙				
9	45	〃	2	1	13.3	5.6	4.2	31.6	46.5	〃	〃	〃	灰黄褐	橙 黒				内面の一部と外面に油煙・煤付着 (231.5)cc
10	37	〃	3	1	13.3	5.4	4.0	30.1	60.0	〃	〃	〃	にぶい褐	褐 橙 灰				外面の部に黒色付着物あり
11	232	〃	2	1	13.8	6.1	3.9	28.3	58.4	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙				歪みが強い (211.1)cc
12	14	〃	2	1	11.5	5.5	3.8	33.0	44.9	〃	〃	〃	〃	〃				(179.7)cc
13	84	〃	2	1	12.2	5.0	3.9	32.0	49.4	〃	〃	〃	灰褐	灰褐				(368.5)cc
14	1	〃	1	1	12.4	5.1	3.8	30.6	50.0	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙				174.1cc
15	66	〃	3	1	(12.8)	5.7	4.7	(36.7)	44.2	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙				
16	29	〃	1	1	12.9	5.5	4.7	36.4	45.7	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙				263.0cc
17	77	〃	4	1	(13.0)	4.5	4.7	36.2	48.5	〃	〃	〃	黒褐	黒褐 褐				内面に炭化物付着
18	17	〃	2	1	13.6	5.4	4.7	34.6	51.6	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙				
19	46	〃	2	2	12.8	5.6	4.6	35.9	43.5	〃	〃	〃	黒褐	にぶい褐 黒				内・外面に油・煤・炭化物付着
20	10	〃	2	1	12.8	5.6	4.6	35.9	46.8	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙				
21	38	〃	2	1	14.7	6.0	5.0	34.0	45.1	〃	〃	〃	〃	浅黄橙 褐 灰				内・外面の一部に煤付着
22	93	〃	2	2	13.0	4.3	4.5	34.6	40.4	〃	〃	〃	橙	橙 にぶい赤褐				
23	115	〃	2	3	12.4	4.5	4.2	33.9	48.8	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙				
24	53	〃	10	1	(13.0)	6.8	4.7	(36.2)	41.7	〃	〃	〃	橙	橙				中・軟質の焼成で粘土細粒
25	46	〃	3	2	(13.8)	6.0	5.8	(42.0)	39.7	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙				

26		坏	3	3	(14.0)	(5.4)	4.8	34.3	44.8	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	にぶい橙	にぶい橙	丸	体部	184	
27		〃	5	2	(14.1)	4.6	5.0	35.3	46.5	〃	〃	〃	〃	〃	丸	〃	130	口縁部にゆみあり
28		〃	2	1	14.5	5.1	5.1	35.2	51.4	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙	〃	〃	129	
29	12	〃	2	1	12.9	5.4	4.5	34.9	43.3	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙 にぶい橙				ほぼ完形(251.9)cc
30		〃	4	2	(12.4)	5.3	5.1	(41.1)	46.6	〃	〃	〃	橙	灰褐 橙	□	体	194	口縁部内外面に炭化物付着
31		〃		4		(6.5)				〃	〃	〃	黒 にぶい橙	にぶい橙 褐灰	真	底	161	
32	101	〃	2	1	11.8	5.8	2.3	19.5	89.6	〃	〃	〃	にぶい橙	橙 にぶい橙				(103.3)cc
33	39	〃	2	1	12.0	6.0	2.3	19.2	87.0	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙				(101.9)cc
34	24	〃	1	1	13.6	5.6	4.0	29.4	70.7	〃	〃	〃	明褐	明褐				167.8cc
35	204	〃	2	1	12.4	4.1	4.4	35.5	70.1	〃	〃	〃	灰黄褐	灰黄褐				底部外面に粘の圧痕 (174.1)cc
36	47	〃	3	2	(12.7)	4.7	4.0	(31.5)	40.0	〃	〃	〃	にぶい赤褐	にぶい赤褐				
37	206	〃	1	1	13.2	5.5	3.8	26.8	55.0	〃	〃	〃	にぶい橙	橙 にぶい赤褐				容量207.4cc
38	4	〃	1	1	13.8	6.2	4.4	31.9	45.7	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙				口縁部内・外面に油状付着 250.5cc
39	4-1	〃	2	1	13.7	5.2	4.7	34.3	41.5	〃	〃	〃	にぶい黄褐	にぶい黄褐				内外面に炭化物付着
40	25	〃	2	1	13.7	4.8	4.6	33.6	42.4	〃	〃	〃	橙	橙 にぶい橙				
41	227	〃	1	1	13.1	5.8	4.3	32.8	40.5	〃	〃	〃	黒 灰黄褐	黒 灰黄褐				内・外面に油状・炭化物付 着2字孔/261.1)cc
42	113	〃	3	1	(14.0)	5.4	5.1	(36.4)	33.3	〃	〃	〃	橙	にぶい橙	十	体	95	
43	16	〃	2	1	13.9	5.0	5.1	36.7	37.1	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙				内外面の一部に炭化物付着 (359.3)cc
44	207	〃	2	1	14.8	5.0	5.1	34.5	38.7	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙				外面に黒色部分あり (435.2)cc
45	232	〃	2	2	14.4	6.2	5.3	36.8	37.7	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙				
46		〃		2		6.0				〃	〃	〃	にぶい橙 黒	にぶい橙	□	体	254	内面に墨付板？あり
47		〃		2		6.4				〃	〃	〃	にぶい 赤褐	にぶい橙	□	〃	190	内面に黒色付着物あり
48		〃		2		6.8				〃	〃	〃	橙	橙	十	〃	99	
49		〃		1		4.1				〃	〃	〃	にぶい褐	にぶい褐	□	〃	188	
50	30	〃	3	1	(14.6)	5.3	4.0	(27.4)	37.1	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙				
51	52	〃	2	1	14.8	5.5	4.9	33.1	43.6	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	十	体	96	
52	105	〃	2	2	15.8	6.1	4.6	29.1	43.2	ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	浅黄橙 明褐灰	浅黄橙 明褐灰				
53	36	〃	2	1	13.6	5.0	3.9	28.7	59.8	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	灰褐	黒 灰褐				(199.6)cc
54		〃	8		(14.6)					〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい橙	小	体	183	
55	35	〃	2	1	13.2	4.9	3.4	25.8	56.3	〃	〃	〃	灰黄褐	灰黄褐				(201.9)cc
56	11	〃	2	1	13.0	5.1	3.9	30.0	52.5	〃	〃	〃	橙	橙				ほぼ完形(218.5)cc
57	44	〃	2	2	13.8	6.0	4.1	29.7	53.6	〃	〃	〃	にぶい褐	にぶい褐 黒				口縁部内面と外面に黒色炭化物付着
58		〃	10	1	(14.0)	5.4	4.4	(31.4)	54.5	〃	〃	〃	〃	にぶい褐	十	体	94	体部に黒斑あり
59		〃	3	2	13.8	5.4	4.4	31.9	39.1	〃	〃	〃	褐	褐	密	〃	165	
60	86	〃	3	1	14.9	6.2	5.0	33.6	41.0	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	密	〃	191	
61	210	〃	4	1	(14.0)	5.7	4.7	33.6	45.7	〃	〃	〃	赤灰 橙	橙				
62	89	〃	3	1	14.8)	5.7	5.8	39.2	39.3	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい褐				
63	8	〃	1	1	10.9	4.4	3.3	30.3	50.7	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙				121.8cc
64	2	〃	1	1	11.5	4.1	3.3	28.7	59.2	〃	〃	〃	〃	〃				125.9cc
65	23	〃	2	1	13.2	6.3	3.9	29.5	47.6	〃	〃	〃	にぶい橙	浅黄橙				(209.3)cc
66	103	〃	2	1	14.1	5.4	3.5	34.8	67.1	〃	〃	〃	浅黄橙 灰褐	にぶい褐				

67	129	坏	3	1	(12.5)	5.4	3.2	(26.4)	51.4	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	糸切り	にぶい橙	にぶい橙 黒				底部に高台を付加して重合する
68	5	〃	2	1	13.0	6.7	4.1	31.5	37.9	〃	ロクロナデ	〃	にぶい橙	にぶい橙				ほぼ完形(237.5)cc
69		〃	10	1	(13.3)	5.3	4.0	(30.1)	52.5	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい黄橙	十?	体	101	
70	33	〃	2	1	13.4	4.4	4.5	33.6	48.4	〃	〃	〃	にぶい黄橙	〃				(285.2)cc
71	97	〃	2	2	14.7	5.5	4.5	30.6	55.6	ロクロナデ ヘラナデ	ヘラケズリ	網代? ヘラケズリ	にぶい橙	浅黄橙				(331.5)cc
72	34	〃	3	1	(14.0)	4.8	4.4	(31.4)	60.2	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	にぶい黄橙 褐	褐				
73	13	〃	2	1	14.3	4.6	5.1	35.7	45.9	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい褐				
74	76	〃	2	1	13.8	5.0	4.2	30.4	49.4	〃	〃	〃	にぶい褐	黒褐				口縁部内面の一部に炭化物付着
75	28	〃	2	1	14.5	5.9	4.3	29.7	57.5	〃	〃	〃	浅黄	浅黄				ほぼ完形(321.1)cc
76		〃	5	2	(13.4)	5.2	4.6	(34.3)	54.3	〃	〃	〃	にぶい褐	にぶい褐	留	体	107	
77		〃		1		4.6				〃	〃	〃	にぶい黄橙 黒	にぶい黄橙 褐 灰	尼	〃	139	内面に煤付着
78	209	〃	4	1	(12.0)	5.0	4.6	(38.3)	34.8	〃	〃	〃	褐	にぶい褐				(253.7)cc
79	62	〃	3	2	(12.9)	5.8	4.7	(36.4)	49.5	〃	〃	〃	橙	橙				
80	31	〃	3	1	(13.8)	6.5	5.1	(37.0)	46.6	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい黄橙				
81		〃	2	1	14.5	6.5	4.1	28.3	49.1	〃	〃	〃	黒	〃	真	底	102	内底墨付?痕(348.2)cc
82		〃		2		5.2				〃	〃	〃	にぶい褐 黒	にぶい褐黒	□万	体	189	内面に炭化物付着
83		〃	10	2	(14.4)	6.0	4.3	(29.9)	47.7	〃	〃	〃	にぶい橙	灰褐 にぶい橙	井	〃	176	
84	6	〃	2	1	14.1	5.6	5.3	37.6	38.2	〃	ロクロナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	浅黄橙 にぶい橙	浅黄橙 灰				(353.7)cc
85	208	〃	2	1	15.5	7.3	4.6	29.7	43.5	〃	ロクロナデ	糸切り	浅黄橙	浅黄橙	□	体	97	(435.2)cc
86		〃	10	1	(15.4)	5.9	5.1	(33.1)	45.5	ヘラミガキ	〃	〃	にぶい褐	にぶい褐	十	〃	100	
87		〃	10		(15.9)					ロクロナデ	〃		にぶい橙	にぶい橙	十	〃	98	
88	218	〃	10	1	(15.8)	5.2	5.4	(34.2)	42.6	〃	〃	糸切り	灰黄褐 黒褐	灰黄褐 黒褐				内面に炭化物付着
89		〃	10	1	(16.0)	6.3	5.3	(33.1)	47.7	〃	〃	〃	にぶい褐	にぶい橙	寺	体	186	

（）は推定値

付着するものがあり、灯明皿用としての使用が推定されるもの等が含まれる。また、口縁部直下に穿孔する坏の底部では炭化物の付着は中央部に限って認められず、台皿としての使用も推測される。

胎土は著しく粗粒のものは含まれず、砂粒や小石の含むものが若干含まれる。色調はにぶい橙色、または褐色がかったものが多く、焼成は全体に良好である。また、体部の外面、または底部に黒班を有するものが若干含まれる。

墨書される土器は小破片を含めて74点である。底部に２点が記されるほかは体部外面に位置し、２字を記すもの１点、底部を上にする逆字５点がある。判明する文字は「十」、「小」、「井」、「丸」、「尼」、「寺」、「平」、「真」、「留」、「徳」、「□万」等11字である。もっとも多いのは「十」７点であるが、稚拙なものが含まれる。

口径は推定値を含めて9.0～17.0cmを計り、13.0～14.8cmが328点で72.8％を占める。図化する82点の平均では13.5cmである。全体に間断なく分布するが、特に口径の小さいものには直線状に立ちあがる器形のものと著しく器高の小さい皿型のものが含まれる。最大径19.8cmを計る

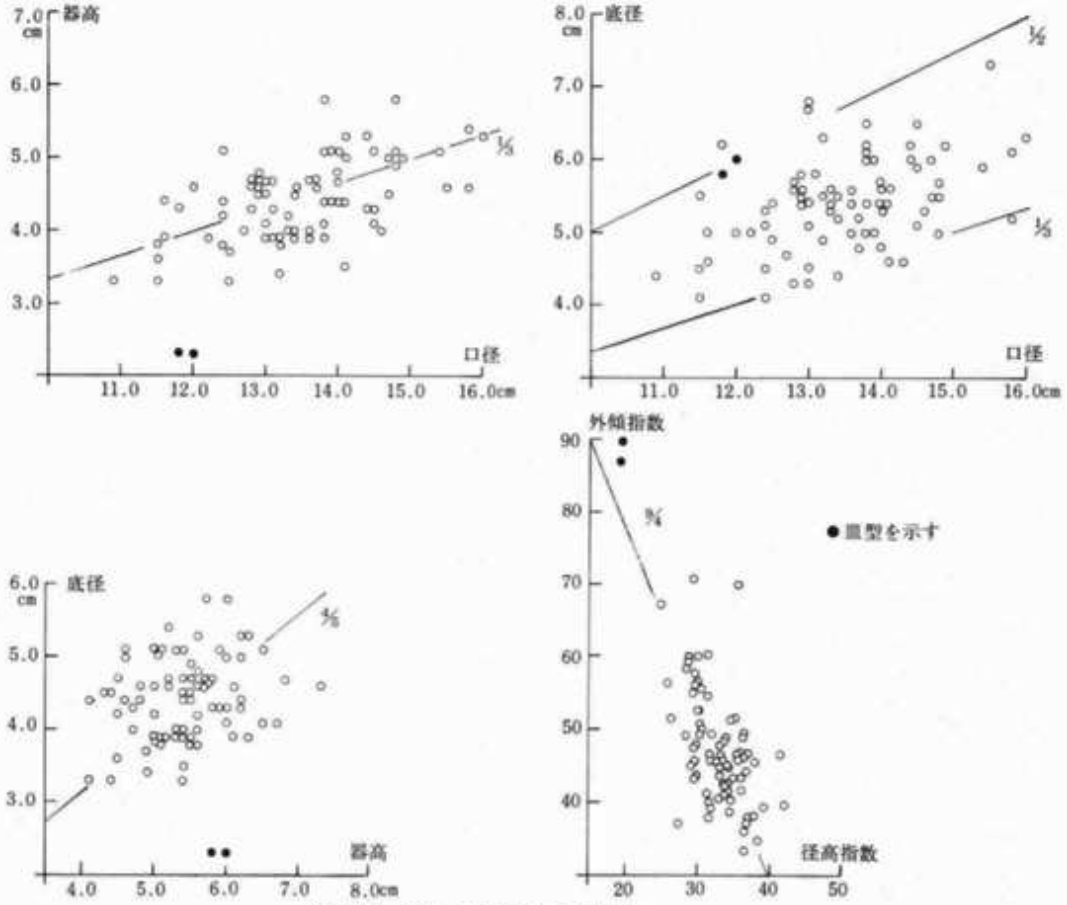
第12表　非黒色処理坏の法量値集計表

口　　径	点　数	比　率	底　　径	点　数	比　率	器　　高	点　数	比　率
9.0～ 9.8cm	2	0.4%	3.8～ 3.9cm	3	0.3%	1.8　cm	2	0.8%
10.0～10.9	9	2.0	4.1～ 4.4	48	5.0	2.1～ 2.3	6	2.5
11.2～11.9	39	8.6	4.5～ 4.9	134	13.9	2.7～ 2.9	8	3.3
12.0～12.9	95	21.1	5.0～ 5.4	323	33.6	3.3～ 3.4	17	7.0
13.0～13.9	127	28.2	5.5～ 5.9	260	27.0	3.5～ 3.9	43	17.8
14.0～14.9	117	25.9	6.0～ 6.4	143	14.9	4.0～ 4.4	70	28.9
15.0～15.9	45	10.0	6.5～ 6.8	38	4.0	4.5～ 4.9	65	26.9
16.0～16.9	15	3.3	7.0～ 7.3	10	1.0	5.0～ 5.4	25	10.3
17.0～(19.8)	2	0.4	7.6～ 7.8	3	0.3	5.5～ 5.8	6	2.5
計	451	99.9	計	962	100.0	計	242	100.0

( ) 高台付坏？

1点は高台付坏とみられるものである。

底径は3.8～7.8cmをみる。全体では5.0～5.9cmに60.7%が含まれ、図化する87点における平均では5.4cmとなる。底径は口径に対応する傾向にあるが、底径が小さく器高の大きいものが混在している。



第30図　非黒色処理坏の法量比

器高は1.8～5.8cmである。1.8～2.3cm及び2.7～2.9cmの低いものと3.3cm以上のこれより大きいものに2分され、前者は比較的口径の小さい皿型をなし、いずれも外傾指数は80以上を計り、全体の3.3%を占める。

完形品9点とほゞ完形に近い4点によって得られる容量は121.8～321.1ccを計る。厚さ0.01mmのポリエチレンを使用して自然状態で計測するものであり、歪みのあるものは更に多少の増量が見込まれる。大凡123.1～125.9cc、167.8～218.5cc、237.5～263.0cc、321.1ccに分けられ、180ccをもって1合とするならば平均値ではそれぞれ0.69、1.07、1.40、1.78合となる。

高台付坏（第31図　第5・13表　図版21）

口縁部より高台部まで残存するものは17点であり、完形品は含まれていない。ほかに高台の剝離欠損する坏部12点、底部232点と高台249点がある。口縁部及び体部片では坏と識別できないため既述の坏に含めるものである。底部による個体数は84個体以上と推計される。

図化する17点によってみると、坏部は器高が低く皿型をなすものとこれより器高の大きいものに分けられる。前者は底部より外傾して立ちあがり、更に口縁端部の外反するものが含まれ、肥厚するものと薄く逸き出されるものである。後者は体部より内彎気味に立ちあがる。

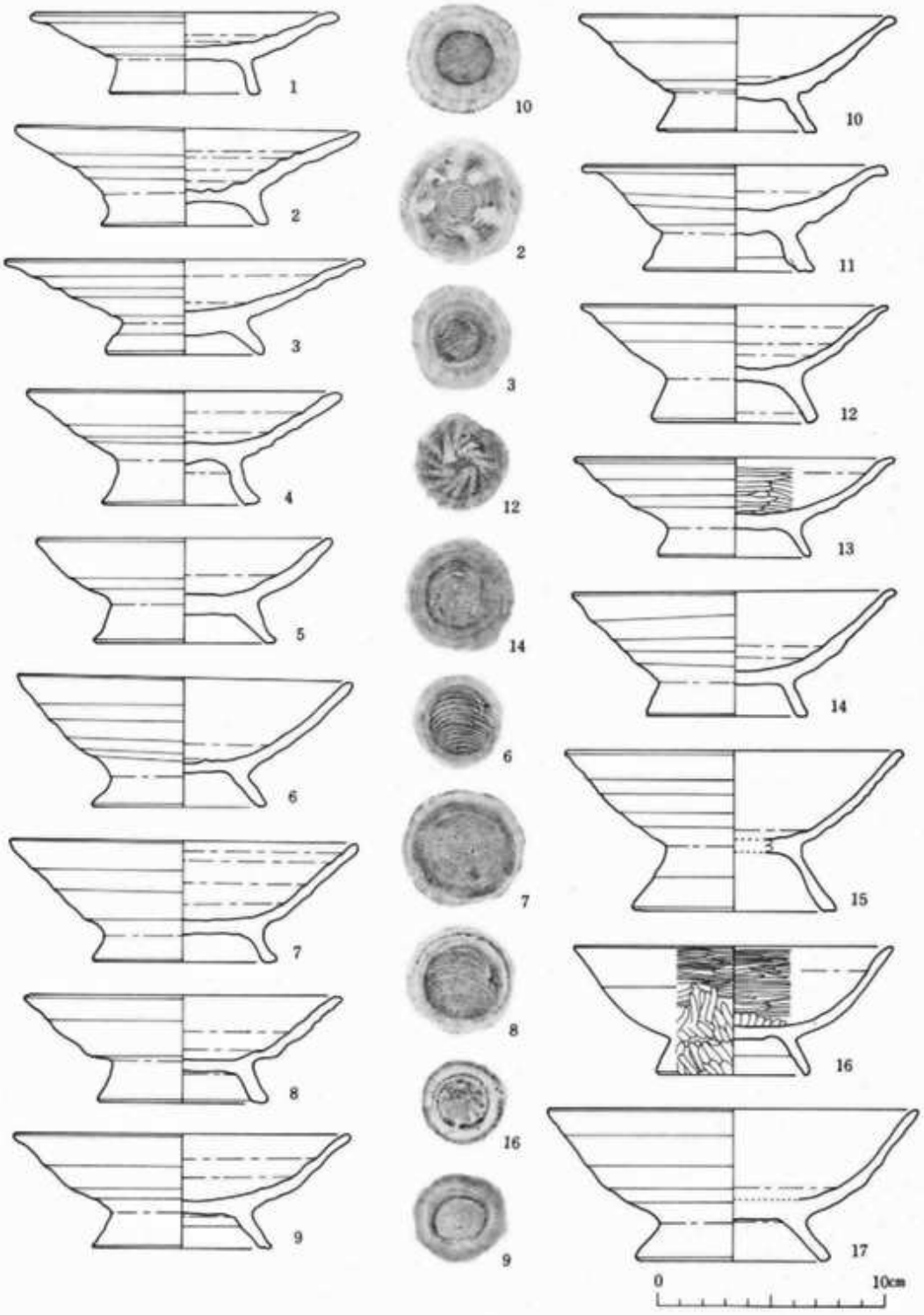
体部は坏と同様に内外面にロクロ痕が目立ち、うち2点は篦磨き痕を有し、高台内を除いて篦磨きされるものがある。磨き方向は黒色処理のそれと同様である。底部は内面の平滑となるものが多いが、著しい凹凸をなすものが混在する。中央部における器厚は0.4～1.1cmを計り、全体では0.2～1.3cmである。

高台は外傾、または外反気味に開き、高台端部に広狭がある。薄く逸き出されるものはやゝ丸味をなす若干を除いて肥厚し、平滑、または高台内側に凹状をなすものが大部分である。高台内外面は篦磨きされる1点のほか、すべてロクロナデされ、全体に滑らかである。高台内は回転糸切り痕を残す9点、全面ロクロナデされる6点、菊花状の圧痕を有する2点があり、糸切り痕のあるもの2点は更に菊花状の押圧痕を有し、高台に沿ってロクロナデされる。判明する全体の底部片95点中のうち86.3%が糸切り痕を持ち、他は菊花状を呈するものである。

口径は13.1～15.4cmでばらつきが小さく、平均では14.3cmを計る。しかし、他の破片を含む推定口径は13.8～17.1cmとなり、更に口径の大きい高台付坏が含まれる。

高台径は6.6～9.1cmであり、図化する17点の平均では7.5cmである。全体では6.2～10.6cmであり、7.0～8.4cmに66.6%が含まれる。高台高は1.2～2.9cmを計り、全体に坏部の器高の小さいものが低い傾向にある。

坏部によって得られる外傾指数は径高指数に対称的な傾向を示し、皿型をなすものから坏部の器高の大きいものまで3分される。しかし、高台の形態との対応は判然としない。



第31図　非黒色処理の土器(6)

第13表　非黒色処理の土器観察表　(2)

実測図No.	登録No.	器種	残存率		口径	底径	器高	径高指数	外傾指数	器面調整		切り離し調整	色調		備考
			口縁	高台						内面	外面		内面	外面	
					cm	cm	cm								
1	11	高台付坏	10	2	(13.6)	6.6	3.6	(26.5)	114.3	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り ロクロナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	
2	20	〃	2	2	15.2	7.4	4.3	28.3	105.2	〃	〃	糸切り 篦削り ロクロナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	容量(161.1)cc
3	14	〃	10	1	(14.9)	7.0	4.2	(28.2)	130.3	〃	〃	糸切り ロクロナデ	にぶい橙	にぶい橙	
4	1	〃	2	1	13.9	7.0	5.0	36.0	71.3	〃	〃	ロクロナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	内面に黒色部分あり(140.7)cc
5	10	〃	2	8	13.1	(8.0)	4.7	35.9	67.6	〃	〃	〃	〃	〃	
6	22	〃	2	1	14.8	7.7	5.7	38.5	60.7	〃	〃	糸切り ロクロナデ	にぶい橙	にぶい橙	(261.1)cc
7	21	〃	3	1	(15.4)	8.1	5.3	(34.4)	64.6	〃	〃	〃	褐	褐	口縁部内面に黒色付着物あり
8	4	〃	3	1	(14.0)	7.6	4.8	(34.3)	68.0	〃	〃	〃	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
9	9	〃	2	2	14.9	7.9	5.0	33.6	70.0	〃	〃	ロクロナデ	にぶい橙	浅黄橙	
10	17	〃	4	2	(14.0)	7.0	5.1	(36.4)	74.1	〃	〃	〃	褐灰	にぶい黄橙	
11	7	〃	7	4	13.5	(7.6)	4.7	34.8	78.7	〃	〃	〃	にぶい黄橙	〃	
12	8	〃	10	1	(13.6)	7.3	5.2	38.2	75.8	〃	〃	葡萄状 ロクロナデ	〃	灰白	
13	13	〃	4		(14.1)	6.7	4.4	31.2	78.7	〃	ヘラミガキ	糸切り 篦削り ロクロナデ	〃	浅黄橙	
14	23	〃	2	1	14.3	7.1	5.5	38.5	61.0	〃	ロクロナデ	糸切り ロクロナデ	〃	にぶい黄橙	(270.4)cc
15	6	〃	7	3	(15.0)	(9.1)	7.1	(47.3)	64.1	〃	〃	ロクロナデ	褐	褐灰 黒	黒色処理?
16	15	〃	6		(14.1)	6.8	5.7	(40.4)	47.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	葡萄状 ロクロナデ	橙	橙 褐灰	
17	5	〃	4	1	(15.4)	8.6	6.7	(42.5)	46.9	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り ロクロナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	

( ) は推定値

鉢（第32図　第5・14表　図版23）

口縁部78点、体部61点、底部9点まで確認されるが、甕と識別できない細片は甕に含めており、実数はこれよりやや多いものとみられる。

口縁部は体部に続いて外反し、僅かに縁帯状をなして上方に逸き出されるものとやや上方に折り曲げられるものが含まれる。共にロクロ使用による成形である。

体部は内面が比較的滑らかであるが、外面はロクロナデのほか、縦、または斜方向の篦削りを不整にうけるものが含まれる。そのほか、内面に横方向の篦磨きを施すもの1点が混入する。全体に器壁が厚く、0.6～1.2cmを計る。

底部は体部と同様に厚手であり、外面に糸切り痕、または更に篦削り痕を有して平滑である。内面はロクロナデされるほか、体部下端より刷け毛目状の調整痕を有するものがある。

胎土は砂粒や小石を含み、色調はにぶい橙色系が多い。また、底、体部の外面には黒色炭化物の付着するものがみられ、共に甕と同様である。

口径は20.6～35.9cmを計り、底径は7.8～11.9cmと推計される。

甕（第32図　第5・14表　図版23）

口縁部より底部まで残存するものは僅か1点であり、他は口縁部285点、体部2,026点、底部178点の破片である。小片のため詳細の判明しないものが多いが、ロクロ使用の有無によって2

分される。ロクロ使用の甕は口縁部230点、体部1,934点、底部73点となり、不明のものを含む全体では89.9%を占める。底部片における個体数は29となるが、すべて接合しない底部片であり、底部の破片数に準ずるものと推測される。

口縁部はいずれも外反し、ロクロ使用の甕ではくの字状に外反するものと更に上方に逸き出されるものが含まれる。それぞれ強弱、長短が認められる。器壁は特にロクロ使用の甕に厚薄が目立ち、内外面は不整に横ナデされる。また、ロクロ不使用の甕にあっては歪みが大きく、押圧痕を有するものが含まれる。そのほか、外面に丹塗りを施す小片1点と直線状をなして立ちあがるロクロ使用のもの1点がある。

体部は口径に比して頸部よりやや張り出すものと緩やかに下降するものがある。ロクロ不使用の甕では外面に篦削り、縦、または斜方向の刷け毛目を有するものが多く、全体に不整である。内面は刷け毛目、横ナデ等によっている。ロクロ使用のそれではロクロ痕のほか、更に縦、または斜方向の不整な篦削りを疎にうけるものがあり、前者が比較的厚手となる。そのほか、体部下半に平行する叩き目を有するもの3点が含まれる。

底部は体部より緩やかに丸味をなして続くもの、鈍角をなすもの、体部下端より底径が大きく、やや張り出すもの等が混在する。器厚は0.25〜1.35cmを計り、体部に比して厚手となる。概して小型の甕は薄手であり、ロクロ使用の底部がやや厚い。いずれも外縁に比して中央部にやや高い。外面は51点中、回転糸切り痕36点、糸切り後の篦削り痕1点、叩き目痕1点、木葉底9点、網代編ともじり編痕3点、砂粒の付着する2点が判明する。内面はロクロ痕のほか、ロクロ不使用の甕においてはナデ、または篦ナデ、刷け毛目状を呈する。

口径は10.3〜24.6cmを計り、10.3〜13.8cm 5点と16.9〜24.6cm 8点があり、ほぼ2分される。底径は152点によってロクロ使用の甕は5.0〜10.3cm、不使用のそれでは6.0〜11.6cmを計り、器高の得られるロクロ使用の甕は14.3cmである。

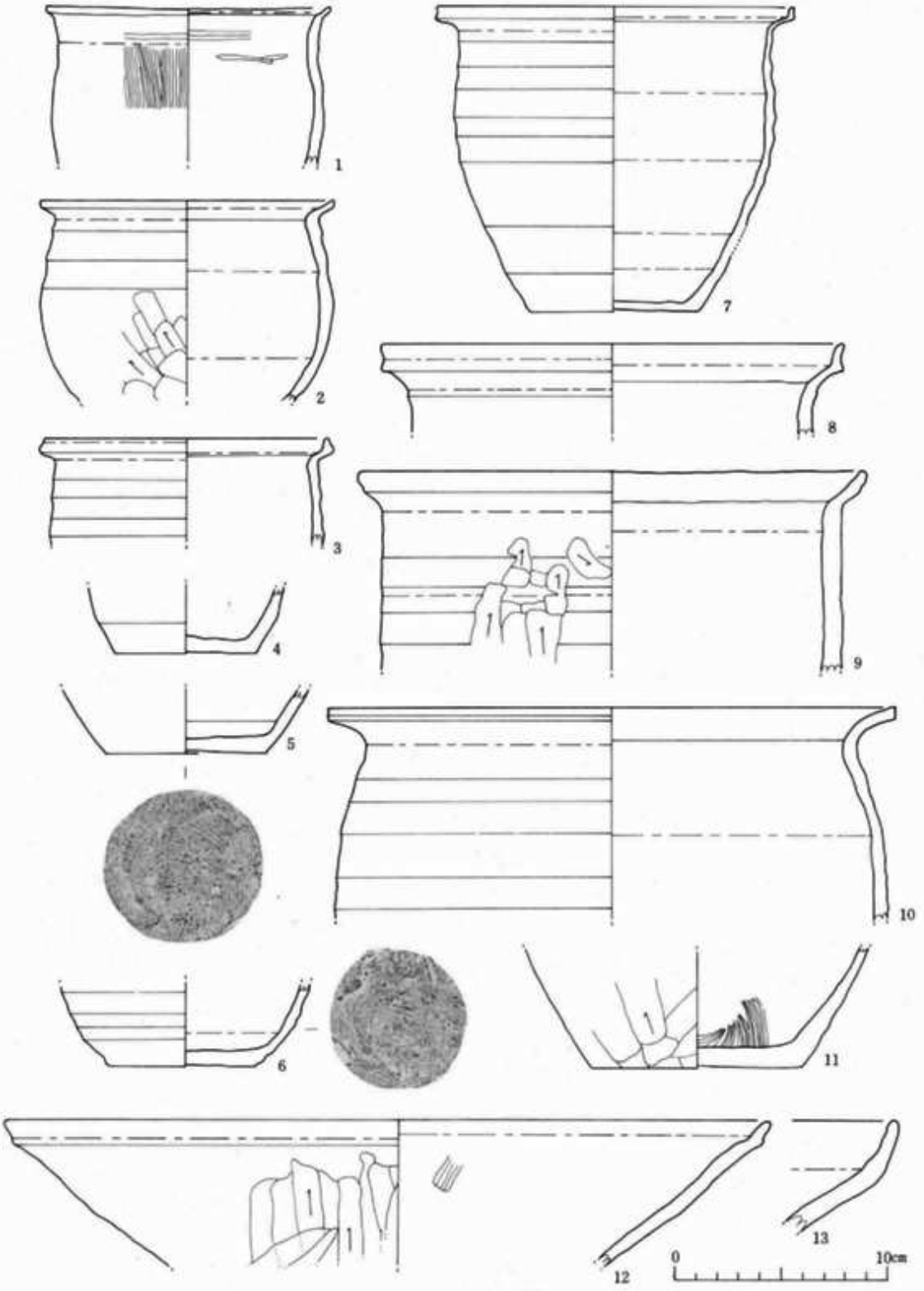
壺・その他（第33図　第5・15表　図版22）

壺1点、把手2点のほか、坏の底部をみられる円版状の土製品、手捏ねによる象形土製品各1点がある。

壺は体部より底部まで残存するロクロ成形の小壺である。内外面は比較的滑らかであるが、底部は中央に歪みのある糸切り痕を残す。底径3.4cmである。

把手2点のうち1点は上方に丸く、下方に不整な稜をもち、先端はやや粗雑になる手捏ねである。他の1点は両端を欠損しているが、全体に滑らかである。断面は接合部を除いて環状を呈し、ロクロ使用による穿孔とみなされる。

円版状土製品は、両面に対称的な回転糸切り痕を有し、二度切りに伴う坏の底部とみられる。そのほか手捏ね土製品は内面に指圧痕、外面に縦方向の細線が走り、上下2段に区画される。

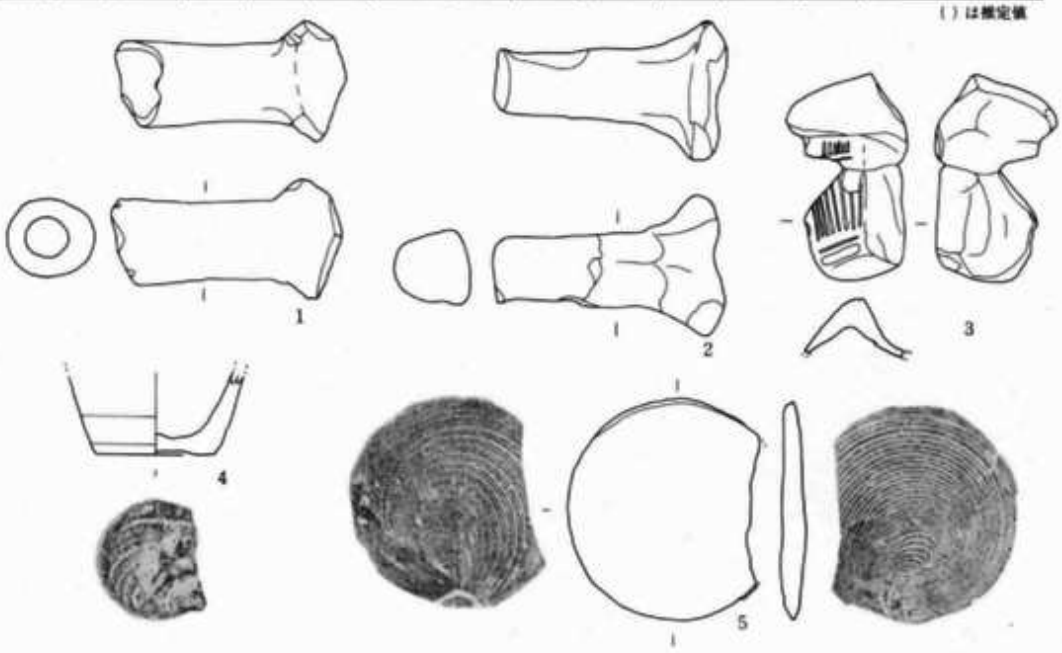


第32図　非黒色処理の土器(7)

第14表　非黒色処理の土器観察表　(3)

実測図No.	登録No.	器種	残存率 口縁	残存率 底部	口径	底径	器高	器面調整 内面	器面調整 外面	切り離し調整	色調 内面	色調 外面	備考
					cm	cm	cm						
1	19	椀	3		(13.4)			横ナデ ナデ	横ナデ ハケメ		にぶい橙色	にぶい橙色	ロクロ不使用
2	3	〃	3		(13.8)			ロクロナデ	ロクロナデ ヘラケズリ		褐灰	褐灰	ロクロ使用
3	47	〃	4		(13.8)			〃	ロクロナデ		にぶい褐	黒褐	〃 煤付着
4	5	〃		2		6.7		〃	〃	糸切り	にぶい橙	赤橙	〃
5	4	〃		1		7.5		〃	〃	〃	〃	にぶい褐	〃
6	1	〃		1		6.8		〃	〃	〃	黒褐	灰褐	〃 煤付着
7	1	〃	3	1	(16.9)	7.9	14.3	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃
8	39	〃	4		(23.9)			〃	〃		橙	橙	〃
9	52	〃	3		24.6			〃	ロクロナデ ヘラケズリ		〃	〃	歪みが大きい，ロクロ使用
10	1	〃	4		25.7			〃	ロクロナデ		にぶい褐	灰褐	〃 煤付着
11	2	〃		1		9.8		ハケメ	ヘラケズリ	砂粒付着	にぶい橙	褐灰	ロクロ使用
12	15	鉢	～10		(35.9)			ロクロナデ	ロクロナデ ヘラケズリ		橙	橙	〃
13	29	〃	～10					〃	ロクロナデ		にぶい橙	にぶい橙	〃

( ) は推定値



第15表　非黒色処理の土器　(4)

No.	種別	長さ	幅径	高さ	厚さ	色調	備考
		cm	cm	cm	cm		
1	把手	6.6	3.4		0.8	にぶい橙色	空洞をなし，ロクロ使用による 一部欠損
2	〃	6.6	4.0			〃	手付け 一部欠損
3	土製品	5.9	3.4	5.7	1.0	橙	〃
4	壺		3.4		0.5	にぶい橙	体部上半より欠損
5	土製品		6.4		0.7	にぶい褐	一部欠損 坏の底部とみられる

計測値は現存最大値

第33図　非黒色処理の土器(8)

4　須恵器（第34～39図　第5・7・16～18表　図版24～30）

環元炎焼成によるとみられる灰色、または灰白色を呈する土器は合せて1,692点であり、土器全体では7.6%を占める。破片が大部分を占め、器形の明らかなものは少ないが、坏、壺、鉢、甕等の器種が推定される。そのうち甕、壺類が須恵器中の56.9%、坏が43.0%を占める。坏に軟質のものが若干含まれるほかは硬質の焼成である。

坏（第34～37図　第5・7・16・17表　図版24・25）

口縁部より底部まで残存するものは68点、うち完形は1点である。他は口縁部339点、体部220点、底部100点である。図化するものは39点であるが、大部分は反転復元するものである。破片を含めた細片化傾向の小さい底部片によって求められる個体数は78以上と推定される。

口縁部は体部に続いて殆ど直線状をなして立ちあがるものと内彎、または内彎気味に立ちあがるものがあり、後者には口縁部の外反するものが若干含まれる。いずれも薄く逸き出されるものと肥厚するものが混在し、直線状に立ちあがる前者に薄手となるものが多い。

体部は内外面共に対応するロクロ痕を残す。比較的体部下半に顕著なものが多く、上半より口縁部にかけては平滑となる。

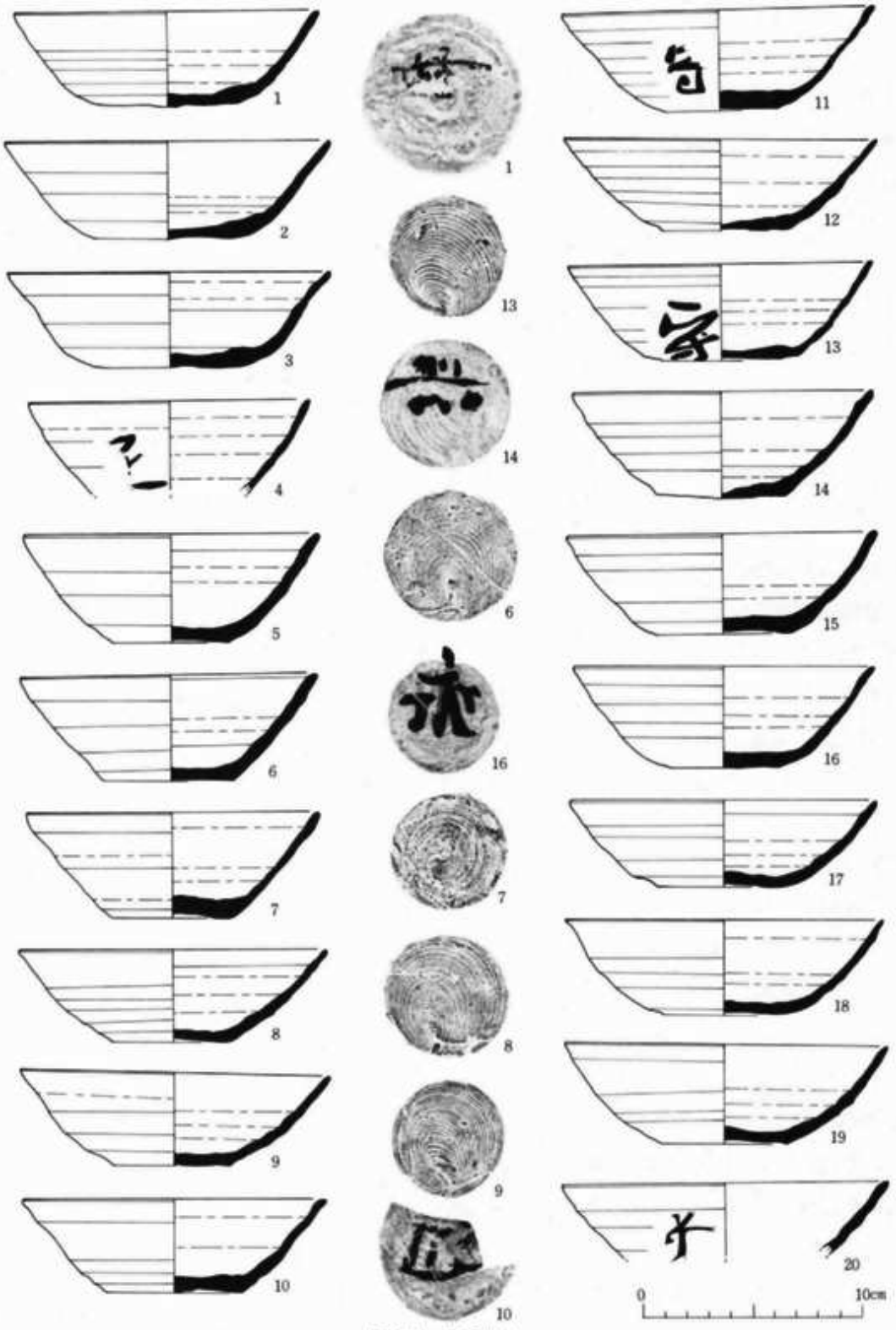
底部は体部下端よりやゝ丸味をなして続くものと体部境に稜をなすものがあり、大部分が体部に比して厚手となる。切り離しは篦切りによるものと回転糸切りによるものがあり、糸切り底が84.4%で圧倒的に多い。そのほか全面を不定方向の篦削りによって不明となる1点がある。篦切り底の外面は中央部に不整な残痕があって不安定となるものが含まれるが、糸切り底においては中央部に凹み状を呈するものが大部分である。共に内面は平滑なものは少なく、ロクロ痕の残るものが多い。

胎土は特に粗粒の目立つものは少ない。篦切りされる坏は灰色硬質のものと灰白色を呈してやゝ軟質のものがある。糸切り底の坏にあっては灰、灰白色のほか、褐色、または黄橙色がかったものが含まれ、焼成は一様でない。

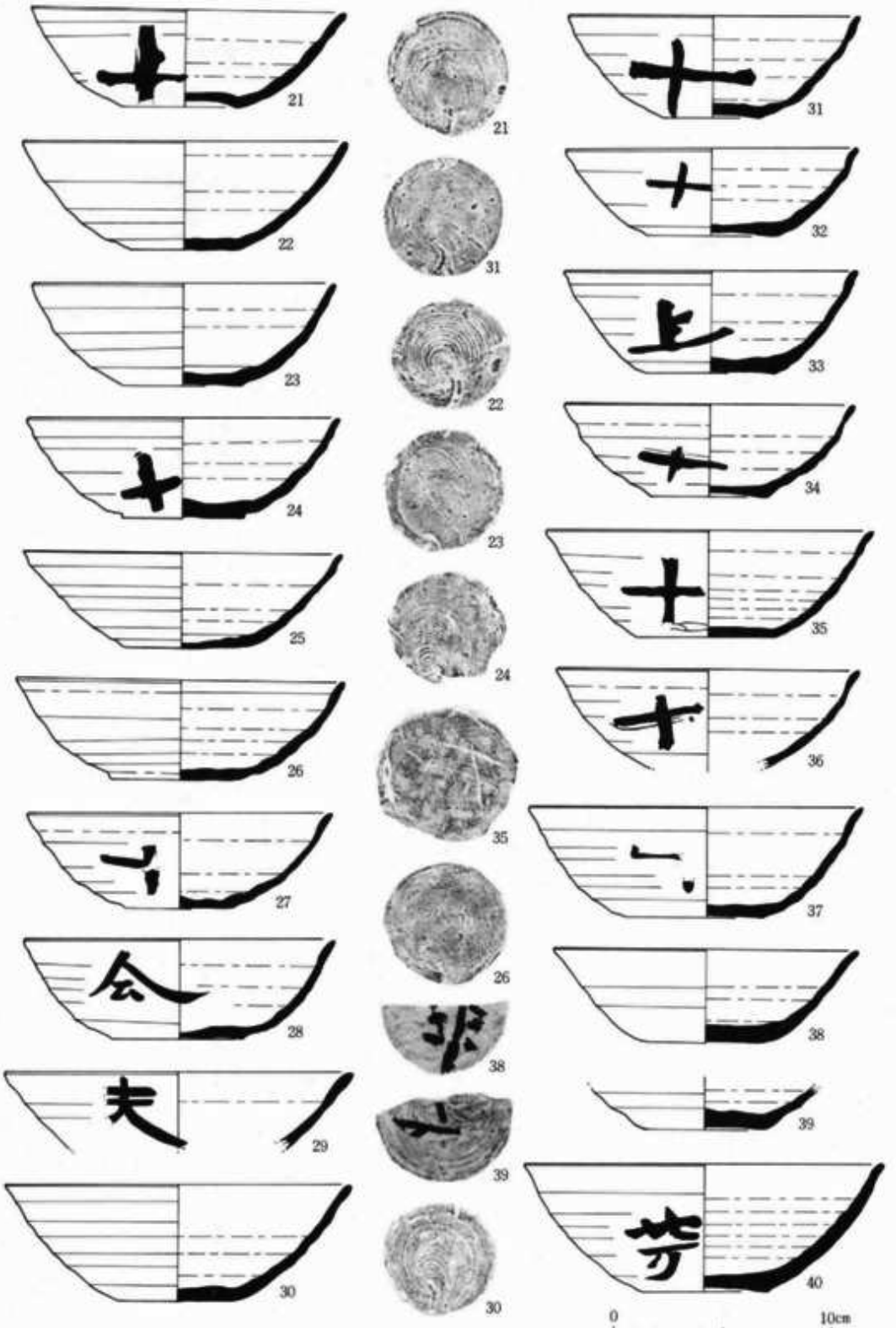
墨書文字のある坏は破片を含めて体部に34点、底部に10点の合せて44点がある。そのうち体部の3点には2字の墨書が判明する。体部では「十」、「上」、「大」、「夫」、「令」、「守」、「尻」、「真」、「廿万」、「髪十」等があり、底部では「大」、「赤」、「真」等が判明する。合せて「十」が15点、「大」、「守」、「真」、「兆」が各2点、他はいずれも1点である。

口径は図化する47点で12.9～16.5cmを計り、全体では12.2～16.5cmと推計される。篦切り底の坏では13.0～15.7cmでばらつきが小さく、糸切り底の坏は分散が大きいが、13.0～15.4cmに90.7%が集中する。

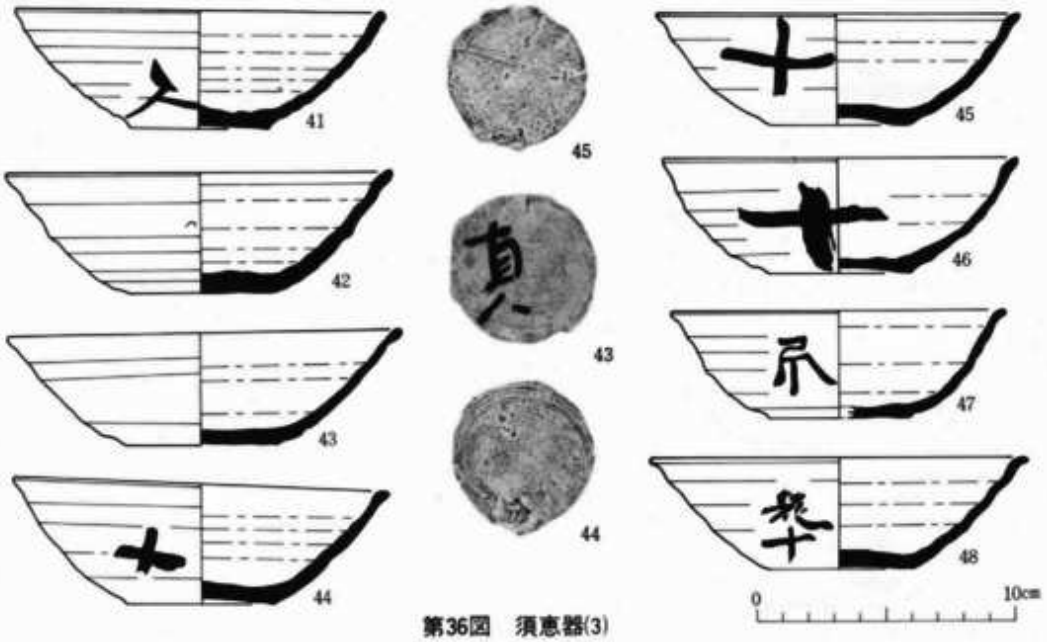
底径は4.1～8.3cmを計り、全体では5.0～6.4cmに78.3%を占める。篦切りの坏は4.1cmと6.0～7.4cmに大小2分され、糸切りの坏では殆ど間断なく分散する。



第34図　須恵器(1)



第35図　須恵器(2)



第36図　須恵器(3)

第16表　同観察表(1)

実測図No.	登録No.	器種	残存率 口縁	残存率 底部	口径	底径	器高	径高指数	外傾指数	器面調整 内面	器面調整 外面	切り離し調整	色調 内面	色調 外面	墨書文字 文字	墨書文字 位置	墨書文字 No.	備考
			分の10	分の1	cm	cm	cm											
1		坏	7	1	(13.5)	6.4	4.4	(31.7)	43.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	灰白	灰白	□	底	232	
2	19	〃	7	1	(15.0)	7.0	4.5	(30.0)	45.6	〃	〃	〃	灰白 灰	灰白 灰				
3	20	〃	4	1	(14.8)	7.0	4.4	(29.7)	44.3	〃	〃	〃	〃	〃				
4		〃	8		(12.9)					〃	〃		灰白	灰白	□	体	221	
5	2	〃	2	1	13.6	5.4	5.0	36.8	42.0	〃	〃	糸切り	灰	灰				体部内面に煤付着 容量(174.1)cc
6	21	〃	2	1	13.7	5.9	4.9	35.8	44.9	〃	〃	〃	灰褐	灰褐				
7	47	〃	8	1	(13.4)	5.4	4.9	(36.6)	48.0	〃	〃	〃	灰褐 灰	灰				
8	25	〃	4	1	(14.2)	5.4	4.3	(30.3)	55.8	〃	〃	〃	灰白	にぶい褐				
9	15	〃	2	1	14.2	5.3	4.5	31.7	46.7	〃	〃	〃	黄灰	黄灰				(305.6)cc
10		〃	10	2	(14.0)	4.1	4.3	(30.7)	52.3	〃	〃	ヘラ切り	灰褐	灰白	智?	底	233	
11		〃	9	1	(14.3)	5.7	4.6	(32.2)	48.9	〃	〃	糸切り	灰白	〃	守	体	182	
12	24	〃	2	2	14.3	5.8	4.3	30.1	51.2	〃	〃	〃	〃	〃				
13		〃	2	1	13.9	5.6	4.4	31.7	42.0	〃	〃	〃	灰	灰	守	体	178	(338.9)cc
14	72	〃	2	1	13.8	6.0	4.9	35.5	48.0	〃	〃	〃	〃	〃	□	底	163	(327.8)cc
15	41	〃	8	1	(14.2)	6.4	5.1	(35.9)	37.3	〃	〃	〃	〃	〃	大	〃		口縁部に歪みがある
16		〃	8	1	(13.8)	5.0	4.6	(33.3)	45.7	〃	〃	〃	〃	〃	赤	〃	179	
17	29	〃	6	2	(14.1)	5.8	4.0	(28.4)	48.8	〃	〃	〃	〃	〃				
18	23	〃	2	1	14.6	5.4	4.4	30.1	46.6	〃	〃	〃	浅黄	灰白				(355.6)cc
19	1	〃	2	1	14.8	5.8	4.6	31.1	46.7			〃	灰白	〃				(414.8)cc
20		〃	6		(14.9)								灰白 にぶい褐	〃	大	体	222	
21	17	〃	2	1	14.4	5.5	4.5	31.2	47.8	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	灰褐 白 灰	褐 灰	十	〃	80	(380.7)cc
22	4	〃	2	1	14.9	5.0	5.0	33.6	49.0	〃	〃		灰白	灰白				(377.8)cc

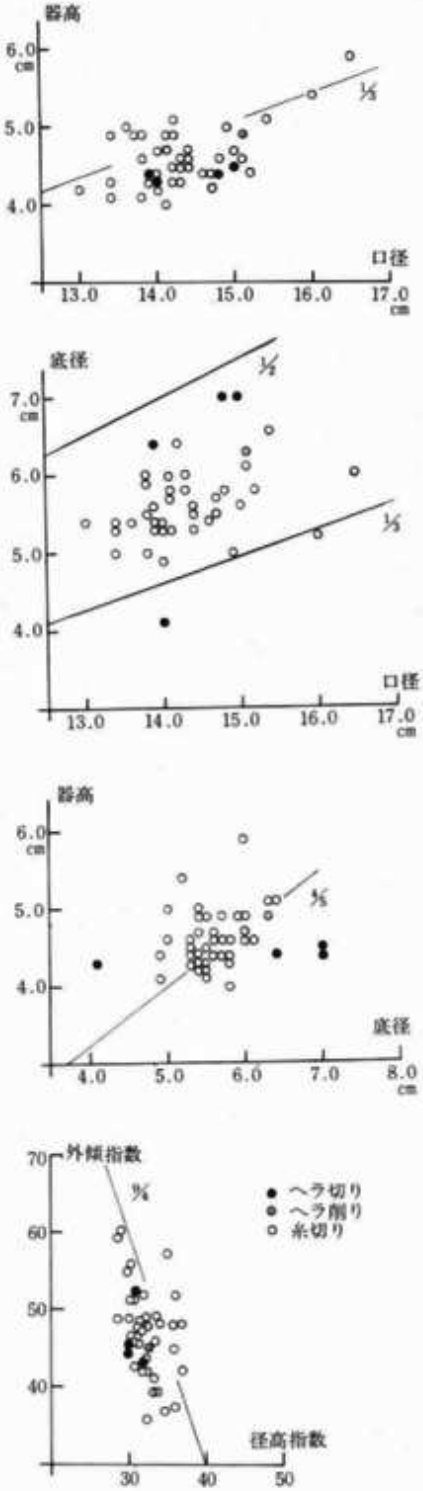
23	3	坏	2	1	14.0	5.4	4.7	33.6	39.4	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	灰黄褐	灰黄褐				(374.1)cc
24		〃	4	1	(14.4)	5.6	4.6	(31.9)	43.5	〃	〃	〃	褐灰	灰白 灰褐	十	体	79	
25	6	〃	2	1	14.7	5.7	4.4	29.9	48.9	〃	〃	〃	灰	灰				
26	22	〃	2	2	15.1	6.1	4.6	30.5	45.7	〃	〃	〃	灰白	灰白				
27		〃	6	2	(14.0)	4.9	4.4	(31.4)	47.7	〃	〃	〃	〃	〃	十	体	83	
28		〃	2	2	14.3	6.0	4.6	32.2	35.9	〃	〃	〃	灰褐	灰白 褐灰	令	〃	149	(381.5)cc
29		〃	−10		(16.0)					〃	〃		褐灰	灰褐	夫	〃	153	
30	13	〃	3	1	(16.0)	5.0	5.4	(33.8)	48.1	〃	〃	糸切り	にぶい黄橙	灰白				
31	12	〃	1	1	14.2	5.5	4.9	34.5	36.7	〃	〃	〃	〃	灰黄褐	十	体	77	388.8cc
32	80	〃	2	2	13.4	4.9	4.1	30.6	42.7	〃	〃	〃	褐灰	黄灰 灰黄褐	〃	〃	81	
33		〃	6	2	(14.1)	6.0	4.7	(33.3)	39.4	〃	〃	〃	褐灰 暗赤褐	灰褐	□	〃	185	
34		〃	3	2	13.4	5.4	4.3	32.1	41.9	〃	〃	〃	灰褐	褐灰 黒褐	〃	〃	76	
35		〃	2	2	15.1	6.3	4.9	32.5	44.9	〃	〃	ヘラケズリ	〃	にぶい黄橙	〃	〃	84	(422.2)cc
36		〃	5		(13.9)					〃	〃	糸切り	灰白	褐灰	〃	〃	86	
37		〃	2	2	15.4	6.3	5.1	33.1	41.2	〃	〃	〃	灰褐 灰白	灰	十?	〃	82	
38		〃	5	2	(14.0)	5.4	4.3	(30.7)	51.2	〃	〃	〃	灰	灰白	六?	〃	164	
39		〃		2		5.6				〃	〃	〃	灰白	〃	□	底	231	
40		〃	10	3	(16.5)	6.0	5.9	(35.8)	51.7	〃	〃	〃	褐灰	灰白	〃	〃	177	
41		〃	10	2	(14.4)	5.3	4.6	(31.9)	52.2	〃	〃	〃	灰褐	灰	廿万	体	180	
42	30	〃	8	2	(15.0)	5.6	4.7	(31.3)	48.5	〃	〃	〃	灰	〃				
43	16	〃	3	1	(15.2)	5.8	4.4	(28.8)	60.2	〃	〃	〃	〃	灰白	真	底	160	
44	81	〃	2	1	14.1	5.7	4.9	34.8	57.1	〃	〃	〃	褐灰	褐灰	十	体	78	(355.6)cc
45	38	〃	2	1	14.1	5.3	4.4	31.2	45.5	〃	〃	〃	灰黄	灰白 にぶい褐	〃	〃	87	
46	33	〃	2	1	13.8	5.5	4.1	29.7	54.9	〃	〃	〃	褐	灰白 にぶい黄橙	〃	〃	75	(322.2)cc
47		〃	4	3	(13.0)	(5.4)	4.2	(32.3)	42.9	〃	〃	〃	灰白 にぶい橙	灰白 にぶい黄橙	尾	〃	140	
48		〃	−10	2	(14.7)	5.5	4.2	(28.6)	59.5	〃	〃	〃	褐灰	灰白	□	〃	81	

( ) は推定値

第17表　須恵器坏の法量集計表

口　径	点　数	比　率	底　径	点　数	比　率	器　高	点　数	比　率
12.2～12.3cm	2	1.9%	4.1～ 4.9cm	4(1)	3.3%	3.3～ 3.9cm	2(2)	3.2%
12.5～12.9	2	1.9	5.0～ 5.4	24	20.0	4.0～ 4.4	24(3)	38.1
13.0～13.4	11(1)	10.4	5.5～ 5.9	37	30.8	4.5～ 4.9	30	47.6
13.6～13.9	18(2)	17.0	6.0～ 6.4	33(2)	27.5	5.0～ 5.4	5	7.9
14.0～14.4	36(1)	34.0	6.5～ 6.9	5(3)	4.2	5.9	1	1.6
14.6～14.9	13(1)	12.3	7.0～ 7.4	12(8)	10.0	6.0	1	1.6
15.0～15.4	17(2)	16.0	7.5～ 7.8	3(2)	2.5	計	63	100.0
15.7	4(2)	3.8	8.1～ 8.3	2(1)	1.7			
16.0～16.5	3	2.8	計	120	100.0			
計	106	100.1						

( ) は見切り



第37図　須恵器坏の法量比

器高は3.5～6.0cmであり、4.0～4.9cmに63点中の85.7%が含まれる。篦切りの坏は3.3～4.4cmに限られ、殆ど一定しており、糸切りの坏では4.0cm以上である。

図化する47点による径高指数はばらつきが小さく、28.4～36.8になるが、外傾指数ではやゝ大きく、特に篦切りの坏においては大小に2分される。

鉢（第39図　第5・18表）

同一個体とみられる口縁部より体部上半までの2点である。全体の器形は不明であるが、僅かに外反して立ちあがり、口縁部にやゝ肥厚する。内外面共に横方向の細かい篦磨きが施されて平滑となる。他の1点は口縁部が外反して上方に逸き出され、内面にカキメ、外面は篦削りされる。共に非黒色処理の鉢に類似する器形と推定される。

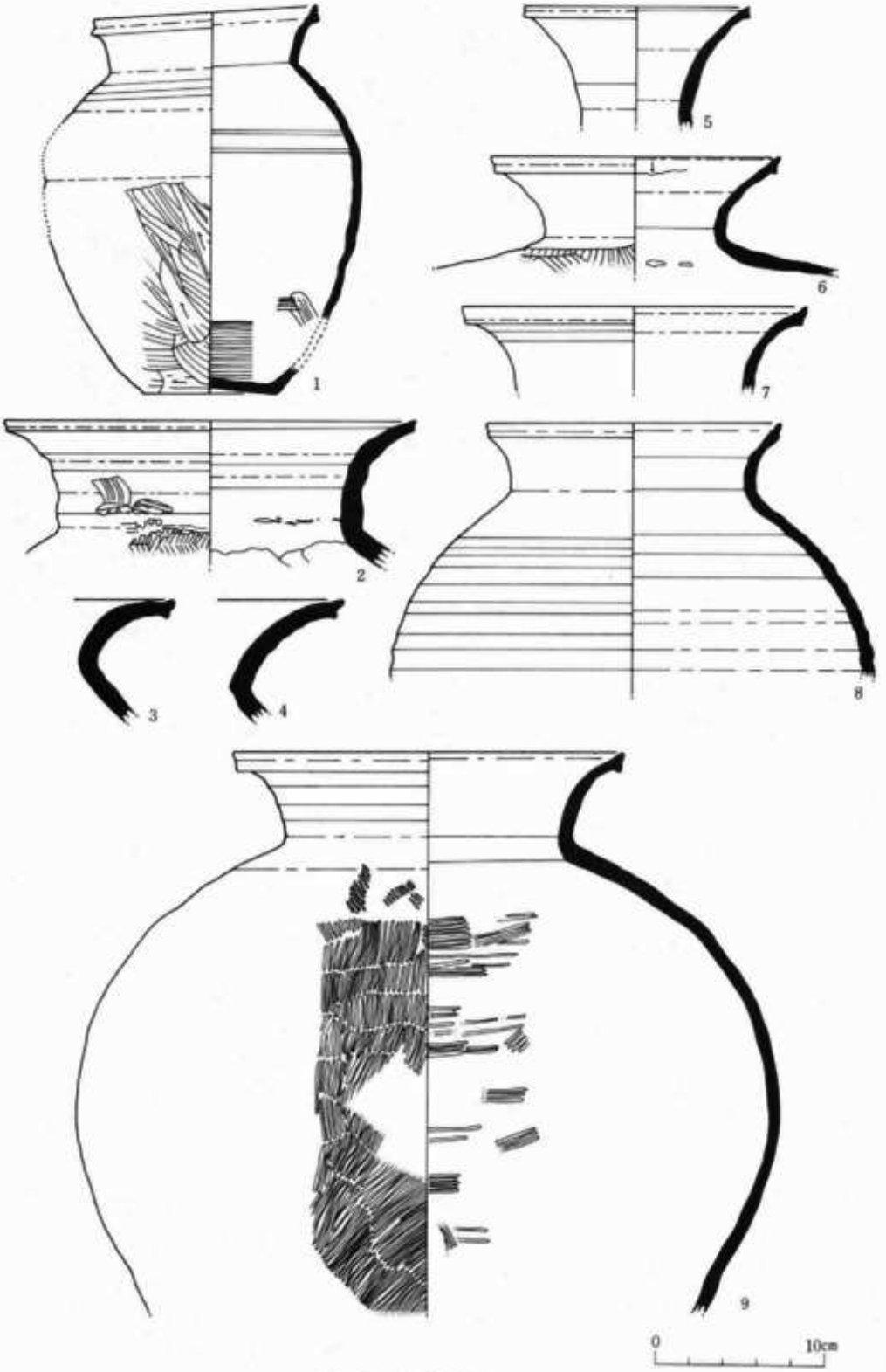
胎土は稠密であり、灰白色を呈して硬質である。前者の外面には黒色炭化物が付着する。体部における器厚はそれぞれ0.9cm、0.4cmを計る。

壺・甕（第38・39図　第5・18表　図版27・28）

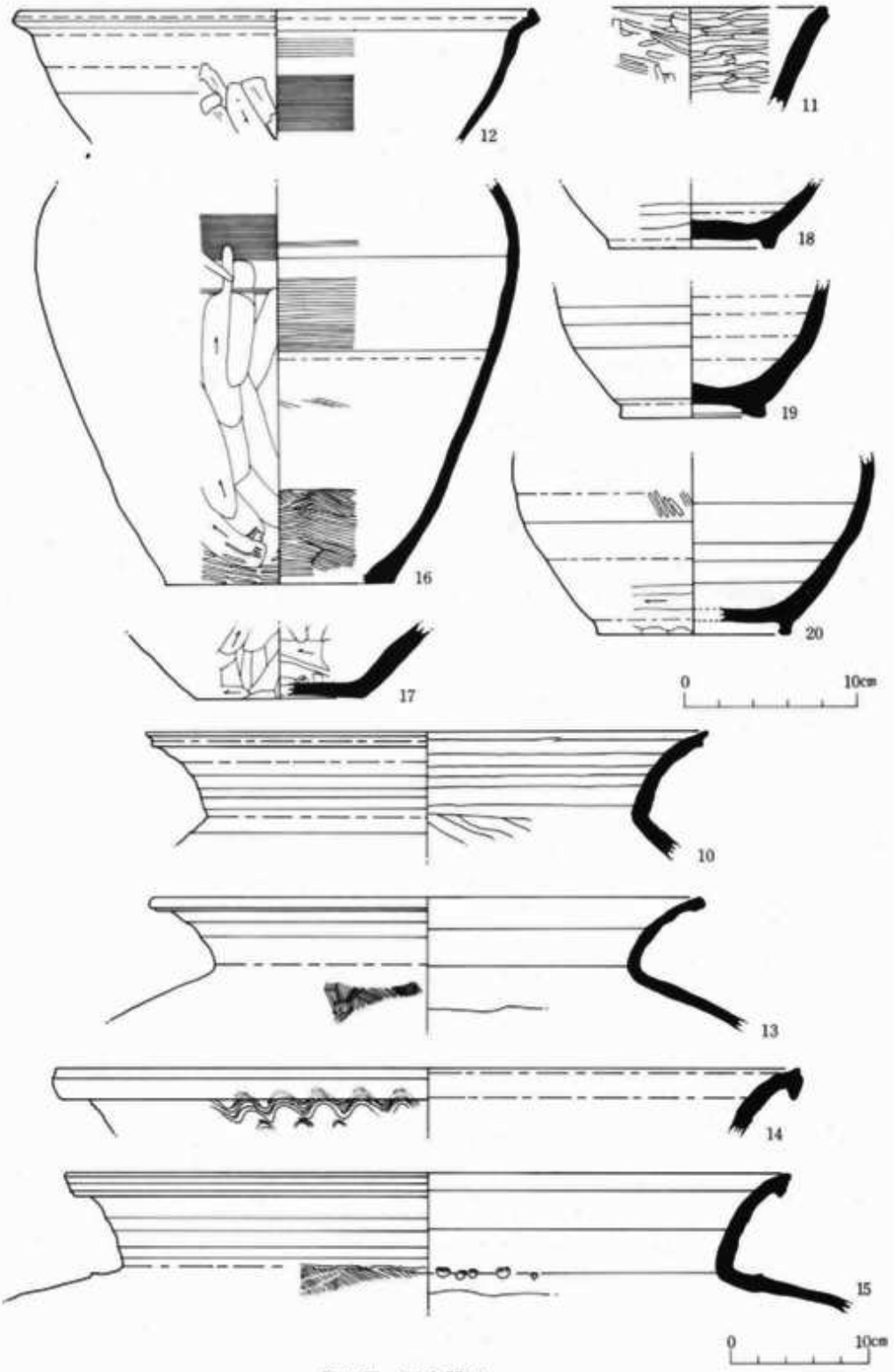
口縁部より底部まで残存するもの1点である。他は口縁部42点、体部888点、底部17点の破片である。底部片は体部と識別できるものが著しく少なく、接合しない口縁部によっては42点の個体数となる。

器形は破片が多く、不明なものが多いが、口頸部によって長頸壺と短頸壺、または甕に分けられ、口径によっては大小が混在する。

長頸壺は口頸部2点、底部4点が推定される。口頸部は緩やかに外反して立ちあがり、口縁部に薄手となる。口縁端部は上下に逸き出されてその中央に凹む。体部では小型の短頸壺や甕と識別できるものは少なく、ロクロナデのほか、縦、または斜方向に篦削りされるもの、斜方向に叩き目を有するものが含まれる。底部は低い付高台をなし、高台端部の幅広となるものと丸味をなして狭まるものがある。前者は平滑をなし、高台内側にやゝ低



第38図　須恵器(4)



第39図　須恵器(5)

第18表 須恵器観察表 (2)

実測図No	登録No	器種	残存率 口縁	残存率 底部	口径	底径	器高	器面調整 内面	器面調整 外面	色調 内面	色調 外面	色調 胎土	備考
1	1	甕	ゆの1 2	ゆの1 1	cm 13.2	cm 8.0	cm 22.3	ロクロナデ カキメ	ロクロナデ ヘラケズリ	赤 灰 灰	灰 明赤 灰	灰 褐	
2	22	甕?	8		(24.4)			ロクロナデ	ロクロナデ タタキメ	灰 白 橙	にぶい黄橙	にぶい褐	焼成不良
3	38	〃	−10					〃	〃	灰	灰 黄褐 褐 灰	にぶい黄橙	斑点状灰被り
4	25	〃	〃					〃	ロクロナデ	〃	灰	〃	
5	7	長頸壺	3		(13.3)			〃	〃	黄 灰 黄 褐	灰 黄 黄 褐	〃	
6	5	甕?	5		(17.2)			〃	ロクロナデ タタキメ	灰	灰 オリーブ黒	褐 灰 灰	斑点状灰被り
7	4	〃	2		20.4			ロクロナデ	ロクロナデ	〃	灰 白 灰	灰 赤	
8	3	〃	3		(17.4)			〃	〃	灰 褐	黄 灰	にぶい黄橙	焼成不良
9	2	〃	2		23.2			ロクロナデ タタキメ後	ロクロナデ タタキメ	灰	褐 灰	灰 赤	
10	13	〃	9		40.8			ロクロナデ	ロクロナデ	〃	褐 灰 灰 褐	にぶい黄橙 褐 灰	
11	1	鉢	−10					ロクロナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐 灰	褐 灰	灰 白	同一個体とみられる破片1点がある
12	55	〃	~10					ロクロナデ カキメ	ロクロナデ ヘラケズリ	灰 白	灰	〃	〃
13	8	甕?	8		(39.8)			ロクロナデ	ロクロナデ タタキメ	黄 灰	黄 灰	黄 灰	
14	34	〃			(53.8)			〃	ロクロナデ クシメ	灰	灰 白	赤 褐	
15	1	〃	3		(52.2)			〃	ロクロナデ ナデ	褐 灰 暗 赤	暗 赤 黄	赤 灰	斑点状灰被りのほか灰白色付着物あり
16	7	〃		3		(11.2)		ロクロナデ カキメ	ロクロナデ ヘラケズリ タタキメ	灰 暗 褐	暗 緑 灰	にぶい褐	胴部斑点状に灰白色となる
17	1	〃		3		(9.6)		ヘラナデ	ヘラケズリ	暗 褐	灰	灰	底部外面に砂粒付着する
18	5	壺		2		9.6		ロクロナデ カキメ	ロクロナデ ヘラケズリ	灰	〃	灰 黄 褐	高台内菊花状を呈する
19	2	〃		2		8.5		ロクロナデ	ロクロナデ	〃	〃	褐 灰	高台内に細一条線が走る
20	3	〃		4		(11.2)		〃	ロクロナデ タタキメ	〃	オリーブ灰	暗 灰 黄	

く削りとられる。高台内外面は共にロクロナデされ、高台内に菊花状を呈するもの1点がある。また、底部の内面には粗雑なロクロ痕を残すものがある。

短頸壺、または甕は口径によって13.3cm、17.2〜25.7cm、40.8〜53.8cmに3分される。口頸部はいずれも強弱を有して外傾、または外反する。頸部より緩やかに外反するもの、大きく外反するもの、頸部に直立し、これより外傾するもの等が含まれる。共に口縁端部が上下に逸き出され、断面三角形状を呈するものが多い。大型壺においては更に折り返し状を呈するもの、不整に丸味をなすものが含まれる。口頸部内外面は共にロクロナデされるが、外面に叩き目や3〜5条の波状沈線を刻するものがある。波状の沈線は3点に認められ、上方より下方へ、左方より右方へ一部重複して描かれる。

体部は肩部の張るもの、丸味をなすもの、なだらかに下降するものがあり、前者は口径の大きい短頸壺に認められる。小・中型壺、または甕の器面はロクロナデのもの、ロクロナデに斜方向の箆削りをうけるもの、更に体部に叩き目を有するものが含まれる。大型のものではいずれも平行する叩き目が縦横に重複する。内面にロクロナデ、ヘラナデ、カキ目のほか、外面と同様の平行するあて工具痕や青海波文、蓮ぐう文等が大型の甕に認められる。

底部は小・中型の壺、または甕にあっては平底とみられる。外面には押圧痕のほか、砂粒の付着するものが含まれ、内面は体部と同様である。底径の得られるものは8.0〜12.0cmを計る。大型甕では大部分丸底とみられ、体部と同様であるため明瞭に識別できるものは含まれていない。

5　陶磁器（第40図　第5・19・20表　図版31）

染付2点、陶器47点である。器形の全体が明らかなものは少ないが、器種別では碗、皿、土瓶、向付、鉢、摺鉢、壺、甕等が含まれる。摺鉢がもっとも多く、次いで壺、甕の貯蔵用、碗、皿等の供膳用の順である。

碗・皿（第40図　第19・20表　図版31）

碗7点、皿2点である。碗4点は体部より僅かに内彎気味に立ちあがる染め分けの碗である。内外面に細かい貫入が多く、浅黄色、または淡緑色を呈し、体部下半より暗赤褐をなす。施釉は畳付を除いて全面に及んでいる。そのほか、灰白色に施釉される1点があり、畳付及び高台内が露胎をなすもの、底部内面に目跡を残す染付片があり、後者は淡青色の条線が内外に巡る。共に貫入が著しく、光沢が強い。

第19表　器種別陶磁器一覧表

器　種	口縁部	体　部	底　部	計	比　率
碗	3	2	2	7	14.9%
皿			2	2	4.3
鉢	4	1		5	10.6
摺　鉢	7	3	1	11	23.4
壺	2	1	1	4	8.5
甕	2	4	4	10	21.3
土瓶・急須			2	2	4.3
不　明		6		6	12.8
計	18	17	12	47	100.1

個体数で算出

皿2点のうち、削り出し高台の1点は淡い緑色がかった白色釉が畳付及び高台内を除いて薄く施釉され、内面に暗い発色の花文がみられる。他の1点は碁笥底をなし、畳付を除いて柔らかい貫入の目立つ白色釉が被っている。底径は3.6cmである。

鉢（第40図　第19・20表　図版31）

口縁部4点のうち、体部より若干薄手となって立ちあがる1点と口縁部が外反して肥厚、または玉縁状をなすもの3点がある。前者は染め分け碗と同様の施釉でやゝ緑色が強い、後者は共にロクロ成形痕を残し、(4)では磁器化が進んでいる。体部1点は褐色釉で内面の光沢が強い断片である。

壺（第40図　第19・20表　図版31）

口縁部2点、体部1点、底部1点である。口縁部は共に細片であり、口縁部の外反する小壺とみられ、1点は暗緑色釉の大部分がとんでいる。体部は光沢のある黒褐色を呈し、頸部に隆線状の条線があって長頸壺と推定される。底部（10）はやゝ厚手の成形で外面に板目状の圧痕が残る。体部下半には黒色釉の釉流れがある。

甕（第40図　第19・20表　図版31）

口縁部2点、体部4点、底部4点があり、内面が露胎をなして有蓋と思われるものが含まれ

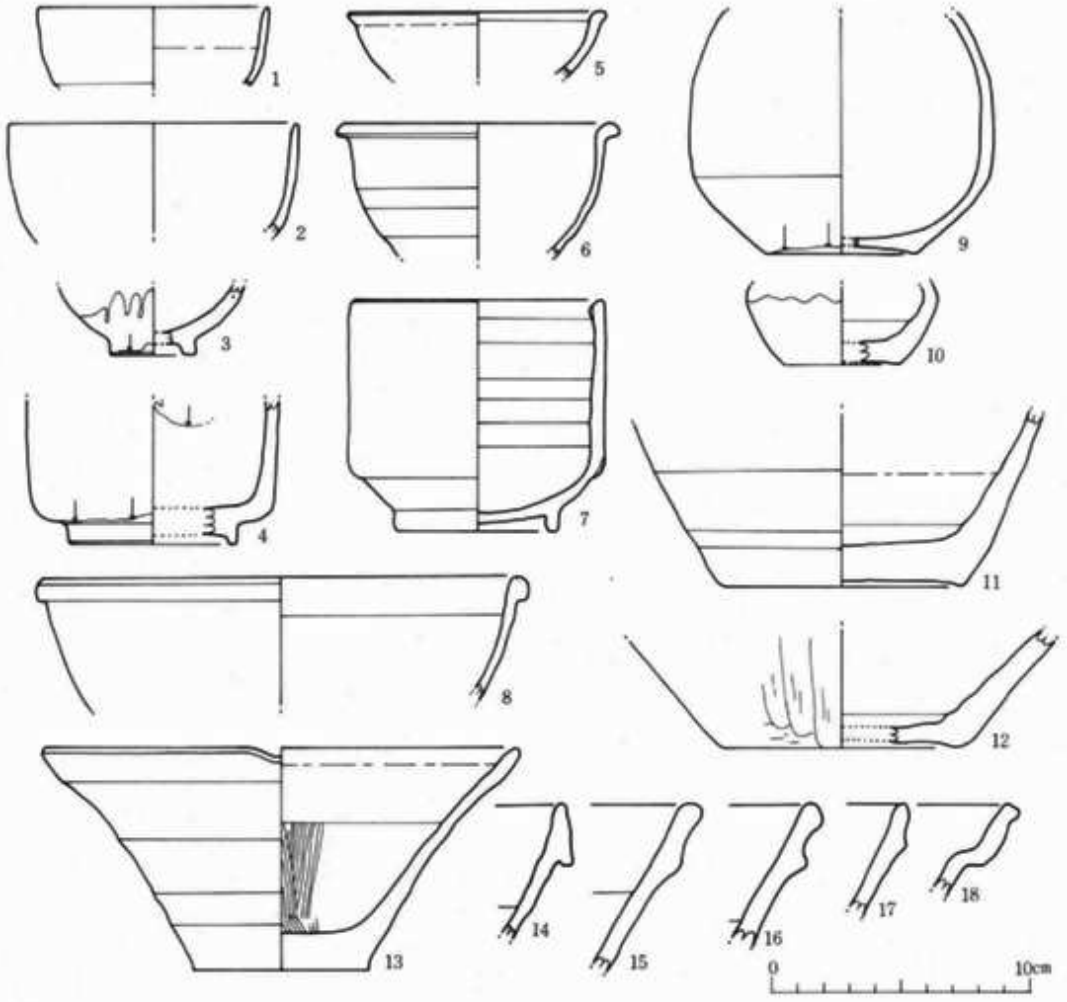
る。(7)は筒形をなし、口縁部に肥厚する。体部下端より無釉となり、内外面共に黄褐色を呈する。内面はロクロ痕を残すが、底部及び高台は丁寧に削り出される。他の1点は口縁部が外反して肥厚する小片である。

体部には大型の甕とみられる厚手のものとこれよりやゝ小型とみられる3点があり、後者はいずれも光沢の強い褐色を呈する。

底部は糸切り底2点、削り出し高台の1点である。ほかに外面が篦削りされる平底の(12)があり、やゝ焼き締りが弱く、無釉である。

土瓶・急須(第40図　第19・20表　図版31)

(9)は球形をなし、土瓶とするものである。外面は体部下半に稜を有し、内面では滑らかに内彎して全面に細かいロクロ痕を残す。施釉は体部下端まで及び、底部脇で削りとられる。底



第40図　陶磁器

部は外面全面を削り、切り離しは不明である。ほかに急須の小片があり、底部に微細な網目の圧痕がみられる。

摺鉢（第40図　第19・20表　図版31）

全体の器形が推定される（13）のほかは、口縁部6点、体部3点、底部1点である。（13）が小型で注口を有し、他は口径の大きい摺鉢である。口縁部は折縁状に外反して更に上方に逸き出される（18）のほか、口縁端部に肥厚して丸くなるもの、縁帯状をなして薄くなるものがある。注口の確認されるものは（13）1点である。底部では糸切り痕を残すものと篦削りされるものが含まれる。

条痕は体部全面に間断なく施され、6条、または8条を単位としている。底部では（13）が6条単位で放射状に巡り、右回りによる15の施条が認められる。内外面は暗褐色、または暗赤褐色を呈し、（13）の口縁部にのみ緑色がかった黄褐色釉が不整に施される。

その他（第19表）

器種不明の細片は6点である。内面の露胎となるものには緑色釉2点、光沢の強い褐色釉1点があり、水注や壺等が推定される。また、内外面施釉のものには白色釉2点、褐色釉1点がある。

第20表　陶磁器観察表

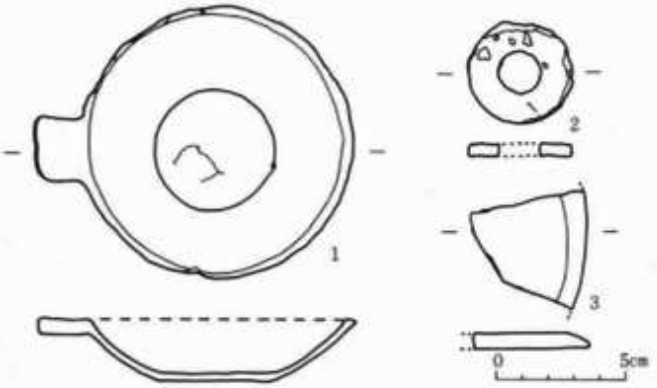
実測図No.	登録No.	器種	残存率 口縁	残存率 底部	口径	底径 高台径	器高	色調 内面	色調 外面	色調 素地	備考
1	17	鉢	分の1～10	分の1	∞	∞	∞	浅黄色	暗赤褐	灰白	染め分け鉢
2	18	〃	〃		(11.2)			にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
3	13	〃		4		(3.3)		褐灰	灰白 褐	〃	削り出し高台
4	21-2	壺		〃		(6.6)		暗赤褐	黒 暗赤褐	褐灰	
5	14	鉢	～10		(10.0)			オリーブ灰	オリーブ灰	灰白	
6	23	〃	〃		(10.6)			黄褐	黄褐 オリーブ灰	黄灰	口縁部直下の外面青灰色
7	15	壺	〃	2	(9.7)	6.5	9.0	褐	明オリーブ灰 にぶい黄褐	にぶい黄褐	削り出し高台
8	4	鉢	〃		(18.4)			暗赤褐	暗赤褐	褐	
9	20	土瓶		2		5.8		明赤褐	にぶい黄橙 褐	明赤褐	糸切り底
10	10-2	壺		3		(4.4)		暗赤褐	暗赤褐	赤灰	底部板目状圧痕
11	38	壺		1		9.2		〃	〃	褐灰	糸切り底
12	33	摺鉢		3		(9.3)		褐灰	暗赤褐	灰黄褐	外面荒削り
13	47	〃	2	1	18.5	7.0	8.8	黄褐 暗赤褐	黄褐 暗赤褐	明赤褐	糸切り底
14	1	〃	～10					暗赤褐	暗赤褐	灰褐	
15	26	〃	〃					暗褐	暗褐	褐灰	
16	2	〃	〃					暗赤褐	暗赤褐	〃	
17	24	〃	〃					〃	〃	〃	
18	3	〃	〃					〃	〃	灰白	

（）は推定値

6　石製品（第41図3　図版36）

円盤状の鐙とみられる破片1点である。両面共に平滑をなし、外縁に沿って丸味をなす。厚さ0.6cmを計り、外径は21.0cm前後と推定される。灰色を呈する金剛石製である。

7　鉄製品（第41図1、2　図版36）



第41図　鉄・石製品

把手のある皿と座金状の製品各1点である。鋳造の皿は口径10.6cm、底径5.4cmを計り、器高は2.4cmである。口縁部は幅0.2～0.4cmの平縁をなし、体部に比してやゝ立ちあがりが強い。底部は内外面共に平滑であり、特に外面は滑らかである。把手は平縁に続いて付され、長さ2.0cm、幅2.4cmのやゝ不整な方形をなす。皿に比して厚手であり、断面は下方に彎曲して半円状を呈する。灯明皿などの用途が推察される。

座金とみられる（2）は、外径5.1cmの円形をなし、外縁の腐蝕が進行している。内径は1.6cm、厚さ0.5cmである。精巧な穿孔と平滑な表・裏面を有し、近代の製品とみなされる。

8　植物遺体（第42～50図　第21～25表　図版32～36）

すべての植物遺体は81点余りである。そのうち木質物がもっとも多く、加工痕のあるものは46点である。しかし、腐蝕が進み、また、断片となって用途や機能の明らかでないものが多い。そのほか、植物種子や果実、若干の植物、菌類等が含まれる。

(1)　木製品（第42～50図　第21～25表　図版32～36）

加工痕を有するもの46点のうち、用途の判明するものは、食膳用の容器、曲物、装飾品、履物、編具、農具等である。

椀（第42図　第21表　図版32）

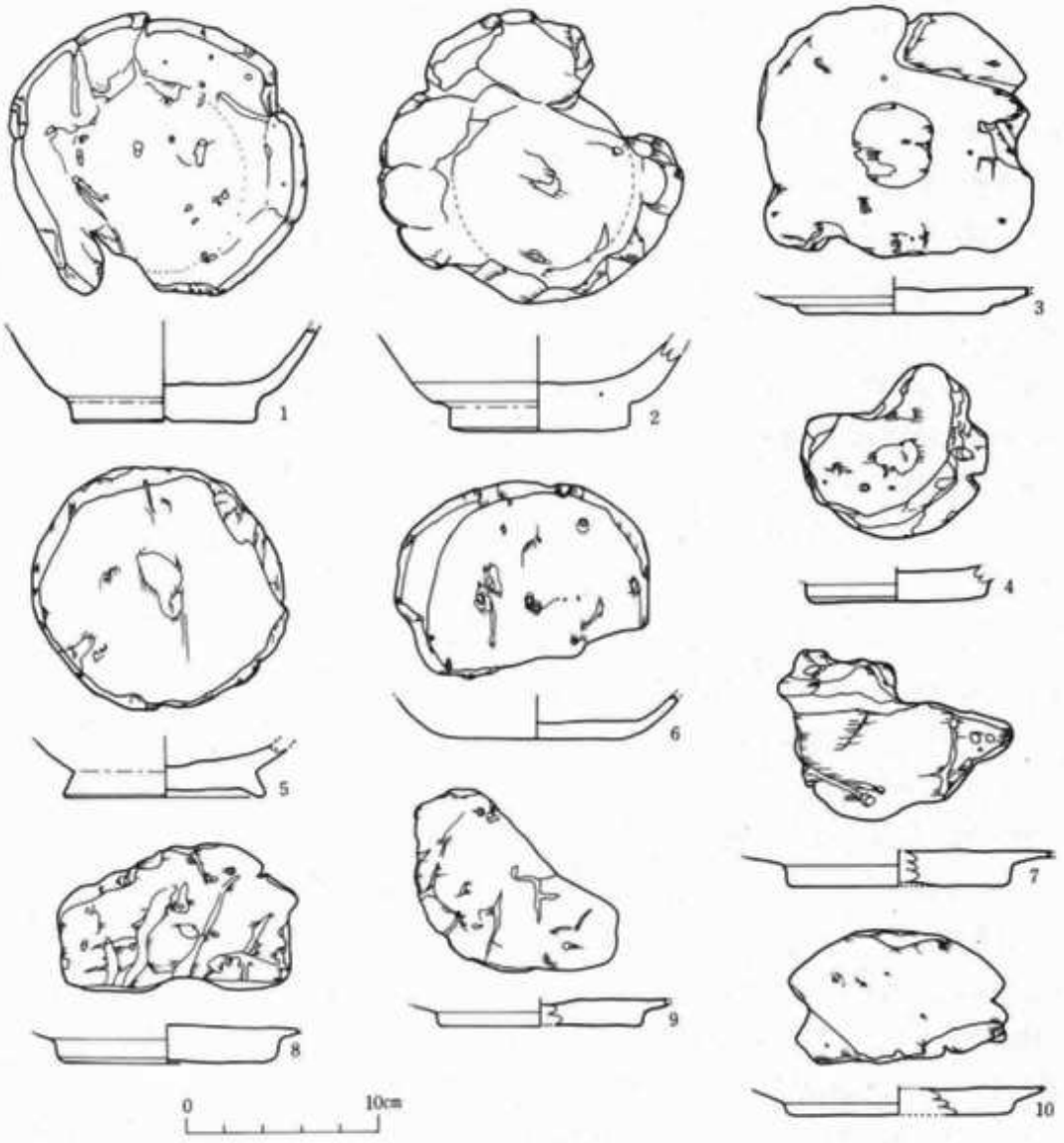
小破片を含めて木地椀7点、漆椀2点である。前者は口縁部及び体部の小片2点があり、同一個体をなす可能性がある。確認される個体数は4点であり、漆椀を含めて6点である。しかし、いずれも全体の器形が明らかなものはない。

図示する4点は、共に体部より高台部の遺存するものであり、（4）は高台径によって椀に含めるものである。口縁部は（2）の小片によって小さく外反し、端反り口縁を有するものとみられる。体部は内彎気味に立ち上がり、下方が若干肥厚している。高台は（1）、（2）、（4）が平滑で高台脇まで直上、またはやゝ緩やかに削り出されるのに対し、（5）は高台内を浅く蛇

の目状に削り出し、高台脇に鋭角をなす。高台径は前者が9.3〜9.5cm、後者は10.4cmである。高台高は1.0〜1.4cmを計り、底部における器厚は1.6〜2.9cmの厚手である。共に口径19.0cm前後と推測される大型の椀である。

いずれも横木取りによるロクロ挽き成形であるが、腐蝕にあってツメ痕跡等は明確でない。また、内面では中央部に僅かに凹みを有するもの、焼けて黒色となるものが認められる。材はすべてセンである。

漆椀2点のうち、(13) の口縁部は薄手の木地に両面黒漆を塗布し、特に内面の光沢が強い。体部より直線状に立ちあがっており、口径が小さく器高の大きい椀と推定される。推定口径は



第42図　木製品(1)

10.2cmである。他の1点（14）は内彎する体部の小片である。外面に黒漆、内面に朱漆が疎に遺存するのみである。

皿（第42図　第21表　図版32）

椀と同様に横木取りのロクロ挽きによる成形である。6点共に口縁部を欠損して全体は明らかでない。大別して器高が低く、削り出し高台を付す（7）～(10）と薄手で内彎して立ち上がる（6）に2分される。

前者は厚手の高台を有し、内面は殆ど平滑をなすものとみられる。高台はほゞ水平をなし高台脇まで直線状、またはやゝ緩やかに削り出される。高台径は9.8～11.4cm、高台高は0.5～1.2cmを計り、（3）がやゝ小さい。底部における器厚は1.3～1.9cmであり、中央部に若干の厚薄がある。

後者の（6）は底径が小さく、体部は薄手となって立ちあがる。前者に比して口径の大きい皿と推測される。底径は8.2cm、底部の器厚は1.0cmである。

第21表　木製品計測表（1）

実測図No.	登録No.	器種	長さ	幅	厚さ	底径 高台径	高台高	重さ	樹種	備考
1	17	椀	13.7cm	15.1cm	2.1	9.5cm	1.2cm	97g	セン	A.E.法保存処理
2	21	〃	15.1	15.9	2.9	9.3	1.4	100	〃	〃
3	15	蓋	12.9	13.9	1.3	9.8	0.5	52	〃	〃
4	13	椀？	8.8	9.7	1.6	9.4	1.0	27	〃	〃
5	16	椀	12.6	13.1	2.3	10.4	1.3	72	〃	〃
6	18	蓋	9.7	13.1	1.0	8.2		31	〃	〃
7	20	〃	7.4	12.2	1.9	11.4	1.2	39	〃	〃
8	12	〃	8.8	9.9	1.4	10.5	0.7	19	〃	〃
9	19	〃	8.3	11.2	1.9	11.4	1.1	26	〃	〃
10	14	〃	5.8	11.2	1.4	10.4	0.6	41	〃	〃
00	22	椀	3.2	3.8	0.8			9	〃	体部断片、内面焦跡あり
02	48	〃	2.7	5.5	1.1			2	〃	口縁部小片
03	47	〃	2.4	3.4	0.2			2	不明	口縁部小片、内外面黒漆
06	46	〃	2.4	4.2	0.7			1	セン	体部片、外面黒、内面朱漆

ほかに椀の体部細片がある。計測値は現存による

桶（第43・44図　第22・23表　図版33～34）

桶蓋・底板とみられる一枚板は小型の曲物容器に付随するものが推定され、これを含めて8点である。また、桶の側板とみられるものは1点である。

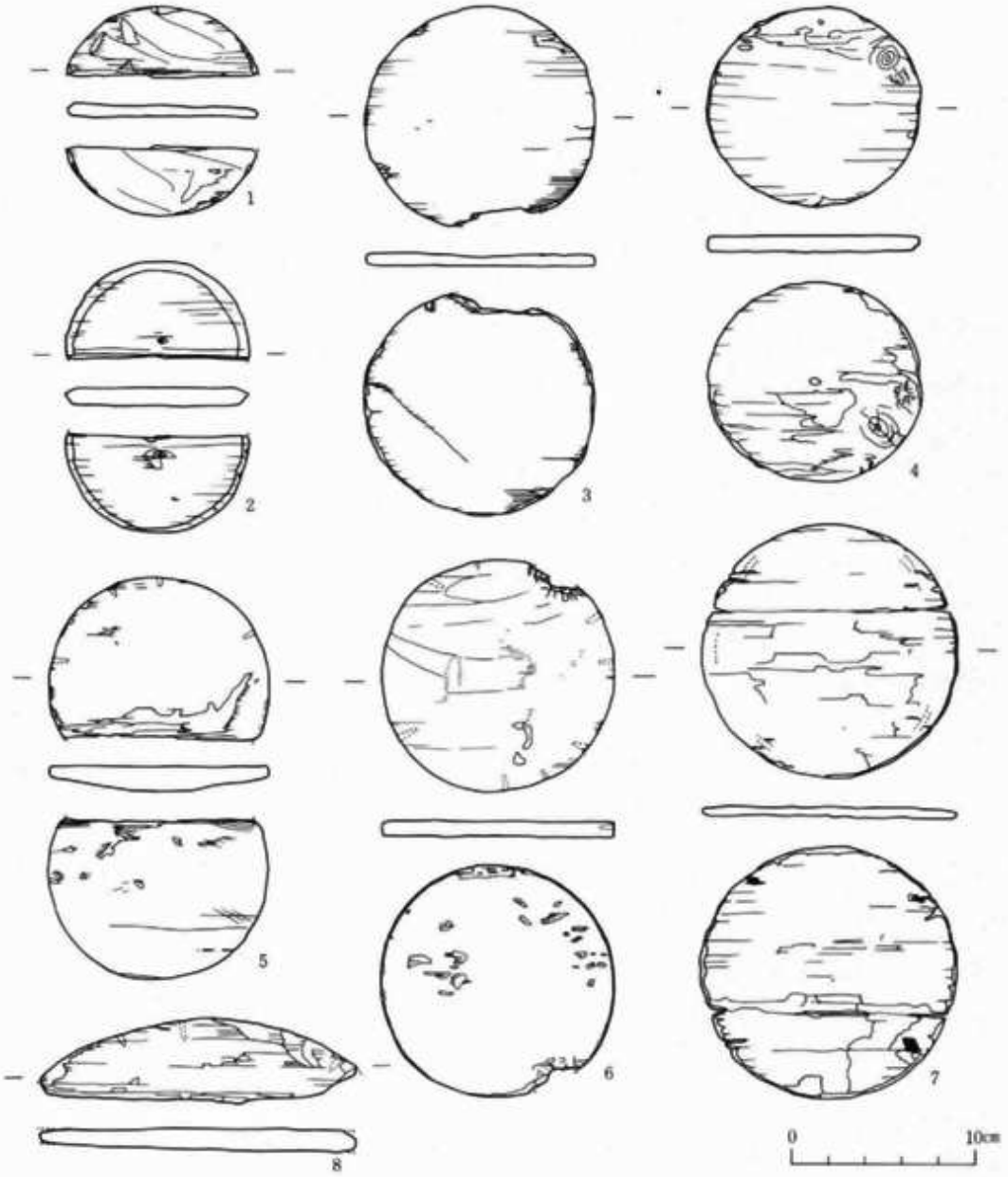
蓋、または底板は（8）がもっとも大きく、径27.8cm前後と推定されるほか、（3）～(7）が11.6～14.0cm、（2）が10.1cmで若干小さい。厚さは（7）が0.6cmで薄手となるが、他は0.7～1.2cm、（5）が最大1.4cmを計る。

内外面共に腐蝕しているものが多いが、殆ど偏平をなし、(6)には平滑に削りとった鉋状の工具痕が征目に沿って認められる。(5)のみは中央部に厚手となり、ロクロ挽きによって整形されているとみられる。また、(6)、(8）の2点は両面共焦げて黒色となり、(6）は一部を

焼失している。

蓋とみられる（7）は内面に側板の痕跡が桜皮に沿って微かに巡り、他に比して薄手である。縫はほゞ9.0cmの等間隔で4箇所にあり、外縁部の径は12.5～12.8cm、側板の厚さは0.7～0.9cmと推定される。

側面は厚手のものがいずれも面取りされ、鑿状工具痕が残る。（2）では両面より削り出し、内面に浅く幅広となる。水もの用と推測されるものである。また、（5）、（6）、（8）の3点に



第43図　木製品(2)

は径0.2〜0.3cm、長さ0.9〜1.2cmの不整な木、または竹釘孔が穿たれる。共に不規則で内外面のいずれかに偏して位置する。材質はクリ、スギに限られている。

桶の側板とみられるものには板状の破片（4）がある。木口より4.0cmをおいて僅かに薄手となり、外面に箍かけによるとみられる細かい亀裂が認められる。現存長21.8cm、幅4.6cm、厚さ1.1〜1.5cmを計る。内面に若干彎曲しており、これによっては30.0cm前後の外径が推定される。

第22表　木製品計測表（2）

実測図No.	登録No.	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	樹種	備考	実測図No.	登録No.	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	樹種	備考
1	92	桶底	10.2cm	3.7cm	0.8cm	8g	スギ	一部欠損	5	29	曲物底	12.0cm	8.6cm	1.4cm	34g	スギ	釘孔4、一部欠損
2	25	〃	10.1	5.3	1.0	19	〃	〃	6	33	〃	12.7	12.7	0.9	60	〃	釘孔8、一部亀失
3	32	〃	12.5	11.7	0.7	25	〃	〃	7	26	蓋	14.0	13.8	0.6	35	クリ	桜皮の綴あり
4	28	〃	11.6	10.8	0.9	36	〃		8	30	曲物底	16.6	4.6	1.2	28	不明	釘孔3、一部欠

すべてA.E.法保存処理

曲物（第44・45図　第23表　図版33）

曲物の側板とみられるものは2点である。（3）は現存長21.6cm、幅5.6cmであり、両端を折損している。柾目のへぎ板を2枚重ねで綴じ合せ、外面上端が僅かに薄くなって湾曲する。内面には3条のけびきが柾目に直交して走り、やゝ内彎している。縫は3箇所にあり、最大幅1.4cmの桜皮である。大型の曲物が推定される。

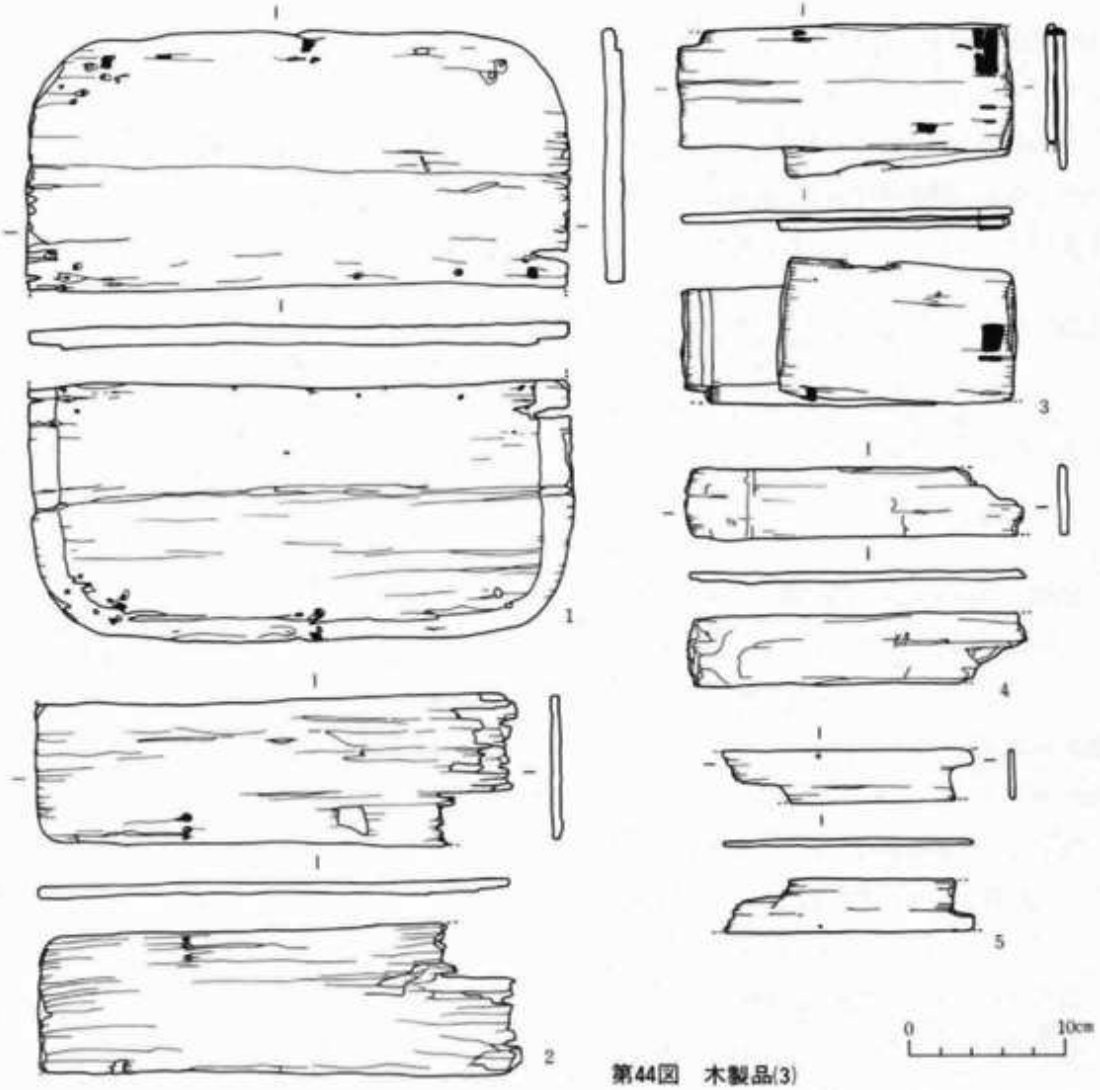
その他、曲物の縫用とみられる桜皮がある。先端で細く薄くなり、他は直線状に断ち切られる。現存長19.3cm、最大幅1.8cm、厚さ0.6cmである。

（5）は穿孔のある厚さ0.4cmのへぎ板断片である。材は（3）共にヒノキである。

折敷（第44図　第23表　図版33・34）

折敷状木製品は2点であり、共に欠損して全体は明らかでない。（1）は現存長35.2cm、厚さ1.4cmを計り、両面を平滑に削り、隅丸に整形する一枚板である。外縁と接合面に沿って合せて8箇所の縫があり、7箇所に桜皮を残す。更に上面より18の穿孔があり、外縁では殆ど対をなして配置される。外縁中央部に桜皮と重複する穿孔があり、また、近接している点で数度の補修が行なわれているとみられる。接合面に近い1孔には竹材が遺存し、穿孔は竹釘用と考えられる。裏面では外縁より1.5〜2.1cm幅をおいて内側にやゝ斜方向の鑿状工具による切り込みがあり、これより外縁まで厚さ1.0cmに削り取っている。桜皮や穿孔は共にこの切り込み端により間をおき、これによる台径は31.0cm前後と推計される。

（2）は厚さ0.7cmの角形に近い柾目材であり、3孔が穿たれる。表面は（1）と同様、不定方向の細線状の擦痕が認められる。裏面は外縁より1.5cmをおいて柾目に直交する微かな凹みがあり、接合痕とみられる。穿孔幅に一致する点で角隅部分と推測される。



第44図　木製品(3)

第23表　同　計　測　表　(3)

実測図No.	登録No.	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	樹種	備考	実測図No.	登録No.	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	樹種	備考
1	8	折敷	34.2cm	16.5cm	1.4cm	126g	スギ	補修あり	4	40	柄	21.8cm	4.5cm	0.7cm	28g	スギ	側板
2	6	〃	31.0	9.6	0.8	73	〃		5	11	曲物	16.0	3.5	0.4	8	〃	へ芳板
3	9	曲物	21.6	5.6	1.1	71	〃	へ芳板	6	50	樹皮	29.3	1.8	0.6	2.3	サクラ	未使保存

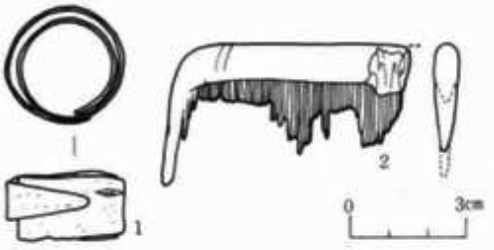
No.1～5はA.E.法保存処理

柄杓（第48図　第25表　図版34）

柄を欠損している刳貫きの柄杓である。現存長13.8cm、幅7.7cm、高さ7.0cmを計り、外縁と内面底部の一部を欠いている。セン材を瓜実状に削り出し、底部をやゝ平滑に整形している。刳形は隅丸にとり、長さ9.5cm、幅5.7cm、深さ4.8cmで側壁は全体に滑らかに削り、外縁ほど薄手となる。内面底部の中央が木芯に一致し、柄はこれよりやゝ上方に位置して径1.5cm前後の円形とみなされる。容量は現存で166.7ccを計る。

櫛（第45図　図版34）

装身具としては櫛1点である。現存長6.0cm、幅2.8cm、台幅0.7cmを計り、隅丸に切って末広をなす。櫛歯は棟境に浅い切り込み線を入れ、両面より切り込んで成形される。合せて69枚まで認められ、歯厚、歯間は1枚あたり0.8cmとなる。櫛歯の細かい点では挽櫛とみられる。暗褐色を呈する黄楊材である。



第45図　木製品(4)

下駄（第46図　第24表　図版35）

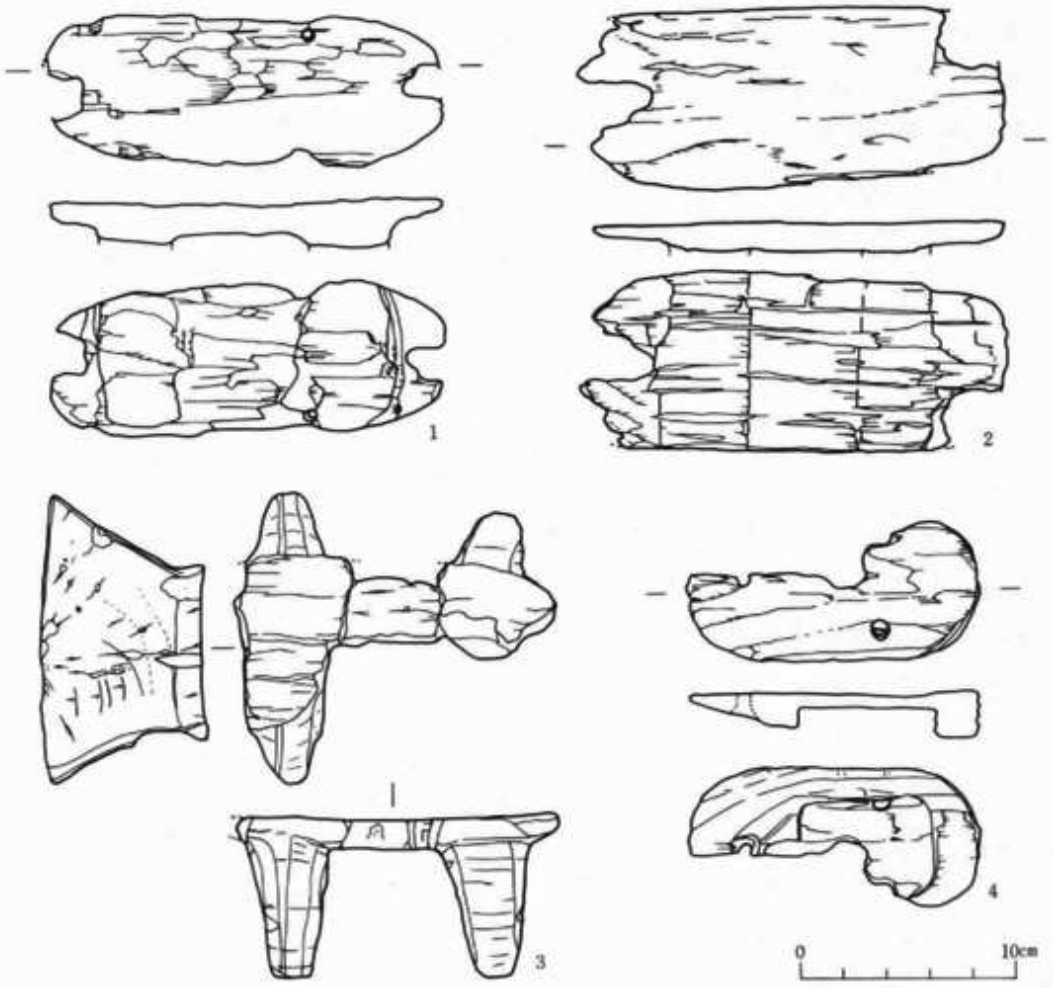
腐蝕し、欠損のある4点であり、共に全体の形状は明確でない。連歯下駄3点と女児用のぽっくり1点である。

（1）は台長18.1cm、台幅6.9cmの前後共に丸く整形される駒下駄である。前壺は明瞭でないが、後壺は径0.6cmの円形に穿たれ、横緒2孔間は4.8cmを計る。前後歯は木口より2.3cmをおいて成形され、歯間が厚く、両小口まで薄くなる。歯幅は前歯で3.5cm、後歯4.0cm前後で不揃いであり、切断痕が粗雑に残る。

（2）は台長19.5cm、台幅8.3cmを計る。（1）に比してやゝ角隅状を呈する。前壺は木口より3.3cmに痕跡を留めるが、後壺は明らかでない。歯は共に木口より3.5cmをおいて3.5cm前後幅に造り出し、歯間は5.0cmを計る。歯両端に切り込み痕を残すが、殆ど偏平となって歯高は得られない。全体に（1）に類似する整形であり、一つ目下駄であろうか。

（3）は銀杏歯の連歯下駄である。現存の台長14.8cm、台幅8.0cmを計り、全高は7.5cmで高下駄といえる。台座は左右両端に高く、これより中央部に低く平滑となる。後木口は丸く整形され、台裏より削り落して薄くなる。前壺と左後壺は共に焼火箸状の工具によって穿孔され、前、後壺間は8.5cm前後である。銀杏歯は後小口より1.5cm前後をおいて造り出され、歯間は台裏で5.0cm、下端で8.1cmとなる。下方ほど広くなって歯厚が小さい。前歯における歯幅は台裏で7.6cm、下端で13.5cmを計り、台座より30°前後で拡大する。両面共に鑿状工具痕を残して整形され、左右を丸く削りだしている。材は（1）～（3）ともクリである。

（4）はぽっくりと称される台裏を刳貫く一木造の下駄である。台長13.5cm、台幅6.2cm以上全高2.1cmである。前壺は小口より2.3cmに台裏より穿たれ、後壺は径0.9cmの円形をなし、やゝ斜方向に付される。壺間は5.6cmである。台裏は前小口より13°前後で斜に削り、刳貫き部分で殆ど偏平となる。刳形は後小口まで2.0cm前後をおいて、長さ6.0cm、幅4.8cmの隅丸となり、歯高は1.2cmを計る。材はスギである。



第46図　木製品(5)

第24表　同　計　測　表 (4)

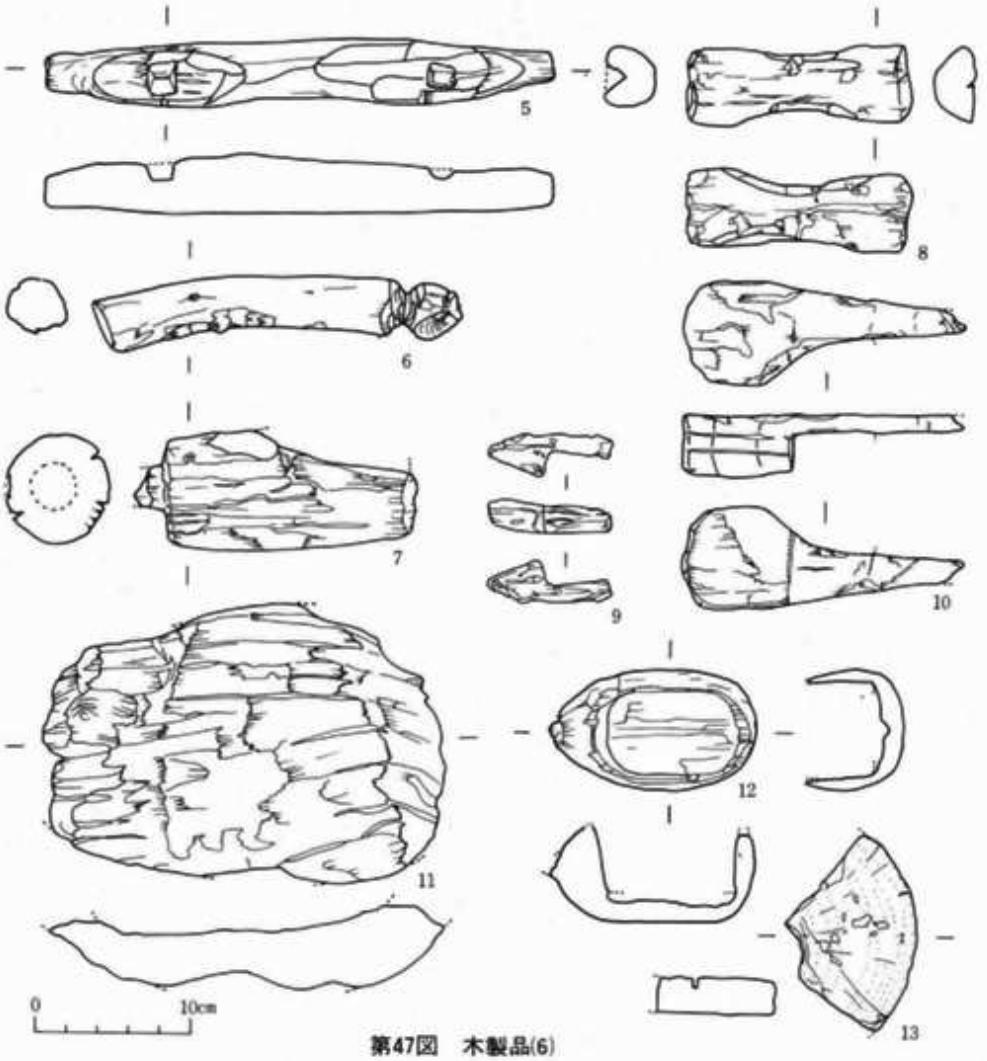
実測図No	登録No	種別	台長	台幅	全高	歯幅	歯間	歯高	重さ	木樹種	備考
1	36	連歯下駄	18.1〜cm	6.9cm	2.3cm	3.5 cm 4.0	5.0cm	0.7cm	80g	クリ	A.E.法保存処理
2	35	〃	19.5〜	8.3	1.4	3.5	5.0	0.5	60	〃	〃
3	34	高下駄	14.8〜	8.0〜	7.5	4.2	5.0	6.0	112	〃	〃
4	37	ぽっくり	13.5	6.2	2.1		6.0	1.2	28	スギ	女児用　〃

槌（第48図　第25表　図版34）

頭部と柄の一部を残す横槌である。頭部は長さ15.2cm、最大径7.7cmの円筒状をなし、柄はほゞその中央に径3.0cmの円形に造り出される。柄部の切り込み面には鑿状の刃痕が残り、敲面は先端まで摩耗して滑らかである。

槌の子（第48図　第25表　図版34）

先端と中央部の一部を欠損しているが、編具の錘とみられる。樹皮を剝ぎ、両端を切って半割し、中央部にくびれをなす。両端には粗い切断痕を有し、くびれ部分には縦長の加工痕が残



第47図　木製品(6)

第25表　同　計　測　表　(5)

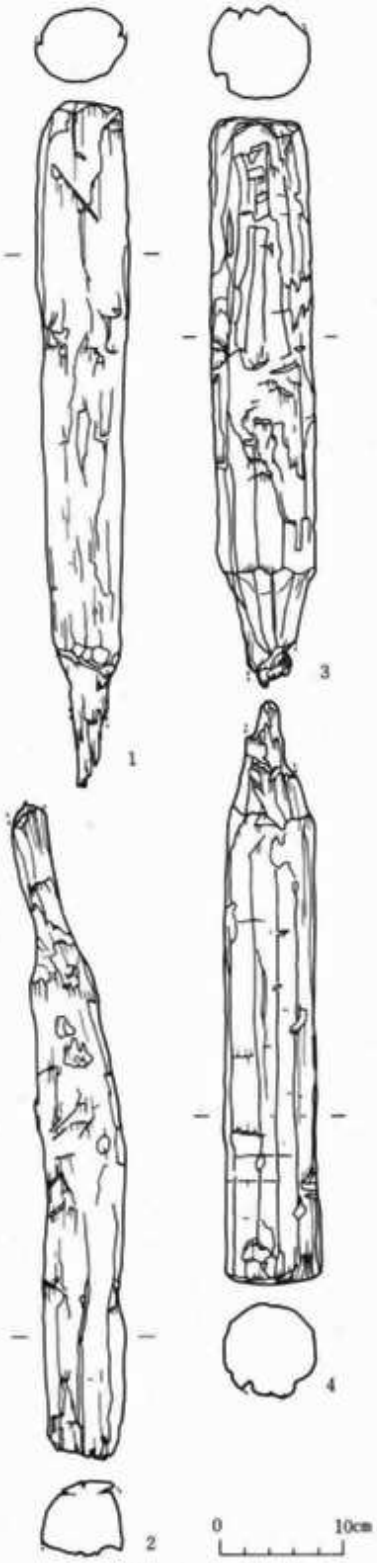
実測図No	登録No	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	樹種	備考	実測図No	登録No	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	樹種	備考
1	1-1	杵	55.8cm	7.6cm	5.9cm	690g	ナラ		8	39	鑿のみ	14.6cm	5.0cm	2.6cm	45g	ナラ	
2	1-2	〃	52.8	6.8	6.3cm	548	〃	No.1と同一個体	9	36	不明	7.7	2.6	1.9	8	〃	鉛形、亀失欠損
3	2-1	〃	46.3	8.2	7.6	810	〃		10	44	〃	18.2	6.6	4.0	71	不明	
4	2-2	〃	47.5	7.4	7.4	895	〃	No.3と同一個体	11	24	〃	25.7	17.6	4.8	428	クリ	
5	51	不明	32.8	4.2	3.9	70	スギ?	刻目きあり、自然風乾	12	23	柄杓	13.5	7.7		90	セン	
6	41	〃	23.7	3.8	3.7	60	マツ	隔物形	13	27	不明	12.3	8.5	2.5	64	〃	切板
7	43	鑿	18.0	7.7	6.5	150	セン	P.E.G.法保存処理	14	5	〃	38.8	13.0	3.4	350	クリ	

No.5、7を除いてA.E.法保存処理

る。全長14.6cm、頭部幅5.0cm、くびれ部分は3.3cm幅である。材はナラである。

杵（第47図　第48表　図版35）

丸太材を使用した竪杵2点である。共にほゞ完形で出土するものであるが、中央部で折損する。（1）、（2）は出土段階で全長90.0cmを計り、（1）の腐蝕が進んでいる。（2）の搗部は8



第48図　木製品(6)

角形に面取りされ、径3.7～4.1cm、中央部の握りまで18.5cm前後である。搗面の使用による磨耗は腐蝕して明らかでない。（3）、（4）は出土時の全長100.0cmを計る。共に斜方向の細い刃痕が認められほか、腐蝕が進んで明瞭でない。材は2点共ナラである。

墨書木製品（第49図　図版36）

木簡を転用する木札状の木製品1点である。現存長13.4cm、最大幅4.3cm、厚さ0.2～0.3cmを計り、右より下方を残して欠損している。表面は板目に鉋状の不整な削り痕を残し、下端に節穴がある。裏面は同様に平滑であり、側縁より0.6～0.7cmをおいて穿孔し、径0.3～0.5cmの不整な8孔が貫通している。左及び右上方は欠損面によって穿孔の痕跡とみなされるが、左右の間隔は2.2～3.4cmとなって上方に幅広となり、必ずしも対応する配置は認められない。右側面は滑らかに削り取って直線状をなし、下方は隅丸に落して共に面取りされる。材はアカマツである。

墨書は表面上端に廳とみられる1字があるほか、右側にこれより小さく月日が記される。月日は裏面からの穿孔によって不明となり、「日」の一部は削りとられているが「三月二日」と判読される。更に月日の右には墨痕があり、文字の認められない左を含めて4行まで推定される。

釈文[m(1)]・　　□

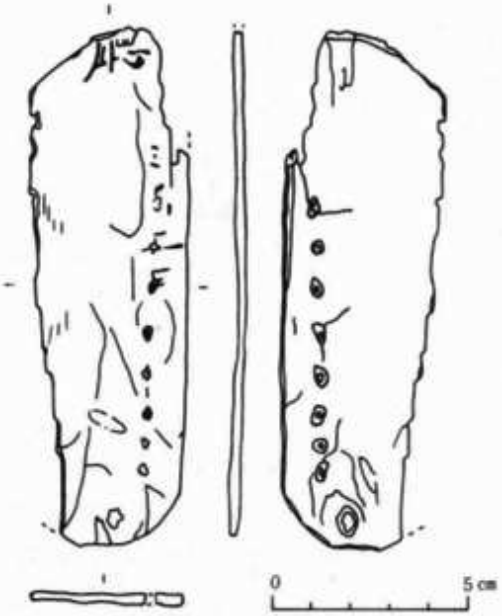
三月二日

×廳

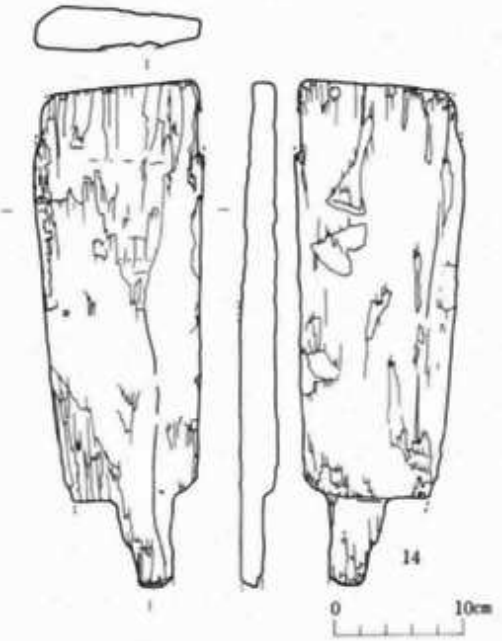
・（文字なし）

その他の木製品（第47・50図　第25表　図版34）

7点の用途不明の木製品、または破片がある。（5）は両端を切断した丸いセン材に面取りし、径1.7cm前後の方形に鑿状工具によって刳貫いている。深さは1.0cmと0.5cmを計り、やゝ粗雑な加工である。（6）は陽物形をなす。全長11.9cm、径3.2cmのマツ材を鋸状工具で切断して樹皮を剝ぎ、更に鉈状工具



第49図　木製品(8)



第50図　木製品(9)

でくびれをとって頭部を造り出している。胴部に縦長に加工痕が残るが、全体に粗雑である。

(11) は鋤状をなすが、両端を欠損して全体は明らかでない。やゝ両端に湾曲するが、腐蝕が進んで加工痕は不明である。(14)は鋸状工具によって角隅に切られて箆状を呈する。一端は薄くなって柄部とみなされる。共に平滑をなし、一面には手斧状の刃痕が認められる。

(10) は一端を欠く木製品であり、半円状に面取りされる。更に6.4cmをおいて切り込み面があり、対称的な形状も推定される。中央部の厚さは0.8cmである。(9). は鉤状に加工された断片である。全体に焦げて加工痕は明らかでない。(13)はセン材の断片であり、皿等の用材が推定される。

種子・果実注(2) (図版36)

半割された胡桃23点、栃6点、栗1点、瓢簞の小破片2点のほか、マンサクとみられる種子、擂鉢のタールに付着する籾殻片1点、稗とみられる種子1点等がある。胡桃は長さ2.6〜3.1cm、幅2.5〜3.1cmを計るオニグルミである。栃は長さ2.8〜3.5cm、幅2.6〜3.3cmを計り、若干の大小差がある。栗1点は1.9×1.6cmの小さい山栗である。

その他

種子に混在する植物数点があり、水生植物とみられる。そのほか、12.8×9.6cmの葺1点がある。サルノコシカケに類似する不整な半円状を呈する。

注(1)　東北歴史資料館企画科長平川南氏の御教示による　(1981)

(2)　分析・鑑定の項参照

VI まとめ

下谷地B遺跡の遺構はこれに隣接する下谷地A遺跡と同様に確認されたものはない。しかし、遺物は著しく多量に出土し、すべてを合せて22,833点に及ぶ。大別して縄文時代の土器、石器、平安時代の土師器、須恵器、木製品、近、現代の陶磁器のほか、石製品、鉄製品等であり、木製品、鉄製品の一部は若干時期の不明なものが含まれる。なかでも土師器及び須恵器の出土量が多く、全体の99.3%を占めている。ここではもっとも多量の出土をみた平安時代の什器類を中心としてその若干を記述することとする。

第26表 遺 物 集 計 表

種類	点数	比率
縄文土器	11	0.05%
石器	11	0.05
土師器	20,930	91.67
須恵器	1,746	7.65
陶磁器	47	0.21
石製品	2	0.01
鉄製品	2	0.01
木製品	48	0.21
植物種子など	36	0.16
計	22,833	100.02

器種		坏	高台付坏	鉢	壺・甕	その他	計	比率
内面黒色処理		4,733	148	20			4,901	21.61%
内面黒色処理		451	13		1	1	466	2.06
非黒色処理		12,303	558	153	2,545	4	15,563	68.63
須恵器		762		2	982		1,746	7.70
計		18,249	719	175	3,528	5	22,676	100.00
比率		80.48%	3.17	0.77	15.56	0.02	100.00	

すべての破片数による

1 出土状況と遺物

遺物の分布域は下谷地A遺跡に続いてやゝ低位となる南接部分に集中し、これより更に南寄りでは殆ど皆無に近い。東西ではやゝ粗密を呈するが、ほゞ調査区域を横断するかたちで分布し、やゝ西方に密となる。このことは下谷地A遺跡の遺物出土量が西方に偏在する傾向と同様であり、接合個体が認められるなど、連続する同一遺跡であることを示すものである。

調査段階においては水路が東流し、これより以前は旧河道が蛇行して東西にのびていたことが伝えられ、大小の暗渠施設も確認されている。しかし、明確な流路はトレンチによって確認されていない。砂礫層は全体に南へ低位となり、これを被う堆積層はグライ化する黒褐色土層であり、同様の堆積層をなす。遺物の出土状況によっては既に破壊された掘削部分とも解されるが、全体として湿地に近い状況と推定されるものである。

遺物の出土層は砂礫層上の1～4層に及ぶ。上層は攪乱されている可能性が強く、また、下谷地A遺跡の削平等により、二次的に移動していることが推定され、これより下層においても暗渠施設等の事業に伴う攪乱があって層位的な把握は必ずしも十分ではない。僅かに波状をなす粉状パミスが堆積し、この上、下層に木製品を含む植物遺体や土器が含まれる。この粉状パミス堆積の前後には著しい流出の状況は認められず、遺物は粉状パミス堆積に近接する段階に

位置付けられるものと推測される。

従って最下層出土の遺物である土師器及び須恵器、木製品の一部はもっとも初期の遺物であり、粉状パミスの降灰時期を9世紀～10世紀初頭[注(1)]に求めるならばほゞこれを近接する時期と把えられるものである。粉状パミスを境にした変化は特に須恵器の坏における底部切り離し技法にみられ、篦切りによるものから回転糸切りによる切り離しとなるが、層位的に不明な遺物が多量を占めて必ずしも断定できる根拠は求め得ない。

(1) 土器（第26～31表）

平安時代の土器は大別して土師器とする酸化炎焼成とみられるもの20,930点、須恵器とする還元炎焼成とみられる1,746点である。前者には黒色処理の有無があり、黒色処理の施されない土器には所謂赤焼き土器や須恵系土器[注(2)]とよばれる土器が含まれる。推定される個体数は残存率等によって黒色処理の土器419点、非黒色処理の土器934点、須恵器156点となり、実数は更にこれを上回るものと推定される。

器種によって分類するならば、黒色処理の施される坏、高台付坏、鉢、壺があり、非黒色処理の坏、高台付坏、鉢、壺、甕、須恵器では坏、鉢、壺、甕がある。そのほか、黒色処理の耳皿、非黒色処理の小型土製品等が含まれる。そのうち高台付坏を含む坏類は全体の83.7%を占めて圧倒的に多く、壺、甕類は15.6%である。

器形（第27表）

坏若干を除いて全体の器形が判明するものは極めて少なく、図化できたものによってみると次表の通りである。

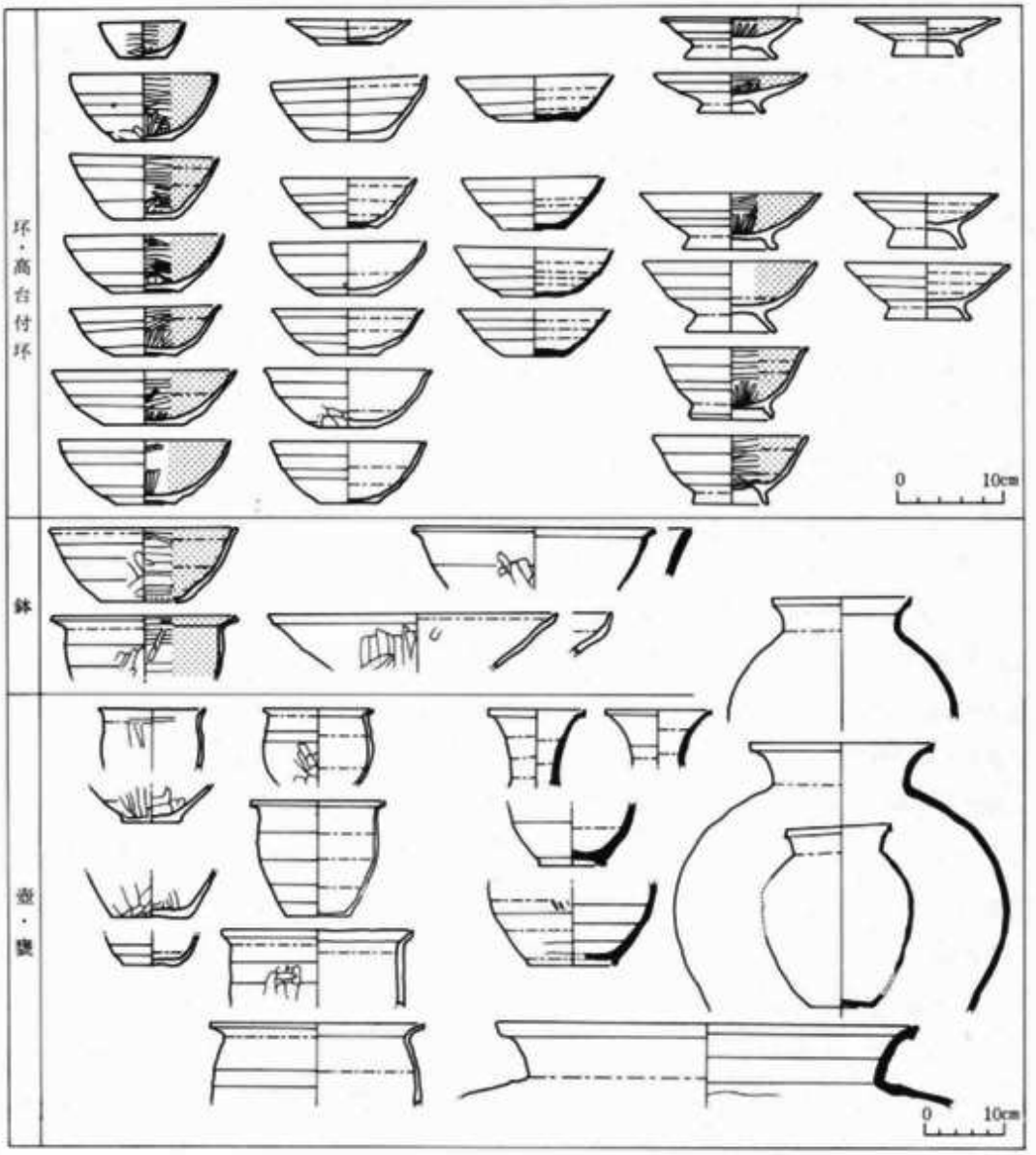
甕の一部にロクロ不使用のものが含まれるほか、すべてロクロを使用するものであり、細部に渡る画一性は求め得ない。

坏は全体に底部からの立ちあがりによって直線状をなすものと内彎、または内彎気味のものがあり、後者では口縁部の外反するものが含まれ、ほゞ3分される。出土比率では内彎して立ちあがり、口縁部の外反するものが若干多い。底部は黒色処理の坏に丸底状の4点が含まれるほかはすべて平底である。また、器高によっては著しく低い皿型をなすものとこれより深いものがあり、大部分が後者にあって更に大小に分けられる。

高台付坏は坏部の器高に大小があり、坏と同様に皿型とこれより深いものに分けられ、立ちあがりは坏に準ずるが、器高の低いものに口縁部の外反するものがやゝ多い。高台はいずれも貼付され、内彎気味となるもの、外反、または外傾するものが混在し、高台端部や高台内の形状も多様であり、坏部との対応は判然としない。

鉢は浅鉢とこれより口径の小さい深い鉢がある。後者は坏型をなすものと口縁部の外反するものがあり、共に内面黒色処理が施される。出土量は圧倒的に浅鉢が多く、外傾して立ちあが

第27表　器形別土器一覧表



るものと口縁部がやゝ内彎気味になるものが含まれる。大部分非黒色処理の浅鉢であるが、須恵器のそれが混入する。

壺は小壺を除いては須恵器の長頸瓶がある。全体の明らかなものはないが底部に高台を付すものと平底をなすものが含まれる。また、短頸の壺も含まれると思われるが明確でない。

甕は若干のロクロ不使用のものと大部分を占めるロクロ使用のものがあり、前者には口縁部が比較的短く外反する長胴形の甕が含まれる。後者では口縁部が外傾、または外反し、共に口縁部が上方、または下方に逸き出される。体部は肩部の張るもの、緩やかに下降するもの等が

混在する。底部は小さい平底のほか、大型の甕にあっては丸底状を呈するものと推定される。また、口径の大小によってはほゞ3分され、中、大型のものは大部分が須恵器である。

器面調整（第28表）

器種別の成形には非黒色処理の甕にロクロ不使用のものが若干含まれ、また土製品に手捏ねが含まれるほか、すべてロクロ使用によるものである。焼成及び器種別の調整を主として図化できたものにより、底部の切り離しや調整を含めてみるならば、ほゞ次表の通りである。

坏は大部分を占める再調整の認められないものを含めて21種の組合せとなる。もっとも多様な組合せとなる黒色処理の坏では内外面の篦磨きされるものが両面黒色処理の施されるものであり、他は内面黒色処理である。後者には各種の組合せがあり、外面に篦削り、篦磨きを施し、底部が全面篦削りされるものや無調整のものが少数ながら混入する。体部の篦削りは回転によるものが体部上半に及び、他の大部分はいずれも下半、または下端に限られる。底部の切り離しは須恵器の若干が篦切りによるほか、全面篦削りされるものを含めて回転糸切りによるものと推測される。

高台付坏は16種の組合せとなり、坏部は大部分の坏と同様である。高台はすべて付高台であり、高台内の調整は全面をロクロナデするものと高台に沿ってのみロクロナデされるものに2分される。後者には回転糸切り痕を残すものと菊花状に篦状工具痕を有してロクロナデされるものがあり、更に中央部より糸切り痕、菊花状の押圧痕を共に残してロクロナデされるものが含まれ、内外面黒色処理のそれも同様である。

鉢は須恵器の底部が不明であるが、7種まで認められる。更に非黒色処理の鉢では底部の篦削りも推定されるが、全体の残存するものが少なく明確でない。

壺・甕では全体の器形が不明なものが殆どである。小型の壺を除いて非黒色処理のものでは7種以上が推定され、ロクロ不使用の底部を含めては更に多様な組合せが推定される。体部外面の叩き目は焼成不良の須恵器を除いて頸部に及ぶものが含まれる。また、須恵器においては付高台の5種のほか、平底が含まれ、甕を含めて多様の組合せが想定される。

全体に器形の小さい坏にもっとも多様な組合せがあり、特に黒色処理の土器に種々の調整が施されるといえる。

法量（第29表）

器種別に口径、底径、器高の得られるものは極めて少ない。推定値を含めて全体の傾向をみると次表の通りである。

坏は著しく器高の低い皿型をなすものとこれより深いものがある。後者は口径によって更に大小に分けられ、全体では13.0〜14.9cmにもっとも集中している。同様に底径では5.0〜6.4cm、器高は4.0〜5.9cmにもっとも多い。図化できたものによっては口径と器高及び底径の比率はそ

第28表 器面調整一覧表

器種	焼成 黒色処理の有無	器面調整 内面	器面調整 外面	切り離し調整	備考
坏	黒色処理	ヘラミガキ ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラミガキ ヘラミガキ ロクロナデ	回転糸切り 糸切り後 ヘラケズリ 全面 ヘラケズリ 回転糸切り	内外面黒色処理のものを含み、内黒処理の底部には丸底状の4点がある 体部外面のヘラケズリは下半に限られる 体部のヘラケズリは回転により、上半に及ぶ 非黒色処理の混入か
	非黒色処理	ロクロナデ ロクロナデ ヘラナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ロクロナデ ヘラケズリ	回転糸切り 糸切り後 ヘラケズリ 全面ヘラケズリ	体部下半のヘラケズリは下半に限られる
	須恵器	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り 回転糸切り 全面ヘラケズリ	
高台付坏	黒色処理	ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	回転糸切り 糸切り後 菊花状 菊花状 全面 ロクロナデ	内外面黒色処理のものを含む
	非黒色処理	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	回転糸切り 糸切り後 菊花状 菊花状 全面 ロクロナデ	
鉢	黒色処理	ヘラミガリ	ロクロナデ ロクロナデ	回転糸切り 糸切り後 ヘラケズリ 全面 ヘラケズリ	内面黒色処理のものに限られる
	非黒色処理	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラケズリ	回転糸切り 糸切り後 ヘラケズリ	
	須恵器	ロクロナデ カキメ ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラケズリ ロクロナデ ヘラミガキ		底部不明
壺 (瓶)	黒色処理	ヘラミガキ ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	内外面黒色処理の小型壺
	非黒色処理	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	小型の壺
	須恵器	ロクロナデ ロクロナデ カキメ	ロクロナデ ロクロナデ タタキメ ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ ロクロナデ 菊花状	
甕	非黒色処理	ナデ (ハケメ) ヘラナデ ロクロナデ ロクロナデ ハケメ	ナデ ハケメ ナデ、 ヘラケズリ ヘラミガキ ロクロナデ ロクロナデ ヘラケズリ	(ナデ) 木葉痕 回転糸切り	底部はほかに網代底、砂底がある 外面調整はほかにロクロナデ、タタキメがある
	須恵器	ロクロナデ (ヘラナデ) ロクロナデ カキメ ロクロナデ (あて工具痕)	ロクロナデ ヘラケズリ ロクロナデ ヘラケズリ タタキメ ロクロナデ (波状沈線文) (タタキメ)	ロクロナデ (ナデ) 砂底	底部はほかに丸底が推定される
耳皿	黒色処理	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(ヘラミガキ)	両面黒色処理の小片

れぞれ3：1、2～3.：1前後に分布し、底径と器高では僅かに器高の比率が低い傾向にある。この傾向は焼成別の出土比率がやゝ異なる北上川東岸の落合II遺跡[注3]においてもほゞ同様である。

焼成及び黒色処理の有無によってみると全体に須恵器では口径や器高のばらつきがもっとも小さい。逆に黒色処理の坏では口径のばらつきが大きく、比較的器高の大きいものが含まれ、非黒色処理の坏は底径、器高がやゝ小さい。しかし、底径のばらつきは殆ど共通している。

径高指数及び外傾指数は全体に外傾指数のばらつきが大きく、ほゞ1：2の比率となる。黒色処理の坏では外傾指数が小さく、須恵器で大きい傾向を示す。非黒色処理の坏には径高指数の大きいものが含まれる。

高台付坏は坏部が殆ど坏と同様であるが、口径の大きいものに限られる。高台は全体に低く高台径は7.0～8.4cmにもっとも多い。皿型のものは坏部の外傾指数が著しく大きくなり、器高は5.0cm未満である。

鉢は口径によって大小2分される。23.5～24.2cmの内面黒色処理の鉢と30.5～35.9cmの非黒色処理のそれである。底径は殆ど同様であるが、前者は器高が高く、後者は浅鉢である。

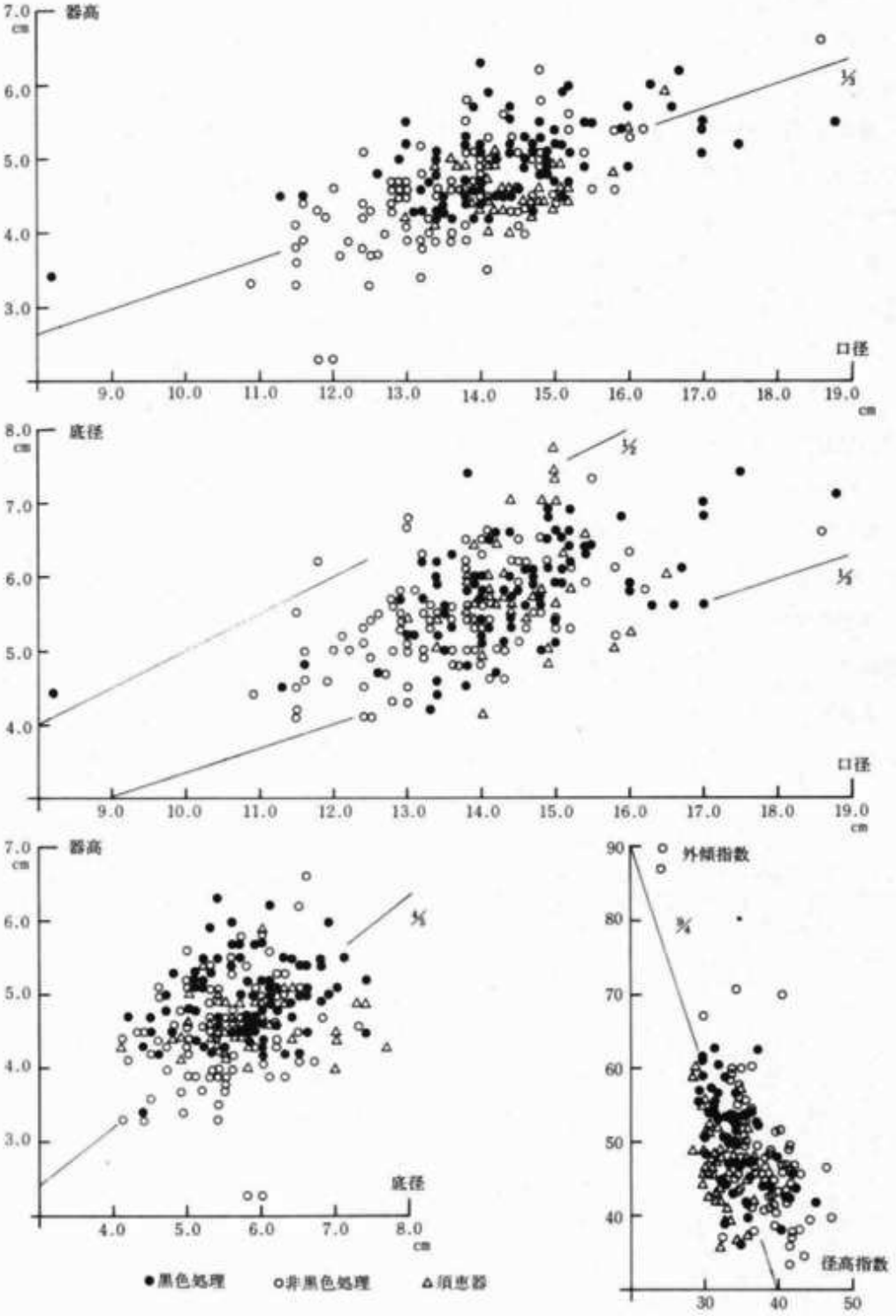
壺は両面黒色処理と非黒色処理の小壺を除いて口径12.2～13.3cmを計り、底径は8.5～11.2cmとほゞ一定している。共に長頸瓶とみられる。

甕はロクロ不使用の土師器では口径20.0cm以下となり、ロクロ使用の甕は大小が混在してこれに対応する底径を有するものとみられる。須恵器の甕は口径によって13.3cm、17.2～25.7cm、

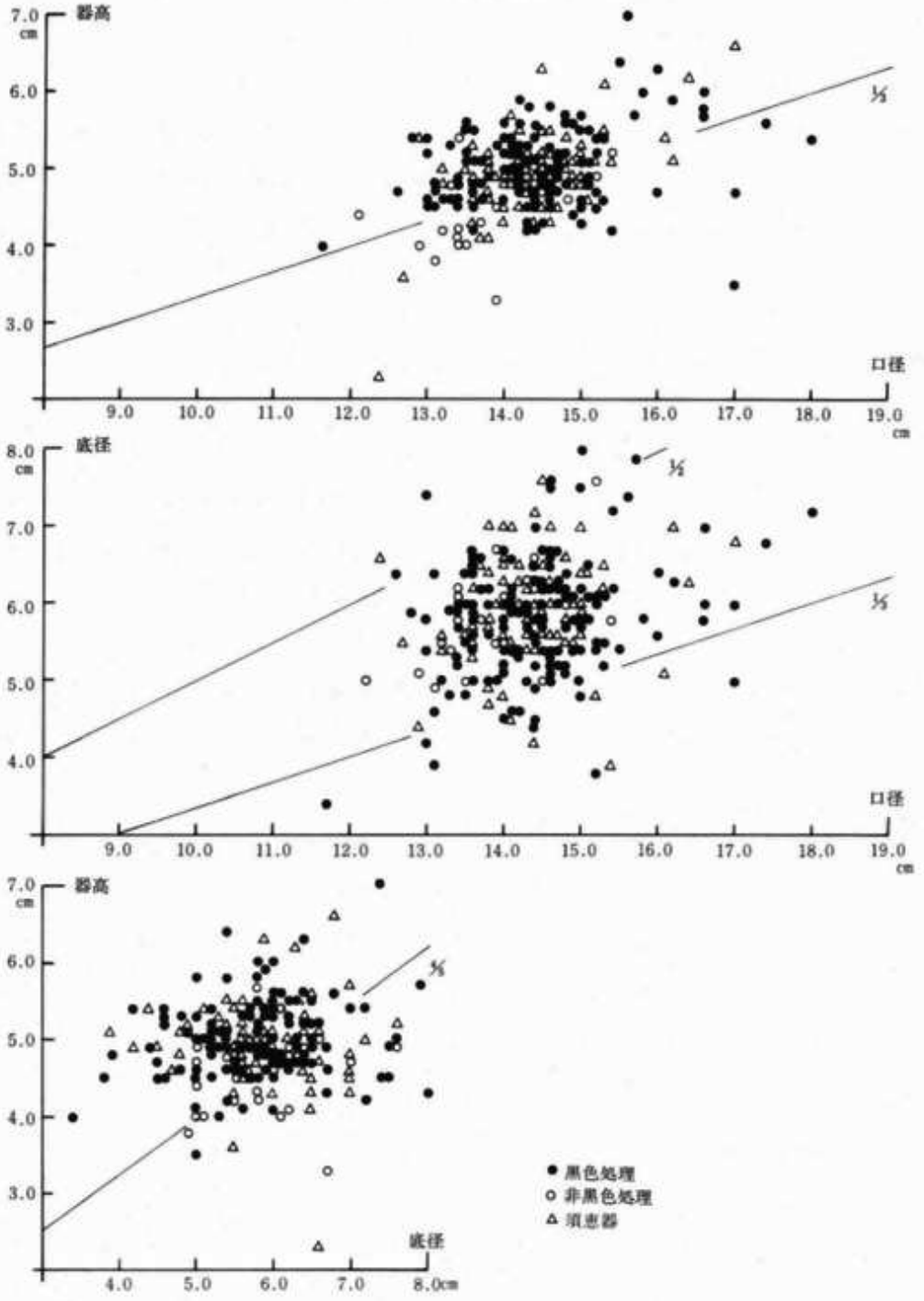
第29表　器種別計測表

器種		黒色処理	非黒色処理	須恵器	備考
坏	口径	8.2～18.8cm	9.0～19.8cm	12.2～16.5cm	非黒色処理には高台付坏が含まれる
	底径	4.1～ 8.2	3.8～ 7.8	4.1～ 8.3	
	器高	2.1～ 7.4	1.8～ 5.8	3.3～ 6.0	
高台付坏	口径	13.4～17.2	13.1～17.1		
	高台径	5.5～19.6	6.5～ 9.3		
	器高	3.7～ 6.8	3.6～ 7.1		
鉢	口径	23.5～24.2	30.5～35.9		
	底径	9.0～14.2	7.8～11.9		
	器高	9.1			
壺	口径			12.2～13.3	
	底径	3.8	3.4	8.5～11.2	黒色処理及び非黒色処理の壺は共に小壺である
	器高				
甕	口径		10.4～24.6	13.3～53.8	
	座径		5.0～11.6	11.2	
	器高		14.3	22.3	

推定値を含む



第51図　坏の法量比分布図



第52図　落合II遺跡出土坏の法量比分布図

（「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」VI所収の「落合II遺跡」より作成）

40.8～53.8cmに3分される。底径は比較的小さく、小型のものでは土師器に共通する。器高は不明なものが多く、大型の甕では70.0cm以上に及ぶものが含まれると推定される。

容量（第30表）

容量の得られるものは完形品が少なく、僅かに坏106点、高台付坏14点である。完形に近く、また計量誤差の小さい残存率良好な120点による計量結果は次表の通りである。全体に歪みのあるものを含めて自然の状態による計量のため、特に口縁部の歪みによって多少の誤差が見込まれ、完形品以外はすべて推定である。

坏類全体では92.6～805.5ccまで大小が分散し、180ccを1合とすると0.5～4.8合までとなる。器種によって計量個体数を異にするが、181～405ccに81.7%が集中し、0.5～4.8合にもっとも多い。

黒色処理の坏では内外面黒色処理のものを含めて容量差がもっとも大きく、0.5～3.5合に及ぶ。非黒色処理の坏では皿型及び口径の小さいものが0.5合程度であり、黒色処理の最小の坏にほゞ一致する。これより口径の大きい坏では1.0～2.0合に集中するほか、4.0合以上のものが1点含まれ、後者では使用目的の相違も推定される。須恵器はもっともばらつきが小さく、ほゞ1.5～2.4合に限られる。

高台付坏のうち黒色処理のそれでは坏に準じて大小が混在し、0.7～3.5合を計る。非黒色処理では計量点数が少なく明確ではないが、非黒色処理の坏と同様に比較的容量の小さい傾向を示すものと把えられる。

容量による坏類の器形や調整による変化は容量の著しく大きいものを除いて特に認められ

第30表　坏・高台付坏容量集計表

容量	坏			高台付坏		計	比率
	黒色処理	非黒色処理	須恵器	黒色処理	非黒色処理		
90～135cc(0.51～0.75)合	1	4		1		6	5.0%
136～180 (0.76～1.00)		6		1	2	9	20.0
181～225 (1.01～1.25)	2	13				15	
226～270 (1.26～1.50)	2	14	1	2	1	20	31.7
271～315 (1.51～1.75)	5	6	4	2	1	18	
316～360 (1.76～2.00)	8	8	6			22	30.0
361～405 (2.01～2.25)	4	1	7	2		14	
406～450 (2.25～2.50)	1	3	2			6	6.7
451～495 (2.51～2.75)	1	1				2	
496～540 (2.76～3.00)	2					2	3.3
541～585 (3.01～3.25)	2					2	
586～630 (3.26～3.50)	1			1		2	2.5
631～675 (3.51～3.75)				1		1	
766～810 (4.26～4.50)		1				1	0.8
計	29	57	20	10	4	120	100

推定値を含む

ず、焼成による傾向に相違はあるものの、最小の容量が0.5合とみられる。また、墨書土器では1.0〜3.0合を計るなど共通する点もあげられる。焼成や黒色処理の有無を含めて使用目的等による何らかの規制要因も推定されるが、全体の不明なものが多く明確でない。

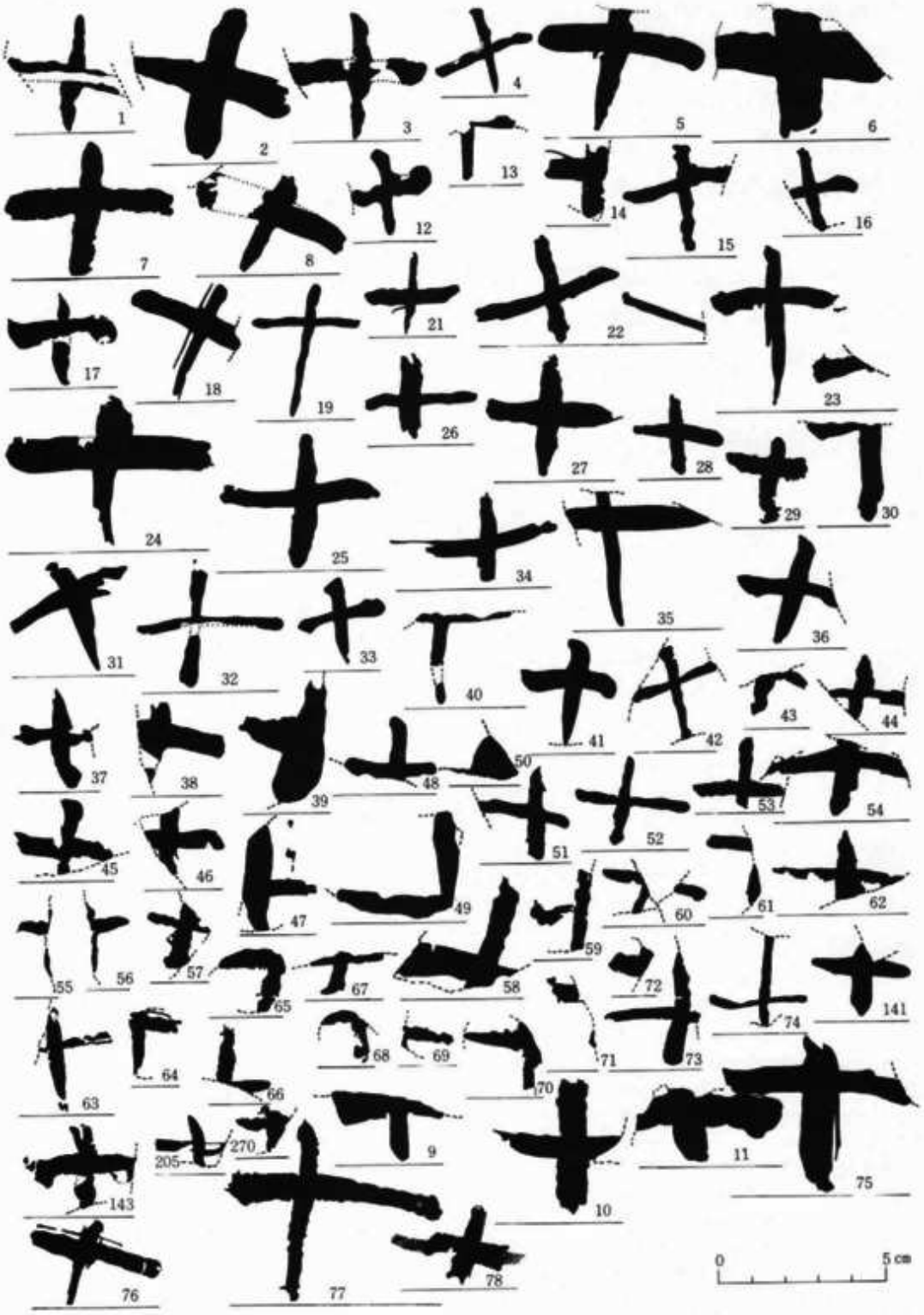
墨書土器（第53〜55図　第31表）

墨書される土器は小破片を含めて297点である。内面黒色処理されるものにもっとも多く、56.2%を占める。次いで非黒色処理が27.9%、須恵器15.8%の順である。器種は坏類に限られ、高台付坏は5点まで確認される。墨書の位置はすべて外面にあって13点が底部に、他は体部にある。底部に記されるものは非黒色処理の坏に皆無であり、須恵器にもっとも多い。特に器形や底部の切り離し、外面調整との関連は認められず、須恵器では底部の篦切りされるものに10点が含まれる。

墨書文字[注(4)]は判読できないものが含まれるが、全体で27〜29種297点である。そのうち2点は同

第31表　墨書文字一覧表

No.	文字	黒色処理		非黒色処理		須恵器		計	比率	備考
		体部	底部	体部	底部	体部	底部			
1	八？			2				2	0.7%	同一個体に2字あり
2	十	60(4)		20		16		100	33.7	高台付坏4点を含む 同一個体に「十」の対応する3字を記するもの1点がある
3	上？	2						2	0.7	
4	丸			1				1	0.3	
5	大？					1	2	3	1.0	
6	小			1				1	0.3	
7	川？			1		1		2	0.7	
8	井			1				1	0.3	
9	夫？	1		2		1		4	1.3	
10	令	4				1		5	1.7	
11	夲	1						1	0.3	
12	尼	2(1)		2		1		6	2.0	高台付坏1点を含む
13	吉	1						1	0.3	
14	守	1				2		3	1.0	
15	安	1		4				5	1.7	
16	寺			1			1	2	0.7	
17	赤						1	1	0.3	
18	𠂤			1				1	0.3	
19	罕	14		7				21	7.1	弋、罕等を含む
20	倍	1						1	0.3	
21	留			1				1	0.3	
22	真				2		1	3	1.0	
23	德			2				2	0.7	
24	六						2	2	0.7	興か？
25	廿万					1	1	2	0.7	
26	□万			1				1	0.3	1字不明
27	髮十	1				1		2	0.7	
28	□十	1						1	0.3	1字不明
29	不明	70	2	36		11	1	120	40.4	
計		160(5)	2	83	2	36	9	297	99.8	高台付坏5点を含む



第53図　墨書文字(1)

79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
142
144
145
146
147
148
149
150
273
303
0
5cm

第54図　墨書文字(2)

No.はB.No.を示す

第55図　黒書文字(3)

一文字が同一個体に対応して記されるものであり、異なった2字を記すものは6点まで確認される。1字を記すものは2～14画の文字であり、比較的画数の少ない文字が多く、9画となる文字は含まれていない。もっとも頻度の高い「十」は33.7%を占め、高台付坏を含めてすべて体部に限られる。次いで「天」が多いが、「天」、「天」、「天」、「天」等があって若干の相違がある。須恵器を除いて体部外面に位置するものである。そのほかは4～1点であり、共通して体部に記されるものには「尻」、「夫」、または「半」がある。黒色処理される坏に限られる文字は「上？」、「吉」、「夲」、「倍」等があり、非黒色処理の坏では「八？」、「丸」、「小」、「井」、「寺」、「竺」、「留」、「真」、「徳」等でもっとも多い。また、須恵器の坏では「大？」、「赤」、「真」、「兴（興？）」があり、後3者は底部に限られる。

2字を記すものは対応する「八？」と「十」を除いて「廿万」と「髪十」各2点である。吉事の文字とも解される。

書体はやゝ稚拙なものから達筆なものまで含まれ、大部分は口縁部を上にして記されるが、「十」、「天」、「丸」等は底部を上にして、または斜方向に墨書される。墨痕は鮮明なものが少なく、摩耗するものが大部分である。

県内でもっとも多量の墨書土器の出土する落合II遺跡[注(3)]においては210文字中「夲」が93.0%以上を占めており、共通する文字には「夲」のほか「寺」、「真」等がある。

使用形態

主として供膳用、煮炊・調理用、貯蔵・醸造用等の用途があげられ、器形の小さいものは前者に、大きいものは後者に含まれるものとみられるが、供献用や祭祀用としての使用も推定される。

もっとも多量な出土をみた坏は全体の80.5%を占め、木製の椀・皿類と共に食膳用具を主目的とするものとみられる。焼成や黒色処理の有無、墨書文字によっては更に使い分けられていることも推測される。使用に伴う痕跡を残すものには、漆液の固着するものや油痕、煤の付着するものがあり、漆とき用や、灯明皿、あるいは台皿等の使用が推定される。そのほか、墨汁痕を有して墨書用とみられるものが含まれ、転用硯も推定されるが明確でない。

煮炊用や調理用とみられるものは土師器の甕や鉢があげられ、11.9%を占める。特に非黒色処理のものでは煤や黒色の付着物があって煮炊用としての使用が推定される。

貯蔵・醸造用とする甕・壺類はいずれも容量が大きく、小型のものでは供膳用も考えられる。下谷地A遺跡における長頸の壺では頸部までの容量が1,750ccを計り、ほゞ1升に近い。

注(1) 分析・鑑定の項参照

(2) 高橋信雄「岩手県のロクロ土師器について」『考古風土記』第2号（1977）

(3) 岩手県教育委員会「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」IV（1980）

(4) 東北歴史資料館企画科長平川南氏の御教示による（1981）

(2) 木製品（第32表）

植物種子等を除く木製品は46点である。推定される用途別によって農・工具、織機用具、容器を含む食膳用具、装身具及び履物、祭祀具、その他に分けられる。容量及び食器類が全体の58.7%を占めてもっとも多く、他はいずれも少数である。

第32表　用途別木製品

No.	用途	種類	樹種	点数
1	農・工具	杵、鋤	ナラ、セン	3
2	織機具	つちのこ	ナラ	1
3	容器	曲物、桶、柄杓	スギ、クリ、セン	13
4	食器	椀、皿、折敷	セン、スギ	14
5	装身具	櫛	ツゲ?	1
6	履物	下駄	クリ、スギ	4
7	祭祀具?	陽物形木製品	マツ	1
8	その他	木簡転用品	マツ	1
9	不明	板材	アカシデ、ナラ、クリ、セン、マツ	8

樺皮1点は容器に含む

農・工具は杵2点、槌1点である。ほかに鋤状のものも推定されるが明らかでない。杵はナラ材を加工するやゝ短い堅杵であり、中央部の握り部分より上下に対応して整形される。槌は同様に小型とみられ、加工の容易なセン材を使用している。

織機具はナラの割材をやゝ粗雑に加工する槌の子1点である。ほかに用途不明の木製品には織機の一部とみられるものが含まれる。槌の子は蓆編み等に使用されたことが推定される。共伴する土器の底部には網代痕を残すものがあり、これによっては2種類の編み方が推定され、縦糸に対して表裏に交錯するものと縦糸によって編みあげるもじり編みものが含まれる。

容器では曲物、桶がある。曲物では底板によって径12.0～12.7cm、16.6cmの大小がある。共に釘孔を有し、位置は不定であるが、大きさは殆ど一定している。底・へぎ板ともスギ材であり、縫は桜皮である。桶は蓋、底板、側板が推定され、径10.1～12.5cmとこれより大きいものが含まれる。側板による器高は21.8cm以上である。材はクリ、スギ材である。そのほか、柄杓1点があり、ほゞ1合の容量と推計される。

食器類には椀・皿のほか、折敷が推定される。椀・皿は木地椀・皿と漆椀があり、漆椀には朱・黒漆の塗分けと黒漆椀が含まれる。全体の器形が共に明らかでないが、椀は高台をつくり出し、1点は低い輪高台をなす。高台径、高台高は殆ど一定している。皿は1点がべた底をなして浅い皿とみられるが、他は高台をつくり出し、著しく器高が小さく殆ど扁平をなす。前者の底径が若干小さく、後者の高台径は椀に比して僅かに大きい。共にセン材の横木取りの挽物であり、用途不明のセン材は皿材であることが推定される。

折敷は共に方形とみられ、1点は隅丸を呈する。縫は桜皮であり、補修されるものである。

装身具・履物類では櫛1点と下駄4点である。履物はクリ材の蓮歯下駄のほか、スギ材を刳貫くぽっくりがある。女児用のぽっくりは近世とみられており、これによっては時期を異にするものが含まれている可能性もあげられる。

祭祀用具・その他では陽物形の木製品1点、木簡を転用した木札状の木製品1点があげられ

る。後者は「廳」の一字と月日が判明し、文書の一部とみなされる。

そのほか、用途不明の木製品には建築材等の想定されるものがあるが、確認できるものはない。

2　まとめ

下谷地A遺跡を含めて明らかな遺構は確認されていないが、平安時代の共通する遺物が中心である。その殆どは集落遺跡に普遍的に認められる土器であり、土師器、須恵器のほか、赤焼き土器、または須恵系土器[注(1)]と呼称される土器である。しかし、著しく多量の土器と木製品の出土は集落遺跡に比してやゝ様相を異にするものである。殊にも墨書土器の比率が高く、また、木製品では木簡を含む多種の木製品を伴っている。この傾向は北上川東岸の落合II遺跡[注(2)]に極めて類似するものである。

焼成別の土器では須恵器の比率が低く、非黒色処理の酸化炎焼成が主体をなし、甕の一部を除いてロクロ使用の土器である。大部分を占める坏は焼成や黒色処理の有無、調整技法等に若干の相違があるが、殆ど回転糸切り無調整のものであり、多様な形状を呈する。換言すればロクロ使用による土器生産が普遍化する段階と解され、全体の特徴によっては9世紀代より10世紀にかけての時期が推定される[注(3)]。このことは層位的に粉状パミス堆積の時期[注(4)]に符合するものではある。

木製品はその大部分が土器と併用されるものとみられる。同時に農耕の普及、鉄器の使用等が推定され、土器を含めて文字の享受されうる状況が推測される。殊にも木簡には「廳」が判読され、庁に何らかの関連をもつことも推定される。胆沢城跡では同様の椀・皿のほか、「廳」が墨書土器に認められている[注(5)]。

しかし、遺跡の性格や時期についてはいずれも周辺の未調査区域、特に西方における調査を待って解明される課題であり、立地の共有する縄文時代や近世以降の遺構についても同様である。

注(1)　前掲「岩手県のロクロ使用土師器について」

(2)　前掲「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」IV（1980）

(3)　岡田茂弘・桑原滋郎　「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要』I　多賀城跡調査研究所（1974）ほか

(4)　付篇「東北地方における奈良～平安時代遺跡埋土中の粉状パミスについて」

(5)　水沢市教育委員会　「胆沢城跡」昭和51年度発掘調査概報（1977）

遺物の鑑定と分析

1　下谷地B遺跡出土植物種子の同定

村　井　三　郎

下谷地B遺跡の植物種子には、種々のものが混在しており、オニグルミが主体をなす。それにトチを混入するほか、特殊な種子を混入していた。それはマンサク（落葉性低木）の種子のようにみられ、沢山混入していた。

第1表　オニグルミ計測表

No.	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ×幅	備考	No.	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ×幅	備考
1	3.3cm	2.8cm	1.4cm	1.18	9.24	2分の1欠損	13	3.4cm	2.7cm	1.5cm	1.26	9.18	2分の1欠損
2	3.2	2.8	1.3	1.14	8.96	〃	14	3.2	2.9	1.3	1.10	9.28	〃
3	3.5	3.1	1.5	1.12	10.85	〃	15	3.1	2.8	1.5	1.11	8.68	〃
4	3.6	2.9	1.4	1.24	10.44	〃	16	3.2	2.8	1.4	1.14	8.96	〃
5	3.2	2.6	1.3	1.23	8.32	〃	17	3.5	2.8	1.3	1.25	9.80	〃
6	2.8	2.8	1.1	1.00	7.84	〃	18	3.7	2.7	1.3	1.37	9.99	〃
7	3.5	2.9	1.4	1.21	10.15	〃	19	3.7	2.7	1.4	1.37	9.99	〃
8	3.5	3.0	1.5	1.17	10.50	〃	20	3.3	2.7	1.3	1.22	8.91	〃
9	3.7	2.6	1.3	1.42	9.62	〃	21	3.4	2.8	1.3	1.21	9.52	—
10	3.7	2.7	1.3	1.37	9.99	〃	22	3.5	2.0	0.7			3分の1欠損
11	3.3	2.5	1.3	1.32	8.25	〃	23	2.6	2.5	2.6			先端欠損
12	3.3	2.8	1.2	1.18	9.24	〃	平均	3.39	2.78	1.35	1.26	9.41	No.22、23を除く

第2表　トチ計測表

No.	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ×幅	備考	No.	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ×幅	備考
1	3.2cm	3.3cm	2.5cm	0.97	10.56	完形	5	3.5cm	2.9cm	2.7cm	1.21	10.15	完形
2	3.1	3.0	2.4	1.03	9.30	〃	6	3.0	3.2	2.5	0.94	9.60	〃
3	2.8	2.6	2.2	1.08	7.28	〃	計	18.5	17.7	14.6	6.30	54.72	
4	2.9	2.7	2.3	1.07	7.83		平均	3.08	2.95	2.43	1.05	9.12	

（すべて水浸保存するものであり、計測は整理者で行なった）

2　土器の岩石学的方法による分析結果

照　井　一　明

I　はじめに

土器の製作地推定のため、岩石学的方法で分析を行なった。また、窯跡周辺の粘土も比較のため分析を行なった。

II　試料

下谷地B遺跡分

S_1……非黒色処理の土師器、坏の口縁部より体部までの破片、トレンチ外出土

S_2……須恵器、坏の体部より底部までの破片、トレンチ外出土

III　分析方法

①　試料をカナダバルサムで固定し、100分の3㎜の厚さの薄片を各3枚ずつ作成した。粘土は、ϕ4の標準篩で水洗し、残砂を乾燥した後薄片を作成した。

②　偏光顕微鏡を用い、鉱物組成、特徴、岩片の種類・頻度を調べた。

③　1つの試料について、それぞれ500〜1,000個の粒子について検討を行なった（0.05㎜以下の鉱物は基質として扱かった）。

④　鉱物、岩種別構成から、粘土の供給源の地質を推定し、製作地を考察した。

IV　分析結果

S_1……岩片に古生層・花崗岩・プロピライトを含み、火山ガラスが認められる。

S_2……古生層の岩片から主に構成され、火山ガラスを含まない。

No.	内眼的特徴	鉱物組織								備考
		Q	Pl	K−F	Bi	Ho	Py	岩片	源岩	
S_1	(色)淡　褐	+++	++				+	Chert Granit Quartzite Propylit (orporphyrite)	古生層 + 花崗岩 + プロピライト (又はひん岩) + 火山ガラス (凝灰岩)	図版37
	(組織)シルト岩状	Py：斜方輝石 その他：火山ガラス・鉄鉱・緑レン石								
	(鉱物)石英とわずかな有色鉱物が認められる。									
	(岩片)白色・灰色岩片は少量									
S_2	(色)灰　色	+++	+	+				Chert Tuff(？)	古生層 + 火山ガラス (凝灰岩)	図版38
	(組織)シルト岩状、緻密	その他：火山ガラス（微量）（脱ガラス化） 鉄鉱								
	(鉱物)石英のほかは認められない。									
	(岩片)白　色									

Q：石英　Pl：斜長石　K−F：カリ長石　Bi：黒雲母　Ho：角閃石　Py：輝石

① 各試料の鉱物組成・岩片構成・特徴は上表の通りである。

② 須恵器の焼かれた温度は、石英→鱗珪石に再結晶していることから推定すると、β_2—鱗珪石（高温型）の安定な870～1,470℃であろう。

③ 各土層は、石英・斜長石の破片結晶から主に構成されるが、試料によっては、黒雲母・角閃石・輝石（特に斜方輝石）の含有量が増加する。

④ 岩片としては、チャート・珪石・ホルンフェルス・花崗岩類・斑岩・安山岩・玄武岩・凝灰岩・苦鉄質火山岩類などがみられる。

⑤ 土器の多くは、火山ガラスを含んでいるが、これらの供給源は粘土の分析結果から北上川層群の凝灰岩が考えられる。

⑥ 土器・粘土の組成と地質とを考慮すると、土器の大半は北上川流域およびその周辺の粘土から作られたものである。

⑦ 各遺跡から出土した土器は、異なった粘土、あるいは産地のものが混じっている。

⑧ 窯跡の粘土、あるいは使用された粘土の大半は鮮新統の凝灰岩・シルト岩、および河岸段丘のシルト岩である。

⑨ 安山岩・玄武岩を含む粘土の産地としては、古生層・花崗岩などの岩片および火山ガラス（凝灰岩）を特徴的に伴うことから判断すると、北上山地で鮮新統の凝灰岩が分布し、さらに中性～塩基性火山岩類の分布する地質状況が推定され、稲瀬火山岩類分布地域周辺の可能性が最も強い（北上川東側の地域）。

⑩ 野外の露頭で採集された粘土（水沢市見分森、江刺市瀬谷子、北上市飯豊森、同藤沢、紫波町杉の上、和賀町岩崎新田など11点）の特徴をみると、一般に北上川の西側地域の粘土には火山ガラスが全く含まれないか、あるいは微量である（飯豊森、藤沢、杉の上、岩崎新田）。角閃石・輝石は含まれる場合と含まれない場合とがある。水沢市見分森の粘土は、火山ガラスを含む角閃石・輝石を含まない特徴がある。紫波町日詰杉の上の粘土には、結晶片・岩片・大山ガラスが含まれずチャート・シルト岩を主として構成される。江刺市瀬谷子の粘土は、チャート・珪岩・英崗岩などの岩片と、石英・斜長石・鉄鉱・ジルマン・緑レン石を含み、火山ガラスを含むことが多い。凝灰岩や凝灰質シルト岩には輝石や角閃石が一般的に認められる。

付記 分析試料及び分析結果は了解を得て下谷地B遺跡についてのみ抜粋するものである。また、写真図版も同様である。他遺跡については、「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」XIII、XIV、XV、XVI（1982）に掲載している。

写　真　図　版